Bull. Tohoku Univ. Museum, No. 9, pp. 111–220, 2010
© by The Tohoku University Museum

岩手県奥州市里鎗遺跡発掘調査報告（土器編）

市　川　健　夫※、小　林　正　史※※、阿　子　島　　香※

※東北大学大学院文学研究科、※※北陸学院大学人間総合学部

A Research Report of the Final Jomon Pottery Excavated from the Satoyari Site, Ohsyu City, Iwate Prefecture, Japan

TAKEO ICHIKAWA*, MASASHI KOBAYASHI and KAORU AKOSHIMA***

**Faculty of Arts and Letters, Graduate School, Tohoku University*

***Faculty of Integrated Human Studies, Hokuriku Gakuin University*

Abstract: This paper is an official report of ceramic artifacts from the Satoyari site, located in Ohsyu city, Iwate prefecture. The first chapter is an original site report which was prepared by Prof. Nobuo Ito but has remained unpublished since 1955. Pottery of this site,dated to the early part of the Ohbora C2 period, are characterized by a clear functional differentiation by shape, volume, decoration and use-wears such as interior carbon deposits and exterior soot. For example, cooking vessels are differentiated into (1)large-sized undecorated deeper pots, which were used for long-term boiling of large amount of foodstuffs as well as for processing poisonous nuts, (2) medium and small sized undecorated shallower pots, and (3)small sized, decorated shallower pots, which were probably used for a combination of serving and short term heating of foodstuffs originally cooked in the large-sized pots. Analyses of incised motifs showed that the above-mentioned differences in motif types between vessel forms result from the width and length of their decorative band as well as from the direction from which motifs are viewed. It is also suggested that Jomon potters placed motifs based on their established motor habit without a prepared and systematic layout.

はじめに　報告書出版の経緯

発掘調査の経緯：昭和 27 年、岩手県水沢市（現奥州市）北下幅で耕地整理関連の土木工事をしていた小野富蔵氏が、工事中に土器がたくさん出土したことを地元研究者の伊藤鉄夫氏に連絡した。伊藤鉄夫氏が現場にいったところ、水路などから土器が多数顔を出しており、近隣では石囲炉も確認した（縄文時代中期の幅下遺跡）。水沢市が調査を東北大学の伊東信雄先生に依頼し、第 1 章で記す発掘調査を行った。

水沢市教育委員会に保管されていた記録によると、発掘調査後、昭和 30 年に水沢市と伊東信雄先生の間で報告書出版の契約が交わされ、発行部数 400 部（一部の印刷単価 200 円で予算計上）で昭和 30 年 5 月に出版予定だった。伊東信雄先生は第 1 章に掲載した報告書の原稿、実測図、写真を水沢市に提出したが、「教育委員会側が、その後何もしないうちに、原稿が分からなくなった」（伊藤編 1983：pp. 8 - 9）という。

本稿の経緯：出版に至らなかった報告書（第 1 章に掲載・直筆原稿コピーが東北大学に保存）作成から約四半世紀後の 1979 年、卒業論文（指導教官は芹沢長介教授と須藤隆助教授・当時）のテーマとして里鎗遺跡を選んだ小林正史は、調査担当者だった伊東信雄先生に分析の許可を得、また当時の状況を教えていただくために先生の自宅に訪問した。その際、伊東先生は報告書の発刊を念頭において土器の整理・分析をするように小林に指示された。第 2 章で記すように、小林は、1979 ～ 80 年の約 2 年間、報告書出版を念頭に置いて里鎗遺跡の土器の整理・分析を行ったが、諸般の事情から出版に至らなかった。その後 30 年を経たが、報告書を出版できる状況が整ったことから、伊東信雄先生が執筆された昭和 30 年前後の報告書本文と、その後の整理・分析の結果を、東北大学考古学研究室として、ここに報告する。

今回は土器について公表し、東北大学収蔵・関係資料の社会的公開の責務の一端としたい。奥州市に保管された石器と土製品については、実測図作成は終了しているので、別の機会に報告したい。

第１章　伊東信雄博士による「水沢市里鎗石器時代遺跡調査報告書」

目次

一、位置
二、調査の経緯
三、遺跡の状態
四、出土遺物
五、里鎗遺跡の年代
六、結言

図版目次

第一　遺跡全景
（１）西方から見た遺跡全景
（２）Ｂトレンチ
第二　発掘状況
（１）Ａトレンチ発掘状況
（２）同上
（３）Ｂトレンチ発掘状況
第三　Ａトレンチにおける土器出土状態
（１）壷形土器（第一九号）
（２）深鉢形土器
（３）注口土器（第一三八号）
第四　Ｂトレンチにおける土器出土状態
（１）壷形土器（第三三号）
（２）手前の壷形土器は第一三号
（３）文様のあるのが第一五号
第五　Ｂトレンチにおける土器出土状態
（１）壺形土器（第二七号）
（２）深鉢形土器（第五六号）
第六　Ｃトレンチおよび出土遺物
（１）遺物出土状態
（２）両頭石棒
（３）單頭石棒
（４）深鉢形土器
第七　壷形土器
第八　甕形土器
第九　甕形土器、鉢形土器
第一〇　台付鉢形土器
第一一　鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器
第一二　後期縄文土器破片・土製小円板
（１）後期縄文土器破片
（２）土器小円板
第一三　土偶・土版
第一四　石器
（１）石匙
（２）石皿
（３）石皿
第一五　幅下出土の爐跡
（１）東から見た爐跡
（２）西から見た爐跡
（３）爐に使用された土器

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　石斧実測図
第３図　石鏃実測図

土器実測図目次

出土土器実測図（一）－（一〇）

一、位置

水沢市里鎗石器時代遺跡は水沢市の西北郊、一・五キロの地にあり、大字北下幅字里鎗一一、一二、一四、一五、一六、一七、一八、二〇、二六、二七、二八番地を占め、その面積は約一ヘクタールに及んでいる（第１図）。附近は胆沢平野のほぼ中央部に当り、一帯に水田が連っている。石器時代遺跡は海岸地方では洪積台地上にあるのが普通であってが（ママ）、このように平野の眞中にあるのは内陸部に見られる特徴である。この地方に伝っている掃部長者の傳説では、この附近は往古は沼であったと言い伝えているが、この遺跡以外に下幅に縄文中期の遺跡があり、五千刈に縄文後期の遺跡があるところを見れば、少くとも縄文中期からは人間の住み得る状態にあったことは確かで、沼であったということは單なる傳説にすぎなかったことが明らかである。

しかし里槍出土の土器の底部にヨシの根が渦巻状に入っているものが見られた。これはこの附近が里鎗遺跡形成後においてヨシの生えるような低湿地になったことを意味するものである。

二、　調査の経過

昭和二十六年十二月、附近一帯の耕地整理が行われた際、この地から土器類が出土した。これが水沢市大畑小路の伊藤鉄夫氏の聞知するところとなり、伊藤氏は貴重な文化が徒らに破壊されることを案ぜられ、当時の水沢町長藤原喜藏氏に、その學術的調査を行うべきことを進言された。藤原町長はこれを容れられ、私に調査を依頼せられた。

私は発掘調査の価値ありや否やを確かめるため、昭和二十七年三月二十六日、水沢に赴き、伊藤氏の案内で現地を視察したのであったが、その際、水路の断面から復原し得る土器が三個も露出しているのを発見、さらに二十七・二十八日の両日、伊藤氏ならびに町役場の職員諸君、水沢高等学校、水沢農業高等学校の生徒諸君の協力を得て、遺跡の中央に近いところに長さ九メートル、幅二メートルの試掘溝を設けたところ、わずか一八平方メートルの土地を三五センチ掘っただけで、

壷形土器　四個
注口土器　一個
深鉢形土器　一個
浅鉢形土器　二個
接合によって復原し得る土器　約一五個
土器破片　五箱
磨製石斧　二個
土偶破片　二個

石刀　一本
石匙　二個
石鏃　六個

という大量の遺物を発掘した。しかもその土器のほとんど全部が縄文晩期の土器中の大洞 C2 式といわれる型式に属するものであった。この試掘の結果、本遺跡は東北でも有数の石器時代遺跡であることが明らかになったので、これが耕地整理および暗渠排水工事のため空しく破壊されない前に本格的な発掘調査をおこなう必要をみとめ、その旨を藤原町長に答申した。

そこで水沢町では正式の手続きをとって、岩手県教育委員会と協同で本遺跡の発掘調査を行うこととなり、伊東を発掘担当者として四月十三日から十八日まで六日間発掘を行った。今回は前回のメンバーのほかに東北大学文学部學生氏家和典君も加わり、前回試掘の場所（A トレンチ）の南隣に長さ一〇メートル、幅二メートルのトレンチを東西に設定したほか（B トレンチ）、その東九〇メートルの C 地点でも小発掘を行い、また耕地整理作業中に発見された幅下の縄文中期の爐跡の調査をも併せて行った。

発掘した遺物は一応伊藤鉄夫氏宅に運んで整理したのであったが、伊藤氏を主として、同氏の令弟陽夫、祐夫の両君が水沢高等学校生徒諸君の援助をうけて水洗、接合などの作業を行い、八月九日から十二日までの四日間、伊東をはじめ、加藤孝、氏家和典、志間泰治の諸氏が仙台から出張して復原、撮影、実測を行った。その後昭和三十年夏、伊東、志間は水沢に出張、残りの遺物の撮影、実測を行った。

調査の済んだ遺物は水沢市立圖書館に移し、ここに陳列して一般の展觀に供している。

このように里鎗遺跡の調査には多くの人々が関係しているのであるが、この遺跡の重要性をいち早く認識して、その調査のため盡力せられ、また整理に当っては一家を擧げて援助せられた伊藤鉄夫氏の熱意はわすれることが出来ない。この貴重な史跡が世にあらわれるに至ったのには氏の努力が与って力がある。また文化財保護行政の当局者として種々配慮せられた当時の町長藤原喜藏氏、助役千田万三氏、學務係菅原実氏、坂本逸男氏の學も多としなければならない。

昭和二十七年の行われた本遺跡の調査報告がこのようにおくれたのはひとえに私の怠慢によるもので、その責は私の負うべきものである。

三、　遺跡の状態

里鎗遺跡は既に述べたように一ヘクタールにわたる大包含地で、耕地整理以前は田と畑とがいりまじっていたが、耕地整理の結果、現在は全部田となっている。

遺跡の東側には後期末の縄文土器の散布が認められるが、大体は縄文晩期の遺跡で、われわれが発掘した A・B 両地点は晩期の土器のうち大洞 C2 式土器を出し、C 地点では大洞 BC 式土器を出した。

A トレンチは遺跡のほぼ中央に設定され、東西九メートル、南北二メートルであり、B トレンチは、その南に接して掘られ、東西一〇メートル、南北二メートルであった。相接しているので地下の状況はほぼ同様であった。場所によって若干ちがうが、田圃の表面から七ー一五センチが耕土で、その下に一〇ー二六センチの黒土層があり、その下が青色の粘土層となっている。遺物が包含されているのは黒土層中で、ほとんど全部の遺物はこの層から出た。耕土層中には破片は含まれているが、完形土器が含まれていることはなかった。黒土層の下の青色粘土層から出た土器は第五六号の甕（図版第五（２））だけであった。この甕はおそらく胎児もしくは小児の遺骸を容れた甕棺であって、故意に地中深く埋められたものと見られる。

黒土層からの土器の出土状態は図版第三・四に見られるように、破片および完形土器が密集して堆積して出て来るのであって、住宅内に安置されていたような状態ではない。このような状態は縄文晩期の遺跡ではよく見られるところで、何等かの事情で土器片がすてられたものを考えられるのであるが、完全な土器もその中に混っているところを見ると単なるゴミ捨場と見ることも出来ない。やはり広い意味の居住地と解すべきであろう。

C トレンチは A・B 両トレンチ北九〇メートル、A・B トレンチの田圃の東にこれと隣接する田圃に設けた。小トレンチであって、ここからは大洞 BC 式土器と石棒が二本発掘された（図版第六）。

この発掘中、この西方四〇〇メートルの幅下で、耕地整理作業中、土器が発見されたとの報せがあったので、かけつけて見ると、中期末の土器大木 10 式土器であった。そしてこの土器は爐もしくは灰壷として使用されたものらしく中にまっすぐに立ててうめてあり、傍から河原石で組んだ爐が発見された。爐がある以上、ここが住居跡であることは明かであるが、竪穴のような落窪みはなく、平地住居であったと思われる（図版第一五）。

四、　出土遺物

里鎗遺跡においてわれわれが発掘した遺物は縄文土器、土偶、土版、石斧、石鏃、石匙、石棒、石皿などであるが、縄文土器が圧倒的に多い。

里槍から出土する縄文土器には後期のものも含まれているが（図版第一二（２））、われわれの発掘した、A・B・C 三地点の出土土器はすべて縄文晩期の土器で、しかも A・B トレンチ出土のものは、その中の大洞 C2 式がほとんど全部であって、他の型式に属するものは二ー三個にすぎなかったし、C トレンチ出土のものは大洞 BC 式であった。

完形品および破片を復原して完形とすることの出来たもの、および図上復原とすることの出来た土器は一三九個にのぼり、その内譯は

壷形土器	三五個	実測図 1 ～ 35
鉢形土器	四五個	38 ～ 44、57 ～ 88、120 ～ 125
甕形土器	一二個	36・37・45 ～ 56
浅鉢形土器	一二個	126 ～ 137
台付鉢形土器	三〇個	89 ～ 118
注口土器	二個	138・139

である。その形状、大きさは実測図ならびに圖版（ママ）を参照せられたい。そのうちで大洞 B 式に属する 18 の壷、

大洞 C1 式的傾向の濃厚な 103 の台付鉢、138 の注口土器を除いた他のすべてが大洞 C2 式に属するものである。

一つの型式の土器が他の型式の土器を混えることなく、出土することは土器の型式分類上重要なことであって、これまであまり明確ではなかった大洞 C2 式の概念が里鎗出土の土器によって明らかにされた。

土器に精製土器と粗製土器との区別があることは縄文後期以後の土器の特徴であるが、里鎗出土の大洞 C2 式土器にも見られるところであって、整美した形につくられ、規則的な口縁部突起をもち、体部には雲形文などの装飾文をもったり、または無文であっても表面を磨研した精製土器と縄文以外には精々口縁部に横走する沈線帯をもつだけの粗製土器がある。壷形土器には精製のものが多く、33・34・35 以外は精製と見られる。鉢形土器・深鉢形土器には比較的粗製が多く、45 ー 56・121・122・125 などがこれに属するが、浅鉢は殆んどが精製である。台付鉢形土器にも精製のものが多く、粗製は 199 唯一つである。注口土器も二つとも精製であって、粗製は認められない。土製小円板 13 に使用したものであるか不明であるが、土器の破片の周囲をすりへらして小円板をつくり、その中央に孔をあけたものが一〇個、その半分にわれたものが六個、未成品と思われる孔のないものが二個、出土している（図版第一二（２））。

土偶　発掘によって七個の破片が発見されたほか、高校生が附近で拾得したものをもらいうけたものが一個ある。図版第一三の（１）は腕および下半身を欠いているが、現在の高さ一一・二センチ、もっとも厚いところで二・五センチ、腕は前に出していたらしい。赤褐色である。（２）は頭の上部と左腕および下半身を欠いている。高さ七センチ、幅六・五センチ、裏面は無文で平坦、最も厚いところで一・七センチある。（３）は高校生の拾得品であって出土地点は明らかでないが、その様式から見て、大洞 C2 式土器に伴ったものであること間違いない。頭部および左腕を欠いているが現高一一・五センチ、厚さ三センチ、灰白色を帯びている。他の五個は顔面、肩、足の小破片である。

土版　破片が二個出土した。一は方形のものの破片で四・五×三・七センチ、厚〇・七センチ、沈線で重弧文をあらはし、中央の空間地帯に刺突文を施している。刺突文は周囲にもあるが、裏面の中央部には見られない（図版第一三（４））。他は楕円形のもので６×４センチ、六本の沈線によって楕円形を六つ重ねている（（４））。

磨製石斧　六個出ている。いずれも側面を平に磨いたいわゆる定角形石斧である（第□図（ママ））。

石匙　一三個出土している。すべて横型である。石質は流紋岩が多い。いずれも A・B 地点出土である（図版第一四（１））。

石鏃　四八個、有茎のものがもっとも多く、柳葉形のものこれに次ぎ、無茎のものがもっとも少い（第□図（ママ））。

石皿　破片が二個出土している。一つは厚さ四・四センチ、大きさ九・五×八・五センチ（図版一三（２））、他は厚さ七・八センチ、大きさ一八×一六センチ（（３））共に安山岩製。

石刀　粘板岩製の磨製石刀の破片が、A・B トレンチから五個発見された。最長のものは二七センチ、厚さ七ミリ、他は小さい断片である。

石棒　C トレンチから二点出土した。一は長さ五二センチ、径中央部で四・五センチの両頭石棒で粘板岩製（図版第六（２））、他は花崗岩製の太い單頭石棒で、長さ三一センチ、径一〇センチである（図版第六（３））。

五 里鎗遺跡の年代

里鎗貝塚（ママ）の A・B トレンチから出土した土器は縄文晩期の大洞 C2 式に属するものであり、C トレンチ出土の土器は大洞 BC 式に属するものである。しかし里鎗遺跡からはもっと古い縄文後期の土器も表面採集されており、その中には宮城県の宝ガ峯式、金剛寺式に並行する土器の破片が見られる。またわれわれの発掘地点では得られなかった晩期の大洞 A 式に属する破片も出土している。したがって里鎗遺跡は縄文後期から晩期後半に至る時期の遺跡である。この時期の年代を実年代をもって正確にいいあらわすことは現在の学問の状態では困難であるが、こころみに最近学界の一部に行われている放射性炭素 14 による年代測定の結果の中でこの遺跡に近いものを擧げてみるならば、昭和二十五年に文化財保護委員会によって発掘調査された愛知県吉胡貝塚の貝殻中に含まれた放射性炭素の量をミシガン大学で測定し、それから指定した年代が二例発表されている。一例は後期後半ものであり、その年代は 920 ± 250B.C. すなわち紀元前六七〇ー一一七〇年の間とされており、一例は晩期のもので 850 ± 600B.C. すなわち紀元前二五〇ー一四五〇年の間という数字が出ている。放射性炭素による年代測定がどれほど信用を置きうるかについては学界にまだ議論のあるところであるから、その数字を無條件に信用するわけには行かないが、縄文後期、晩期がほぼ西暦紀元から前一〇〇〇年代の間に含まれるであろうことは、弥生式土器の年代との関係からもうかがはれるところであるから里鎗遺跡の年代も大ざっぱにいまから二五〇〇ー三〇〇〇年前のものと見ることは大過ないであろう。

註１　渡辺直経「日本先史時代に関する C^{14} 年代資料」第四紀研究第二巻第六号

六 結言

以上で明らかになったように里鎗遺跡は縄文後期の中頃から晩期の終り近くに至る石器時代の遺物包含地であって、広義の集落跡と認むべきものであろう。その面積は約一ヘクタールにわたり、包含地としては大きな方である。われわれの発掘した面積は四〇平方メートルを若干こえる程度の狭いものであったが、そこからの出土物は、前述のように夥しいものであり、また精巧なものを含んでいる。したがって一ヘクタールに及ぶ遺跡全体に埋藏されている遺物の量は膨大なものと推察される。その一部分は耕地整理によって破壊されてしまったが、まだ残っている部分も多い筈である。これらの遺物は水沢市の先史時代の文化を物語るかけがえのない資料であるから、これを保護し、長く保存する必要がある。今回の発掘品が一括して市立圖書館に保管され、一般にも展觀されていることはよろこばしいこ

とである。

水沢市には里鎗以外にも各地に石器時代遺跡が存在しているが、學術的調査の行われたものは里鎗遺跡のほかには佐倉村の杉の堂遺跡と常盤遺跡があるにすぎない。杉の堂遺跡は里鎗遺跡とほぼ同時代の遺跡であり、常盤遺跡はこれらよりおくれる弥生式時代の遺跡である。したがって縄文後期以降はこの地にかなりの文化がひらけていたことがわかるのであるが、それ以前のことはよくわからない。

第２章　遺跡の概要と遺物整理過程

２- １．遺跡の概要（伊東報告の補足）

立地の特徴（第１図）：遺跡が所在する水沢盆地の北上川右岸地域は、南から伸びる胆沢扇状地と呼ばれる６段の段丘により構成される。これらの扇状地は高い方（北部）から順に、一首坂面、上の原面、横道面、堀切面、福原面、南都田面と呼ばれ、最下段の南都田面には大きな沖積面が東西に抉りこんでいる。里鎗遺跡はその沖積面にある標高約 53m の自然堤防上に立地している。北上川と胆沢川が合流する胆沢平野中央部に位置している。

付近の縄文晩期遺跡の立地をみると、沖積面に立地する遺跡（里鎗遺跡のほかに不断町東遺跡）、南都田面に立地する遺跡（杉の堂遺跡、根岸遺跡）、堀切面に立地する遺跡などがあるが、段丘面に立地する遺跡はその縁辺部に位置することから、各々の下位面での資源調達を意識しているといえる。大洞 C1 式期までが主体の根岸遺跡と杉の堂遺跡（晩期末にも集落が存在）が南都田面縁辺に立地するのに対し、大洞 C2 式を主体とする遺跡は沖積面に進出することが特徴である。このような「大洞 C2 式期における遺跡の低地化傾向」（半田 1967）は、里鎗遺跡のほかにも九年橋遺跡（北上市）、安堵屋敷遺跡（花巻市）、東裏遺跡（衣川町）などの北上川中流域の遺跡において顕著に観察される。大洞 C2 式期は北部九州で水田稲作が普及し始めた弥生時代早期に対応する時期なので、遺跡の低地化現象はこのような西日本での変化と無関係ではないだろう。

遺跡の時期：口縁部で集計した個体数の９割以上が大洞 C2 式期（特に前半期）に属する。この他に縄文時代後期後葉、縄文時代晩期大洞Ｂ式期から C1 式期および大洞Ａ式期の土器が少数ずつ出土している。大洞 C2 式期以外の復元可能土器は大洞Ｂ式の小型壷（0.2㍑・第 50 図 229）、大洞 C2 式後半～Ａ式初頭の有文壷（第 47 図 196）など極めて少数である。このように、遺跡の存続時期は後期後葉から晩期後半（大洞Ａ式初頭）までの幅があるが、本稿では大多数を占める大洞 C2 式について記述する。

土器出土状況（第２・３図）：里鎗遺跡の土器出土状況は、①単一層から密集して出土している、②口縁部破片から集計した総個体数（約 1300 個）の割に復元（実測）土器数（約 150 個）が多い、③全く破損していない完形個体も小型壷と小型深鍋を中心に比較的多く確認されている、④明瞭な居住域が確認されない、などの点で北海道七飯町聖山遺跡（芹沢編 1979 など）、青森県外ヶ浜町今津遺跡（藤沼他 2005 など）、岩手県九年橋遺跡（藤村 1985 など）、東裏遺跡（相原他 1980）、安堵屋敷遺跡（国生他 1984）などで報告された「平面的な遺物密集ブロック」と共通している。

「大量の遺物密集出土」現象が顕在化する大洞 C2 式期は（東北地方北部を除いて）、上述の「遺跡の低地化傾向」が現れる時期に相当する。なお、大洞Ａ式期後半には北上川流域や山形盆地（佐藤 1987）において山間部・丘陵部に小規模遺跡が増加する「遺跡の拡散化現象」（佐々木 1984）が起こるが、これに伴って「居住域から離れた遺物密集ブロック」の形成も衰退する。

２- ２．出土遺物の整理過程

発掘調査後、伊藤鉄男氏らにより復元された土器（容量を計測できた 143 点）は水沢市立図書館に保管され、志間泰治氏らにより報告書用の実測図面が作られた。これらを志間実測資料と呼称し、前章に掲載した昭和 30 年報告における実測図番号を本稿の属性表に記載した（第３～５表）。それ以外の土器破片資料は、洗浄と一部の注記がされた状態で東北大学に保管されていた。

1979 年初頭から小林正史が卒業論文として整理・分析を行うことになり、同年２月から 1981 年春にかけて以下のような整理作業を行った。まず、東北大学に所蔵されていた土器破片資料については、１ケ月以上接合作業を行った後、口縁部を含む土器破片を対象として属性表（本稿第３～25 表）を作成した。土器破片は膨大な量だったため、胴部破片の接合を一通り行った後、口頸部と接合する胴部破片に重点を置いた。口縁部で個体数を集計するため、口縁部を含む破片の接合と同一個体認定は徹底して行った。

その後、1979 年７・８月の約２ヶ月間、小林は水沢市に滞在し、水沢市立図書館に所蔵されていた復元可能土器（志間実測図資料）の再実測を行った。卒業論文提出後の 1980 年度は、東北大学に保管された破片資料のうち上半部が復元できた土器の実測図・拓本図作成、水沢市での石器と土偶の再実測などの報告書出版に向けた作業を行った。

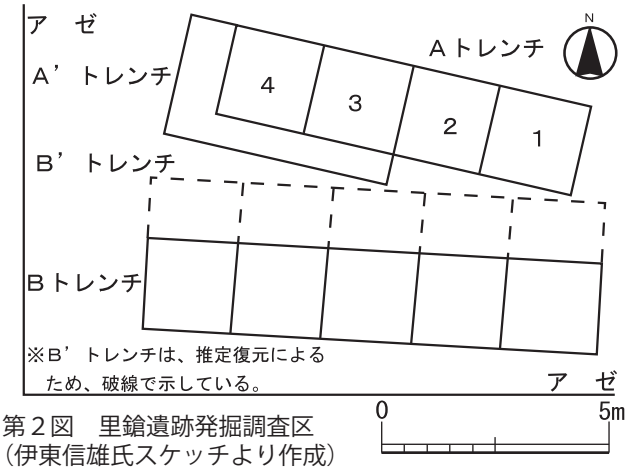
その後、水沢市（現在は奥州市）埋蔵文化財センターの設立に伴い、水沢市立図書館に保管されていた復元可能土器約 150 点は、同センターに移され、現在に至っている。そして、2008 年９月に「スス・コゲからみた里鎗遺跡の縄文深鍋による調理法方法の復元」をテーマとした土器観察ワークショップ（代表・小林正史）が奥州市埋蔵文化財センターで行われ、里鎗遺跡の復元可能深鍋 54 点のスス・コゲが記録された。その分析結果は市川健夫によりまとめられ、その一部が本稿の４・５章に記載されている。

２- ３．本稿の記述方法

里鎗遺跡の土器の特徴として、①容量を計測でき、単位文様の全容がわかる復元可能土器が多数得られた、②大洞 C2 式期前半という時間的まとまりが強い、③形、大きさ、装飾の３要素が器種単位で強い結びつきを示し、作り分けが明瞭である、などの点があげられる。さらに、④深鍋は大多数にスス・コゲが付くのに対し、浅鉢・鉢と壷には全く付かない、⑤中・大型深鍋と小型深鍋ではコゲの付き方（調理方法）が異なる傾向がある、などの点で器種間の使い

第１図　里鎗遺跡位置図
Fig. 1　Location of Satoyari site

第３図　層序模式図
Fig. 3　Cross-section of excavated trenches



第２図　里鎗遺跡発掘調査区
（伊東信雄氏スケッチより作成）
Fig.2　Plan of excavated trenches

分けも明瞭である。本稿では、こうした長所を生かして「器種間の作り分けと使い分け」と「単位文様の施文過程」を中心に記述する。

「器種間の作り分けと使い分け」の分析では、以下の分析資料を用いた。まず、容量を計測できた復元可能土器（昭和 30 年報告の志間実測資料約 150 点）を対象として、形・大きさ・文様（有文、素文、無文赤彩などの区分、および、有文の中での単位文様の種類）による作り分けを明らかにした。また、復元可能土器のうち深鍋 54 個を対象としてススとコゲの特徴を記録し、調理方法を推定した。最後に、器種組成の集計では、容量を計測できなかった土器を含めて、口縁部を含む個体を対象とした。これは、容量を計測できた復元可能土器は「大型ほど復元しにくいため組成比率が過小評価される」という制約があるためである。

一方、単位文様の施文過程（単位数と不揃い施文）の分析では、里鎗遺跡の復元可能な有文土器（55 点）に加えて、展開図が豊富に報告されている同時期（大洞 C2 式期前半）の安堵屋敷遺跡と今津遺跡の文様展開図資料（単位数がわかる 155 点と 33 点）を比較資料として用いた。

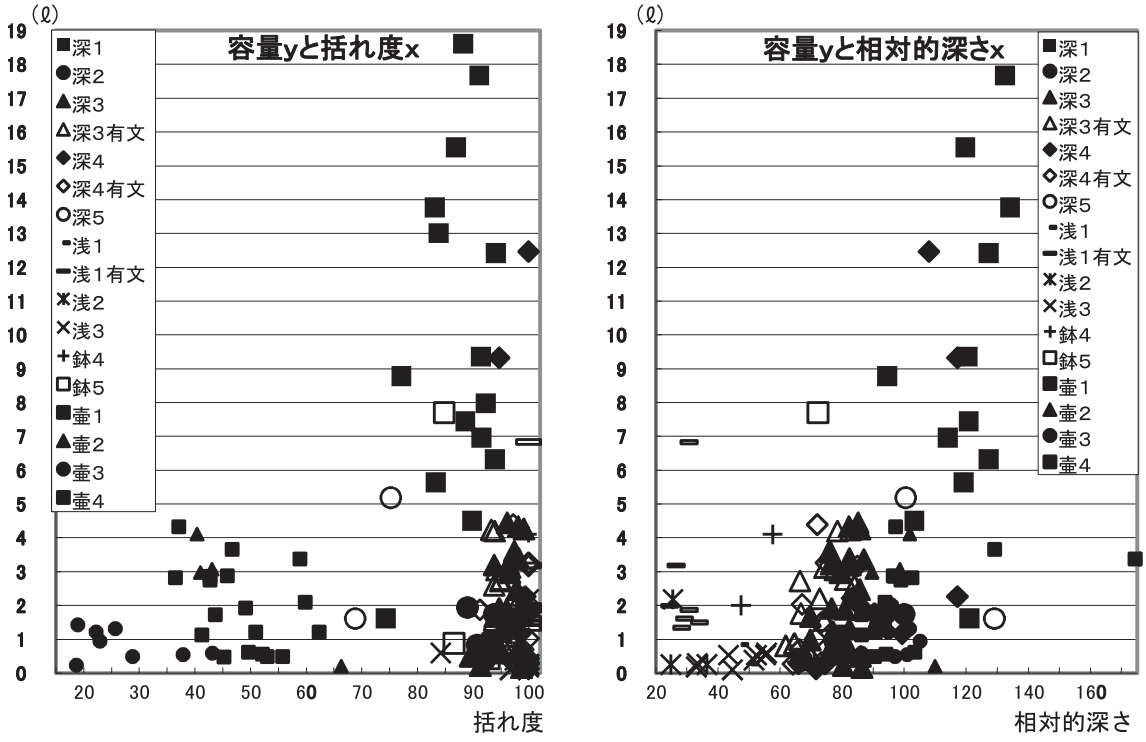
第３章．土器の器種分類

３-１．大別器種間の作り分け

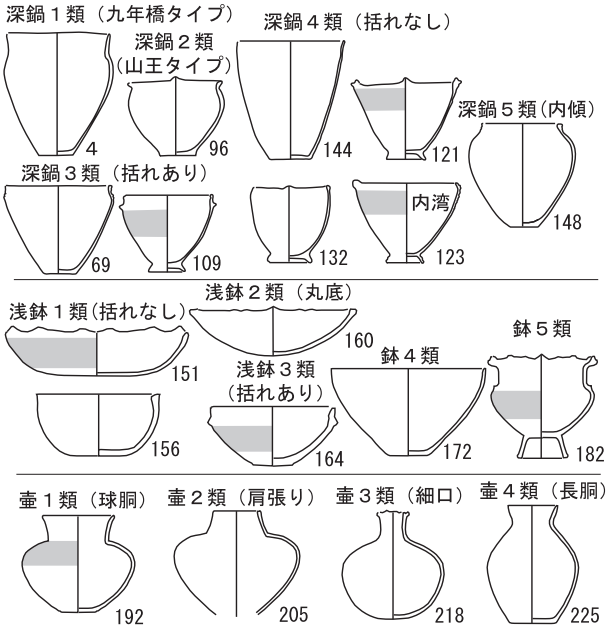
分類基準：形の作り分けの分析では、土器作り民族誌において使い方を最も良く反映することが示されている相対的深さ（器高最大径× 100）と括れ度を重視した。括れ度は「頸部最小径／胴部最大径× 100」であり、括れがなく口がすぼまる形は「口径／胴部最大径× 100」、括れがなく口が開く形では 100 となる。器高は、突起や台部を除いて計測した（第４図）。

容量を測定できた土器 143 個は、深鍋（調理用）、浅鉢・鉢（盛り付け、加工用）、壷（貯蔵用）、注口（短期の保管）、蓋という５つの大別器種に区分できる。深鍋と浅鉢・鉢は、括れ度 70 弱を境に壷（頸部の括れが強い）と区別され、また、深鍋は相対的深さ 60 を境に浅鉢・鉢と明瞭に作り分けられている（第５図）。

調理や加熱を伴う食材加工（灰汁抜き、湯がきなど）が主用途と考えられる深鍋は、ススとコゲと赤彩の有無においても浅鉢・鉢や壷と明瞭な違いがある。まず、ス付着については、壷と浅鉢・鉢ではススが付く例がないのに対し、深鍋は、大半（ススとコゲが分かる復元可能深鍋 67 個中 58 個）にススが付く。ススとコゲがない（煮炊きに未使用の）９個は１個を除いて２㍑未満の特小型であり、また、２㍑未満の深鍋は２割強（35 個中８個）にススとコゲがないことから、第４章で述べるように調理専用というよりは



第４図　里鎗遺跡における形の作り分け（プロット（大）は深鍋を示す。）
Fig. 4　Differentiation of ceramic forms by volume, neck-constriction(x; left) and relative height (right).



第５図　里鎗遺跡出土土器における器種類型
（網掛けは文様帯の位置を示す。）
Fig. 5　Classification of forms. Dark area shows decorative bands

「盛り付けと調理の兼用」と思われる。このように深鍋では全ての細別類型、サイズクラスにおいて過半数にススが付くことから、（専用でないものを含むとしても）煮炊き用が主体だったといえる。

次に、赤彩される比率は、注口２個中２個（破片を含めた口縁部集計では５個中３個）、壷 31 個中９個（口縁部集計 149 個中 18 個）、浅鉢・鉢 27 個中５個（口縁部集計 179 個中 21 個）に対し、深鍋では有文でも赤彩される例がほとんどない。縄文時代晩期の赤彩には、漆をふんだんに使った漆塗り土器と、焼成後に漆や膠などを接着材としてベンガラを塗った赤彩とがあるが、後者が圧倒的に多い。後者の赤彩は廃棄後の堆積中に剥がれやすく、沈線や表面の窪み部分に痕跡的に残るのみの例が多い。

「深鍋は高い頻度でススが付くが、赤彩が施されない点で、浅鉢・鉢や壷と作り分けられている」点を考慮すると、有文・台付で直立した長めの頸部をもつ第 45 図 180 ～ 183 は、一見深鍋と類似した形（括れ度と深さが深鍋の範囲内）だが、①スス・コゲがない、②赤彩例がある（第 45 図 183）、③台付深鍋に比べて台部が高い、④浅鉢に特徴的なモチーフが付く（当該期では深鍋、浅鉢、壷が各々独特のモチーフをもつ）、⑤口縁部に手の込んだ突起装飾が施される、などの点から「浅鉢・鉢」とした。また、相対的深さが深鍋と鉢の境界付近にある第 44 図 176 も、赤彩される点で「浅鉢・鉢」とした。

大別器種間の容量の違い：深鍋は後述する口縁部集計では4㍑以上が過半数を占めるのに対し、壷と浅鉢・鉢は大多数が4㍑未満であり、中でも2㍑未満が大半を占める。また、10㍑以上は深鍋に限られる。同様の傾向は九年橋遺跡においても報告されている（藤村1981）。壷は貯蔵用とされるが、小型が主体であることから主要食物資源を長期間保存するには適さない。また、内面調整が入念でない（内面に手が入らないため）ことから液体の長期保存にも適さない。よって、小さな固体の貯蔵や液体の短期保存（盛り付け用など）に主として使われたと推定される。

3-2．大別器種組成

小破片を含めた口縁部集計（大洞C2式全体では復元可能土器を含めて約1300個体）による大別器種組成では、深鍋が75%を占め、浅鉢・鉢と壷が各々約1～1.5割である（付表）。注口は4個のみで0.3%に過ぎない。口縁部集計で深鍋が7割を占める点は、これまで報告された東北地方当該期の大別器種組成と類似する。一方、容量測定資料143個では、深鍋83個（58%）、浅鉢・鉢27個（18.9%）、壷30個（21.0%）、注口2個（1.4%）、蓋1個（0.7%）であり、口縁部集計に比べると「大型品が多い深鍋」の比率が低く、「小型品が多い浅鉢・鉢と壷」の比率が高まる。これは、大きめの土器ほど復元しにくいため、組成比率が過小評価された結果と思われる。

廃棄時の実態により近いと思われる「小破片を含めた口縁部集計」では、東北地方の当該期遺跡の多くでは深鍋が7割程度と高い比率を示す。これは、調理用の鍋の方が非調理用の浅鉢・壷よりも寿命が短いことに起因する可能性がある。東南アジア、中南米、西アフリカなどの土器作り民族誌では、鍋の平均寿命は1年未満の場合が多く、盛り付け用や貯蔵用の土器よりも短いからである（Tani and Longacre 1999)。

3-3．有文・素文・無文という作り分けの意味

器種間の違い：装飾は、単位文様が付く「有文」、無文ミガキ（当該期では高い比率で赤彩されたと思われるが、剥落により痕跡が残らない例も多い）、それ以外の「素文」に大別される。素文には口頸部に沈線が巡るものと全面縄文施文とがある。また、内面ミガキと黒色（褐色）化が施されるいわゆる「半精製」（頸部に沈線が巡るもの）とこれらを欠くいわゆる「粗製」（頸部に沈線が巡るものと全面縄文施文とがある）という区分もこれまで用いられてきた。

小破片を含む口縁部集計では、深鍋は素文が大半を占め、有文は小型の一部に限られるのに対して、浅鉢・鉢は有文が最も多く、無文ミガキ（赤彩）と素文が次ぐ。壷では、素文（縄文）が過半数を占めるが、有文もそれに近い比率である。なお、壷の中での無文ミガキの比率は「小破片を含む頸部集計」8％（148個中12個）よりも「容量を計測できた復元可能資料」23%（30個中7個）の方が明瞭に高いことから、有文や素文の壷に比べて残存率が高いといえる。小型無文ミガキ壷はほぼ完形で廃棄されたと推定される例も目立つ。この理由として、儀礼的飲食などの後、まだ使える状態の無文ミガキ壷を廃棄した可能性が考えられる。

同一器種内での有文と素文の違い：有文と素文の違いについて、深鍋と壷の間に以下の共通点がみられる。まず、深鍋・壷ともに、有文を多く含む類型（後述の深鍋3・4類と壷1類）の方が素文のみの類型よりも小さめである。次に両器種ともに、有文を含む類型には全体形が類似した有文と素文の2タイプがあり、有文の方が素文よりも小さめ（壷1類）または浅め（深鍋3・4類）である。さらに、有文の小型深鍋3・4類と壷1類は、口縁部に1個のみ大きめの突起が付く（すなわち、正面を意識した）例が多いのに対し、素文の同類型には正面を意識した例は少ない。以上より、深鍋と壷の有文器種は、同一類型の素文土器と対になっている、と考えられる。有文土器における「正面を意識した装飾」は日常の調理や盛り付けの器には特に必要ないことから、「同一類型の中での有文と素文の違いは、（使い方の違いというよりも）、日常用と非日常用（来客用、儀礼用）といった使用コンテクストの違いを反映する」という仮説を提示することができる。

一方、浅鉢・鉢は有文の比率が高く、「同一類型内での有文と素文の並存」や「正面を意識した突起装飾」が顕著ではない。これは、盛り付け用の浅鉢・鉢は深鍋・壷に比べて、日常用と非日常用の違いが小さいためと考えられる。

第4章　深鍋の中での作り分けと使い分け

4-1．深鍋の中での作り分け

細別器形類型（第5図）：器形を、1類「九年橋タイプ」、2類「山王タイプ」、3類「頸部屈折」、4類「括れなし」、5類「内傾」に分類した。

1類「九年橋タイプ」は、口頸部が屈折して外傾し、幅広の頸部を形成する。頸部の施文には、3～11本の平行沈線が巡るものと無文とがあり、両者の比率が時間差と地域差を反映している（藤村1979・第25図など）。単位文様が付く例はない。小破片を含めた口縁部集計では、深鍋の半数近くを占める。頸部に緩やかな括れを持つが、この括れは「熱い状態の鍋の頸を掴んで移動するため」だったとは考えにくい。頸部の括れは、成形時に粘土紐の接合角度を変えることにより作り出されているため、頸部の付け根の接着が弱い（頸部で割れ口が全周を巡る例が多い）からである。

2類「山王タイプ」は、頸部屈折のように明瞭な屈曲点を持つものではなく、緩やかに内湾し、口唇部で小さく外反する（第30図）。口頸部幅は狭い。里鎗遺跡では客体的な器形であり、宮城県栗原市山王囲遺跡（伊東・須藤1985）など仙台平野・最上川流域に主体的に分布する。胴部全体に縄文が施文され、単位文様が付く例はない。

3類「頸部屈折」は、頸部で内屈し、口唇部で外傾・外反する類型である。素文（第31図など）・有文（第35図など）の2つに細分した。この類型も1類と同様に里鎗遺跡で主体的な類型の一つであり、東北地方全域に分布する。

4類「括れなし」は、口頸部に屈折がなく、直線的に開

く形である。3類と同様に素文（第40図など）・有文（第38図など）の2つに細分した。有文のものは里鎗遺跡において出現頻度が高い。器形は東北地方全域に分布する。

5類「内傾」（第41図146・148）は、口縁部が内傾する形であり、全体形は多様である。

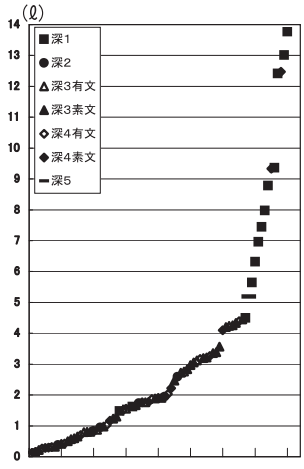
形と大きさによる鍋の作り分け（第6-9図）：里鎗遺跡における鍋の作り分けについて、①容量分布、②容量と相対的深さの相関関係、③容量と括れ度の相関関係の3点を検討する。

まず、深鍋全体の容量分布では、5㍑付近までは間断なく分布するが、5㍑・10㍑付近において明瞭な空隙がみられる（第6図）。よって、10㍑以上を大型、5～10㍑を中型、5㍑以下を小型とした。九年橋遺跡などの容量分布においても5・10㍑を境とする作り分けがみられることから、東北地方に共通した特徴といえる（小林・阿部2008）。器形類型毎に見ると、5㍑以上の中・大型は1類が主体を占め、5㍑以下の小型はその他の類型が集中する。小型の中では、類型毎の偏りはみられず、有文・素文別にも容量の差異は認められない。後述のように、5㍑を境に胴下部コゲ頻度が明瞭に異なることから、このサイズ区分は使い方の違いを反映している（第7図）。

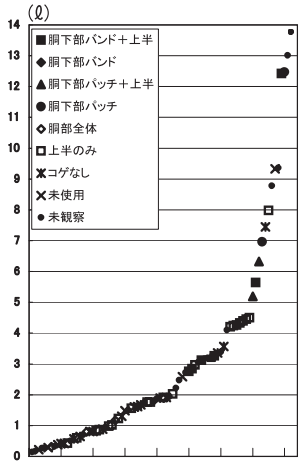
次に容量と相対的深さを検討すると、容量5㍑・相対的深さ90を境に「中・大型で深め」と「小型・特小型で浅め」の作り分けがみられる（第8図）。前者は、大・中型を占める1類（九年橋タイプ）が主体を占め、4類（括れなし）素文も含まれるのに対し、後者は、3類（頸部屈折）の大多数と4類（括れなし）の一部が該当する。4類では、有文は相対的深さ90未満で小型・特小型なのに対し、素文は90以上で中・大型の比率が高いことから、「有文が小さく、素文が大きい」といえる。括れなしの素文深鍋は、縄文時代晩期の各地域で普遍的に用いられる器形であり、上述の傾向も時期・地域を超えて当てはまる。

一方、容量と括れ度については、器種間に明瞭な違いがみられなかった。ただし、3類（頸部屈折）において、有文と素文とで括れ度に若干の差異が認められる（第9図）。

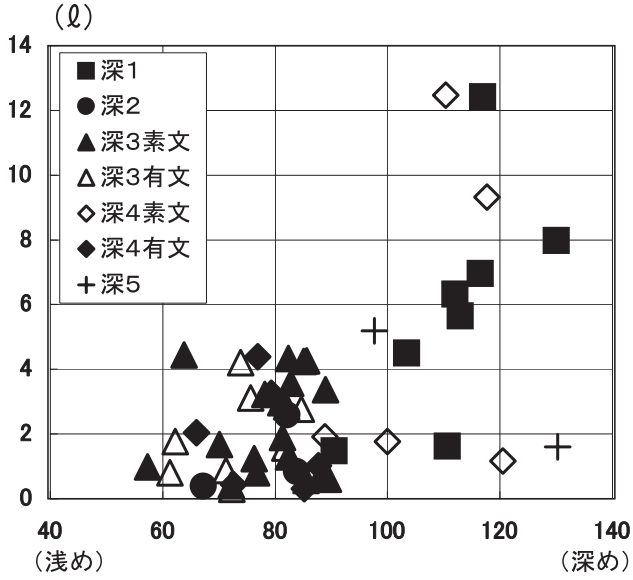
深鍋の中での作り分けのまとめ：　深鍋は「中・大型（5㍑以上）で深め（深さ90以上、全て素文で九年橋タイプ主体）」、「小型・素文（浅めが大半を占めるが、深めも少数あ



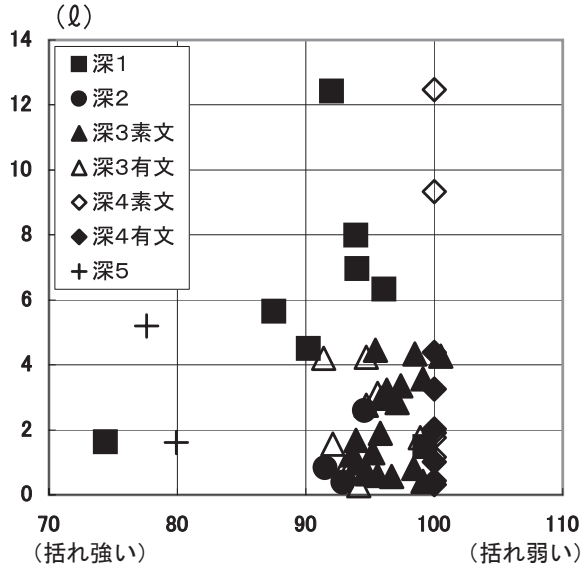
第6図　器形類型毎における容量分布
Fig. 6 Volume distribution of cooking pots by vessel forms



第7図　コゲ類型毎における容量分布
Fig. 7 Volume distribution of cooking pots by carbon deposits types



第8図　器形類型毎の容量Xと相対的深さY
Fig. 8 Differentiation of cooking pot forms by volume and relative height



第9図　器形類型の容量Xと括れ度Y
Fig. 9 Differentiation of cooking pot forms by volume and neck constriction

る)」、「小型・有文（全て浅め)」の３つに作り分けられている。中型と大型を一括したのは、北上川中流域では中型・大型ともに九年橋タイプが主体を占めるためである。また、有文と素文の使い分けを検討することが本稿の目的の一つであることから、「小型・浅め」の中での有文と素文を別類型とした。

３タイプの各々は、相対的深さ、底部形態（台付か平底か)、器面調整、口縁部装飾において以下のように明瞭に作り分けられている。

相対的深さは、中大型（全て 100 以上)、小型素文（31 個中 24 個が 80 以上)、小型有文（14 個中９個が 80 未満）の順に浅めになる。台が付く比率は、中大型（全て平底)、小型素文（平底主体で台付もある)、小型有文（台付主体）の順に高まる。台部は全て２cm 以下と低めであり、また、小さめの鍋ほど出現頻度が高いことから、加熱効率の向上というよりは高台的な機能を意図されたと考えられる。

器面調整は、中大型は大多数がミガキや黒色化がないのに対し、小型有文は内面に入念なミガキがほどこされ、黒色化も顕著である。小型素文は、浅めのものはミガキと黒色化が入念だが、深めで２㍑以上ではミガキが施されないものが多い。

鍋蓋の有無：口縁部の突起や把手の出現頻度は中大型、小型素文、小型有文の順に高くなる。３類型とも木製蓋を掛けるのに適した作りではない。縄文時代では土製鍋蓋は三十稲場式や下野式といった限られた時期にしか作られないことから、蓋を掛けるとすれば木製蓋になる。木製蓋は口縁からはみ出すように掛けると周縁部が燃えてしまうことから、内側に置く必要がある。中大型深鍋を構成する１類と４類は、口頸部の内側に蓋を置くことができない。小型も、①口頸部が短い、②口縁部に把手や突起が付くものが多い、などの点で蓋を置きにくい作りである。以上より、３類型とも木製を含めて鍋蓋を用いなかったといえる。蓋を用いない理由として、頻繁なかき回しの必要性や、加熱しながら食べるような調理方法が想定される。

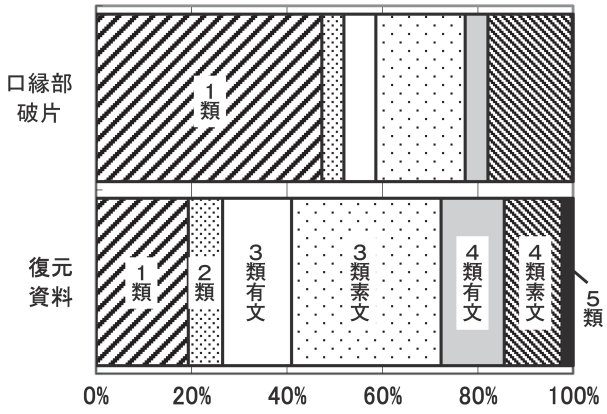
４- ２．深鍋の各類の組成比率

細別類型の組成比率：小破片を含む口縁部集計では 1000 個中、1 類が 43%で最も多く、括れがある３類（33%）が次ぐ。括れがない４類は 16%であり、仙台平野・最上川流域に特有な２類は８％程度と少ない。この深鍋の構成は九年橋遺跡と共通することから、北上川中流域の大洞 C2 式期に共通する特徴といえる（図 10b の上から２段目)。

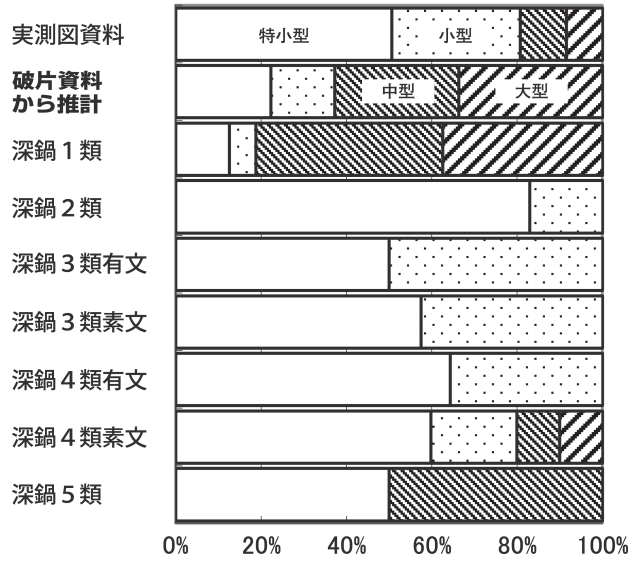
サイズクラス組成（第 10 図）：容量を測定できる復元資料では大型と中型の比率は各１割に過ぎないが、「大きめの鍋ほど復元しにくいため比率が過小評価される」ことから、本来のサイズ組成比率の推定を試みる。当該期の深鍋は、「１類は中大型が主体」「３類は小型にほぼ限られる」というように、各類型が特定のサイズに偏ることが特徴である。このため、中大型に偏る１類は、口縁部破片を含めた器種組成では４割を占めるのに対し、復元資料では２割に過ぎない（図 10a)。一方、小型が主体の３類と４類は容量測定資料（83 個中 28%）の方が口縁部資料（908 個中 15%）よりも明瞭に高いことから、大きめの深鍋ほど復元率が低いことが明らかである。

そこで、復元資料において深鍋タイプ毎に大型・中型・小型の比率を集計し、その値に各タイプの組成比を掛けた後でサイズ毎に再集計することにより、「大きめの土器の過小評価」を補正した (図 10b)。例えば、復元資料における１類のサイズ組成は、大型 37.5％、中型 43.8％、小型 18.8％なので、口縁部資料における組成比（908 個中の 44.6%）を掛けることにより、本来の個数である大型 158 個、中型 184 個、小型 79 個という値が復元される。各タイプを

10a 復元資料と口縁部破片資料のタイプ組成の違い



10b 大きめの土器の過小評価補正



第 10 図　深鍋におけるサイズ組成

Fig.10　Frequency of cooking pot forms in a rim-count sample (top) and a restorable pot sample (bottom)

合計すると、深鍋全体では大型３割、中型２割、小型素文３割強、小型有文２割弱という比率が得られた。

４- ３．深鍋細別器種間の口縁装飾の違い（第 11 図）

深鍋では以下の違いがある。まず、１類は押圧（Ｃ類）が大半を占めるのに対し、２・３・４類は刻み目（Ａ類）が主体を占め、平縁（Ｅ類）または小波状（Ｗ類）が次ぐ。後者の中では、２類では突起装飾を伴わないのに対し、３類にはＢ突起が複数単位均等に配されることが多い。また、４類は、他の類型よりも平縁（Ｅ類）の出現頻度が高い。

このように、有文比率が高い３類（括れがある深鍋）の方が１・２・４類よりも口縁部の装飾性が高いといえる。また、上述のように、小波状口縁（Ｗ類）、押圧（Ｃ類）や突起装飾（Ａ突起・Ｂ突起や１単位の大型把手）は蓋を（口縁からはみ出して）掛けるのに適さない作りであることから、木蓋を含めて蓋を掛けることはなかったと考えられる。

５章．コゲ付着からみた深鍋の使い分け

５- １．土器使用痕（スス・コゲ）の観察方法

スス・コゲの残り具合：里鎗遺跡の深鍋では廃棄後被熱の痕跡は認められないが、廃棄後（堆積中）の磨耗のためススの保存状況は良好とはいえない。

外面のススは、薪からでた炭素が薪から気化した樹脂を接着材として器表面に貼りついており（外表面の細かな凹みに入り込んでいる）、断面内部まで浸透していないことから、表面が磨耗を受けると跡形もなく落ちてしまうことが多い。低湿地遺跡から出土した鍋類は分厚いスス層に覆われている例が多いことから、丘陵部の遺跡の多くでは堆積中の磨耗によりススの大半が消失したことが明らかである。

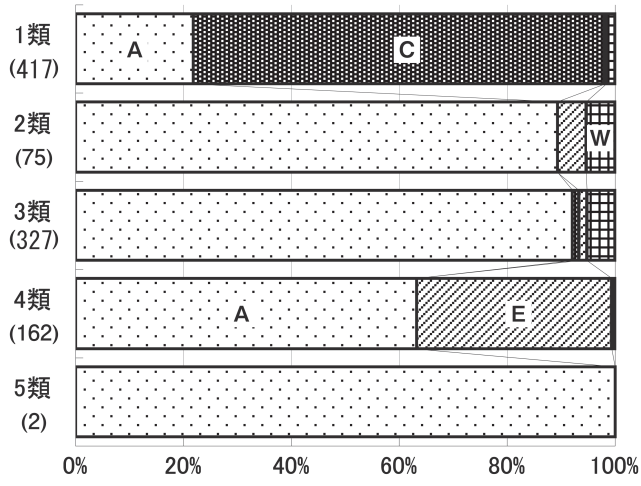
また、調理内容物が炭化した結果である内面のコゲは、内面のミガキ調整が入念でない場合は、煮汁に溶けた内容物が器壁内部（断面）まで入り込んだ状態で炭化するため洗い落とされにくいのに対し、内面のミガキ調整が入念な場合は内部まで浸透しにくいため、磨耗により落ちてしまいやすい。特に、東北地方の縄文時代晩期の小型深鍋では入念な磨き調整（＋黒色化）のため、堆積中の磨耗により薄いコゲが落ちてしまうことが多い。

以上より、調整が丁寧で摩耗していない器面において、一部のみに明瞭なコゲが付着していた場合、本来はコゲが帯状に全周を巡っていた可能性が高い。

磨耗した内面におけるスス・コゲの認定方法：スス・コゲ自体が磨耗して殆ど認定できなくとも、器面が帯状に磨耗している場合は、「その上下の磨耗していない部分では本来ススやコゲに覆われていたため磨耗を免れた」と考えて、スス・コゲの範囲を復元することができる。すなわち、コゲやススに覆われた部分では、堆積中の磨耗により表層のスス・コゲの多くが落ちてしまうが、それらに覆われていた土器表面は磨耗が少ない。一方、本来ススやコゲがなかった（または薄かった）部分は堆積中に土器表面が直接磨耗にさらされるため、土器表層のミガキ層や黒色化層が帯状に失われてしまう。

このような「本来スス・コゲがなかったことを示す帯状の磨耗部」は、内外面が黒色処理された土器において認定しやすい。縄文後期後半から小型精製の土器に普及する黒色化は、入念にミガキをおこなった器面に焼成直後に炭素を吸着させたものである。内外とも明色に焼きあがった後に、表層の極めて薄い部分（0.1 mm程度）のみ炭素を吸着して黒色化されるため、堆積中に磨耗すると黒色化以前の明色の器面が露出する。このような磨耗部がほぼ同一レベルで器面を巡る場合は、堆積中の偶然の磨耗ではなく、使用時のススなし部を示すと考えてよい。

なお、スス・コゲの認定方法や喫水線上コゲの認定基準については小林 2008、小林・阿部 2008 などを参照されたい。



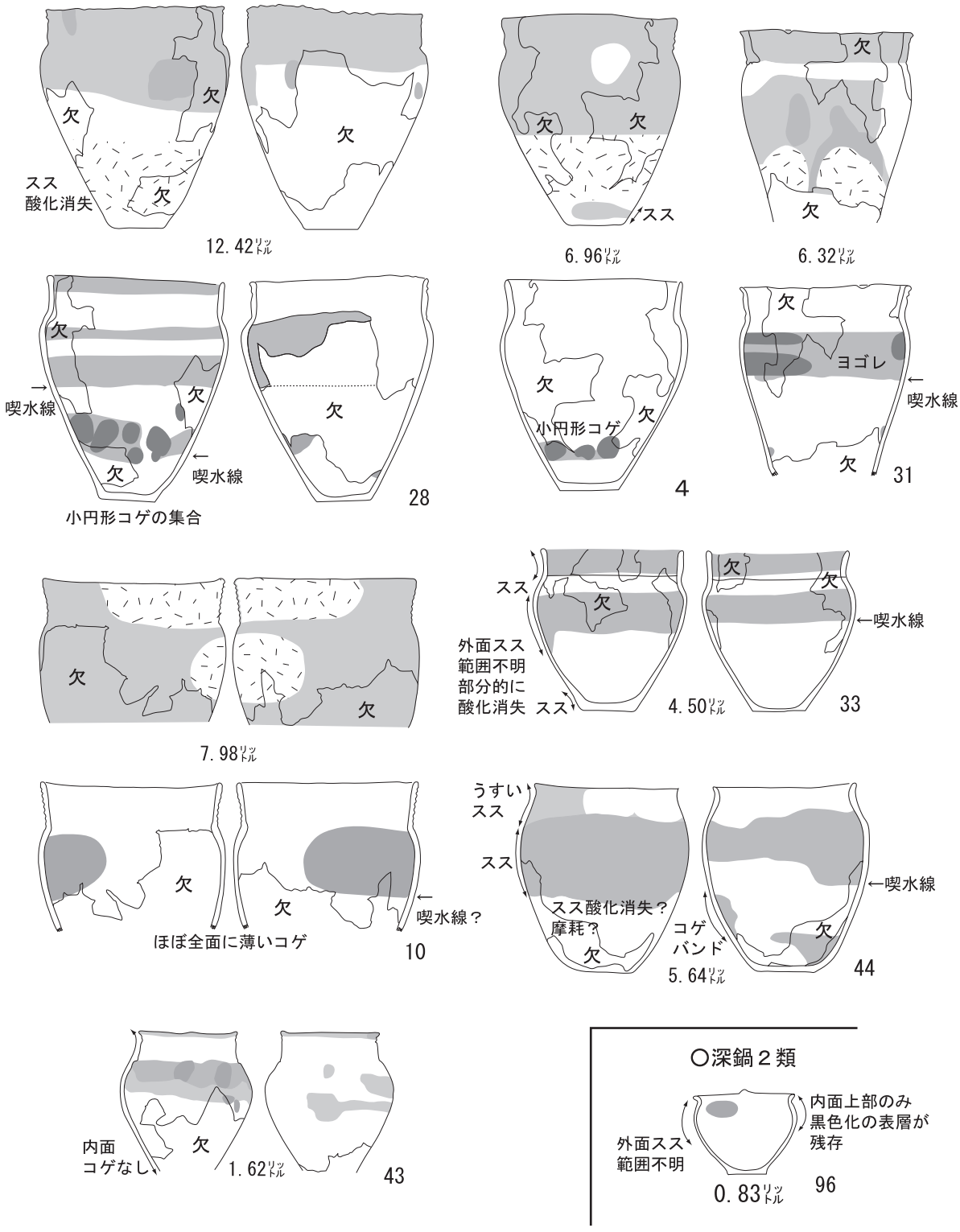
第 11 図　深鍋における口縁装飾出現頻度
Fig.11　Differences in rim decoration types between cooking pot forms

５- ２．コゲの形成過程（第 12-15 図）

煮炊きに未使用（スス・コゲなし）：未使用は 11 点ある。中大型は８個中１個のみなのに対し、小型は 45 個中９個と未使用の比率が高い。器形類型では、１類は少ないのに対し（９個中０個）、２類はスス・コゲを観察した３個中２個が未使用である。２類は、里鎗遺跡では客体的な類型であることから、使い分けた可能性も示唆される。小型の中では素文（31 個中８個）の方が有文（14 個中２個）よりも未使用の比率が高い。また、より細かな容量ごとにみると、１㍑未満（14 個中５個）が最も未使用が多く、１㍑台（11 個中２個）と２～５㍑（16 個中３個）、５㍑以上（８個中１個）の順に比率が低くなる。

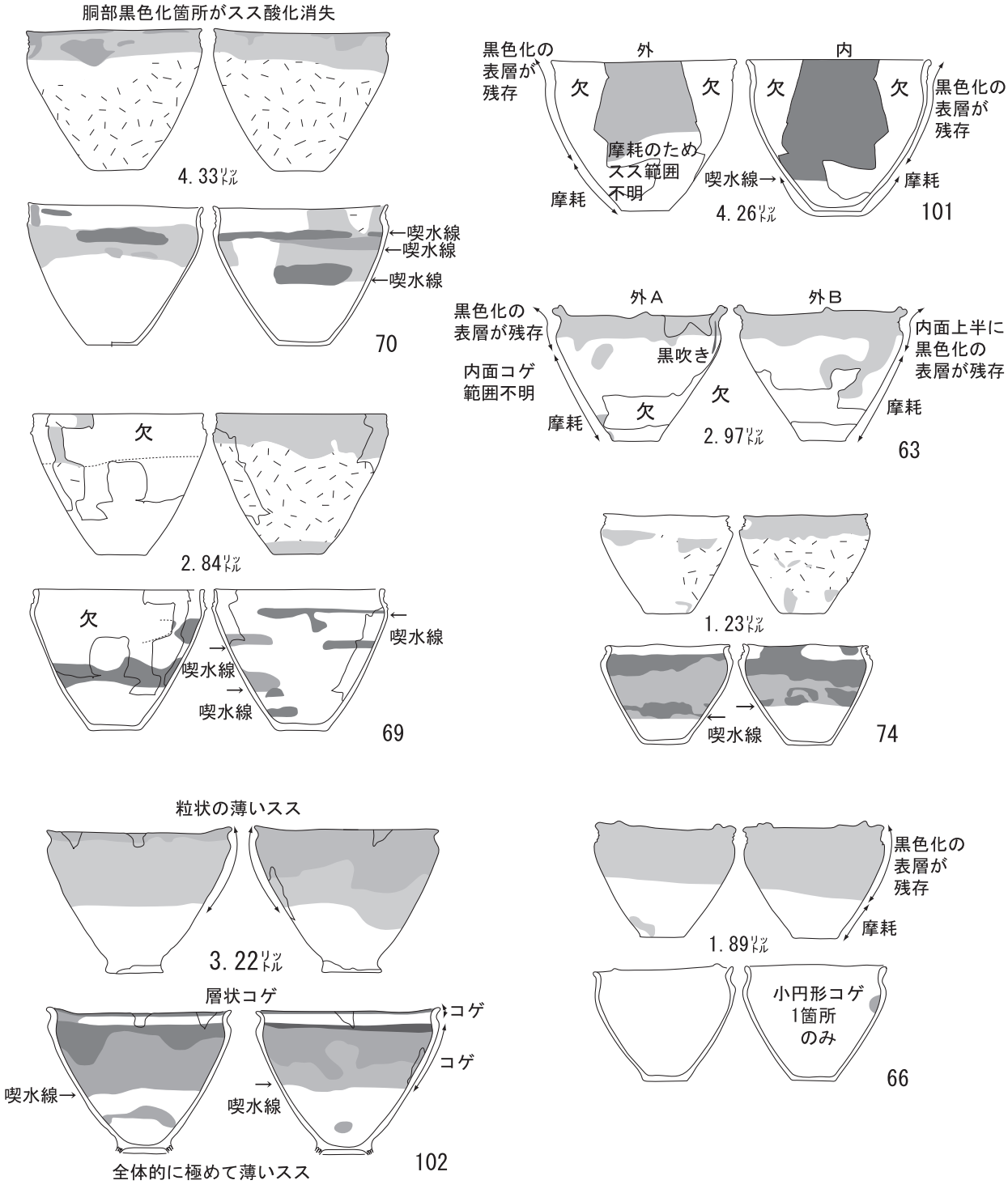
コゲ範囲の類型化：幅広で帯状に付着したコゲを「バンド状コゲ」とし、その内、コゲの下端ラインが水平で、輪郭が明瞭なものを「喫水線コゲ」と認定した（小林・阿部 2008 など）。また、不整円形ないし楕円形のコゲを「パッチ状コゲ」とした。

○深鍋１類

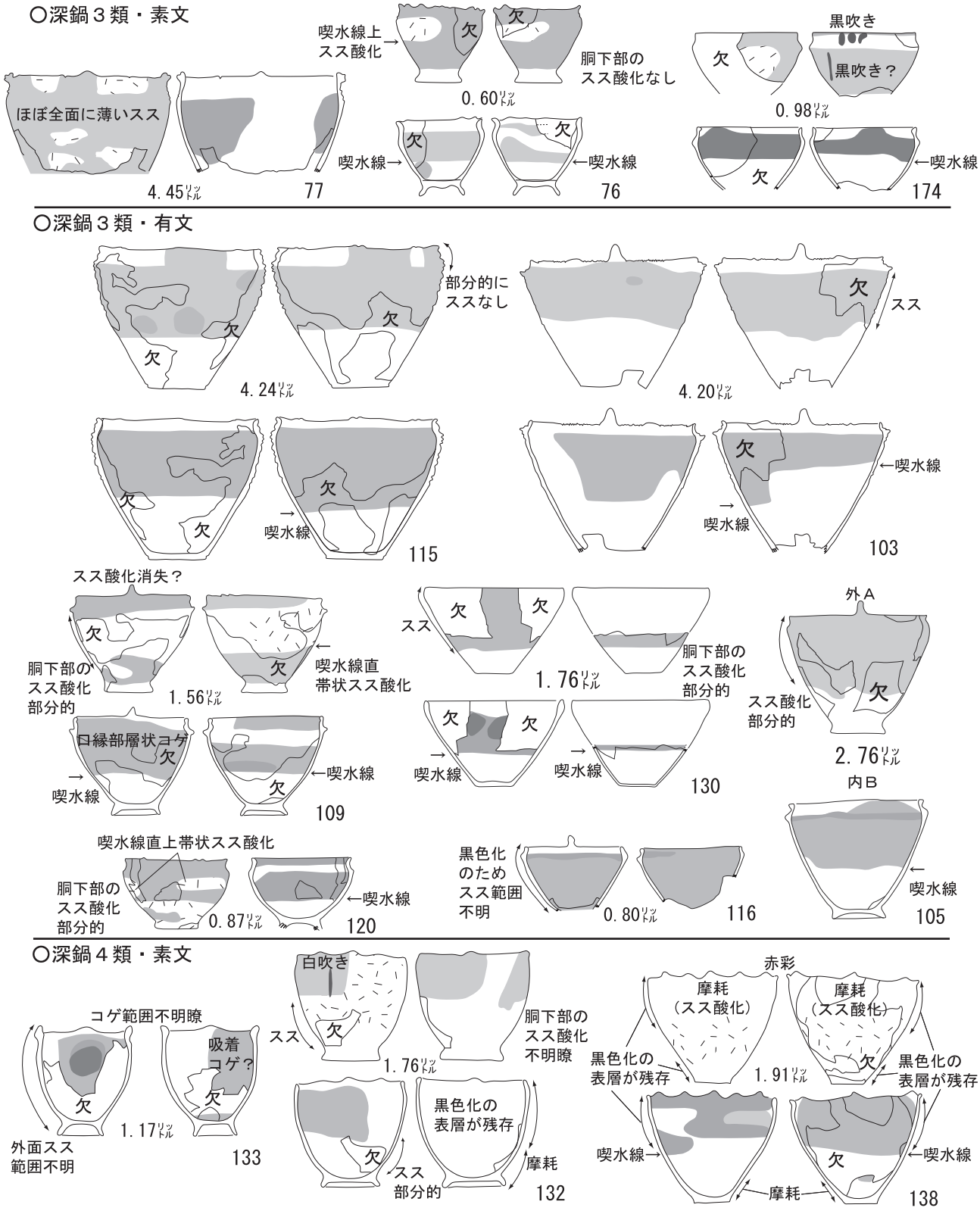


第 12 図　深鍋のスス・コゲ実測図１　縮尺 1/8
Fig.12　Illustration of carbon deposits and soot of cooking jars

○深鍋３類・素文

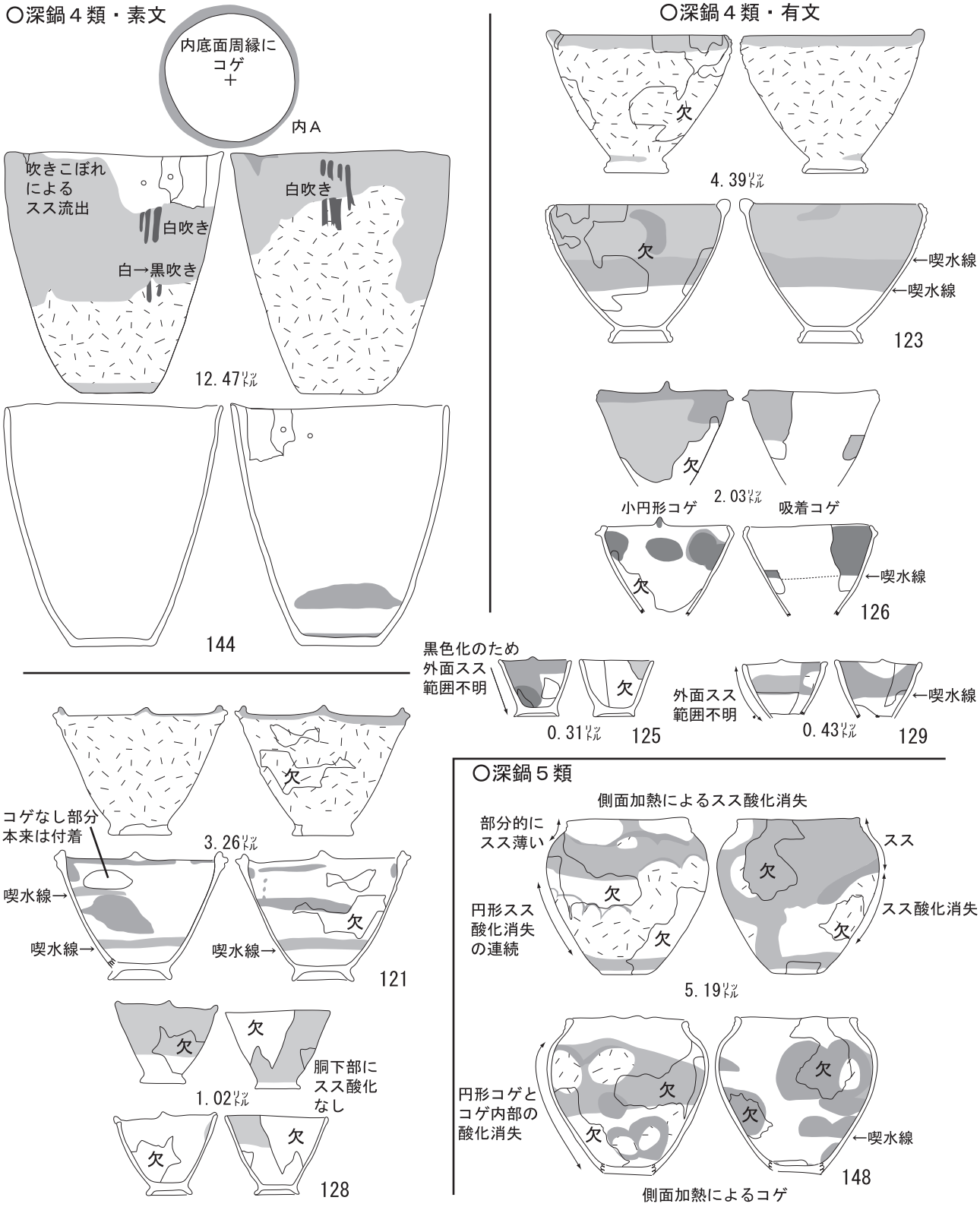


第 13 図　深鍋のスス・コゲ実測図２　縮尺 1/8
Fig.13　Illustration of carbon deposits and soot of cooking jars



第 14 図　深鍋のスス・コゲ実測図３　縮尺 1/8

Fig.14　Illustration of carbon deposits and soot of cooking jars



第 15 図　深鍋のスス・コゲ実測図４　縮尺 1/8
Fig.15　Illustration of carbon deposits and soot of cooking jars

胴下部コゲには、バンド状コゲ 7 点、パッチ状コゲ 5 点、内面全体コゲ 2 点、「欠失のためバンド状かパッチ状かを判別できない胴下部コゲ」1 点が看取された。パッチ状コゲについては、1 類 3 点（第 12 図 4・28・31）、3 類 1 点（第 13 図 102）、4 類 1 点（第 15 図 144）、5 類 1 点（第 15 図 148）である。いずれも横長楕円形の明確なコゲが付く。サイズは偏りがなく、有文のものにはみられない。なお、深鍋 4・102（第 12・13 図）には、明確な円形ないし楕円形のコゲが付着しており塊状食材の密着によるコゲの可能性が高い。

中・大型深鍋の胴下部コゲの形成過程：喫水線上か下かを判定できないものが多いが、胴下部の帯状コゲについては以下の点から「盛り付け終了時まで鍋がイロリから動かされずにオキ火に囲まれていたことを示す喫水線上こびり付きコゲ」も多く含まれると思われる。

第一に、中大型の胴下部コゲの形成過程を判定できる唯一の例である大型深鍋 28（第 12 図）は、胴下部コゲの下端ラインがやや高めであることから喫水線上の可能性が高い。また、中型深鍋 148（第 15 図）には胴下部に円形コゲと帯状コゲの両者が付くが、帯状コゲは下端ラインがやや高めであることに加えて、下端ラインがほぼ水平に巡ることから喫水線上コゲと認定した。

第二に、他遺跡の例から「胴下部のバンド状コゲには喫水線上こびり付きコゲがかなり多く含まれる」ことが示唆されていることから（小林・阿部 2008）、中型深鍋 4（第 12 図）や大型深鍋 144（第 15 図）の帯状コゲも喫水線上の可能性が十分ある。一方、胴下部に小円形コゲが連続する場合は喫水線下コゲ（内容物の流動性がなくなるシチュー状）の可能性が高い。深鍋 4（第 12 図）と 28（第 12 図）の胴下部コゲは一見円形コゲが連続するようにみえるが、実際には器面の凹みに顕著なコゲが残存した結果である。

なお、中・大型深鍋の上半部のコゲは喫水線を示すコゲが主体を占める。これらの喫水線は比較的高い位置（器高の半分以上）に巡ることから、調理中の喫水線を示すことが明らかである。中大型深鍋は、小型深鍋と異なり、胴上半部コゲ（器高の 5 割以上）と胴下部コゲの間にコゲがないことから、胴上半部コゲは調理中の喫水線、胴下部コゲは盛り付け終了時の喫水線を示す可能性が高い。

小型深鍋の胴下部コゲの形成過程：バンド状コゲの内、喫水線上コゲに該当するものは 5 点ある（第 13 図 69・101、第 14 図 105、第 15 図 121 など）。これらは、コゲの下端ラインが水平で輪郭も明瞭であることから喫水線上コゲと認定した。

5-3．深鍋の作り分けの意味

深鍋の使い分けについての従来の仮説：従来の研究から、縄文晩期深鍋の使い方として、①ナッツ類のアク抜きなどの食材加工（大型を想定）、②宴会・儀礼などでの（世帯を超えた）多人数用の調理（大型を想定）、③世帯の日常用調理（数食分の作り置きも含む；20㍑未満を想定）、④少量の特別調理（有文深鍋を想定）、⑤飲食用と短時間の加熱用の兼用（小型を想定）、などが想定されている。

ナッツ類のアク抜きは 20㍑以上の特大型を含めた大形鍋が想定される。集落から離れた共同トチ加工場の埼玉県川口市赤山陣屋跡遺跡では、20㍑以上の特大型に特徴的な胴下部コゲが付くことから、これらがアク抜き用だったことが指摘されている（小林 2008）。

世帯を超えた多人数用調理は、共同での宴会・儀礼用の調理が想定され、10㍑以上の大型深鍋が想定されている。

世帯の日常調理は、中小型が主体だったという説もあるが、①上述した長時間煮込む調理では数食分を作り置きすることが多かったと考えられる、②喫水線を低めに抑えた調理では調理内容物量に対して大きめの鍋が必要などの点を考慮すると、10㍑台の大型も対象となりうる。深鍋の中での大型（10㍑以上）の比率は、2㍑未満が急増する縄文時代晩期でさえも 4 割近くを占める。こうした組成比率の高さを考えると、食材加工用や「宴会などでの多人数用調理」と共に日常調理にも頻繁に使われた可能性が高い。

特別調理は、儀礼・宴会などでの調理や、日常調理でも特別な場合に小型の有文深鍋が用いられたという仮説である。後者は、来客へのもてなしや誕生日などの特別な料理では、高級食器を使うのと同じ理由で、有文の特別な鍋を使う、といった状況を想定している。

最後の「飲食・調理兼用」仮説は、①中大型で調理した内容物を小型鍋に盛り付けて、場合によっては追加加熱する、②旅館の個食用鍋物のように一人分を調理し、鍋から食べる、などが想定されている。この仮説の根拠は、①ススが付くと見えなくなる平面的な沈線文様や黒色化が小型深鍋には施される、②縄文晩期になると 2㍑未満の深鍋の組成比率が急増することから、世帯単位の調理用というよりは銘々用の可能性が高い、③ 1㍑未満の鍋は世帯用としては小さすぎる、などの点である。この仮説は、有文と素文を含めた小型鍋を対象に想定している。一方、有文と素文の作り分けについては、①使用コンテクストの違い（有文は儀礼を含めた特別食に使われた）、②異なる料理に使われた、などの可能性が考えられる。

里鎗遺跡の中大型深鍋と小型深鍋の使い分け：里鎗遺跡では、胴下部（＋胴上半部）にコゲが巡る中大型と、大多数が上半部のみにコゲが限定される小型という使い分けが明瞭である。中大型と小型のスス・コゲの違いとして、胴下部のスス酸化消失程度を加えた以下の 3 点があげられる。

第一に、中大型深鍋は全て胴下部にコゲが付くのに対し、小型の大多数（45 個中 39 個）は胴下部にコゲがない。中大型深鍋の胴下部コゲは喫水線上コゲが多く含まれると考えられる。小型鍋は胴下部コゲが少ないことから、「盛り付け終了時まで鍋がオキ火に囲まれている調理」や「内容物の流動性が消失する炊飯やシチュー状の調理」は少なかったといえる。

第二に、中大型と小型は共に高い比率で上半部に喫水線コゲが付くが、中大型深鍋では上半部の喫水線は高め（器高の 5 割以上）であり、胴下部コゲとの間にコゲなし部が広がることから、「調理中の喫水線を示す上半部コゲと盛り付け後の喫水線を示す胴下部コゲ」という組み合わせが多

かったと考えられる。一方、小型鍋の上半部コゲは器高の８割から２割（胴下部コゲは含まれていない）まで多様であり連続していることから、いずれも調理中の喫水線を示すと考えられる。

第三に、中大型は全て胴下部に明瞭なスス酸化が巡ることから、調理中に強い加熱を受けたと考えられる。また、胴下部の顕著なスス酸化消失は、盛り付け後の喫水線上の被熱によるものも含んでいると思われる。一方、小型深鍋では胴下部のスス酸化消失が弱い（ススが部分的に残る）例も含まれることから、「大型に比べて胴下部の被熱が弱かった」「喫水線下の水分の浸み出しにより外面胴下部の温度上昇が抑えられた」という場合が中大型よりも頻繁にあったと考えられる。

以上をまとめると、素文の大・中型深鍋は、喫水線が高めであるが、胴下部にコゲがみられる。一方、小型有文鍋は喫水線が低く、胴下部コゲも各種みられ、文様が施文されていることを考慮すると、盛り付けと調理を兼ねて使用されていた可能性が高い。このことから、素文深鍋で内容物を熱した後、小型有文鍋で盛り付けされる場合の他、小型有文鍋に移し替えて加熱したことが推測される。

第６章　浅鉢・鉢の中での作り分け

６- １．浅鉢・鉢の細別類型（第５図）

浅鉢･鉢を相対的深さ、口縁部の括れの有無、底部形態（稜線が明瞭な平底、稜線が曖昧な平底、丸底）の３属性により、浅鉢１類「括れのない皿形」、２類「丸底で括れがない皿形」、３類「括れがある浅鉢・鉢」、鉢４類「括れがない鉢」、鉢５類「長頸の台付鉢」に区分した。

浅鉢１類は、有文・浅め 1a 類と素文でやや深めの 1b 類との二者がある。ともに稜線が曖昧な平底をもつ。1a 類は浅鉢・鉢の中で最も個数が多く、当該期の浅鉢を代表する形である。一方、全面に縄文が施文される 1b 類（第 43 図 156・157）は、里鎗遺跡では少ないが、同時期の岩手県花巻市安堵屋敷遺跡で多数出土している（国生他 1984）。

浅鉢２類は、①最も浅め、②無文ミガキで本来は内外全面が赤彩されていたと思われる（堆積中に剥がれ落ち、痕跡をとどめないものもある）、③丸底、という特徴をもつ (第 43 図 158・159)。赤彩が映えるように白っぽく焼き上げられている。２類は当該期に青森県から宮城県までの広範囲に分布するが、上述の特徴は地域を超えて共通している。

浅鉢３類は、深鍋２類を浅くした形である。頸部に弱い括れがあり、最大径部分に突帯が巡る。胴部に単位文様が付くものが多いが、無文（第 44 図 169・170）や縄文のみのもの（第 44 図 167）もある。底部は稜線のある平底である。大洞 C2 式期では浅鉢 1a 類と３類が有文浅鉢の中心となるが、３類は大洞 C2 式後半に増加し、１類に代わって浅鉢の主体となる。３類は 1a 類に比べ文様帯幅が狭まり、胴下半部に縄文が施文されることが多い（1a 類は無文ミガキ）。

鉢４類は、やや深めで括れがなく、稜線の明瞭な平底をもつ。有文が多いが（第 44 図 171・172）、縄文のみの素文類型もある（第 44 図 176）。

鉢５類は、口頸部が長く、胴部上半に単位文様が施される。相対的深さは深鍋２類と同じ範囲に収まるが、スス・コゲがなく、赤彩されることから、鍋ではなく「鉢」とした。台部は有文深鍋２類に付く台部より高めである。１㍑未満の小型と７㍑以上の大型とがある。５類は東北地方北部に多く、単位文様も北部に多い類型が用いられる。

６- ２．浅鉢・鉢の細別器種組成（付表）

破片を含む浅鉢の口縁部集計（総数 184 個）では、１類（括れなし）が 56%で最も多く、３類（18%）が次ぐ。以下、丸底無文の２類（11%）、括れのない鉢４類（９%）、台付鉢５類（６%）の順に比率が低くなる。里鎗遺跡の浅鉢の主体を占める１・３類は東北地方全域に分布する普遍的な類型であるのに対し、組成比率が低い５類は東北地方北部に多い。

盛り付け・食材加工用と考えられる浅鉢・鉢は、浅めの１・２・３類が大多数を占め、やや深めの４・５類は少数に過ぎない。ただし、鉢４・５類は、深鍋３類（括れがあり、有文の比率が高いが、スス・コゲが高い頻度で付くことから盛り付け・調理兼用と推定される）よりもやや浅めの傾向があるものの、全体形が類似したものが多い。このように、やや深め（相対的深さが 60 ～ 80）の容器は盛り付け・加工専用（鉢４・５類）か「盛り付けと調理の兼用」（深鍋３類）に使われることが多かったといえる。

６- ３．細別類型間の口縁装飾の違い（第 16 図）

浅鉢１・３類と鉢４類では、細い刻目（Ａ類）が主体を占め、押圧（Ｃ類）が次ぐ点で共通性が高い。ただし、浅鉢１類ではＡ突起を４単位均等に貼付されることが多いのに対し、浅鉢３類はＢ突起を貼付するか、突起を伴わない場合が多い。一方、浅鉢２類・鉢５類は素文口縁（Ｅ類）が主体を占めており、平縁にＡ・Ｂ突起が均等に数単位貼付されることが多い。小波状Ｗ類は、大洞 C2 式前半から出現し、後半に増加する類型であり、浅鉢１類・鉢５類に若干みられるのみである。

第７章　壷の中での作り分け

７- １．壷の細別器種（第５図）

壷は、口頸部（外反・直立、内傾、細口）と胴部（球胴、肩が張る、長胴）の組み合わせにより、１～４類に細分した。

壷１類は、口頸部が外反または直立し、球胴状の器形である。胴上半部に単位文様が付くことが多いが、縄文のみの例もある。有文のものには赤彩されるものがある。

壷２類は、胴部最大径が１類より上位にあり、やや肩が張る形である。口頸部は内傾するものが多いが、直立に近いものもある（第 48 図 204）。胴部全体に縄文施文される。

壷３類は、口頸部が内傾し、頸部上端がすぼまる。いわゆる細口壷である。口縁部は短く外反する。胴部は偏球形であり、底部が丸底気味で不安定である。ただし、大洞 C2 式後半～Ａ式期になると底面に低い４個突起が付くようになり、また、頸部の括れが弱いもの（第 49 図 222）が多く

なる。装飾は無文ミガキが大多数を占めるが、単位文様が付く例も少数ある。無文ミガキ・有文ともに外面全体が赤彩されたと思われるが、堆積中に剥落して痕跡をとどめないものもある。赤彩が映えるように白っぽく焼き上げられている。他の壷類型に比べて鉄分の少ない素地を用いたと考えられる。

壷４類は、胴部が長い長胴壷である（第 48 図 224・225）。口頸部が外反し、胴部全面に縄文が施文される点は共通するが、全体形や口頸部内外面の仕上げ（ミガキの有無）は多様であり、１～３類に比べて「同一タイプとしてのまとまり」は弱い。

７- ２. 各類の形と大きさによる作り分け（第 17 図）

容量と括れ度のプロットグラフでは、素文の類型（１類の素文と素文のみの２・４類）の方が、有文・無文赤彩（1類の有文と３類）よりも大きめの傾向がみられる。素文壷は大半が２㍑以上なのに対し、有文と無文赤彩の壷は全て３㍑以上で２個を除いて２㍑未満である。括れ度は、３類は定義上、最も括れが強く、他の１・２・４類では「大きめの壷ほど括れが強まる」という傾向がある。１類有文は１類素文との間に形の違いはないが、前者の方がやや大きめである。

７- ３. 壷の細別器種組成

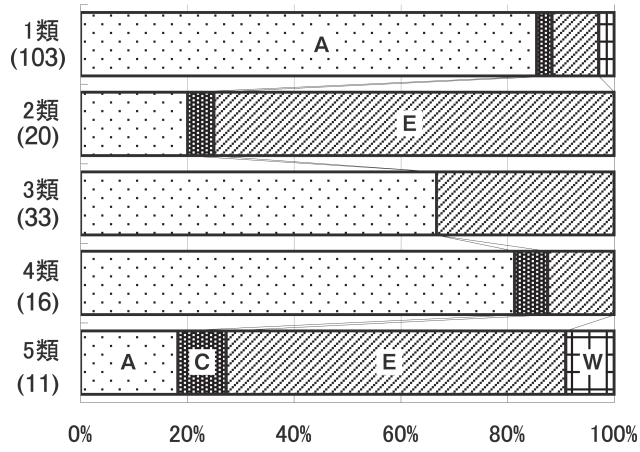
壷は球胴の１類、肩が張り内傾口縁の２類、細口の３類、長胴諸タイプを一括した４類に区分したので、口頸部の小破片では類型の識別が難しいものも多い。そこで、壷は破片資料を含めた口縁部集計ではなく、復元可能資料を用いた組成比を集計した。その結果、復元可能の壷 30 個のうち１類が 16 個と過半数を占め、３類（８個）が次ぎ、２類（4個）と４類（２個）は少ない。

壷１・２類は、大洞 C2 式前半の東北地方各地域で普遍的にみられる類型であり、里鎗遺跡で主体を占めることは、妥当な傾向であるといえる。壷３類は、北上川流域～仙台平野や津軽地方などに少数ながら局部的に分布する。細口壷は口頸部の小破片でも認定できるが、「小破片を含めた口縁部集計」では 185 個中４個、「小破片を含めた頸部下端集計」では 139 個中６個に過ぎず、上述の復元可能資料における比率（30 個中８個）とは大きな違いがある。なお、大洞 C2 式期前半の復元可能な壷の中での細口壷の比率は、北上川中流域の里鎗・安堵屋敷遺跡の方が津軽地域の今津遺跡よりも高めである。壷４類は、東北北部を中心に分布する類型であり、主体的ではないが北上川流域など東北中部にもおよぶ。

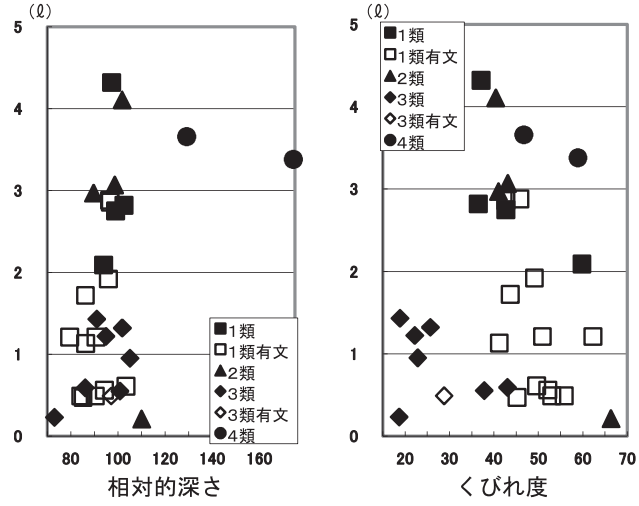
７- ４. 壷の装飾

有文の比率：小破片も含めた頸部下端集計（計 139 個）では縄文（76 個、54.7%）が過半数を占め、単位文様（52 個、37.4%）が次ぐ。一方、容量を計測できた復元可能資料（30 個）では単位文様（13 個、43.3%）が最も多い。３- ３で述べたように、縄文施文の壷に比べて単位文様（有文）と無文ミガキ（赤彩）の壷の方が復元可能の比率が高い。この理由として、容量がやや大きめな縄文施文壷の方が復元されにくいことに加え、有文壷と無文ミガキ壷は完形に近い状態で廃棄される頻度が高かったことがあげられる。有文壷や無文ミガキ壷は儀礼的な飲食に使われた後、まだ使える状態で廃棄された可能性がある。

口縁装飾の出現頻度：壷の口縁装飾は、各類型間の違いが少ない。平縁であり、突起装飾によって加飾される場合が多い。ただし２類には、他の類型で少なからずみられる押圧（Ｃ類）が施文されないなどの違いもある。



第 16 図　浅鉢・鉢における口縁装飾出現頻度
Fig.16　Differences in rim decoration type between serving bowl forms



第 17 図　壷における形の作り分け
Fig.17　Differentiation of necked jar forms by volume, relative heigh and neck constriction

７－５．細口壷（３類）の機能

細口壷は、極端にすぼまった口頸部の形から、液体や細粒状物質を入れたと推定される。以下の点から、特に液体（酒類など）の盛り付けに使われたと考えられる。

第一に、大洞 C2 式期前半の３類は自立しにくい丸底が主体である（大洞 C2 式期後半からＡ式期では４個突起底に変化）ことから台の上に載せるか、杯のように手持ちで飲みきってしまうような使い方が想定される。

第二に、３類の細口壷は、①丸底気味の不安定な底部である、②（赤彩が映えるように）白っぽく焼きあがる素地粘土を用いることが多い、③他の類型に比べて小さめである、などの点で浅鉢２類（丸底皿）と共通することから、両者がセットとして（すなわち、液体の盛り付け用に）用いられた可能性が高い。

第三に、壷・注口の中での細口壷（３類）と注口土器の比率は相互補完的であることから、細口壷は注口（上述のように液体盛り付け用の可能性が極めて高い）と類似した使われ方をした可能性が高い。すなわち、容量を測定できた復元可能な壷・注口の中での「壷３類と注口の合計比率」は里鎗遺跡（33 個中 10 個＝ 30.3%）と安堵屋敷遺跡（95 個中 29 個＝ 30.5%）とほぼ共通するが、里鎗では細口壷（８個）の方が注口土器（２個）よりも明瞭に多いのに対し、安堵屋敷遺跡では細口壷（18 個）と注口土器（11 個）の個数が近似する。

第８章　単位文様

８－１．単位文様の分類

基本パターンの設定と細分（第 18 図）：単位文様パターンを、文様施文の基本となる「基本パターン」と基本パターンの内部や間を埋める「充填文様」の２要素に分解し、基本パターンを分類の基準とした。基本パターンは、文様要素の配置や間隔などから判定される。藤沼邦彦氏の「区画文・配置文」（藤沼 1983・1989a）や高橋龍三郎氏の「主要素」（高橋 1981）とほぼ同じものである。

区画系雲形文の基本パターンには、倒Ｃ字状沈線（基本パターンＡ）、Ｓ字状沈線（基本パターンＢ）、偏平な楕円（基本パターン A1・3）、縦区画沈線（基本パターンＦ）、山形沈線（基本パターンＯ）、その他（基本パターンＣ・Ｄ）、などがある。

基本パターンＡ：「Ｃ字を倒した沈線」という普遍的図形を基本パターンとしているため多くの類型を含んでいる。「区画が完結している（A1、A4 ～ 6）か、一部途切れている（A2、A3）か」「倒Ｃ字形の区画が文様帯の上または下の区画と接する（A1、A2、A4、A5）か否（A3、A6）か」の２基準により、A1 から A6 に細分される。

単位文様 A1（楕円文）は、上端または下端が文様帯区画線と接するＣ字形の区画文様である。文様帯区画線の上端に接続する場合（下向きと呼称）が大半を占めるが、下向きの単位と上向きの単位が交互に組み合う場合も存在する。

単位文様 A2 は、倒Ｃ字状沈線の左端が文様帯区画線の上端に接続する。区画が完結しないため、縄文地文の沈線文手法か縄文なしの沈線文手法で施文される。

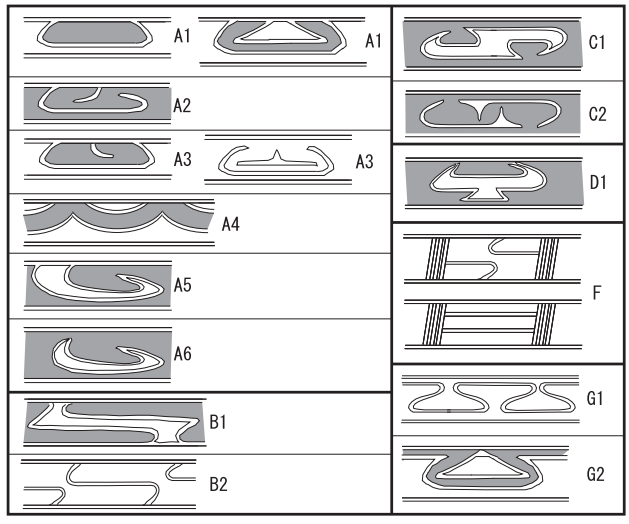
単位文様 A3 は、上向きの倒Ｃ字状沈線が文様帯区画線と接続しないパターンである。基本パターン A3 は区画が完結しないため、充填縄文手法は用いられないことが多い。

単位文様 A4（弧線文）は、１～２本の弧線が連続する区画文様であり、両端が文様帯区画線の上端に連結する。

単位文様 A5 は、２本の倒Ｃ字状沈線の右端を連結させて鋭くかえし、左端を文様帯区画線の上端に接続する。「釣針文」と呼ばれることもある。基本パターン間に多様な充填文様が配置される場合も多い。大洞 C1 式期からの系統関係が明瞭であり、藤沼分類の配置文Ａに対応する（藤沼 1983・1989）。

単位文様 A6 は、Ｃ字形の区画文である。文様帯区画線とは接続しない点で単位文様 A5 と異なる。藤沼分類（大洞 C1 式期）の配置文Ｃに対応する。

基本パターンＢ：２つのクランク状沈線による区画が基本パターンである。沈線の湾曲度や屈折の段数により、単位文様 B1 ～ B3 に細分される。1 段の B1、区画文様をなさない倒Ｓ字形の連続を B2（充填縄文手法は用いられない）、2 段以上に複雑に湾曲するものを B3 にとした。里鎗遺跡では 1 段のパターン B1、沈線の湾曲度が簡略なパターン B2 がある。藤沼分類（大洞 C1 式）の区画文 C1・C2（いわゆる大腿骨文）にあたる文様だが、大洞 C1 式期の充填文が基本パターンに変化した文様なので、基本バターンの間に「かつての基本パターンの一部だった充填文様（側辺が抉れた平行四辺形など）」を伴うことが多い。ただし、大洞 C1 式期では右上がりが主体だったが、大洞 C2 式期では左上がりのみになる。



第 18 図　文様類型
（小林 1998 を改変　※網掛けは縄文施文部位を示す。）
Fig.18　Classification of incised decorations; Dark area shows jomon impression

基本パターンC：区画文様のC1と非区画系の入り組み文様C2（縄文地文）とがある。里鎗遺跡では前者のC1類がある。基本パターンの間に連結工程の区画文様が入る場合と入らない場合とがある。単位文様C2の沈線の形態は津軽から道南に普及している入組文と一部共通する。大洞C1式期からの系統のつながりが明瞭であり、単位文様C1は藤沼分類の配置文D2に相当する。

基本パターンD：「基本パターンが上下の文様帯区画線と接する（D2）か否（D1）か」により細分している。単位文様A6のバリエーションとみることもできる。里鎗遺跡では単位文様D1のみがある。

基本パターンF：3本1組の縦区画沈線による区画パターンである。縦区画線は垂直の例は少なく、大半がやや右上がりに傾くことから、右利きの製作者が多かったと思われる。長方形の区画内には単位文様A1などと共通する充填文様が施文されることが多い。区画の山形文様（単位文様O）が区画間に配置される例や、縦沈線が密に並ぶ例も少数ある。この文様は殆ど壷に限定され、充填文様が異なる単位文様Fが縦区画の位置をずらして2段重なることも多い。

基本パターンG：大洞A式の工字文の祖型となる基本パターンである。基本パターンの間に配置される充填文の形態によってG1～4類に細分される。里鎗遺跡では、充填文が伴わない単位文様G1、三叉文の一端が文様帯区画線に連結した充填文が伴う基本パターンG2がある。

単位文様のバリエーション：単位文様は、①複数の基本パターンの折衷、②基本パターンの末端部などの微細な違い、③基本パターンの間に配置される充填文様の種類の違い、などの点で、かなり多くのバリエーションがある。

単位文様は上述した主体的パターンがあるが、それらを変形、折衷したパターンも少なからず存在する。例えば、第39図125は単位文様B1とA5の折衷、第38図121は単位文様D1が連続したパターン、第45図181と第42図149は単位文様B1の変形、と解釈することもできる。

典型的な単位文様パターンの一部が変容した例も多い。例えば、深鍋の単位文様の大半を占めるB1には、典型例の他に、上側の左端が跳ね上がるもの（第38図122・、第39図126・127）、左上と右下部の張り出しがなく、なだらかな倒S字形を描くもの（大洞C1式期の伝統を引く、藤沼分類の区画文C2・第35図103）、上端が文様帯区画線と接しないもの（安堵屋敷遺跡の53-２・国生他1984：p.84）、全体が左上がりに鏡転写したもの（大洞C1式では普遍的であり、大洞C2式期では東北地方北部に多い；藤沼分類の区画文C1）、などがある。さらに、基本パターン間に挿入される充填文様にも多くの種類がある。例えば、B1では、典型例（第35・36図105-107など）の他に、充填文様の上下が文様帯区画線とつながる（第36図108など）、充填文様を欠く（第39図126）、「ノ」字形沈線のみ（第39図124・125など）、Z字形沈線（区画文から変化）、などの多くの種類がある。

以上のように、全体形が分かる文様パターンを詳細にみると、同じ類型の文様でも「典型例」の個数が意外に少ない。文様のバリエーションは時間差が関与していると思われるが、それ以外にも製作者の個人的なくせや同じ製作者の中でのバリエーションもかなり関与している可能性がある。

8-２．文様施文手法

広義の磨り消し縄文手法の施文手順：里鎗遺跡の文様施文手法は「広義の磨り消し縄文手法」が大多数（有文の容量測定資料52個中45個）を占め、縄文地文の沈線文手法（単位文様A2が施文される第46図194など）、地文のない沈線文手法(単位文様A3の付く第37図120と、単位文様A1が付く第44図166の2個)も少数ある。以下では、広義の磨り消し縄文手法では「レイアウト沈線を描いた後に縄文を施文したこと」、および、「レイアウト沈線を描いた後、文様帯全体に縄文を施文した場合と、区画内外を中心に縄文を充填した場合（充填縄文手法）とがあったこと」を明らかにする。

広義の磨り消し縄文手法は、①縄文施文に先立って細く深めのレイアウト沈線でモチーフを描く、②縄文をモチーフ区画内（または外）または文様帯全体に施文する、③無文部にする範囲の縄文を磨り消す、④乾燥後、沈線のなぞりと無文部のミガキ調整を行う、という手順で施文されている。以下、各工程について検討する。

縄文施文に先立つレイアウト沈線：東北地方中部・南部の大洞C2式期の単位文様の多くでは、縄文施文に先立って細く深めの沈線によりモチーフのレイアウトが描かれた可能性が高い。その証拠として、①モチーフ沈線内に細く深めのレイアウト沈線が残る、②修正されたレイアウト沈線が縄文の下に痕跡的に残る、の2点があげられる。

里鎗遺跡においてモチーフ沈線の中にレイアウト沈線が残る例として、単位文様B1が付く深鍋3類の第35図103がある。103は大洞C1式の伝統を引く「左右の張り出しがない倒S字状の単位文様B1（藤沼分類の区画文C2）」が太く浅めの沈線で描かれている。大洞C2式では細めのモチーフ沈線が増えることから、太く浅めのモチーフ沈線も大洞C1式の伝統を引いているといえる。上側の文様帯区画線（モチーフ沈線と接する最下段）の内部に細く深めのレイアウト沈線が痕跡的に観察される（写真1）。文様帯のほぼ全周が残っているが、レイアウト沈線が確認できたのは1箇所のみだったことから、大多数の部分で仕上げ段階の沈線のなぞりによりレイアウト沈線が残らなかったといえる。

２番目の証拠として、修正前の古いレイアウト沈線が縄文の下に痕跡的にみえることがある。レイアウト沈線は、地文の縄文を施文した後になぞり(ミガキ)が加えられる段階で部分的に修正されることがある。なぞりが加えられない古いレイアウト沈線は、縄文に半ば埋もれて目立たないので、そのまま放置されたと思われる。里鎗遺跡では明瞭な例を見出せなかったが、九年橋遺跡では、文様施文手法を観察したA－E区0～5列出土の627個中4個（浅鉢39-8と91-2、壷98-5と99-5）において見出された（第1表）。

「縄文施文前のレイアウト沈線」の証拠が得られる文様は、乾燥後のなぞりや縄文施文後でも観察可能な細く深めの沈線に限られる。全てのレイアウト沈線が細く深めかどうか分からないが、細く深めである理由として、その後に縄文

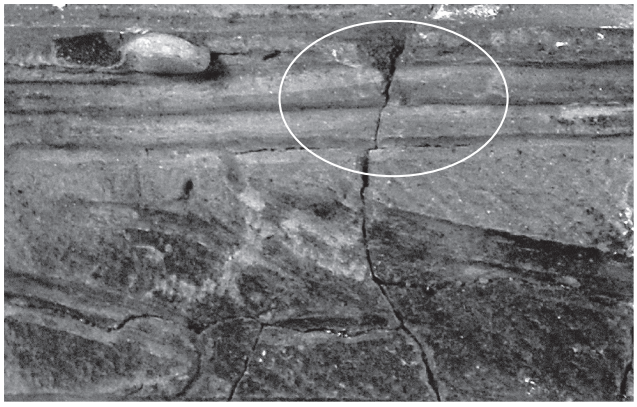


写真１　深鍋 103 の文様細部
Photo １　Deep and sharp layout lines overlaid by wider and shallower final lines.

を施文しても完全には覆い隠されないことがあげられる。

地文の縄文施文：レイアウト沈線を描いた後、文様帯の一部または全体に縄文が施文される。充填縄文手法による文様では、区画外（内）の縄文施文部は隙間なく縄文が充填されており、縄文を施文し忘れていることはほとんどない。よって、縄文は常にレイアウト沈線の外側（後の無文部）まではみ出して施文され、後にはみ出した縄文をすり消して無文部を作り出したといえる。文様区画内の無文部に縄文が部分的に消し残される例（第 35 図 103・第 37 図 116 など）では、消し残された縄文がかなり広範囲にわたることがある。よって、文様帯全体に縄文を施文した場合もあったと思われる。例えば、３本１組の縦区画文（単位文様 F）の内部の細長い部分に無文部が限定される場合（第 46 図 192・193）では、全面に縄文が施文された後、幅狭い沈線間のみ縄文が磨り消された可能性が高い。この場合は、縄文施文に先立ってレイアウト沈線を描く点を除いて「狭義の磨り消し縄文手法」と共通する。

深鍋、壷、浅鉢３～５類では文様帯下位の胴下部に縄文が施されるが、文様帯地文と縄文原体の種類・回転方向・乾燥度が同じことから、両者が連続して施文されたことが明らかである。一見、「胴部全体の縄文施文と連続して文様帯全体に縄文を施文した（狭義の磨り消し縄文手法で施文された）」ことを示唆するようにも思われるが、大洞 B ～ C1 式期では「胴下部と連続して縄文が施文されながら、文様帯部分ではモチーフ沈線に沿って縄文の走行方向が変化する」例も多く存在することから、充填縄文手法で施文された可能性も十分ある。

充填縄文手法では、レイアウト沈線にそって縄文を転がすので、縄文が器壁深くまで施されるとレイアウト沈線が見えなくなる危険がある。そのためか、地文の縄文は、素文深鍋などに比べ乾燥が進んだ段階で施され、浅く転がされている場合が多い。一方、単位文様を持たない深鍋などでは、大粒の縄文を深く転がしている場合もしばしばみられる。

第１表　充填縄文手法の証拠
（九年橋遺跡では証拠が見つかった土器のみを掲載）
Table １．Evidence of juten-jomon technique in four final Jomon sites

遺跡	図面番号	器種	単位文様	証拠①	証拠②	証拠③	レイアウト沈線の証拠
上野原	25-35	浅鉢3類	A1				
	28-41	浅鉢3類	A4			○	
	28-42	浅鉢3類	A4				
	28-43	浅鉢3類	A4				
	29-44	浅鉢3類	A1		○		
	29-45	浅鉢3類	三角文				
	29-46	浅鉢3類	A1			○	○
	30-48	浅鉢3類	A4				
	34-64	壷	G1 縄文地文の沈線文手法		○		
館ノ内	1	浅鉢下半部					
	5	浅鉢胴部破片	A1？				
	32	浅鉢胴部破片	A1				
	33	浅鉢3類	A1	○	○		
	34	浅鉢3類	A1		○		
	35	浅鉢3類	A1				
	36	浅鉢3類	A1		○		
	37	浅鉢3類	A1				
	38	浅鉢3類	A1				
	39	浅鉢3類	A3orG1		○		
	73	浅鉢胴部	A1？		○		
	109	浅鉢3類	A1		○		
	115	浅鉢下半部	A1				
	132	壷胴部小破片	A1？				
	142	浅鉢3類胴部片	G1		○		
	175	浅鉢3類	ind				
	224	浅鉢胴部破片	A1				
	226	浅鉢3類	A1＋A4	△ 単位間で条の方向が異なる	○		
九年橋	39.08	浅鉢3類	A1				○
	40.05	浅鉢3類	D2		○		
	91.02	浅鉢	D				○
	162.04	浅鉢	D	○			
	98.05	壷	F＋A1				○
	99.05	壷	A1				○
里鎗	59	深鍋3類	B1				細く深い沈線がなぞり沈線内に残る
	61	深鍋4類	B1		○		
	94	浅鉢4類	D	○			

充填縄文手法の証拠：「レイアウト沈線の外側を中心に縄文を充填する充填縄文手法」の証拠として、①モチーフ沈線に沿った縄文の走行方向の変化、②地文縄文がモチーフ沈線にかぶる、③一部の単位のみ縄文が付け忘れられる、の３つがあげられる。これらの内、証拠①は大洞 C2 式期では稀であり、証拠②・③も施文が入念な東北地方中部ではほとんどみられない。そこで以下では、大洞 C2 式の区画系雲形文が多く出土した東北地方中部（里鎗遺跡と九年橋遺

跡）と新潟（上野原遺跡と館ノ内遺跡）を比べることにより、東北中部においても充填縄文手法が多用されたことを明らかにする。

分析資料は、九年橋遺跡では、A～G区の１～３列出土の大洞 C2 式期後半の「広義の磨り消し縄文手法」による復元土器 46 個（浅鉢 15 個、壷 27 個、深鍋 4 個）および「縄文地文の沈線文手法」による復元土器 26 個（深鍋 22 個、浅鉢 1 個、壷 3 個）ある。新潟県三条市上野原遺跡（中島ほか 1981）では「広義の磨り消し縄文手法」の浅鉢８個と「縄文地文の沈線文手法」の壷 1 個、新潟県新発田市館ノ内遺跡（田中他 1992）では破片資料主体の浅鉢 17 個と壷 1 個である。第 1 表では上野原・館ノ内遺跡は観察土器全てを示したが、九年橋遺跡は資料数が多いため、充填縄文手法の証拠が見出された土器のみを示した。

証拠①：モチーフの輪郭に沿って縄文の回転方向が変化する例は、充填縄文手法の最も確実な証拠である。大洞Ｂ式から C1 式期の単位文様は、このような例が多いことから、充填縄文手法によっていることが明らかである。一方、単位文様が横長になるため縄文の条の変化がみい出しにくい大洞 C2 ～Ａ式期の単位文様では、この証拠は稀にしかみられない。里鎗遺跡の復元資料では浅鉢 94 のみ、小破片を含めた口縁部カウント資料でも浅鉢 4 個のみだった。また、九年橋では施文手法を観察した 46 個中 1 個（浅鉢 162-4）のみ、東北地方南部（越後地域）の上野原遺跡・館ノ内遺跡でも、縄文の走行方向の変化がみられたのは館ノ内遺跡の２例（浅鉢３類の 33 と 226）に限られた。

このように、大洞 C2 式期では「モチーフに沿った縄文の走行方向の変化」を見出しにくい理由として以下の２つが考えられる。第一に、大洞 C2 式期の単位文様パターンは大洞 C1 式期に比べて幅狭で直線的になるため、モチーフ沈線に沿って縄文を施文したとしても走行方向の変化が明瞭に現れにくい。大洞Ｂ～ C1 式期の区画文様でも、モチーフ沈線に沿った縄文の走行方向の変化は、文様帯が幅広く、曲線が多い文様に多くみられ、文様帯が幅狭く胴下半部全体に縄文が施される文様では出現頻度が低いようである。

第二に、大洞 C2 式期では文様帯幅が狭まり、その下位の胴下部全体に縄文が施文される頻度が高まることから、胴部全体と連続して文様帯全体に縄文を施文する「狭義の磨り消し縄文手法」の頻度が高まった可能性がある。

証拠②：沈線のミガキ（なぞり）が不十分な部分で縄文が沈線にかぶっていることがある。この証拠は、モチーフ沈線が文様帯区画線と接する部分に見出しやすい。東北地方中部では「仕上げ段階でのモチーフのなぞり」が入念なため、該当例は里鎗遺跡では深鍋に 1 個のみ（第 38 図 123・写真 2）、九年橋遺跡でも 46 個中 1 個（浅鉢 3 類の 40-5）のみである。一方、東北地方南部の館ノ内遺跡では 18 個中８個、上野原遺跡では８個中 1 個に見出された。上野原資料（全て実測図資料）では同一個体に２カ所以上みられ、館ノ内資料では、実測図資料では３個中２個において２カ所以上観察されたのに対し、破片資料では全て１カ所のみだった。よって、上野原・館ノ内遺跡では、残存率が高ければ「縄文の沈線への被り」が２カ所以上存在した可能性が高い。一方、九年橋遺跡（復元土器）では、「縄文の沈線へのかぶり」は各土器に１カ所しかみられなかった。

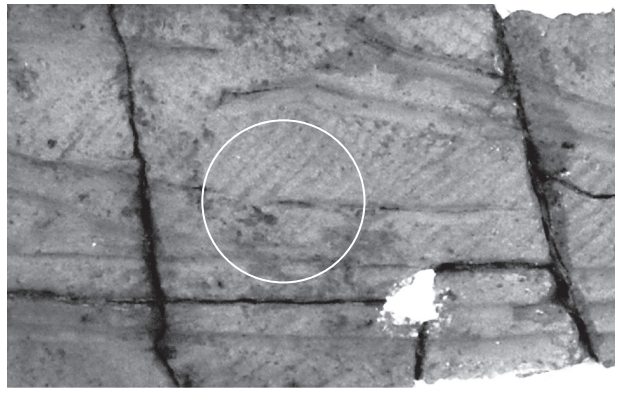


写真 2　深鍋 123 の文様細部
Photo 2　Evidence of juten-jomon technique; layout lines are overlaid by jomon impressions

なお、上野原遺跡では縄文地文の沈線文手法による単位文様 G1 においても「モチーフ沈線に縄文がかぶる例」が観察されたことから、①レイアウト沈線を描く、②文様帯全面に縄文を施文、③モチーフ沈線をなぞる（仕上げ）、という充填縄文手法と共通した手順で施文されたことが明らかである。

証拠③：区画系雲形文の１単位のみ縄文を付け忘れていることがある。該当例は上野原遺跡の楕円文 A1 が付く浅鉢２個のみである。これらの浅鉢では、楕円文の１単位のみ縄文がなく、ミガキ調整も施されないことから、「縄文を磨り消したのではなく、縄文を付け忘れた」ことが明らかである。館ノ内遺跡では該当例を見出せなかったが、同遺跡出土の大洞 C1 式の浅鉢では一部のみ縄文が付け忘れられた例がある。

以上より、「広義の磨り消し縄文文様」における充填縄文手法の証拠①～③の出現頻度は、上野原遺跡（８個中３個）・館ノ内遺跡（18 個中８個）の方が東北中部の九年橋遺跡 (46 個中 6 個) や里鎗遺跡（42 個中３個）よりも明瞭に高い。

また、半乾燥段階での沈線のミガキ（なぞり）調整が徹底している里鎗遺跡･九年橋遺跡資料では「なぞりが不完全」「縄文の付け忘れ」といった施文・調整の不備に基づく例がほとんどない。一方、半乾燥段階でのミガキ調整が不完全なことが多い東北南部の上野原遺跡・館ノ内遺跡資料では、半乾燥段階での沈線のなぞり不十分なため縄文が沈線に被る例が多く、しかも、同一個体で２カ所以上存在する場合が多い。このように、「半乾燥段階での沈線のミガキが不十分な東北地方南部の土器では充填縄文手法の頻度が高い」ことから、「沈線のミガキ調整が徹底している東北地方中部で充填縄文手法の頻度が低いのは、その証拠が消された結果である」といえる。

仕上げ段階の沈線のなぞりと無文部のミガキ調整：半乾燥状態になった段階で沈線をなぞる調整と無文部のミガキ

調整を行う。仕上げ段階のなぞり沈線は、壷では「断面Ｖ字形で深めの沈線が多いのに対し、大洞 C1 式期の伝統を強く引く浅鉢・深鍋では浅めで幅広い沈線が多い。後者の例として単位文様 C1、返しのない単位文様 B1（上述の深鍋４類の第 35 図 103・第 38 図 123 など）などがあげられる。大洞 C1 式期の区画文様は、無文部の区画沈線の内側を削りこむことにより縄文部を浮き出させるレリーフ手法を用いている。このため、モチーフ沈線は無文部側が削られた幅広い沈線となる。大洞 C2 式前半の太く浅めのモチーフ沈線は、この伝統を引くと思われる。一方、大洞 C2 式期に出現する縦区画文、楕円文（単位文様 A1）および、大洞 C1 式期の祖形から大きく変化した単位文様 B1（大洞 C1 式期で主体だった右上がりが消失）では細く深めの沈線が主流となる。

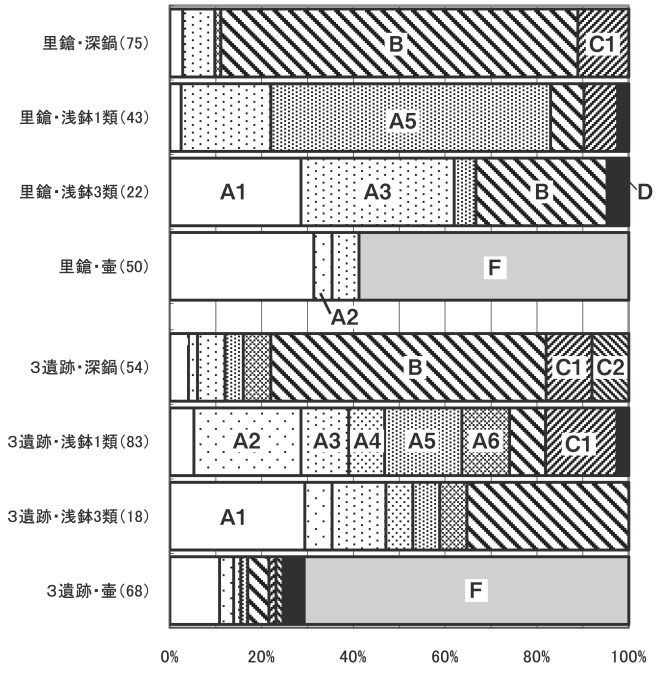
モチーフなぞり沈線の切り合い関係（時計回り／逆時計回りに進行するかなど）を観察したが、モチーフ沈線は複雑な形が多いためか、一定の傾向を示す例はほとんどなかった。ただし、台付鉢 183 の弧線文（単位文様 A4・第 45 図 183）のみ、全ての単位の右側の沈線が左側の沈線よりも新しいことから、時計回りになぞり沈線を描いたことが判明した。時計回り施文は、単位文様の大きさやスペースの不揃い施文においても観察され、右利きの製作者が多かったことを示す。

レイアウト沈線施文後に縄文地文を施す理由：大洞 C2 式期の「広義の磨り消し縄文手法」は、大洞 C1 式期までみられた「区画モチーフに沿った縄文の回転方向の変化」が観察されないことから「縄文を全面に施文した後、区画文様をレイアウトする狭義の磨り消し縄文手法」だったと考えられてきた。しかし、上述のように、大洞 C2 式期においても前段階同様に「レイアウト沈線を描いた後、地文の縄文を施文し、はみ出した部分を磨り消す充填縄文手法」がかなり多く含まれると推定される。

縄文に先立ってレイアウト沈線を描く理由として、「縄文を施文した上にレイアウト沈線を描くと、レイアウト沈線の修正を行いにくい」ことがあげられる。九年橋遺跡では修正前のレイアウト沈線が縄文の下に痕跡的に残る例があることから、モチーフ沈線をなぞる仕上げ段階において修正を加えることもあったことが明らかである。モチーフ沈線の修正は、縄文施文前のレイアウト段階でも頻繁にあったと思われる。

８- ４．器種と単位文様の結びつき

器種間の単位文様の違い（第 19 図）：東北地方中部の大洞 C2 式土器では、器種により単位文様が使い分けられている。里鎗遺跡における有文器種は、深鍋３・４類、浅鉢１・３類、鉢４・５類、壷１～３類である。深鍋では単位文様



	A1	A2	A3	A4	A5	A6	B	C1	C2	D	F	その他	注口	工字文	総計
里鎗の口縁部カウント(小破片を含む)															
深鍋	2		5			1	56	8				1		2	75
浅鉢1類	1		8		25		3	3		1		1		1	43
浅鉢3類	6		7		1		6			1				1	22
鉢4・5類						2		1		1	1	1			6
壷	16	2	3								30			2	50
里鎗・復元土器															
深鍋			2	1			17	3				1			23
浅鉢1類			1		3			2				1			7
浅鉢3類	2		1				2								5
鉢4・5類				2				1		1		1			5
壷	2		3								8				13
注口												2	2		2
安堵屋敷・復元土器															
深鍋	2				1	1	16	3	4					1	29
浅鉢1類	3	13	5	1	6	3	2								34
浅鉢3類	4	1	1	1		1	5							1	13
鉢4・5類	1	3	1	4	1		2	1							15
壷	5	1					3	1	1	3	39	1		2	56
注口	1	1												6	8
今津・復元土器															
深鍋		1			1	1				1		1			5
浅鉢		3	1		5	3	2	8		1		3			26
壷					1					1					2
3遺跡の復元土器の合計															
深鍋	2	1	3		2	3	30	5	4			2		1	54
浅鉢1類	4	18	8	6	13	8	6	12		2		4			83
浅鉢3類	5	1	2	1	1	1	6							1	18
壷	7	2	1		1		3	1	1	3	46	1		2	68
注口	1	1	1										8		11

第 19 図　器種間における文様の違い　（里鎗遺跡の口縁部集計（上）と３遺跡の復元土器の合計（下）。国生他 1984 より、藤沼他編 2005 より作成。文様単位数が把握できる資料を対象とした。）

Fig.19　Differences in incised design types between vessel forms in Satoyari, Andoyashiki and Imazu site

B1 がその大半を占め、これに C1 と A3 が次ぐ。一方、浅鉢１類は単位文様 A5 が最も多く、これに A3・B1・C1 が続く。また、深鍋３類を浅くした形である浅鉢３類（小型主体）は、楕円文 A1・A3 と B1 が主体を占める。壷は縦区画文Ｆが大半を占め、縦区画内に楕円文 A1 が組み合う例も多い。

このような大洞 C2 式期前半の主要単位文様類型と器種との結びつきは、同じ北上川流域の安堵屋敷遺跡や津軽地域の今津遺跡や雄物川上流域でも観察され (国生他 1984、藤沼他編 2005)、東北地方中・北部に共通した特徴といえる。そこで、各器種が十分な個数を確保できるように、里鎗、安堵屋敷、今津の３遺跡の資料を合わせて、器種間の文様の違いを検討した（第 19 図）。その結果、「縦区画文Ｆが７割以上を占め、単位文様Ａが次ぐ壷」、「単位文様 B1 が６割以上を占め、単位文様Ｃと基本パターンＡが各２割程度で次ぐ深鍋」、「基本パターンＡが６割以上を占める浅鉢（１類では単位文様Ｃが次ぐのに対し、２類では単位文様 B1 が次ぐ）」、という器種間の違いがさらに明瞭に示された。上述のように、各遺跡でも同様の器種差が観察される。

器種間で異なる単位文様が選択された背景：器種間の単位文様の違いを生み出した理由として、「文様帯の縦幅・横幅」と「文様の見え方」が器種により異なることがあげられる。文様の見え方については、壷は上方から全周を俯瞰しやすいのに対し、浅鉢は直置きされた状態では一部の側面しかみることができない。深鍋は文様帯の位置が浅鉢よりも高い分、浅鉢よりも広い面が視野に入る。次に文様帯の形は、壷と深鍋は縦幅が広いが横幅は限られるのに対し、浅鉢は縦幅が狭いが（同じ容量ならば）横長となる。こうした文様帯の特徴から、上方から俯瞰できる文様に適する壷、横長・扁平な文様に適する浅鉢、縦長気味の文様に適する深鍋という違いが想定される。このような視点から、器種間で主要単位文様が異なる理由として以下の点が考えられる。

まず、壷のみに用いられ、かつ主要文様となっている縦区画文Ｆは、区画の全体構成を俯瞰でき、かつ、ある程度の縦幅が必要である点で、壷に適した単位文様といえる。

次に、深鍋において単位文様 B1 が大半を占める理由として、この文様のルーツとなっている大洞 C1 式の大腿骨文（縄文施文部）は縦長の文様だったことがあげられる。ただし、上述のように、大洞 C2 式期になると、大洞 C1 式期では充填文様だった無文部が基本パターンに変化し、徐々に扁平化する。単位文様 B1 は「深鍋２類を浅くした形である浅鉢３類」にもしばしば施文されるが、充填文様を省略または簡略化してさらに扁平な形になっている。

器種間の施文手法の違い（第２表）：里鎗遺跡では広義の磨り消し縄文手法（充填縄文手法も多く含む）が大多数を占め、縄文地文の沈線文手法は浅鉢と壷に各２個のみ、地文のない沈線文手法は深鍋と壷に各２個、１個あるのみである。文様パターンとの結びつきをみると、区画系文様は大多数が充填縄文手法によるのに対し、単位文様 A2・C2・B2 などの非区画系文様は縄文地文の沈線文手法で施文される。里鎗遺跡において充填縄文手法が大半を占めるのは、区画系の単位文様が大多数を占めることに起因する。

第２表　器種間における施文手法の違い

Table. 2　Differences in decorative technique between vessel forms.

	里鎗				安堵				今津			
	深鍋	浅鉢	壷	計	深鍋	浅鉢	壷	計	深鍋	浅鉢	壷	計
充填縄文	22	13	10	45	22	30	41	93	4	23	2	29
縄文地文	0	2	2	4	4	28	14	46	1	3		4
沈線のみ	2	1		3	1	4		5				

一方、安堵屋敷遺跡では、縄文地文の沈線文手法が 32%（144 個中 46 個）を占めるが、これは、非区画系単位文様である A2・A3・C2 の比率が高いことに起因する。なお、同時期の今津遺跡では単位文様 A5・A6・C1・Ｄなどの区画系雲形文が主体を占めることから、里鎗遺跡と同様に充填縄文手法が大多数（33 個中 29 個）を占めている。

次に、器種間を比べると、里鎗、安堵屋敷、今津の３遺跡ともに「浅鉢は深鍋・壷よりも縄文地文の比率が高い」という傾向がみられる。特に安堵屋敷遺跡では浅鉢では充填縄文手法と縄文地文の沈線文手法が拮抗する比率で存在する。これは、３遺跡共に非区画系の単位文様 A2・A3 が浅鉢に多く存在することが背景にある。単位文様 A2・A3 は幅狭い文様帯でも施文できるため、浅鉢に多用されたと推定される。

８－５．文様の単位数と割付

分析目的：文様単位数を最初に検討した鈴木公雄氏は、文様帯の横幅が埋まるまで機械的に単位文様を繰り返す「追い込み施文」と口縁部突起などに応じて文様単位を割り付けた「分割型割付け」の２種類があることを指摘した（鈴木 1968、Suzuki1970）。この指摘に基づいて、今村啓爾氏は、縄文土器の単位文様は、「追い込み式」が多く、口縁部突起や波状口縁を目印として配置する場合でも複数の文様帯を貫徹して正確な割付が行われる例が少ないことを明らかにした（今村 1983）。その際、縄文土器全体では均等な割付がしやすい４単位が最も多く、４単位以外の場合は「４単位では多すぎるので３単位にする」といった釣り合い感覚が影響していることも指摘された。さらに、桜井準也氏は、関東地方の縄文中期土器を定量的に分析した結果、文様が均等に割り付けられていないことが多い点を明らかにした（桜井 2007）。ただし、文様割付の正確さには時間的・地域的な違いもあり、縄文中期前葉では小林謙一氏が指摘するように比較的正確な割付が多いのに対し（小林 2000）、中期中葉・後葉の順に「追い回し型」施文が増えるという（桜井 2007）。

佐原真氏は、鈴木公雄氏論文を参照しつつ、大洞Ｂ～C1 式期の単位文様の特徴として、①文様割付の目安となることが多かった波状口縁が後期末に消失した結果、文様割付の目安がなくなった、②口縁部の突起は割付の指針を果たさない、③均等割付をしない「追い回し」施文では「単位文の数は（中略）そのときによって偶然きまった」、④「余

白が広すぎるか狭すぎるかして、単位文様を引き伸ばしたり縮めたり、あるいは別の文様を入れたりしてとりつくろっていることもある」などの点を指摘した（佐原 1979：p.51）。

本稿では、このような視点から大洞 C2 式期前半の単位文様割付（単位数と不ぞろい施文の頻度）を検討する。

土器群全体の文様単位数：以下では、里槍・安堵屋敷・今津遺跡という大洞 C2 式期前半の３遺跡の有文土器を対象として、文様割付方法との関連から単位数を検討する。同時期だが地域が異なる３遺跡を対象とするのは、地域差を超えた「文様・器種と単位数の結びつき」を検討するためである。

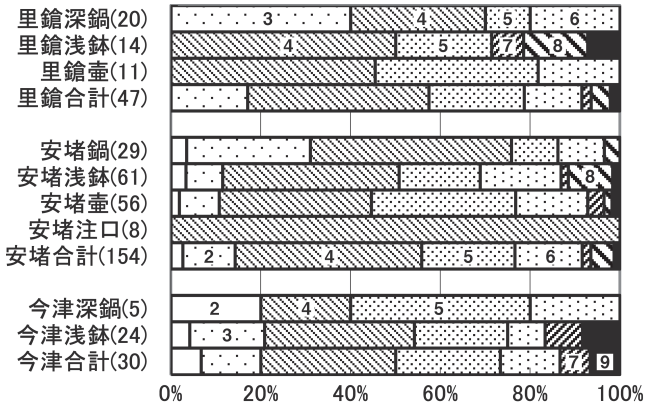
実物を詳細に観察した里鎗遺跡では容量を計測できた有文土器 47 個を対象としたのに対し、安堵屋敷遺跡と今津遺跡では報告書に掲載された豊富な文様展開図（単位数が分かるもので、各々 154 個と 30 個）から単位数と不揃い施文を分析した。なお、今津遺跡では単位数がわかる深鍋と壷の個数が５個以下と少なかったため、浅鉢のみを検討した。

単位数は２～ 15 単位までの幅があるが、里鎗遺跡と安堵屋敷遺跡では 10 単位までである。３遺跡とも４単位が最も多く、５単位が次ぐ。９・10 単位は少数のみで、多くは８単位以下である。全体の単位数構成は北上川中流域と津軽地方の間でも共通性が高く、横から見た時に視野に入る単位数は１～２単位だったといえる。４単位が全体の３割以上で最も多いのは、割付しやすいことが主な理由と考えられる。

一方、以下の理由から、視野に入る文様帯の横幅に合わせて単位数を選択したことも多かったと考えられる。

突起と単位文様の対応関係：口頸部に３～５単位の突起が付くことが多い深鍋３・４類を対象として、突起数と文様単位数の対応を集計した。文様と突起の両者の単位数が分かる土器において、４単位では 17 個中 10 個において文様単位数と突起数が同じだった。文様単位数間を比べると、４単位では４個すべてが対応したのに対し、３・６単位では 13 個中６個のみだった。よって、４単位の文様は突起をある程度意識していたと考えられる。例えば、浅鉢１類との結びつきが強い文様 A5（釣針文）は、この器形によく結びつく口縁部装飾（均等に配される４単位のＡ突起）との位置が対応することが多い。ただし、佐原氏が指摘したように、口頸部の突起数と文様単位数が同じ場合でも、突起が文様割付の指標となっていない場合の方が多い。

器種間の比較（第 20 図）：深鍋は、里槍遺跡では３単位が最も多く４単位が次ぐのに対し、安堵屋敷遺跡では４単位が半数近くを占めるという違いがあるが、両遺跡とも平均4.1 単位で３遺跡合計の平均は4.1 単位である。壷は、里鎗・安堵屋敷遺跡とも４単位が最も多く、５単位が次ぐ。平均は里槍 4.7 単位、安堵屋敷遺跡 4.8 単位、３遺跡合計 4.7 単位である。浅鉢は、３遺跡とも４単位が最も多く、６単位以上が次ぐ。平均は里槍 5.4 単位、安堵屋敷遺跡 4.9 単位、今津遺跡 5.0 単位、３遺跡合計 5.0 単位である。このように、深鍋、壷、浅鉢の順に単位数が増す傾向がみられた。この傾向は、各遺跡においても３遺跡をまとめた資料でも観察される。この順に文様帯の横幅が広いことから、「文様帯の横幅が広いほど、より多くの文様が視野に入り単位数が増す」と考えられる。同様の傾向は市川健夫による九年橋遺跡などの文様単位数分析でも指摘されている（市川 2008・2009）

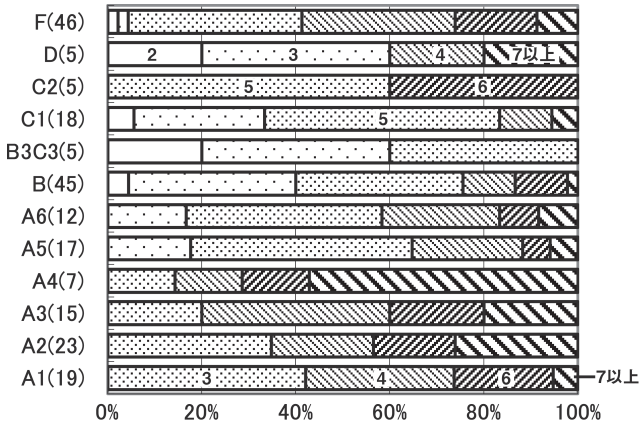


第 20 図　器種間の文様単位数の違い
Fig.20　Differences in the number of decorative unit beween vessel forms

また、５単位や７単位といった均等割り付けが難しい単位数が意外に多い。特に、３遺跡共に６単位よりも５単位の方が多い事実は、「均等割り付けの容易さ」よりも、「単位文様の横幅に応じた割付」や「視野に入る単位文様の数」の方が重視されたことを示している。なお、「視野に入る単位文様の数」は、「使用時に眺めた時の見える範囲」だけではなく、「文様施文時に、手に持った時に見える範囲（多くは１または２単位）」でもあると考えられる。

単位文様間の比較（第 21 図）：遺跡単位では十分な個数を確保できない文様が多いため、里鎗、安堵屋敷、今津の３遺跡を合わせた資料を用いて単位文様（資料数５個以上）間の単位数の違いを検討した。その結果、４単位以下が７割以上を占める「単位数少なめ」の単位文様 B1（平均 4.0 単位）と単位文様 C1（平均 3.9 単位）、５単位以上が６割程度を占める「単位数多め」の単位文様 A1 ～４（各々平均 5.0、5.5、5.6、7.0 単位）と単位文様Ｆ（縦区画文、平均 4.9 単位）、「両者の中間（４単位以下が６割程度を占める）」の単位文様 A5・6（各々平均 4.5 と 5.2 単位）と単位文様 C2（平均 4.8 単位）という３つのまとまりが見出された。なお、縦区画文は単位数構成では「単位数多め」に属するが、平均単位数は「単位数中間」に近い。また、単位文様Ｄ（平均 4.0 単位）、単位文様 B3（平均 3.0 単位）、単位文様Ｃ３（平均 3.3 単位；今津遺跡のみに存在）は個数５個以下だが、平均単位数から「単位数少なめ」に属すると思われる。

各器種の主要単位文様を比べると、浅鉢の単位文様の主体を占める A1 ～４と A5・６は各々「単位数多め」と「単位数中間」であり、壷の主体的単位文様である縦区画文は「単位数多め（ただし平均値は中間に近い）」である。一方、深鍋の主要単位文様である B1 とそれに次ぐ C1 は「単位数少なめ」である。以上より、深鍋、壷、浅鉢の順に単位数が



第 21 図　文様間の単位数の違い（3 遺跡の合計）
Fig.21　Differences in the number of decorativeunit beween incised motifs

増す傾向は、各器種の主体を占める単位文様の単位数の特徴を反映していることが明らかとなった。すなわち、①各器種の文様帯の特徴（俯瞰文様か側面から見る文様か、また、文様帯が横長か縦幅があるか）に応じて、各器種の主要文様が選択される、②主要文様の横幅に合わせて単位数が決まる、という施文過程が想定される。このような施文手順は、佐原氏が「文様を描きながら余白にも目を走らせて、あといくつ単位文様が入るかを暗算して、誤ることなく全周を埋め尽くす」と表現した「追い込み施文」（Suzuki1970）の典型例といえる。

８－６．単位文様の不ぞろい施文

単位文様の不ぞろい施文には、①一部の単位のみ基本パターンや充填文様の形が異なる「異形」、②基本パターンの大きさ（横幅）が不揃い、③一部の単位のみ基本パターン間のスペースが不足または過剰、の３種類がある。以下では里鎗遺跡の容量を測定できた有文土器資料と安堵屋敷・今津遺跡の展開図資料（単位数が分かるもの）を対象として、各タイプの出現頻度や器種・単位文様・単位数との関連を検討する。

異形（形の不揃い）：基本パターンが１単位のみ異形の土器が３個（深鍋４類の第 38 図 122・第 39 図 129、浅鉢３類の第 44 図 164）、充填文様が１単位のみ異形の例が６個ある。

深鍋 122・129 では単位文様 B1 の４単位中１単位のみ、スペース不足のため左端（上側）の張り出し部の形が異なっている（129 では左側の突出を欠き、122 ではＣ字状の部分を欠く）。一方、浅鉢３類 164 では、単位文様 B2 の５単位中１単位のみ、倒Ｓ字形沈線の上端が文様帯区画線と接していない。これはスペース不足とは関係ないことから、単に基本パターンの上端を文様帯区画線に繋ぐのを忘れた結果だろう。

充填文様の「異形」６個は、台付鉢の第 45 図 180 を除いて深鍋である。180 では単位文様 A6 の４単位中の１単位のみ充填文様が大きめで異形（単位文様 B1 の基本パターンに類似）である。この充填文様の左隣の文様単位のみ他の単位よりもわずかに横幅が小さい。この土器に「異形」が生じた背景として、①最後の単位のスペースが過剰だったため、充填文様を大型化した可能性と、②最初に異形の充填文様を描いた可能性が考えられる（展開図参照）。

深鍋３類の第 35 図 103 では、単位文様 B1 の５単位中１単位のみ、スペース不足のため充填文様が簡略化されている（３単位は平行四辺形だが、１単位のみ三角形・展開図参照）。同様に、深鍋３類の第 37 図 115 では、単位文様 C1 の４単位中１単位のみ、スペース不足のため上側に入り組む充填文様が異なっている（展開図参照）。

一方、深鍋３類の第 36 図 107・109 では、単位文様 B1 の３単位中１単位のみ、充填文様が基本パターンＢに似た形になっている。これらは、スペースの不足・過剰とは無関係であることから、意図的に１単位のみ異なった形にしたと思われる。なお、107・109 ともに口縁部に正面を意識した大型把手が１単位のみ付くが、単位文様との結びつきは特にみられない。また、深鍋３類 120 では、単位文様 A3（推定６単位）の一部の単位のみ、上下の文様区画線から△形の抉りこみが基本パターンの間に入っている。これもスペースの多寡とは無関係の不揃いといえる。

以上のように、基本パターンと充填文様の「異形」は、第 38 図 122・129・第 45 図 180 などのようにスペース不足や過剰に対処した結果である場合が多いが、スペースとは無関係に１単位のみ変化をつけることもしばしば行われている。このような異形文様は８個中５個が単位文様Ｂであり、また、８個中６個が深鍋である。これは、単位文様Ｂ（特に B1）は比較的大きめの充填文様を伴うため、スペースの不足や過剰が生じやすいことが理由と考えられる。

大きさ不揃い：基本パターンの形は保持されるが、大きさ（横幅）が１～２単位のみ特に小さいまたは大きい場合である。この中には、佐原真氏が青森県弘前市十腰内遺跡の大洞 C1 式浅鉢（３単位の単位文様 B1）を例にあげて指摘した「大きさが一定方向（時計回りまたは逆時計回り）に小さくなる」場合も含まれる（佐原 1979・p.51）。連続的に大きさが縮まる例は、里鎗遺跡では見出せなかったが、安堵屋敷遺跡では 155 個中７個見出されている。佐原氏があげた例や安堵屋敷例では時計回りに文様単位が小さくなるものが多い。

里鎗遺跡では深鍋４類の第 39 図 128・130 と深鍋３類の第 36 図 110 の３個が「大きさ不揃い」に該当する。深鍋 130 では、単位文様 C1 の３単位中１単位のみ基本パターンが横方向に寸詰まりで、かつ、左隣の文様単位とのスペースが消失して文様が上下に重複している（展開図参照）。この土器ではモチーフのなぞり沈線の切り合い（沈線の仕上げ段階の工具の動き）も逆時計回りに進行していることから、左利きの製作者が逆時計回りに基本パターンを施文したと考えられる。

深鍋 130 では、単位文様 B1 の３単位中１単位がスペース不足のため寸つまりになり、かつ、右側の単位とのスペースが消失している。単位文様 B1 は右下がりの構成だが、上

方から下方へと沈線を引くほうが自然だとすれば、時計回りに施文された可能性が高い。よって、深鍋 128 は時計回りに施文された最後の単位で、スペース不足のため右隣り（最初）の単位とのスペースが消失したと考えられる（展開図参照）。

また、深鍋 110 では基本パターン C1 の４単位（全周の５割程度しか残存していないため推定値）中１単位のみ著しく横幅が短い。右側のスペースの方が窮屈になっていることから、時計回りに施文した最後の単位と考えられる。

以上のように、上述３例では、最後に施文された単位においてスペースが不足したため、最終単位のみを横方向に寸詰まりにすることにより対応している。

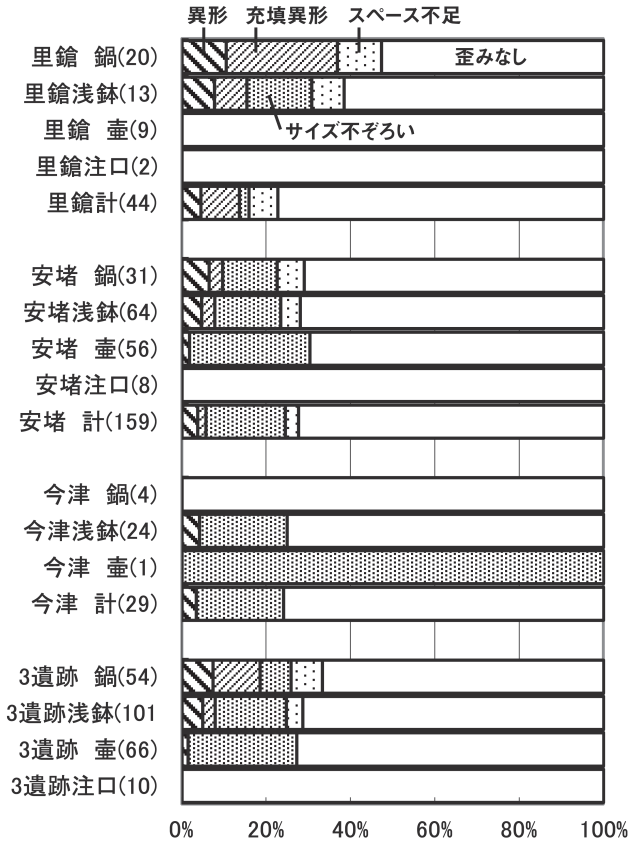
スペース不足／過剰：基本パターンと充填文様の形と大きさは均一だが、文様間のスペースが１単位のみ不足または過剰なものである。里鎗遺跡では深鍋３類の第 39 図 128 と浅鉢１類の第 43 図 153 が該当する。

深鍋 128 では単位文様 B1 の３単位中１単位がスペース不足のため右隣とのスペースが消失し、ノ字形の充填文様も欠落している。右下がりの単位文様 B1 が時計周りに施文されたとすれば、深鍋 128 と同様に最後の単位におけるスペース不足に対応した結果といえる。浅鉢 153 では単位文様 A3 の８単位（うち６単位残存）中の最終単位がスペース不足のため右隣の（最初の）単位と切りあっている（展開図参照）。時計回りに施文が進行したと考えられる。

里鎗遺跡の不揃い施文の特徴：上述の不揃い施文 13 個中、最終単位のスペース不足に起因するものが 10 個に上る。このうち文様施文の進行方向が分かるものが５例（第 35 図 104・第 39 図 128・130・第 43 図 153・第 44 図 172）あり、130 を除いて時計回りである。製作者は右利きが多かったと思われる。里鎗遺跡では不揃い施文の個数が 13 個と少ないため、器種、単位文様、単位数などとの相関を検討しにくい。よって、ほぼ同時期の安堵屋敷遺跡（単位数の分かる展開図資料 155 個中、不揃い施文が 37 個存在）と今津遺跡（展開図資料 29 個中、不揃い施文が７個ある）を加えて、３遺跡を合計した特徴の検討と３遺跡間の比較を行う。なお、安堵屋敷遺跡の不揃い施文の種類では、「形の不揃い＋スペースの不揃い」が４個、「形の不揃い＋大きさの不揃い」が１個存在したが、集計ではこれらを両タイプにダブルカウントした。

不揃い施文の出現頻度（第 22 図）：不揃い施文の出現頻度を器種間と遺跡間で比較する。まず、遺跡全体での不揃い施文の頻度は、２割強と共通性が高い。一方、不揃い施文の種類は安堵屋敷遺跡と今津遺跡では大きさ（文様の横幅）不揃いが大多数を占めたのに対し、里鎗遺跡では「形の不揃い（１単位のみ異形）」が主体を占めた。

次に、不揃い施文の頻度の器種差については、３遺跡を合わせた資料では、深鍋、浅鉢、壷が３割程度でほぼ近似した値を示した。これに対し、注口土器は里鎗・安堵屋敷遺跡ともに不揃い施文がみられず、今津では展開図を作れる注口土器はなかった。注口土器は注口部と張り出し部を境に上半部と下半部の２つの文様帯があるが、下半部の文様は下方から俯瞰できるので不揃いが生じにくい。一方、



第 22 図　器種間における不揃い施文
Fig.22　Frequency of irregular design layout for each pottery types

上半部の文様も斜め上からの俯瞰がある程度できるが、同様の条件の壷に比べて明らかに不揃い施文の頻度が低いことから、注口土器の文様施文は意識的に入念に割り付けていた可能性が高い。

各遺跡での器種差をみると、里鎗遺跡では壷の不揃い施文頻度が低く、４割前後にのぼる浅鉢・深鍋との違いが顕著である。一方、安堵屋敷遺跡では壷・浅鉢・深鍋が３割弱とほぼ共通した不揃い頻度を示す。

このように不揃い施文の出現頻度では壷・浅鉢・深鍋の共通性が目立つのに対し、不揃い施文のタイプは器種間で大きな違いがある。すなわち、壷→浅鉢→深鍋の順に「形の不揃い」が増え、「大きさとスペースの不揃い」が減る傾向がみられる。同様の傾向は安堵屋敷遺跡（壷→浅鉢・深鍋）と里鎗遺跡（浅鉢→深鍋）でも部分的に観察できる。壷は斜め上から全体を俯瞰しやすく、かつ縦区画文が施文の基準になることから、大きさの不揃いが少ないと予想していたので、この結果は意外だった。里鎗遺跡では壷の不揃い頻度が低い点は当初の予想と対応するが、安堵屋敷遺跡において壷の「大きさの不揃い」が多い事実は、縦区画文でさえ均等な割付をあまり考慮していないことを示している。

文様間・単位数間の不揃い施文頻度の違い（第23・24図）：各類型が十分な個数を確保できるように、３遺跡を合わせた資料において文様間と単位数間の比較を行った。個数が10個以上の単位文様について不揃い施文の出現頻度をみると、不揃い施文がない「注口土器に特有の鉢巻文」を除いて２割から４割の範囲にあり、資料数を考慮すれば概ね類似した比率といえる。その中で不揃い頻度が高め（３割以上）なのは単位文様B1・２、A6であり、低め（２割前後）なのは単位文様A1・C1・縦区画文である。楕円文A1や縦区画文Ｆのようなシンプルな単位文様では比較的不揃いが少ないのに対し、不揃い頻度が高めの単位文様では「形の不揃い」が全体の頻度を押し上げている。よって、「大きさやスペースの不揃い」の頻度は（注口土器を除いて）単位文様間で大差ない。

次に、単位数による違いをみると、２・４・６という偶数単位よりも３・５という奇数単位の方が不揃い施文の頻度が明瞭に高い。これは、偶数単位の方が目視による均等割り付けを行いやすかったことを示している。なお、７単位以上では不揃い比率が低いのは、単位数が多くなるほど「大きさや「スペースの不揃い」が目立ちにくくなるためだろう。

文様の不ぞろい施文からみた文様施文プロセス：以上の検討結果は次のようにまとめられる。

第一に、不揃い施文の比率は遺跡間・器種間で共通性が高く、３割前後にのぼる。そして、形の不揃いよりも「大きさとスペースの不揃い」が主体を占めることから、追い回し（追い込み）型施文が主体だったと考えられる。この点は、①多くの土器において口頸部の突起が文様配置の目安になっていない、②斜め上から全体を俯瞰しやすく、かつ、シンプルな縦区画文が主体の壷においても、浅鉢・深鍋と大差ない頻度で不揃い施文がみられる、などの事実からも補強される。

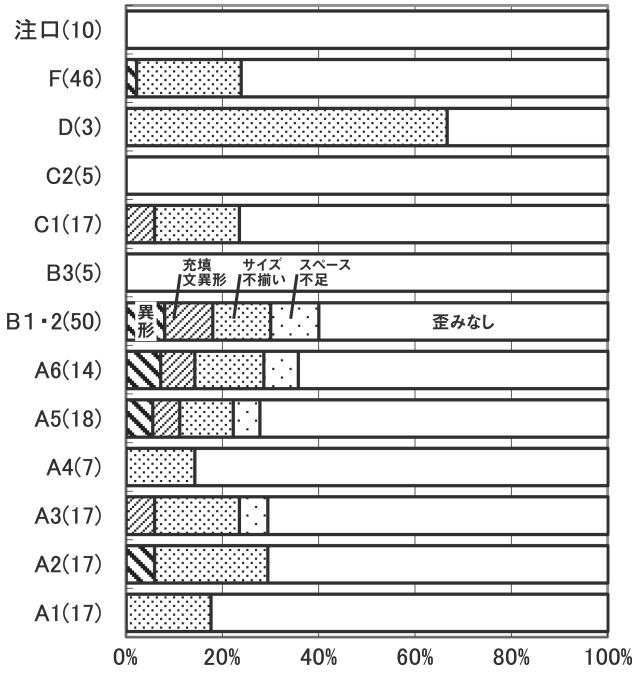
第二に、注口土器は不揃い施文の頻度が低いことから、例外的に「注口部を中心とした分割型割付け」が行われた。

第三に、大多数の単位文様は不揃い施文の頻度が２～４割の範囲に収まり、文様間の微細な頻度の違いは「形の不揃い」の頻度の違いが影響する。よって、「大きさとスペースの不揃い」の出現頻度は、単位文様間に顕著な違いはない。

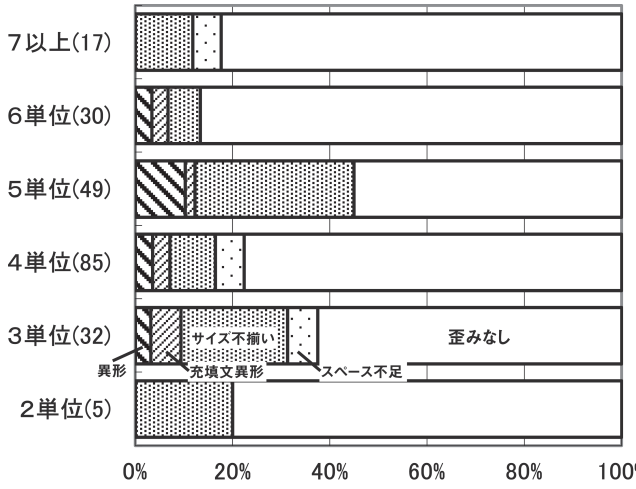
第四に、偶数単位（２・４・６）の方が奇数単位（３・５）よりも不揃い施文の頻度が低いことから、追い回し施文では偶数単位の方が目視により均等割付をしやすかったといえる。

以上より、文様単位が規則的に割付されたというよりも、追い込み式で一気に施文した可能性が高い。一気に施文する場合、レイアウト以前に縄文が全体に施文されているとレイアウトの修正が困難になることから、縄文施文に先立ってレイアウト沈線を施文した可能性が高い。

そして、このような追い込み施文は、「習慣的に身に付いた動作（モーターハビット）により単位文様が施文されていた」ことを示唆している。



第23図　文様間における不揃い施文（3遺跡の合計）
Fig.23　Differences in the frequency of irregular layout between motif types (3 sites combined)



第24図　文様単位数間における不揃い施文（3遺跡の合計）
Fig.24　Differences in the frequency of irregular layout between motif units (3 sites combined)

第９章　まとめ

１．里鎗遺跡では、大洞C2式期前半という時間的まとまりが強い復元可能土器が多数えられた。当該期の土器は、形、容量、施文の３要素の結びつきが強く、明瞭な作り分けが観察された。これらの作り分けがどのような使い分け

を反映しているかを検討した結果、以下の点が指摘された。

２．有文と素文の作り分けについては、以下の理由から「使い方の違いと共に、日常用と非日常用といったコンテクストの違いを反映する」、と推定した。まず、小型深鍋の中で有文と素文の間にスス・コゲの明瞭な違いがみられなかった。また、深鍋と壷では、形がほぼ同じ細別類型の中で有文の方が素文よりもやや小型で、かつ正面を意識している。最後に、盛り付け用という最も目立ちやすい器種である浅鉢・鉢では、有文が大多数を占める。

３．深鍋は中大型の素文（１類「九年橋タイプ」主体）、小型素文、小型有文に作り分けられており、前者は胴下部にコゲが巡るのに対し、後２者は胴上半部に調理段階の喫水線上コゲが巡る（胴下部にコゲがない）、という明瞭な違いが観察された。使用回数が少なめの他遺跡資料の観察から、前者の胴下部コゲは「盛り付け後まで鍋を移動せず、大量のオキ火に囲まれていたことを示す喫水線上コゲ」が主体を占めると想定した。一方、小型有文深鍋は浅い沈線区画文様と黒色化仕上げからみて顕著なスス付着を想定した作りではない。調理段階の喫水線コゲが付く小型深鍋は、有文・素文ともに「盛り付けと短時間の加熱」に用いられたと推定した。以上より、中・大型深鍋で長時間調理した内容物を、小型深鍋に盛り付けたり、短時間再加熱した可能性が想定された。

４．容量組成については、「容量を計測できた深鍋では、大きめのサイズクラスほど復元しにくいため組成比率が過小評価される」という制約に対し、形と大きさの結びつきが強いことから、口縁部破片資料の組成比を用いて補正することができた。その結果、５㍑以上の中大型が深鍋全体の５割を占めることが示された。大型深鍋が高い比率を占める事実は、これらが「ナッツ類のあく抜き」といった食材加工用だけではなく、日常料理にも使われたことを示唆している。

５.単位文様については、深鍋、浅鉢・鉢、壷が異なるモチーフを選択する傾向が見出された。理由として「文様帯の縦幅と横幅」と「文様の見え方（上方から全体を俯瞰する文様か、横から一部のみを見る文様か）」が指摘された。

６．単位文様の描き方について、①地文の縄文施文に先立ってレイアウト沈線を描いた、②地文の縄文はレイアウト沈線の区画を意識して部分的に施文する充填縄文手法と文様帯全体に施文する場合（縄文に先立つレイアウト沈線の存在を除いて、狭義のすり消し縄文手法に近い）とがあり、大洞 C2 式期では前段階に比べて後者が増加した、③文様区画内にはみ出した縄文を磨り消した、④半乾燥後、無文部のミガキ調整と沈線のなぞりを行った、という施文手順が復元された。

７．単位文様のレイアウトは、事前に均等割付を行わない、典型的な「追い込み施文」であることが示された。その根拠として、①単位文の形、大きさ（横幅）、スペースの不揃い施文が３割という高頻度で認められる、②口頸部の突起が単位文様のレイアウトの指標にされていないことが多い、などの点が指摘された。このような追い込み施文の結果、器種間の単位数と単位文様の違いは、各器種の文様帯の特徴（上述）や単位文様の形と相関を示した。

謝辞

本稿を作成するにあたり、以下の方々のお世話になった。1979 ～ 80 年の奥州市（当時は水沢市）における土器整理では、里鎗遺跡の調査のきっかけを作り、発掘直後の整理作業に携わった地元研究者の故伊藤鉄夫氏に多大なお世話になった。この報告書を生前にお見せできなかったことが大変残念である。奥州市埋蔵文化財センターの佐藤良和氏・伊藤みどり氏には、2008 年９月開催の「スス・コゲからみた里鎗遺跡の縄文深鍋による調理法方法の復元」をテーマとした土器観察ワークショップをはじめ、資料調査・写真撮影においてご配慮を頂いた。また、文様施文手法の比較資料の観察では、北上市教育委員会の稲野裕介氏、新発田市教育委員会の田中耕作氏、三条市教育委員会の金子正典氏らから多くのご配慮とご教示を頂いた。報告書作成には、東北大学大学院文学研究科考古学研究室の五十嵐愛を主体に、傳田惠隆、馬場隆介・秋山綾子・阿部友香・岡本拓也・川口亮・工藤麻衣・藤咲智也・舩渡耕己の学生諸氏があたった。最後に、東北大学総合学術博物館 柳田俊雄教授には常日頃より多くのご指導を頂戴するとともに、編集に際して格別のご配慮を頂いた。

以上、末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

引用文献

相原康二他 1980『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－関地区東裏遺跡－』岩手県文化財調査報告書 55

阿部芳郎　2008「土器の使用方法と器種構成」『縄文時代の考古学』７ pp.123-130、同成社

市川健夫 2008「北上川中流域における晩期縄文土器割付の研究―晩期中葉を中心に―」『文化』72-1・2 pp.1-22

市川健夫 2009「大洞 C2 式併行期における土器製作者の文様認識の地域的変異―地域間交流理解に向けての予察―」『青森県考古学』17 pp.9-20

伊東信雄・須藤隆 1985『山王囲遺跡調査図録』 宮城県一迫市教育委員会

伊藤博幸編 1983『里鎗遺跡を語る－里鎗遺跡とその文化』水沢市文化財報告書 11

今村啓爾 1983「文様の割付と文様帯」『縄文文化の研究』５ pp.124-150 雄山閣

岩波書店編集部 1952 『平泉』岩波写真文庫 69

国生尚他 1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書 74

小林謙一 2000「縄文中期土器の文様割付の研究」『日本考古学』10 pp. 1 -24

小林正史 1991「単位文様と器種組成からみた縄文時代終末期の地域差」『東日本における稲作の受容－第Ⅰ分冊－』pp.92-125

小林正史 1998「土器の文様はなぜ変わるか－東北地方の縄文晩期後半の単位文様を例として－」『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜 第三分冊』pp.47-91

小林正史 2008「土器付着炭化物分析－スス・コゲからみた

縄文深鍋による調理方法ー」『縄文時代の考古学 7 土器を読み取る 縄文土器の情報』pp.143-156
小林正史・阿部昭典 2008「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法：胴下部コゲの形成過程を中心に」『新潟考古』19 pp.3-42
桜井準也 2007「文様の割り付け」『縄文時代の考古学』 7、pp.255-266 同成社
佐々木彰 1984「再び遺跡の拡散化現象について」『北奥古代文化』15 pp. 1 -29
佐原真 1979『縄文土器Ⅱ』講談社
鈴木公雄 1968「安行式土器における文様単位と割りつけ」『日本考古学協会昭和 43 年度大会研究発表要旨』pp. 5 - 6
芹沢長介編 1979『聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊 2
高橋龍三郎 1993「大洞 C2 式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』 4 pp.83-151
田中耕作他 1992『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』新発田市教育委員会
中島栄一他 1981「上野原遺跡」『三条市史 1 』pp.173-305
半田純子 1966「東日本縄文時代晩期前半から後半への移行期にみられる変化についての一考察」『明治大学研究紀要』 4 pp.717-727
藤沼邦彦 1983「文様の描き方ー亀ヶ岡式土器の雲形文の場合ー」『縄文文化の研究』 5 pp.151-167
藤沼邦彦 1989「亀ヶ岡式土器の文様の描き方」『考古学論叢Ⅱ』pp.129-175
藤沼邦彦他編 2005『青森県東津軽郡平舘村今津遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告 2
藤村東男 1981「土器容量の測定ー晩期縄文式土器を例としてー」『考古学研究』28-3 pp.106-117
藤村東男 1983「縄文土器組成論」『縄文文化の研究』 5 pp.237-249
藤村東男 1985『九年橋遺跡第８次調査報告書』北上市文化財調査報告書 39
Tani, M. & W.Longacre 1999 On methods of measuring ceramic use-life. American Antiquity, 64- 2 , pp.299-308
Suzuki, K 1970 Design System in Later Jomon Pottery. 人類学雑誌 ,78- 1 , pp.38-49

属性表の説明

○土器の番号

No.:　本稿の実測図と拓本の番号
伊東報告書番号:　未出版の1955年報告書の実測図番号
個体番号:　東北大学に保管されている破片資料にシールで添付した番号

○口縁装飾

W:　小波状口縁　（例:第31図62・第33図84・86など）　　A:　刻み目　（例:第31図63～68など）
C:　口縁部に押圧　（例:第25図1～6など）　　E:　素文　（例:第40図141・143・第41図144・145）

○施文工程（口縁部）

工程A:　素文口縁　　工程B:　押圧のみ
工程C:　内面に面取りした後、口縁に押圧　　工程D:　内面の面取りと口縁に押圧の後、内面に沈線

○頚部沈線数

頚部無文の深鍋1類（九年橋タイプ）では頚部の上端と下端の沈線数を「○（上端）＋△（下端）」と表示。
沈線数が厳密に把握できない場合は「≧～」と表示する。

○計測値

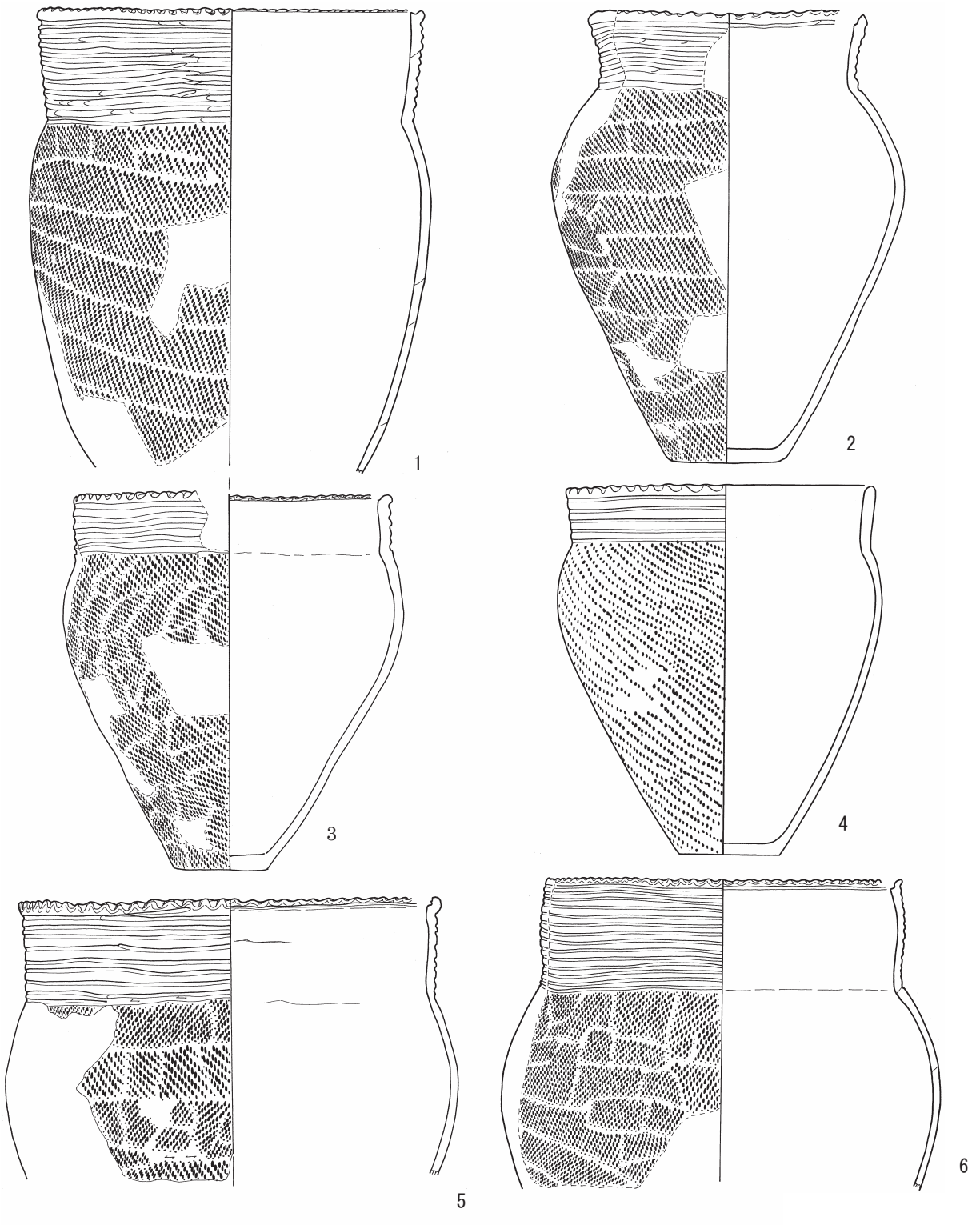
器高:　突起と台部を除いた高さ。底部径が空欄の場合、器高は推定値。
最大径:　胴部最大径と口径のうち、より大きな値。
底部径:　台付の場合は、台部を除いた底面の径（台部上端の径）。
頚部のくびれ度:「頚部径／胴部最大径x100」。頚部の括れがなく、胴部に最大径がある場合は
「口径／胴部最大径x100」。
頚部に括れがなく、口縁部に最大径がある場合は100。値が小さいほど括れが強い。
相対的深さ:「器高／最大径x100」。

○単位文様

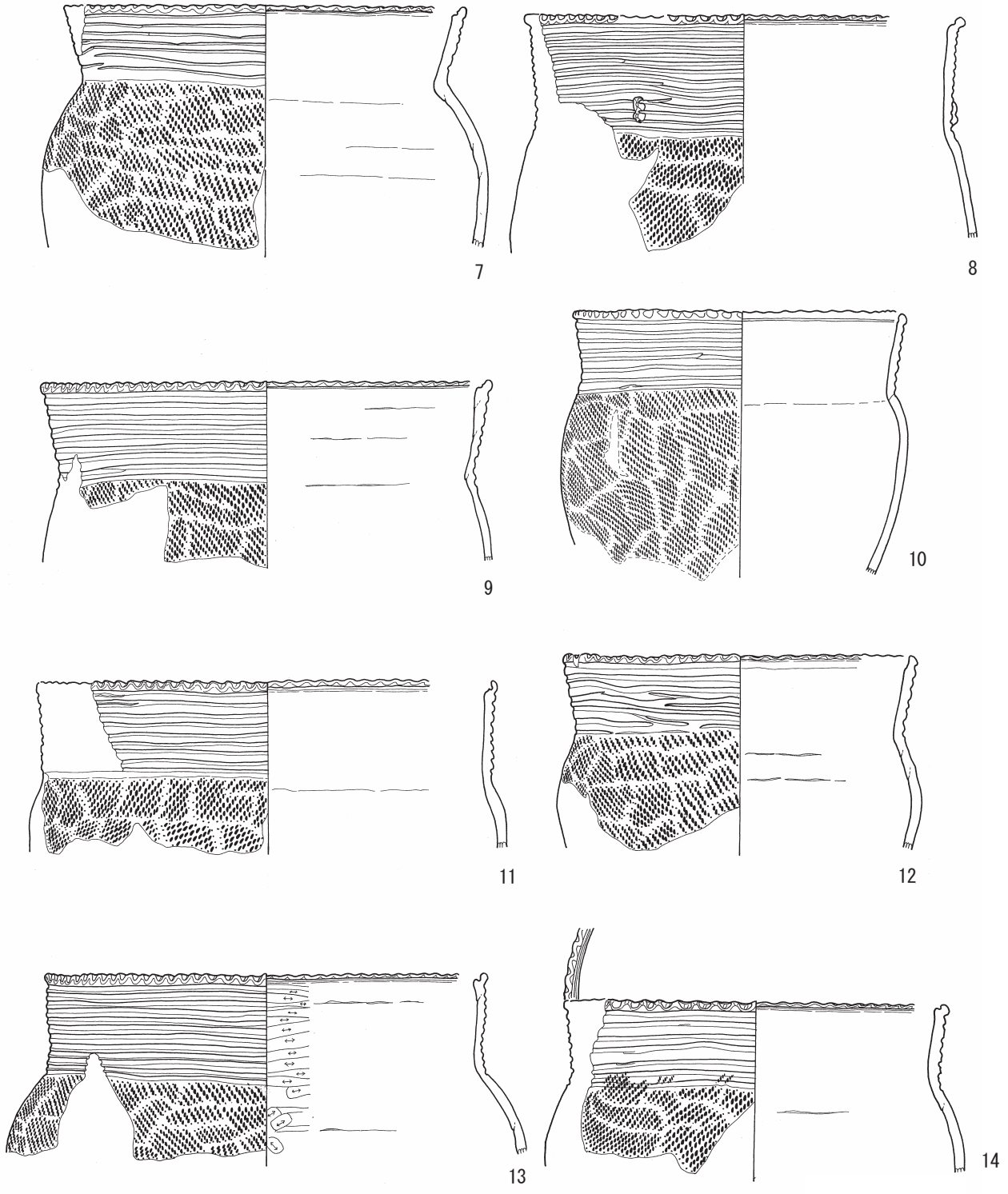
文様類型は第18図を参照。縄文原体は胴下半部と同じ。

付表　里鎗遺跡出土土器個体数集計表
Assemblage of the Final jomon pottery from the Satoyari site

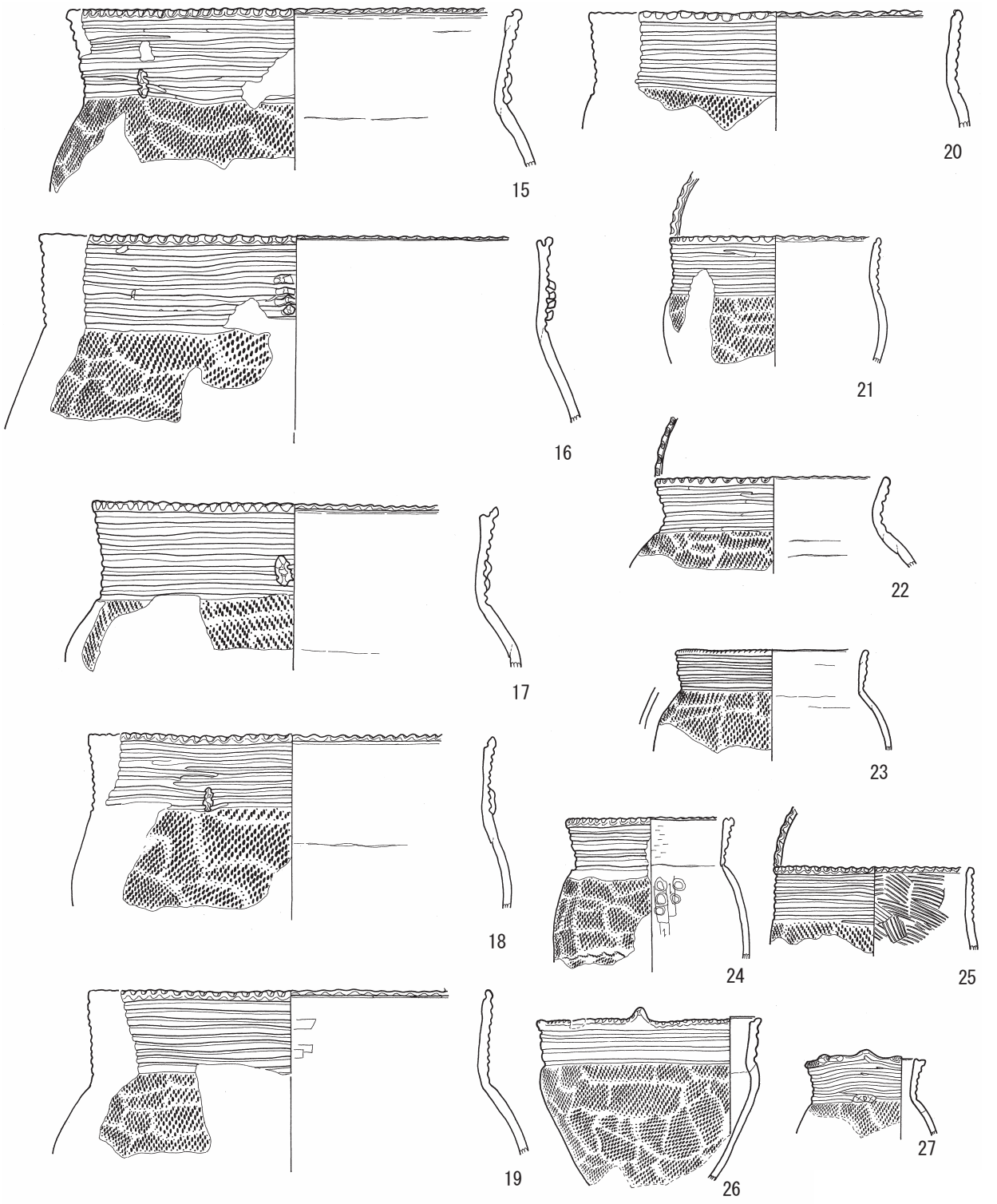
容量測定資料	復元素文	復元無文	復元有文	復元総計	口縁部を含む破片資料	破片素文＋無文	破片不明	破片有文	破片総計	全体	素文＋無文	有文	不明	総計
深鍋1類	16			16	深鍋1類	412			412	深鍋1類	428			428
深鍋2類	6			6	深鍋2類	72			72	深鍋2類	78			78
深鍋3類	25		12	37	深鍋3類	124	38	119	281	深鍋3類	149	131	38	318
深鍋4a類	2		12	14	深鍋4類	134		14	148	深鍋4類	144	26		170
深鍋4b類	8			8										
深鍋5類	2			2	深鍋5類	4			4	深鍋5類	6			6
浅鉢1a類			7	7	浅鉢1類			95	95	浅鉢1類	2	102		104
浅鉢1b類	2			2										
浅鉢2類		3		3	浅鉢2類			17	17	浅鉢2類	3	17		20
浅鉢3類	1	3	5	9	浅鉢3類			24	24	浅鉢3類	4	29		33
鉢4類	1		1	2	鉢4類			9	9	鉢4類	1	10		11
鉢5類			4	4	鉢5類			7	7	鉢5類		11		11
壷1類	4		12	16	壷外反	18	6	13	37	壷	62	56	31	149
壷2類	4			4	壷直立	13	12	4	29					
壷3類		7	1	8	壷内傾	9	10	3	22					
壷4類	2			2	壷不明	5	3	23	31					
注口			2	2	注口			3	3	注口		5		5
蓋			1	1	蓋					蓋		1		1
復元合計	73	13	57	143	破片合計	791	69	331	1191	合計	877	388	69	1334



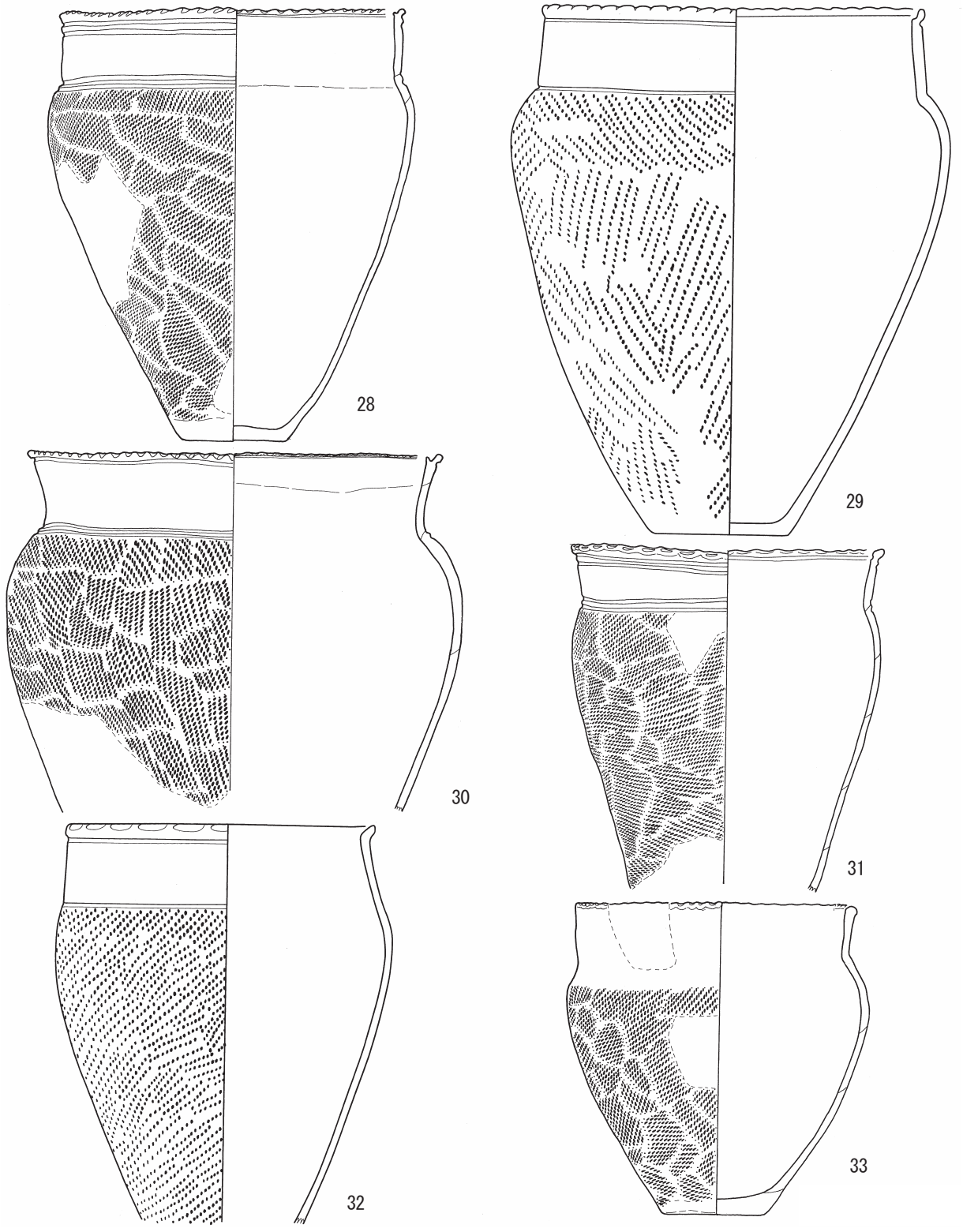
第25図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 25 Jomon Pottery from the Satoyari site



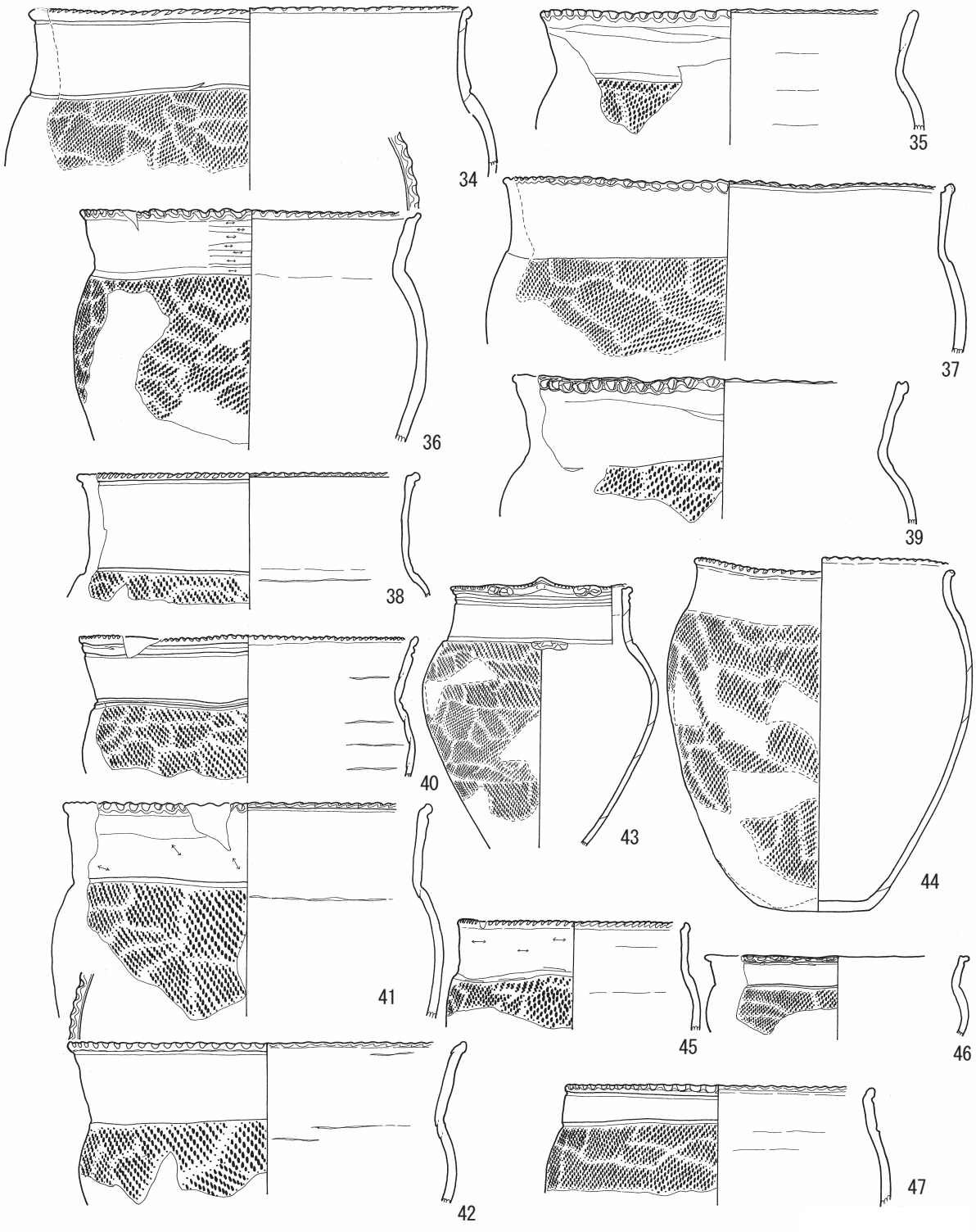
第 26 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 26　Jomon Pottery from the Satoyari site



第27図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 27　Jomon Pottery from the Satoyari site



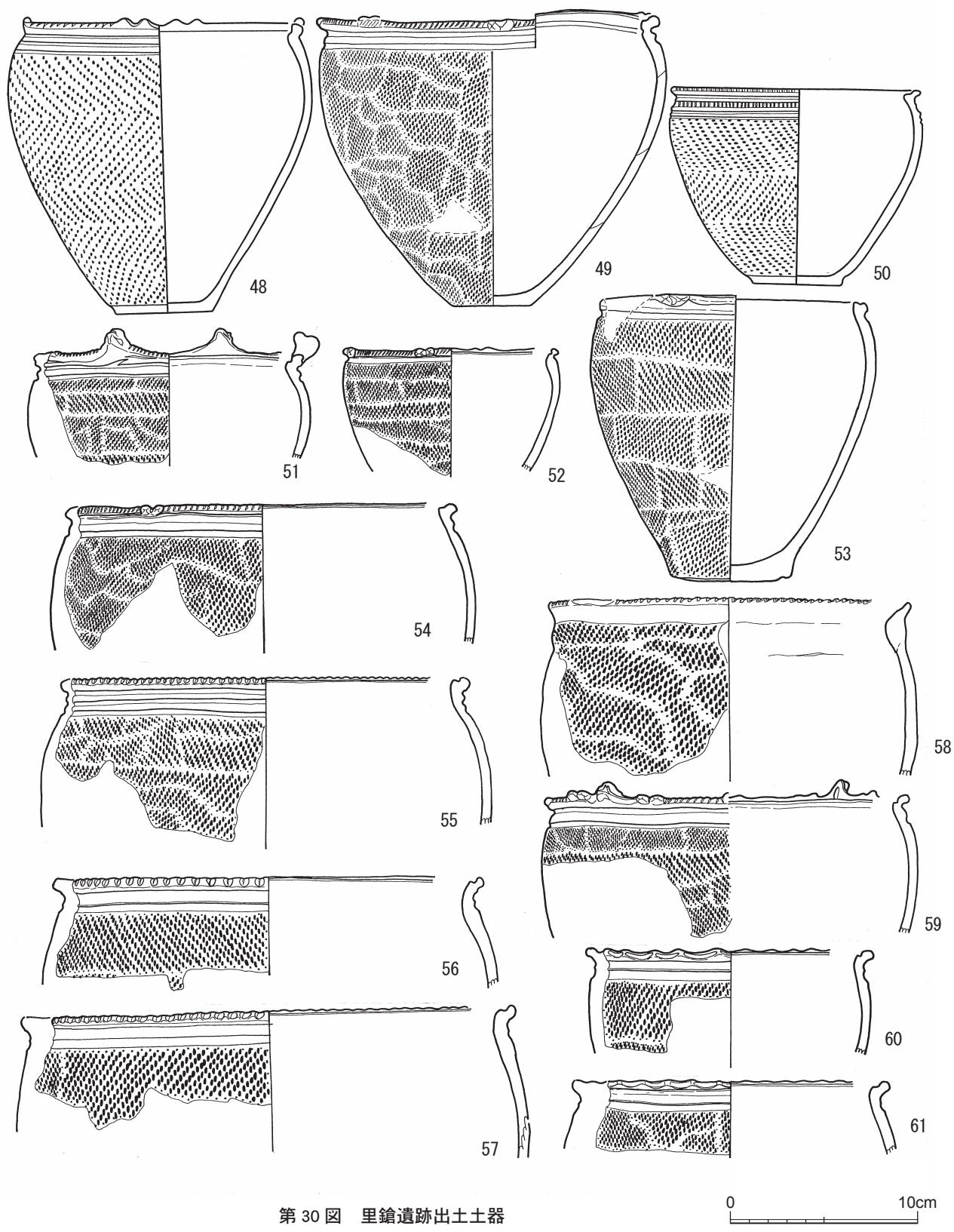
第 28 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 28　Jomon Pottery from the Satoyari site



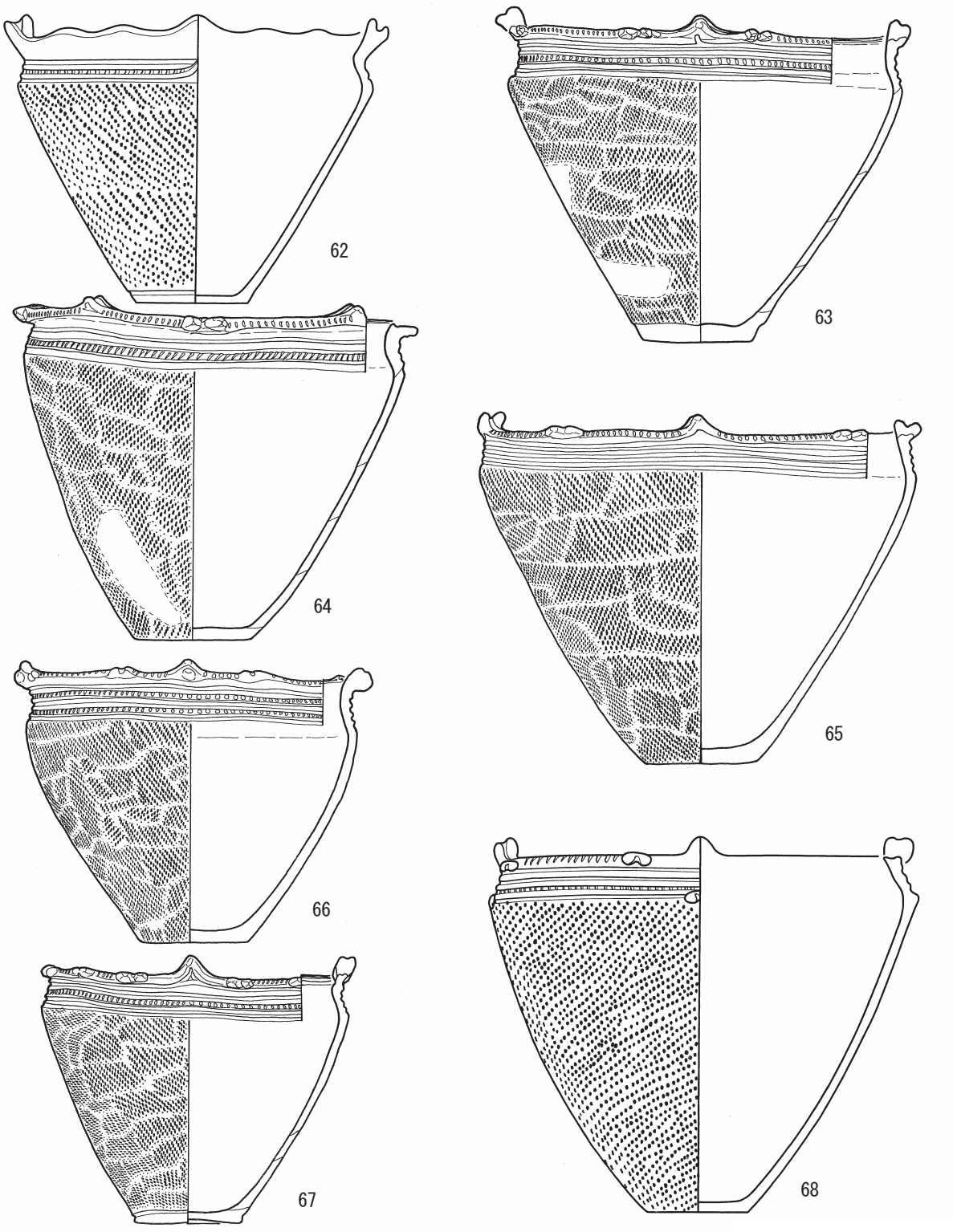
第29図　里鎗遺跡出土土器

Fig. 29 Jomon Pottery from the Satoyari site

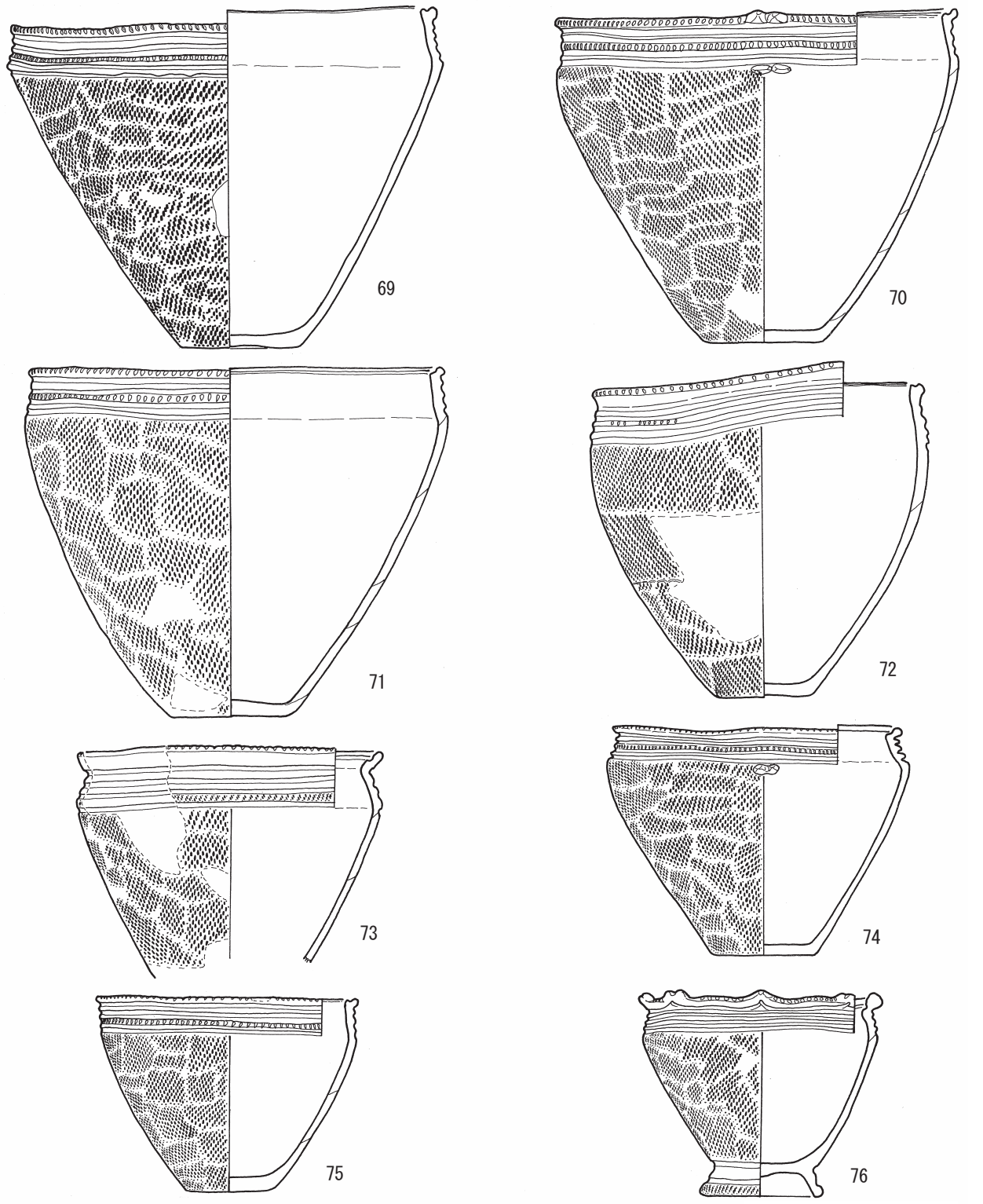
0 10cm



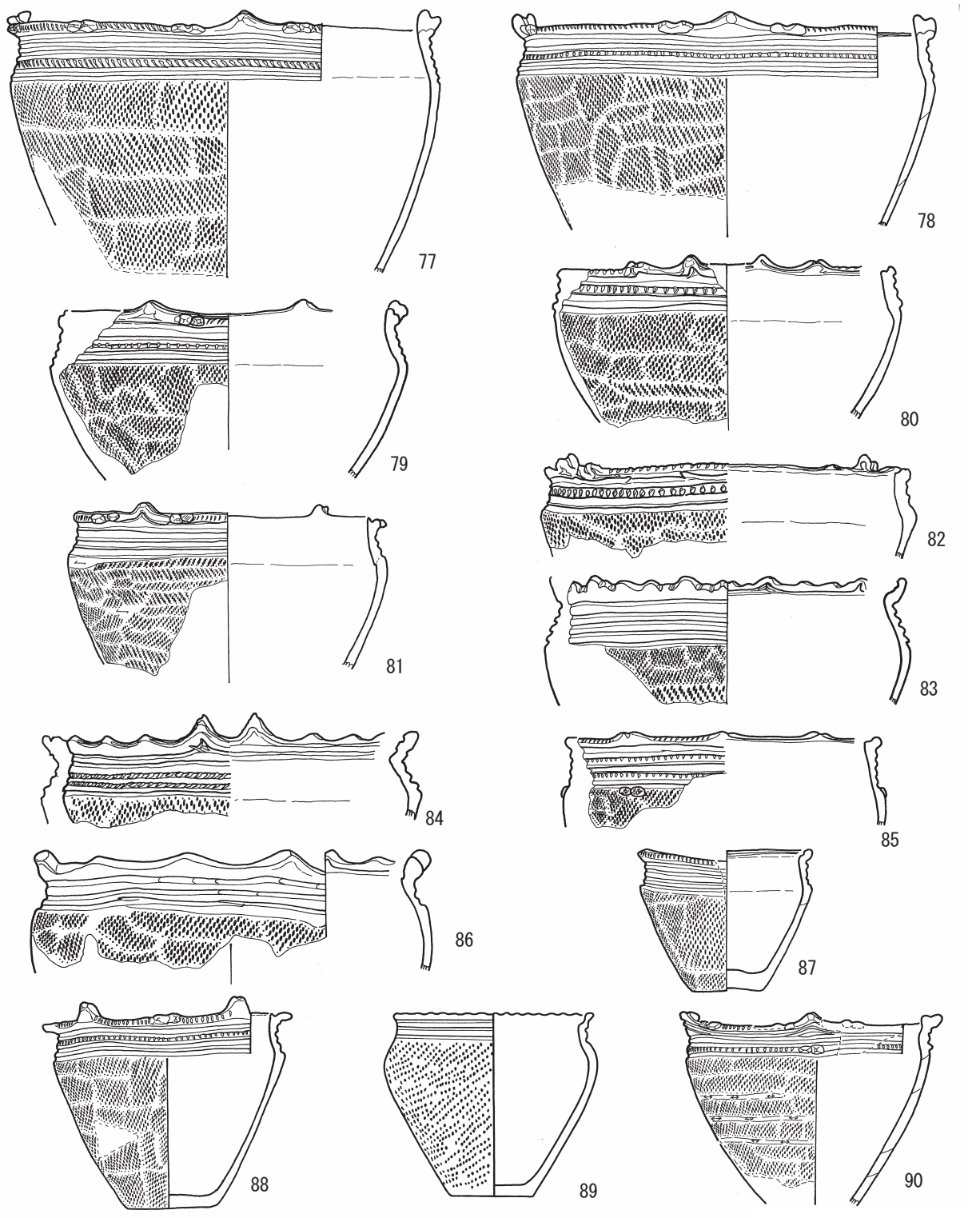
第 30 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 30　Jomon Pottery from the Satoyari site



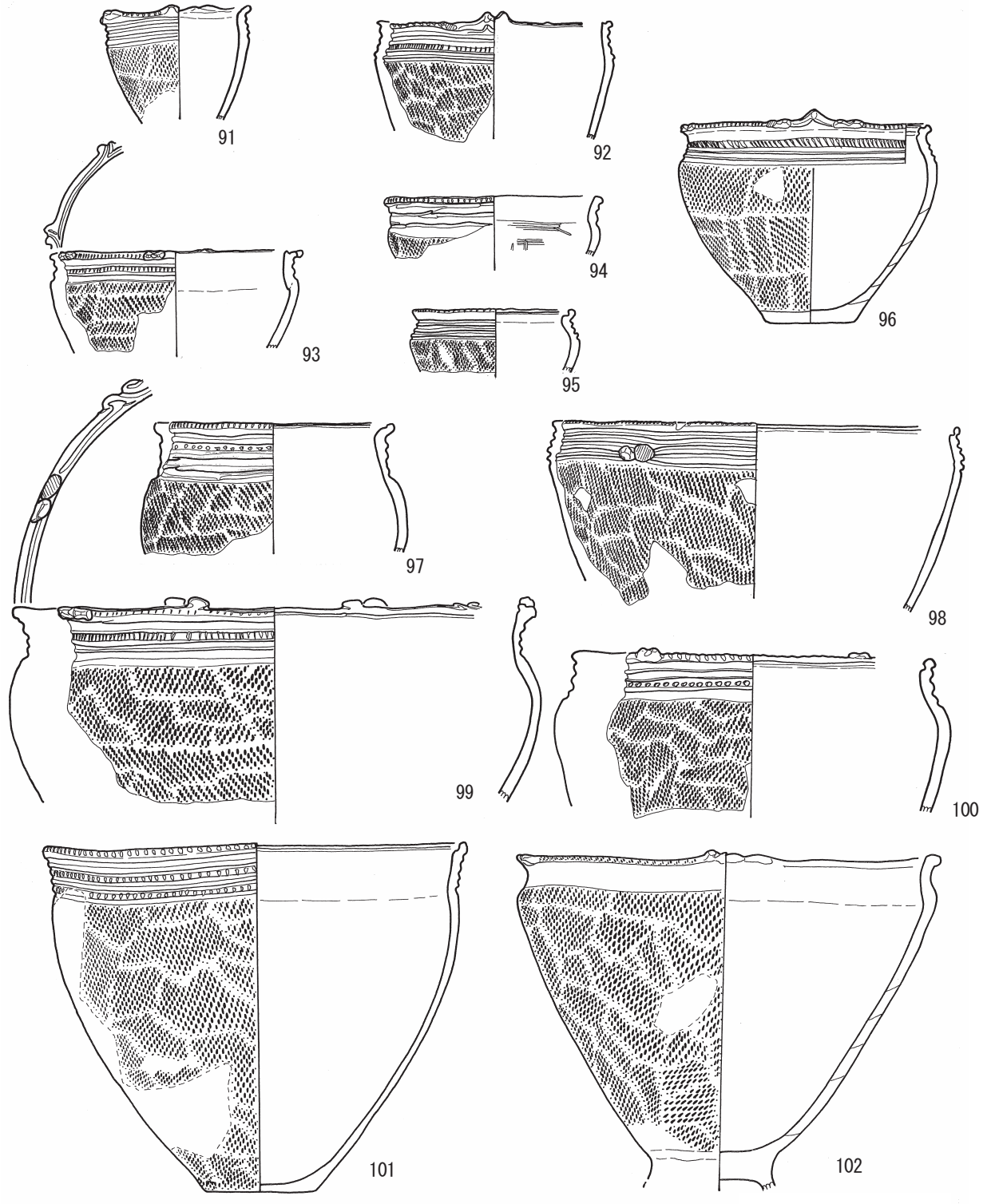
第31図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 31 Jomon Pottery from the Satoyari site



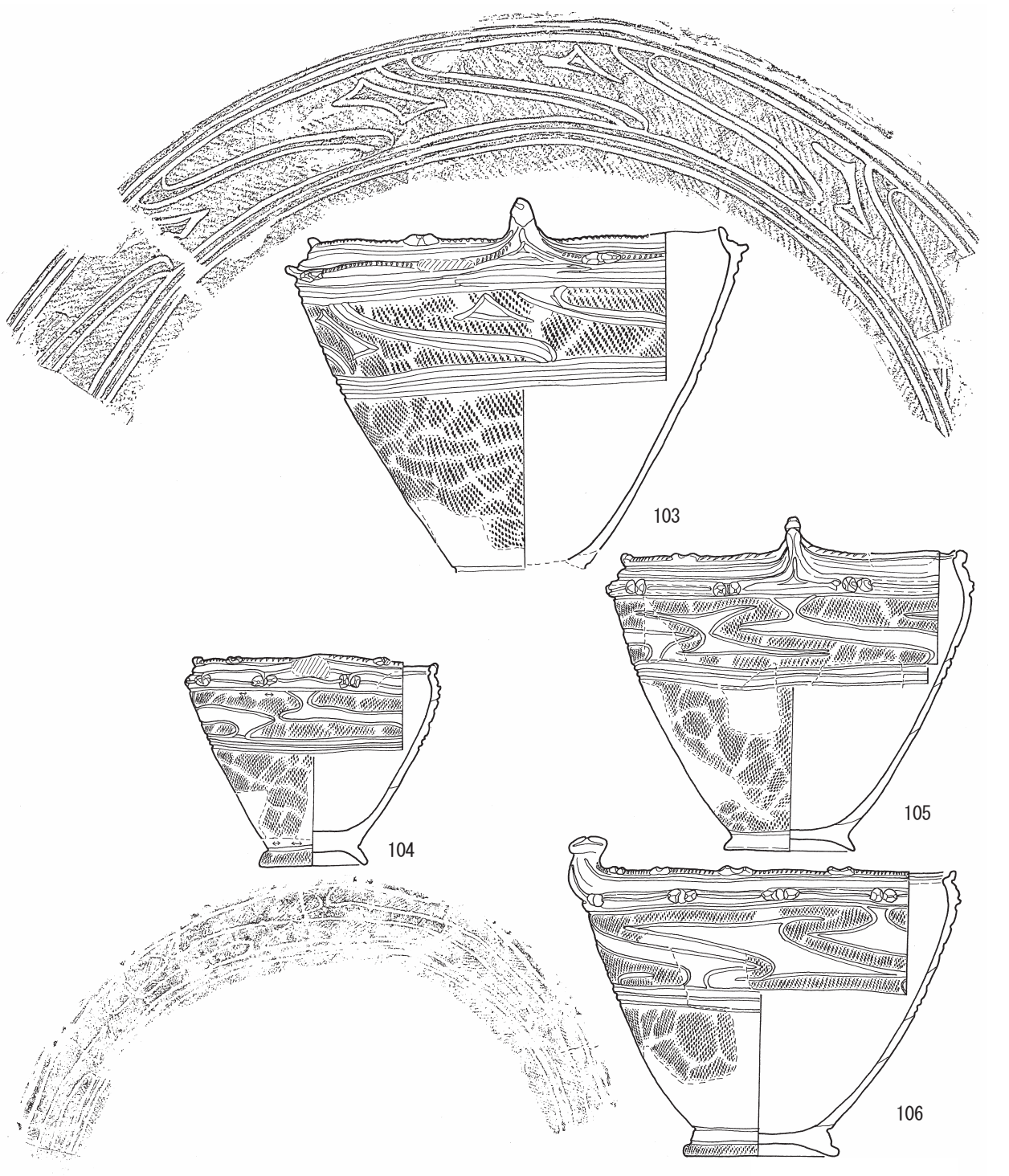
第 32 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 32　Jomon Pottery from the Satoyari site



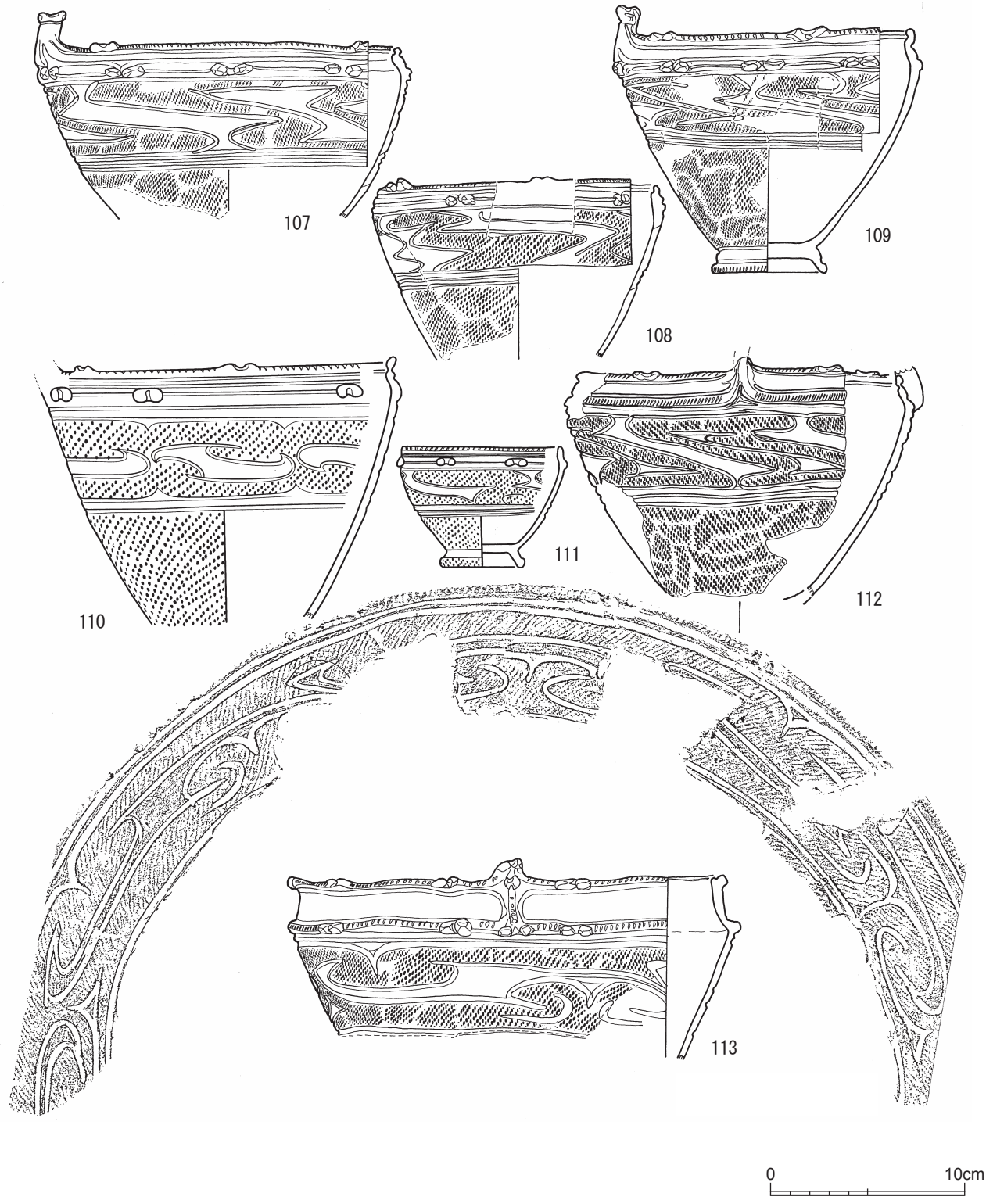
第33図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 33 Jomon Pottery from the Satoyari site



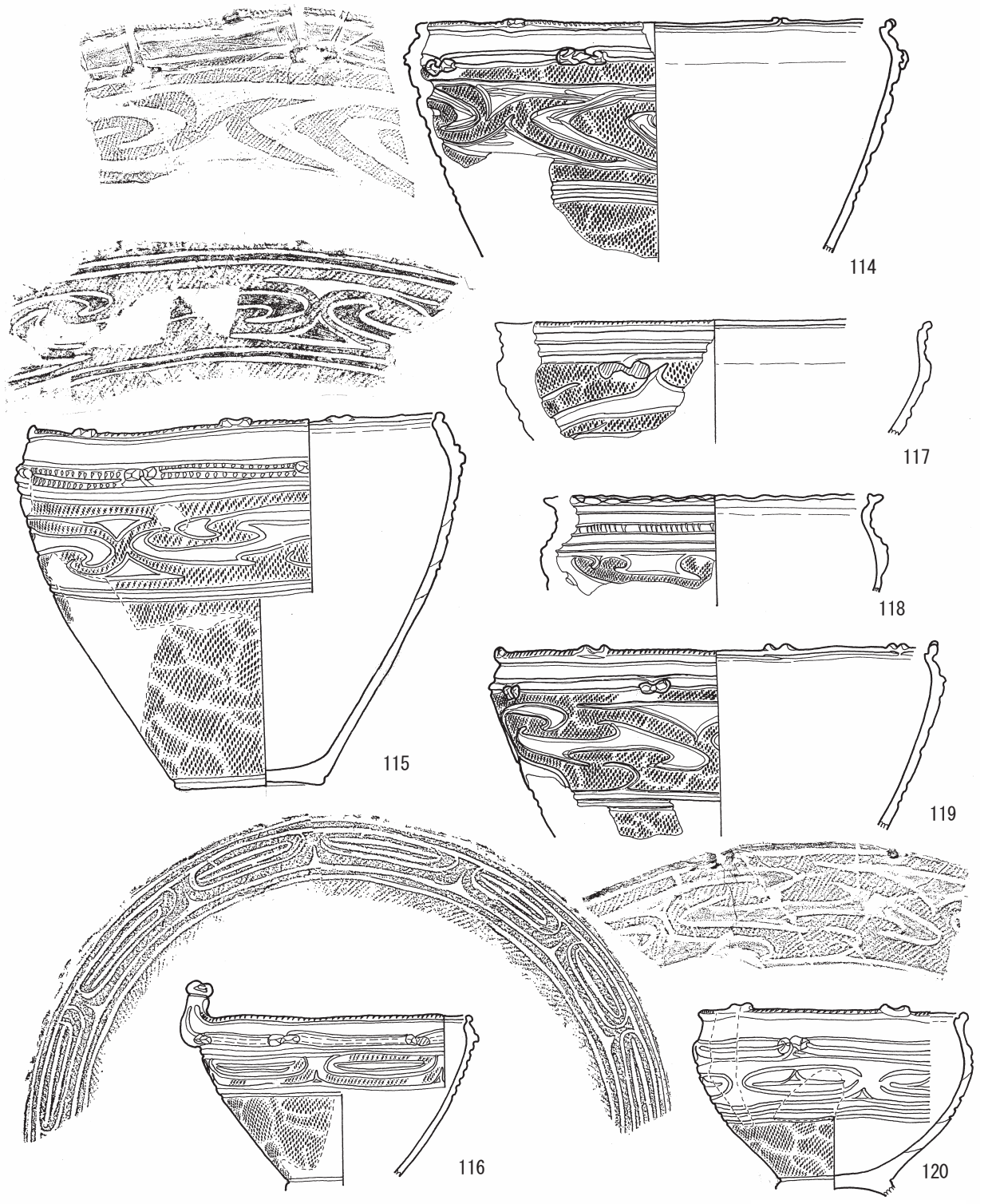
第 34 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 34　Jomon Pottery from the Satoyari site



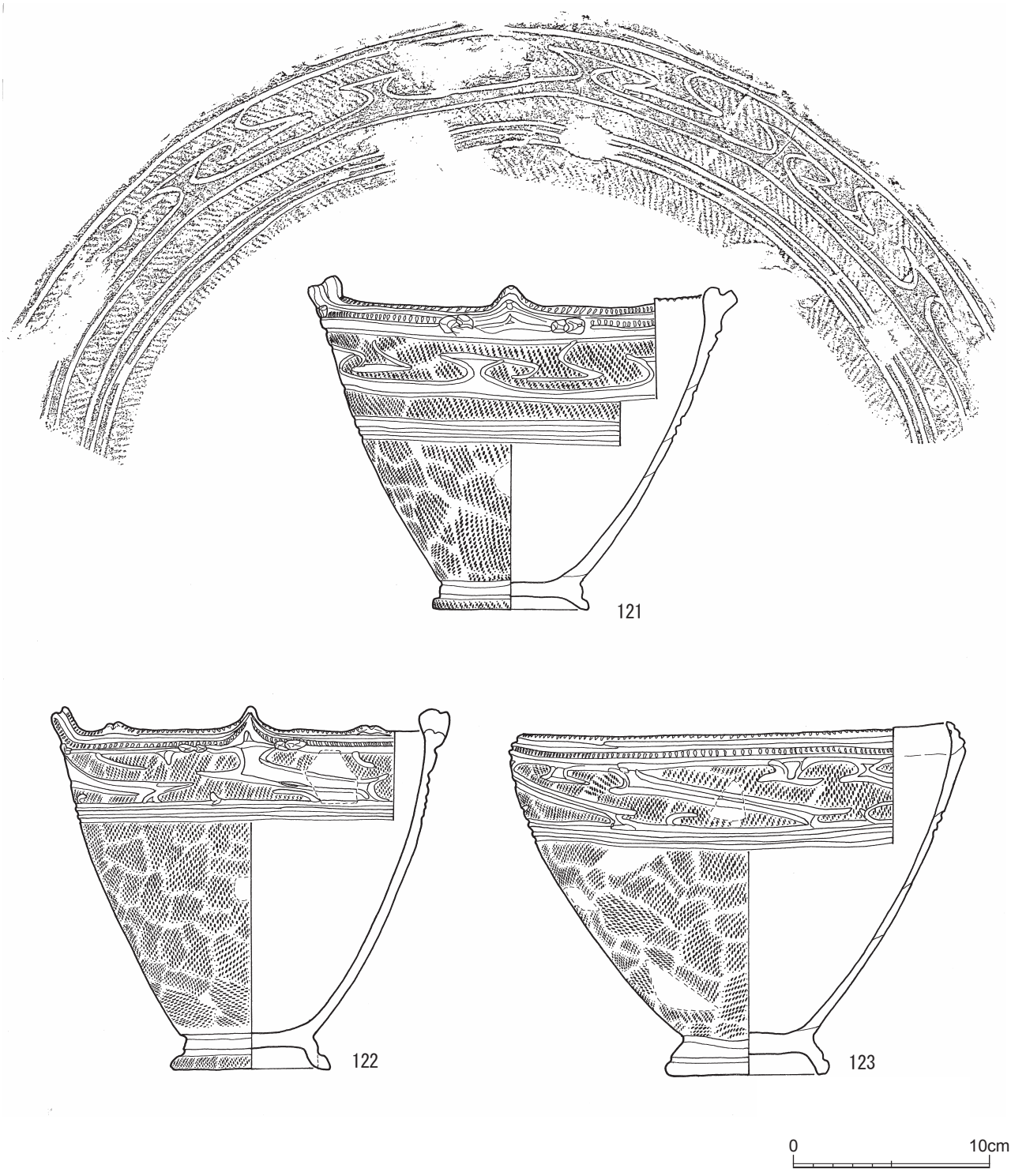
第35図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 35　Jomon Pottery from the Satoyari site



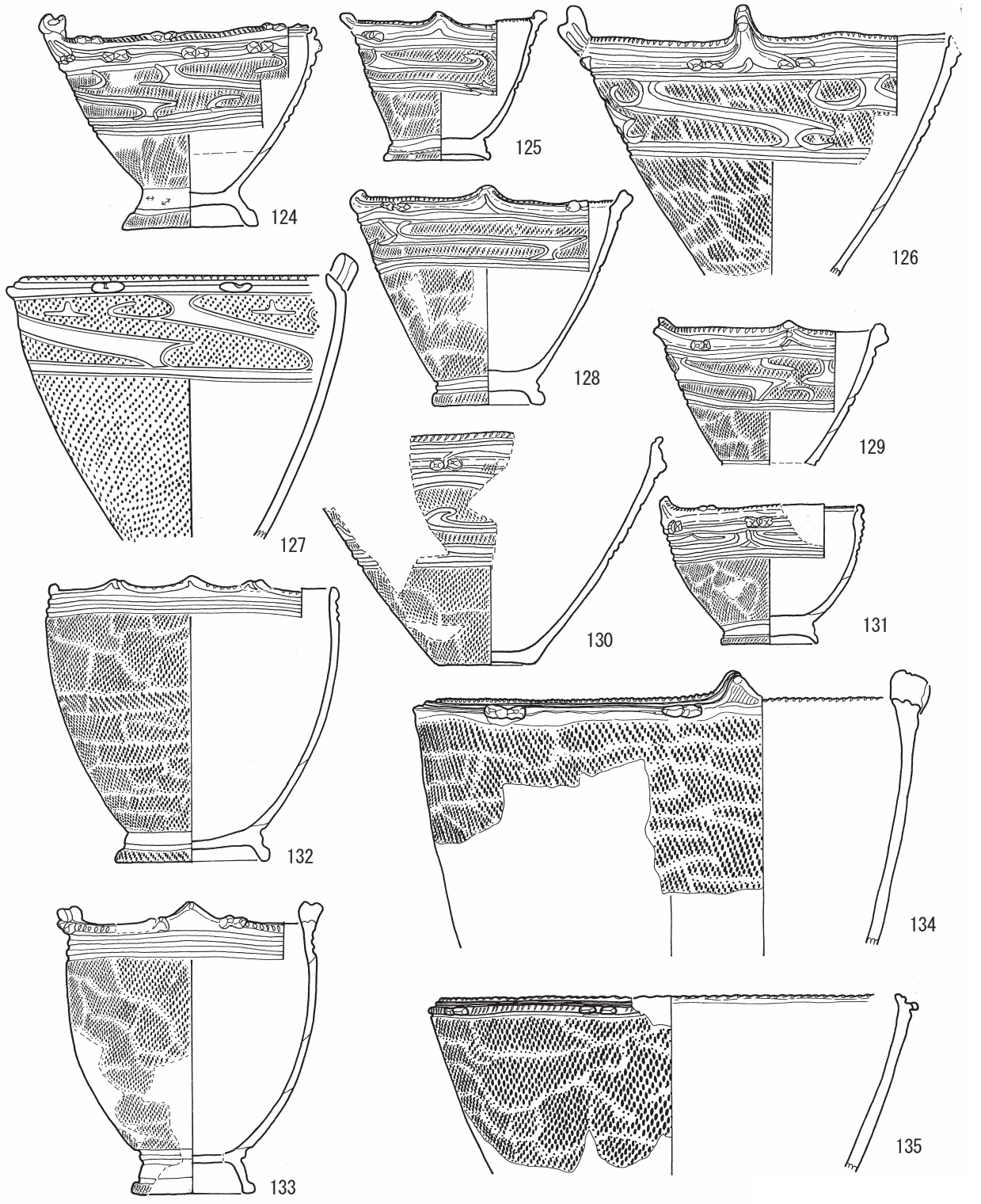
第 36 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 36　Jomon Pottery from the Satoyari site



第37図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 37 Jomon Pottery from the Satoyari site



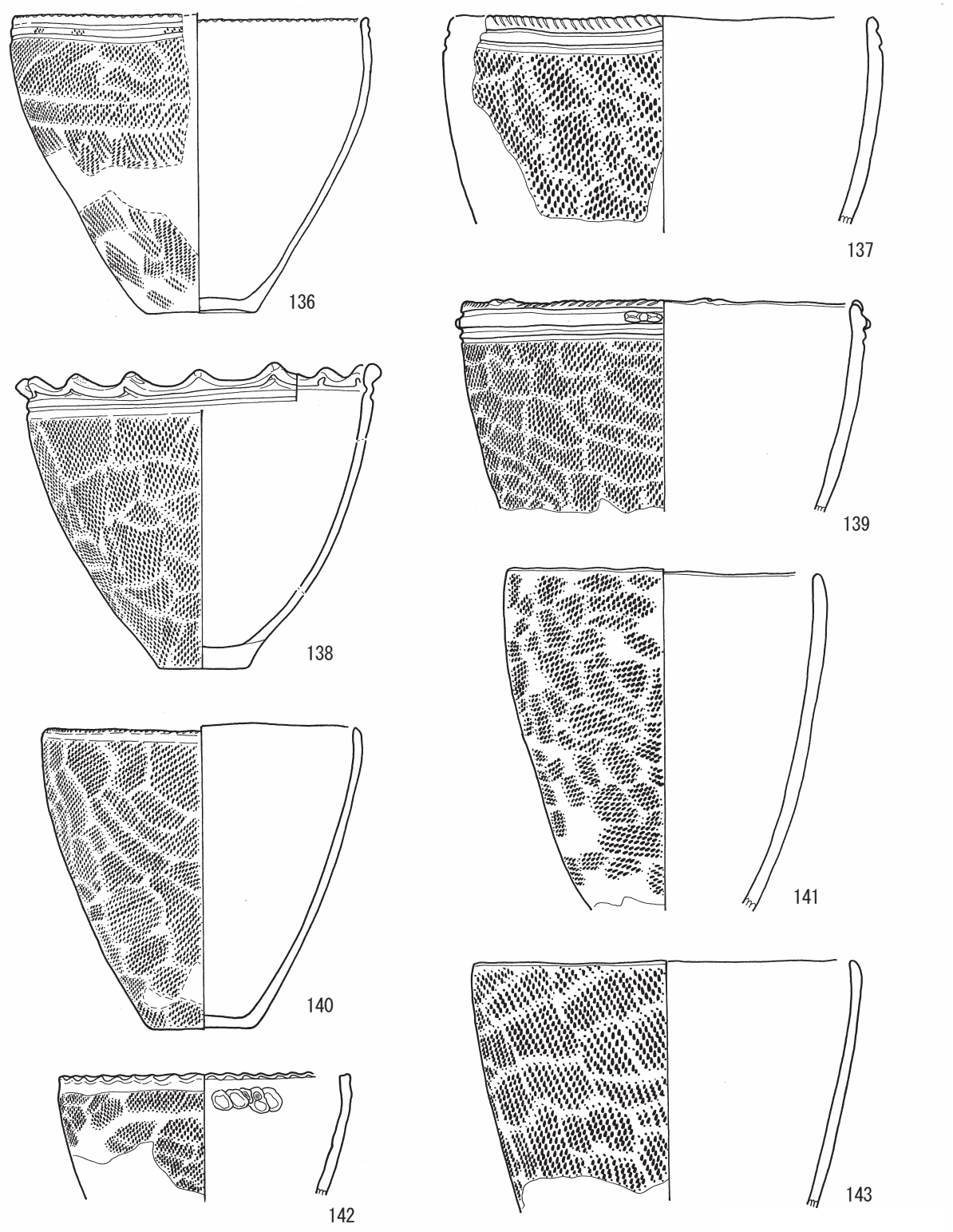
第 38 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 38　Jomon Pottery from the Satoyari site



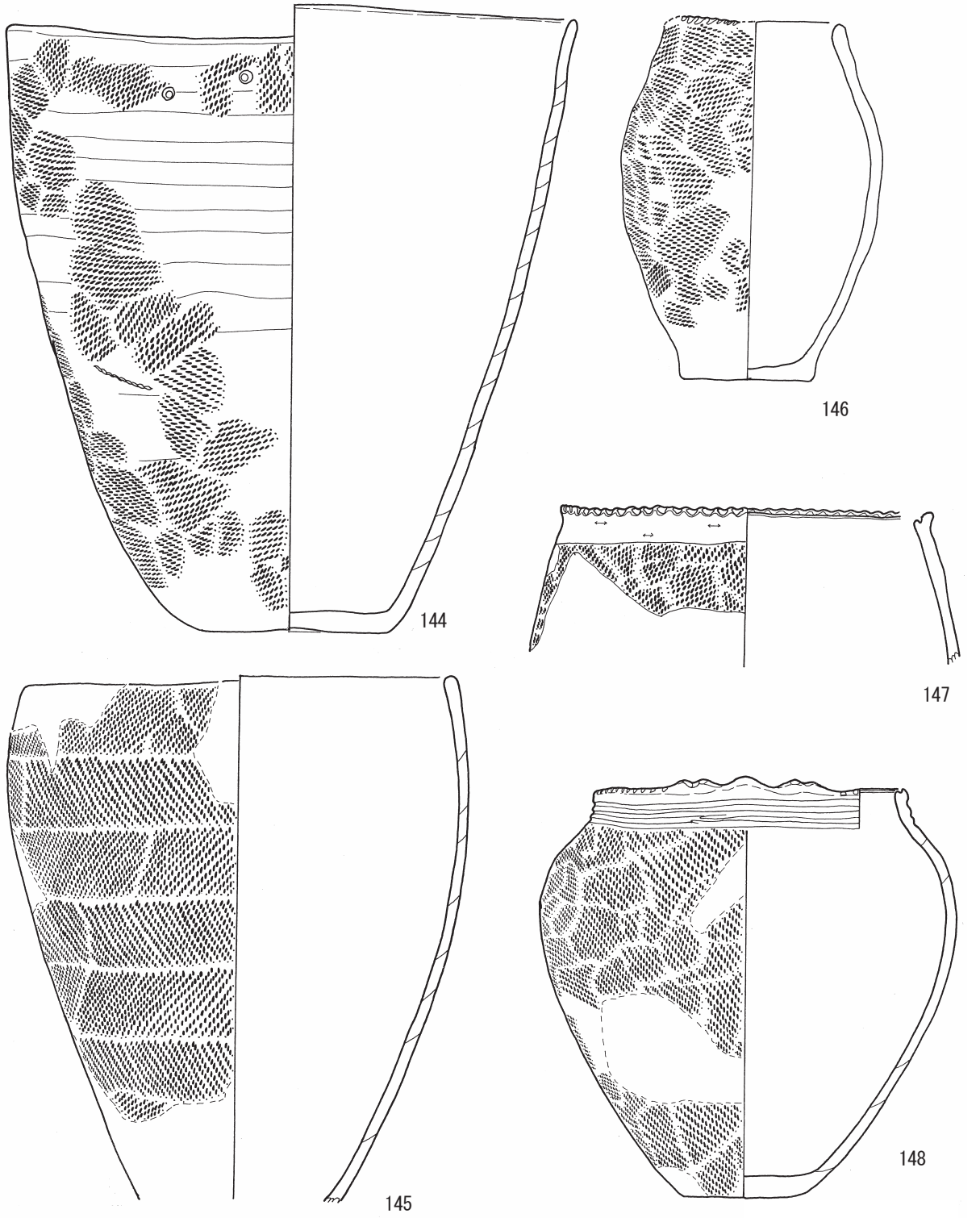
第39図　里鎗遺跡出土土器

Fig. 39 Jomon Pottery from the Satoyari site

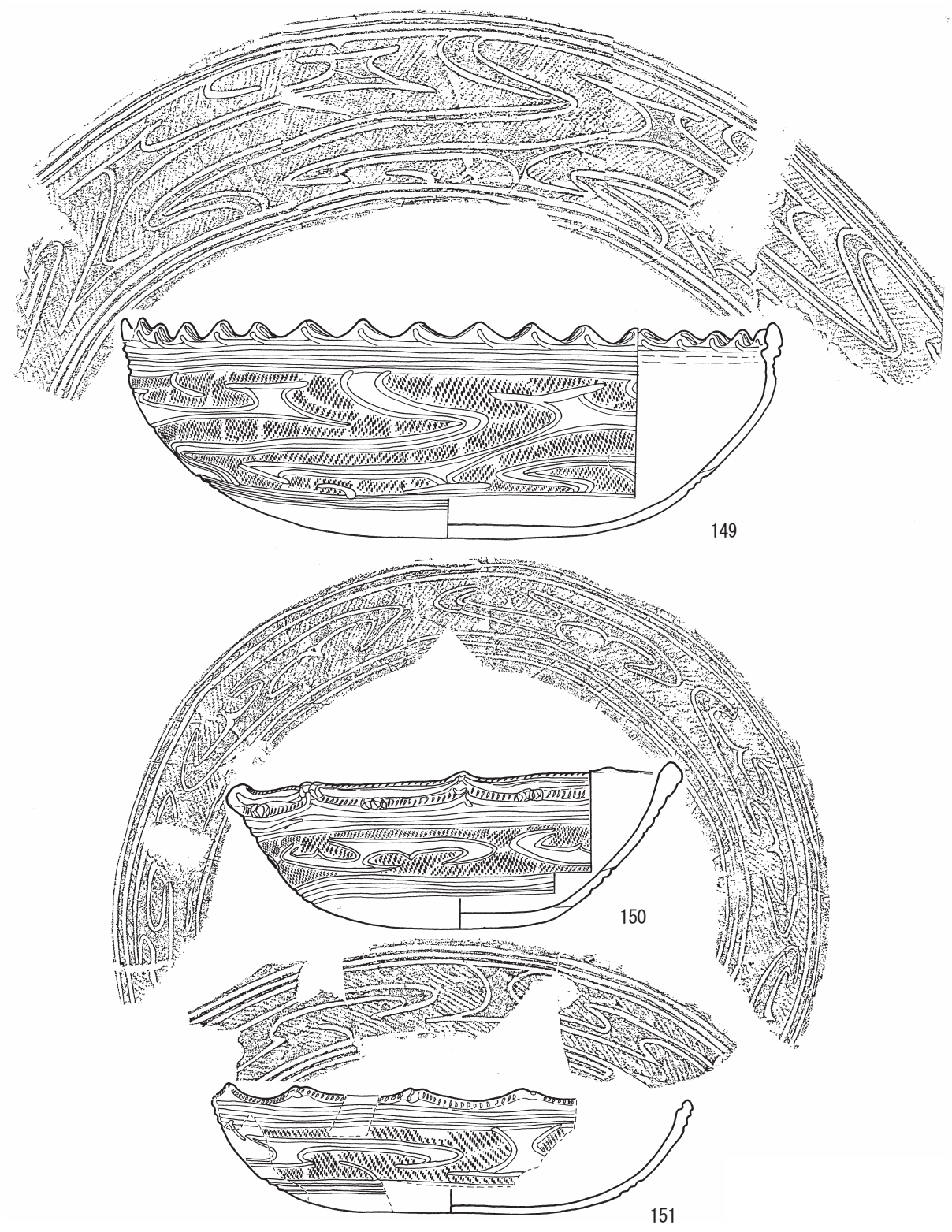
0 10cm



第 40 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 40　Jomon Pottery from the Satoyari site

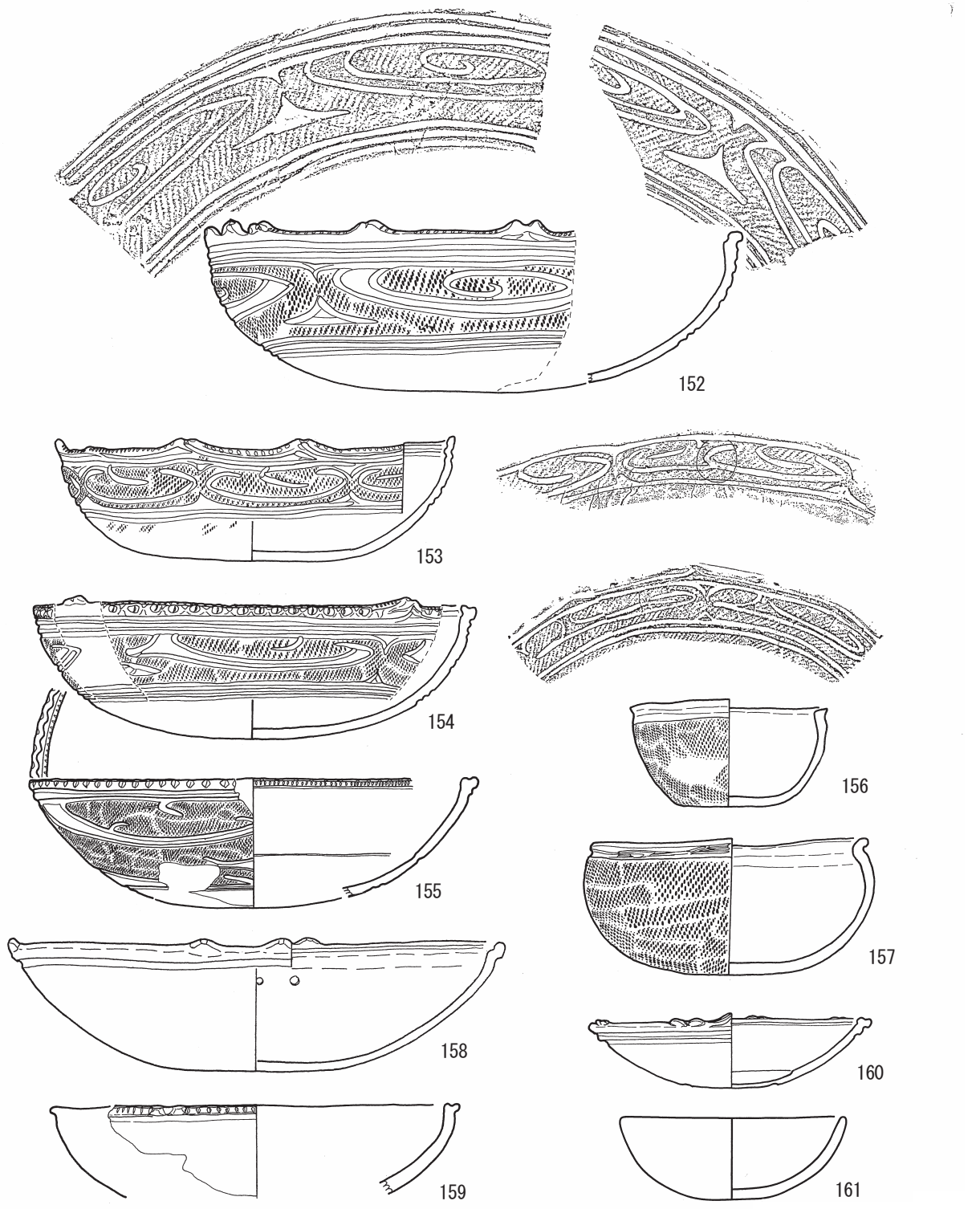


第41図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 41　Jomon Pottery from the Satoyari site

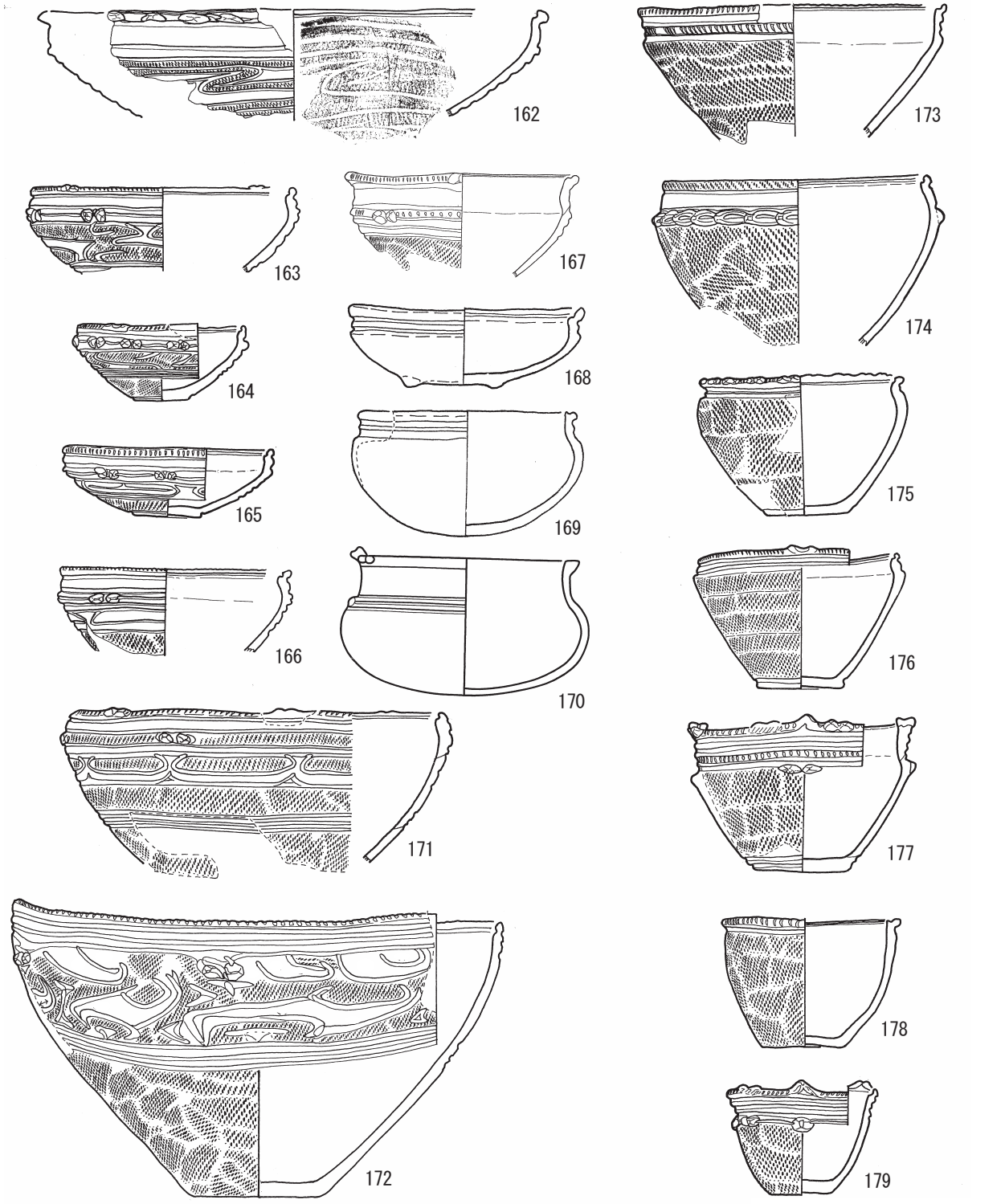


0　10cm

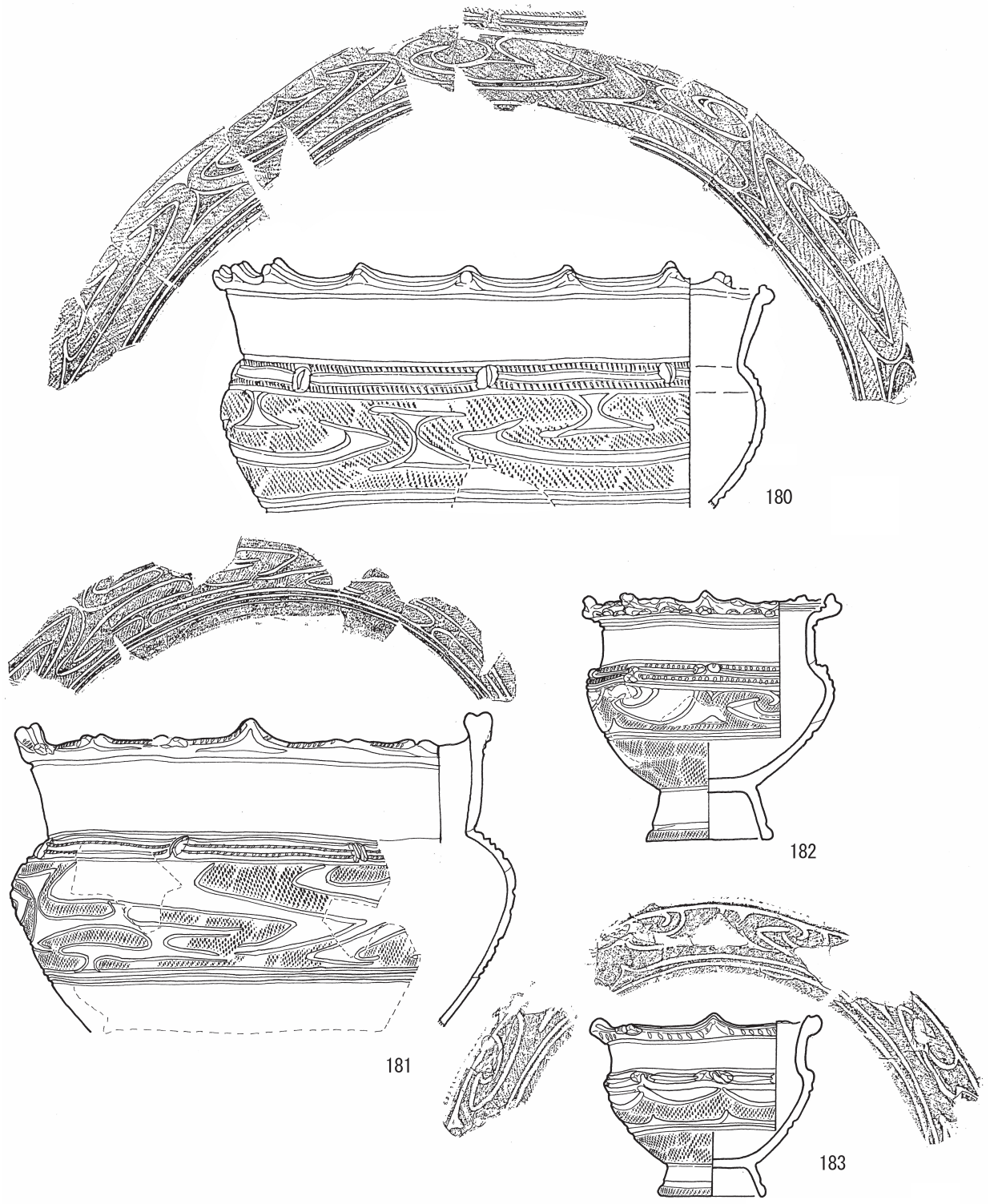
第 42 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 42　Jomon Pottery from the Satoyari site



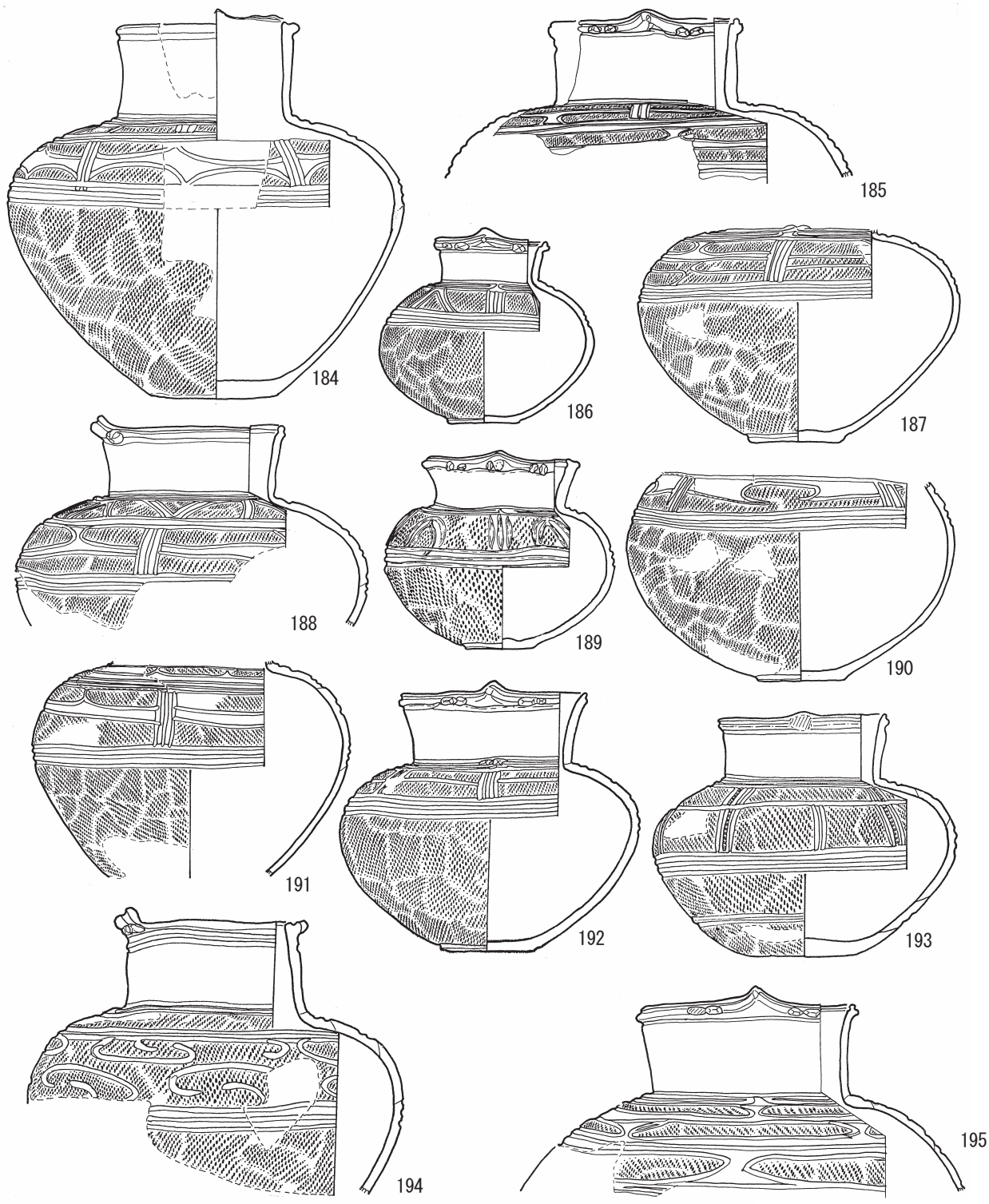
第43図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 43　Jomon Pottery from the Satoyari site



第 44 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 44　Jomon Pottery from the Satoyari site



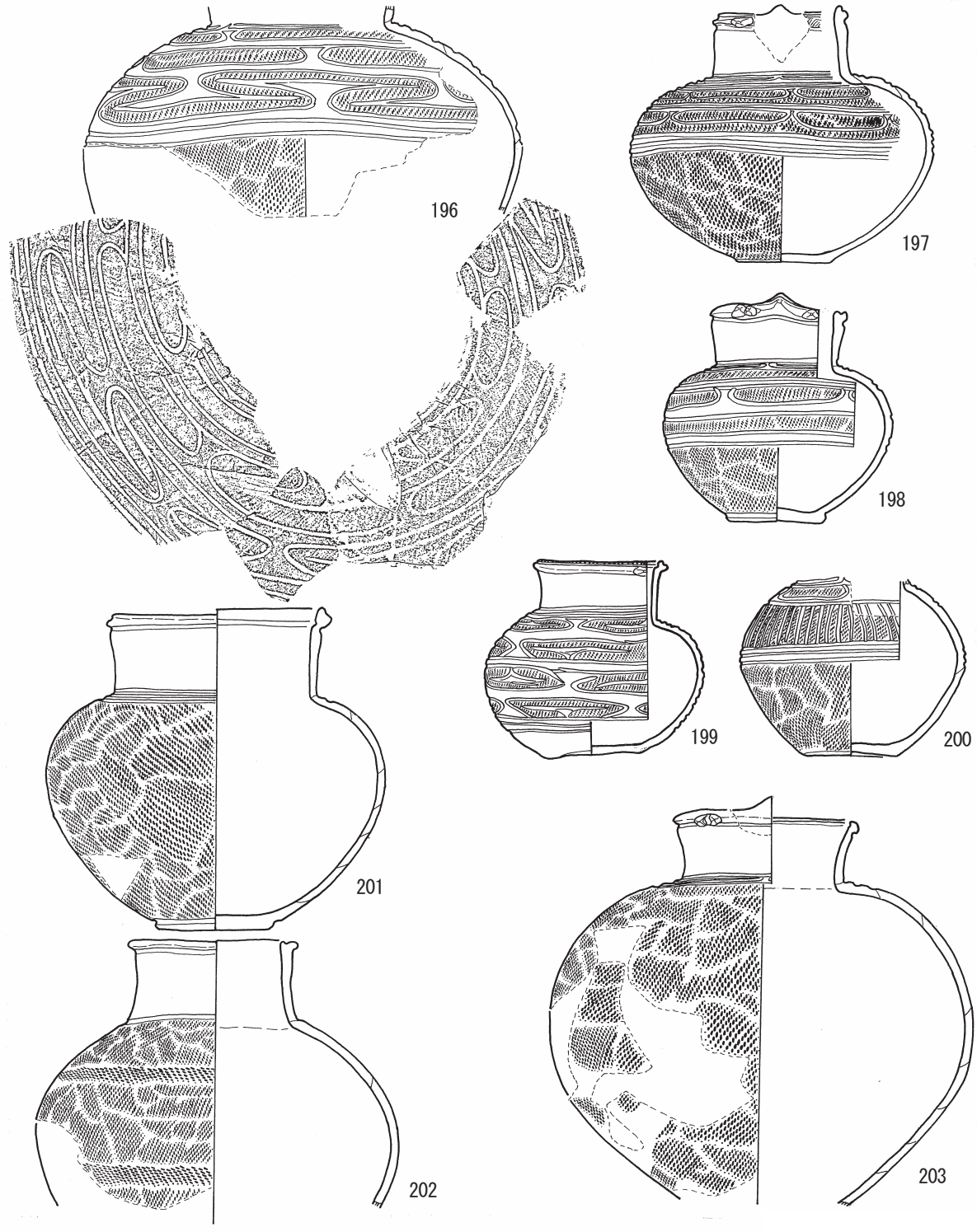
第45図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 45 Jomon Pottery from the Satoyari site



0　10cm

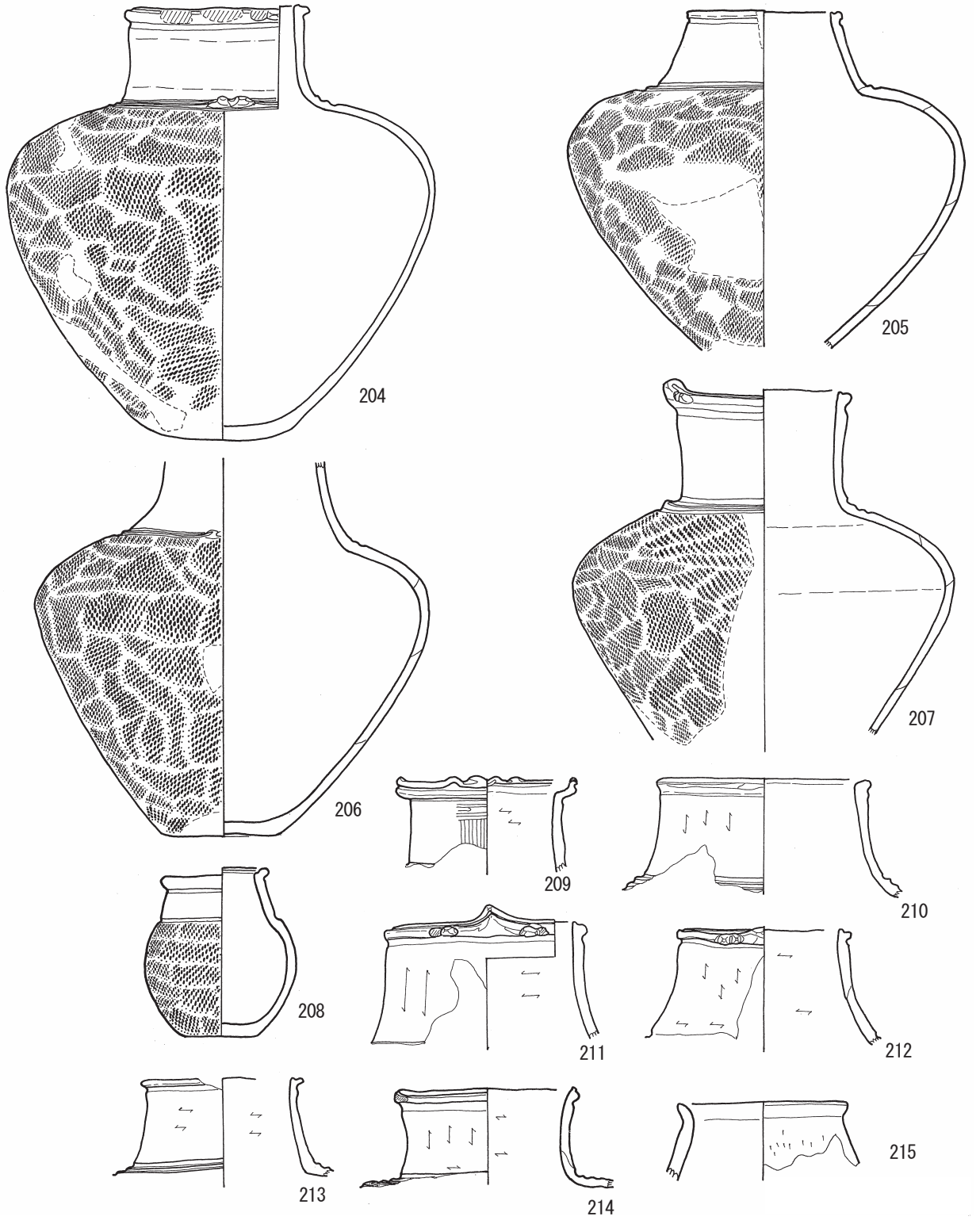
第 46 図　里鎗遺跡出土土器

Fig. 46　Jomon Pottery from the Satoyari site

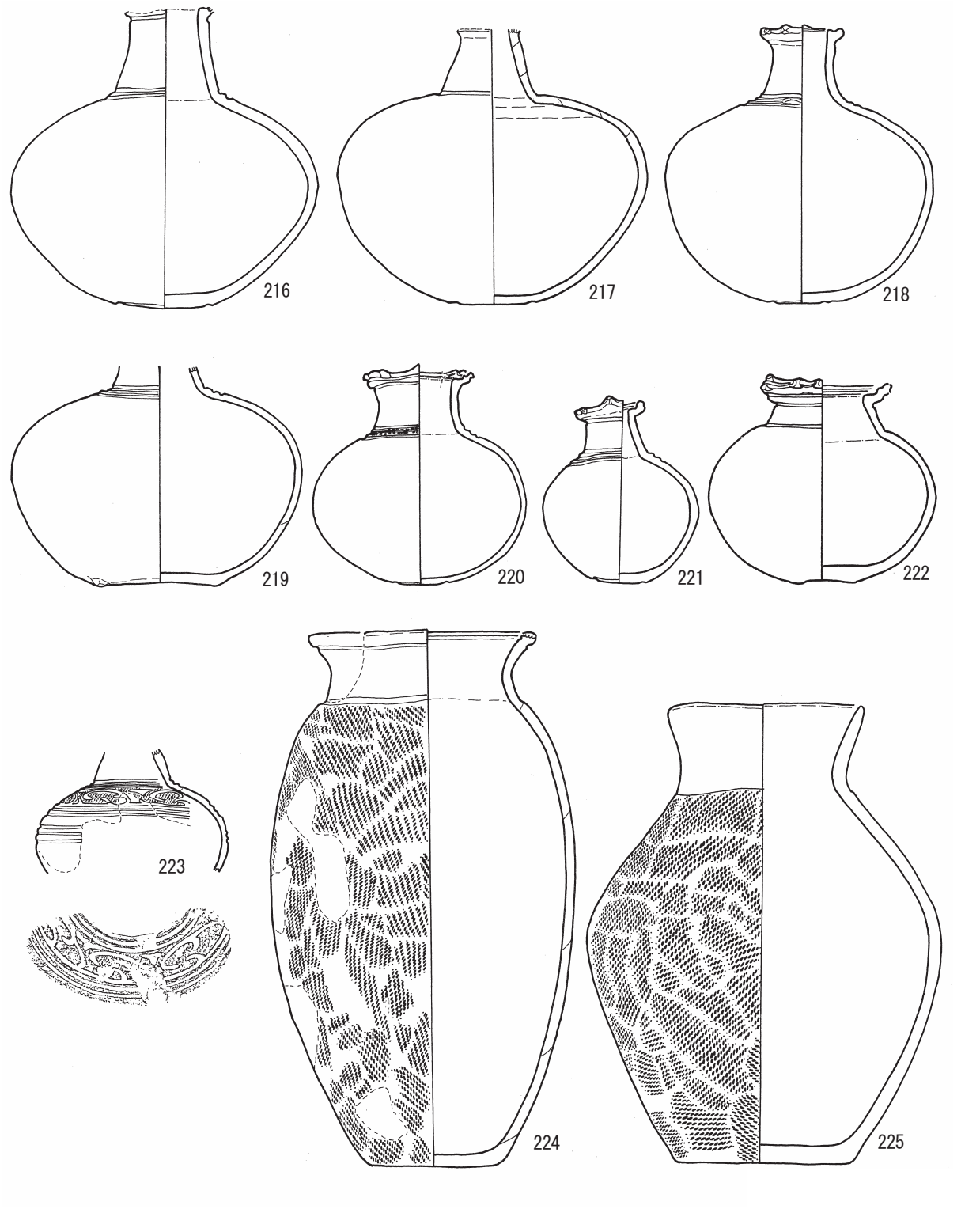


第47図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 47 Jomon Pottery from the Satoyari site

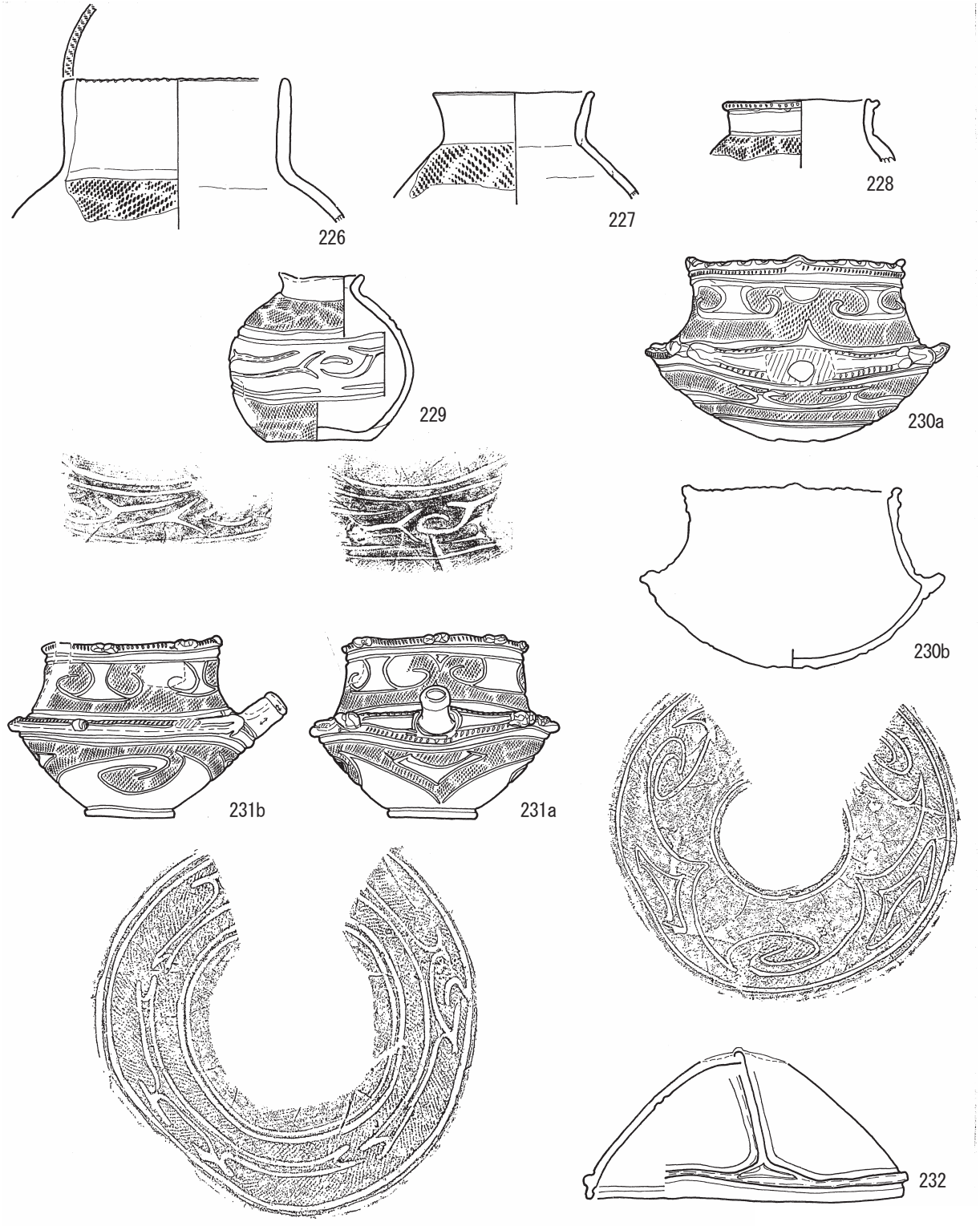
0 10cm



第 48 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 48　Jomon Pottery from the Satoyari site



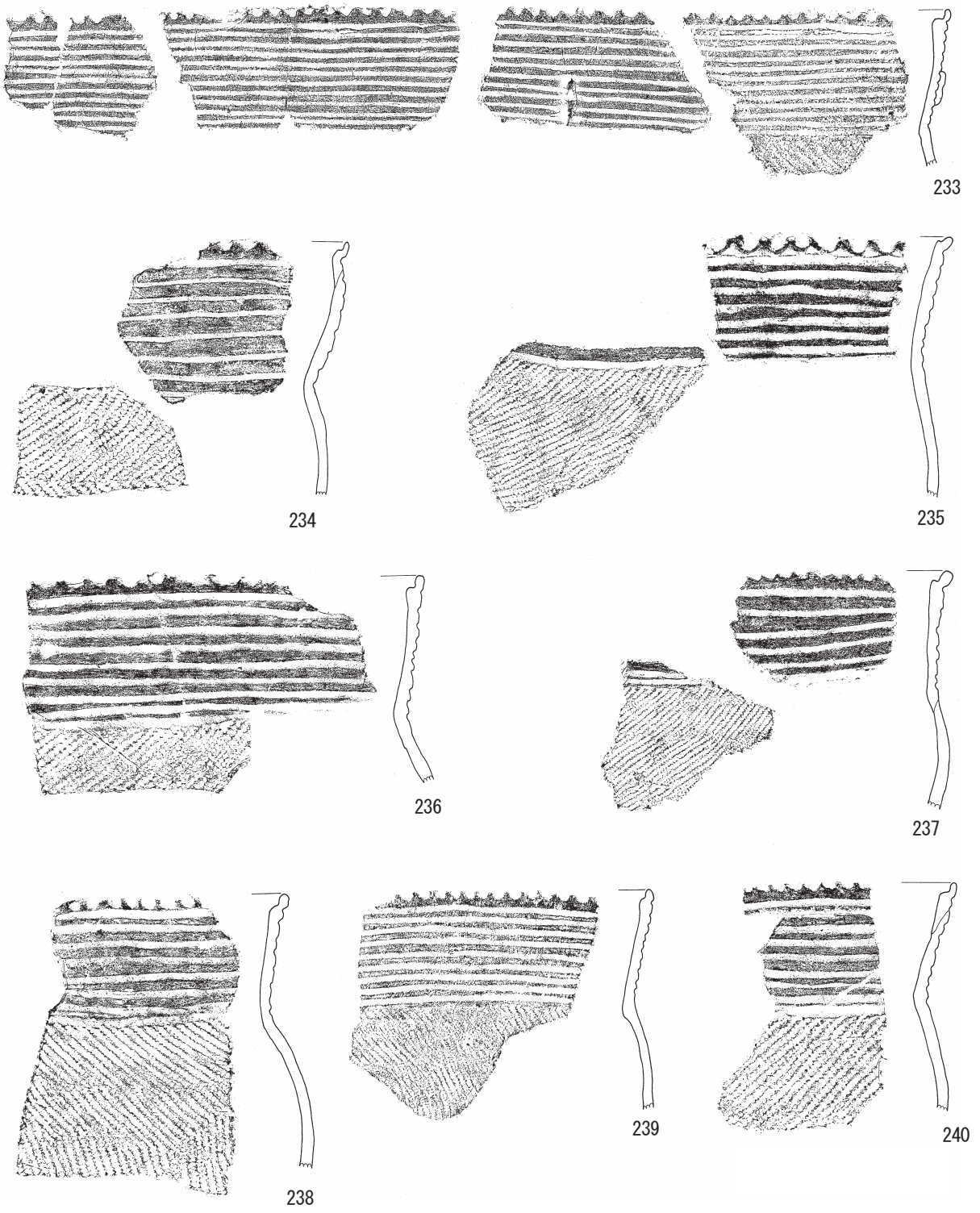
第49図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 49 Jomon Pottery from the Satoyari site



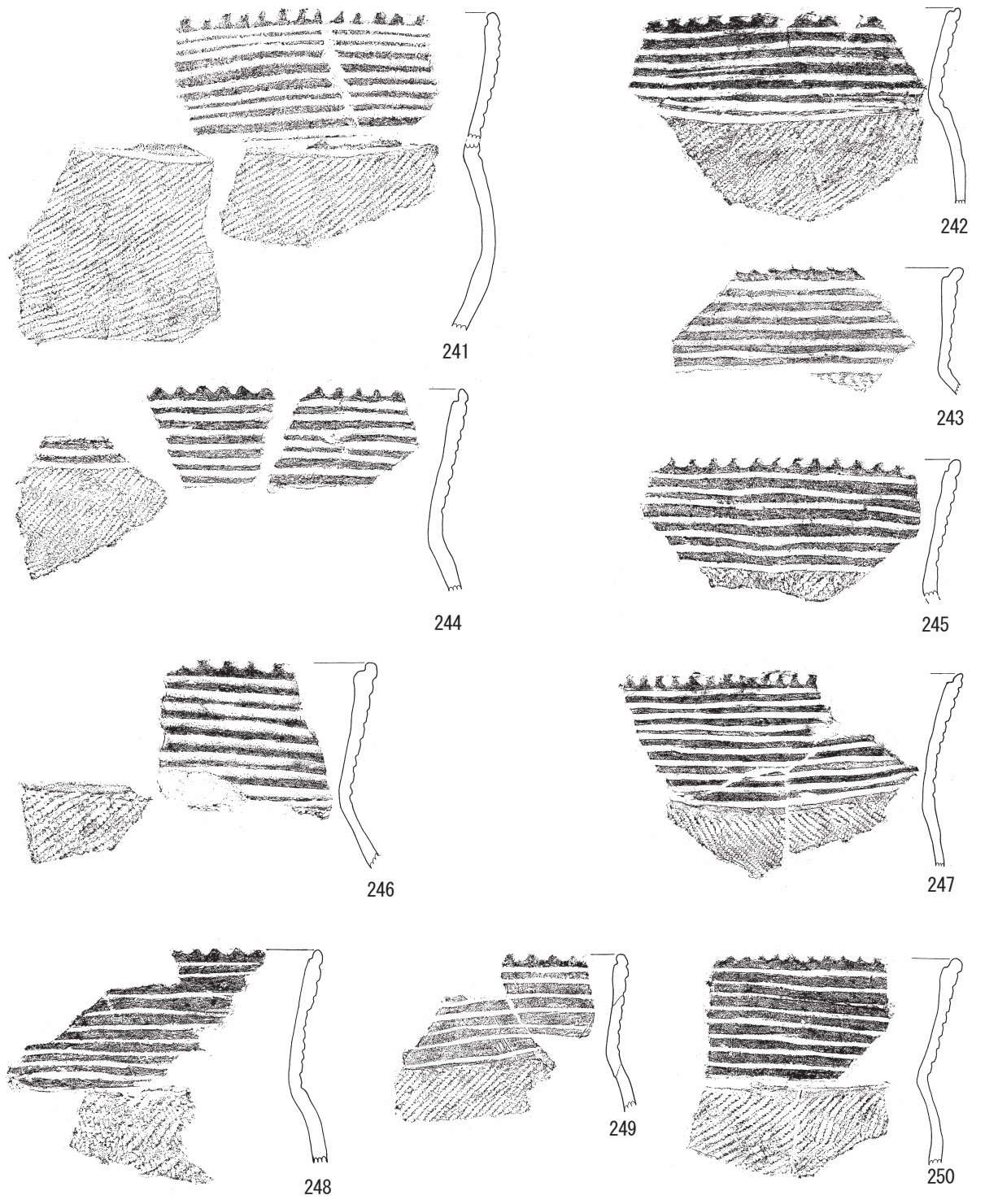
0　10cm

第 50 図　里鎗遺跡出土土器

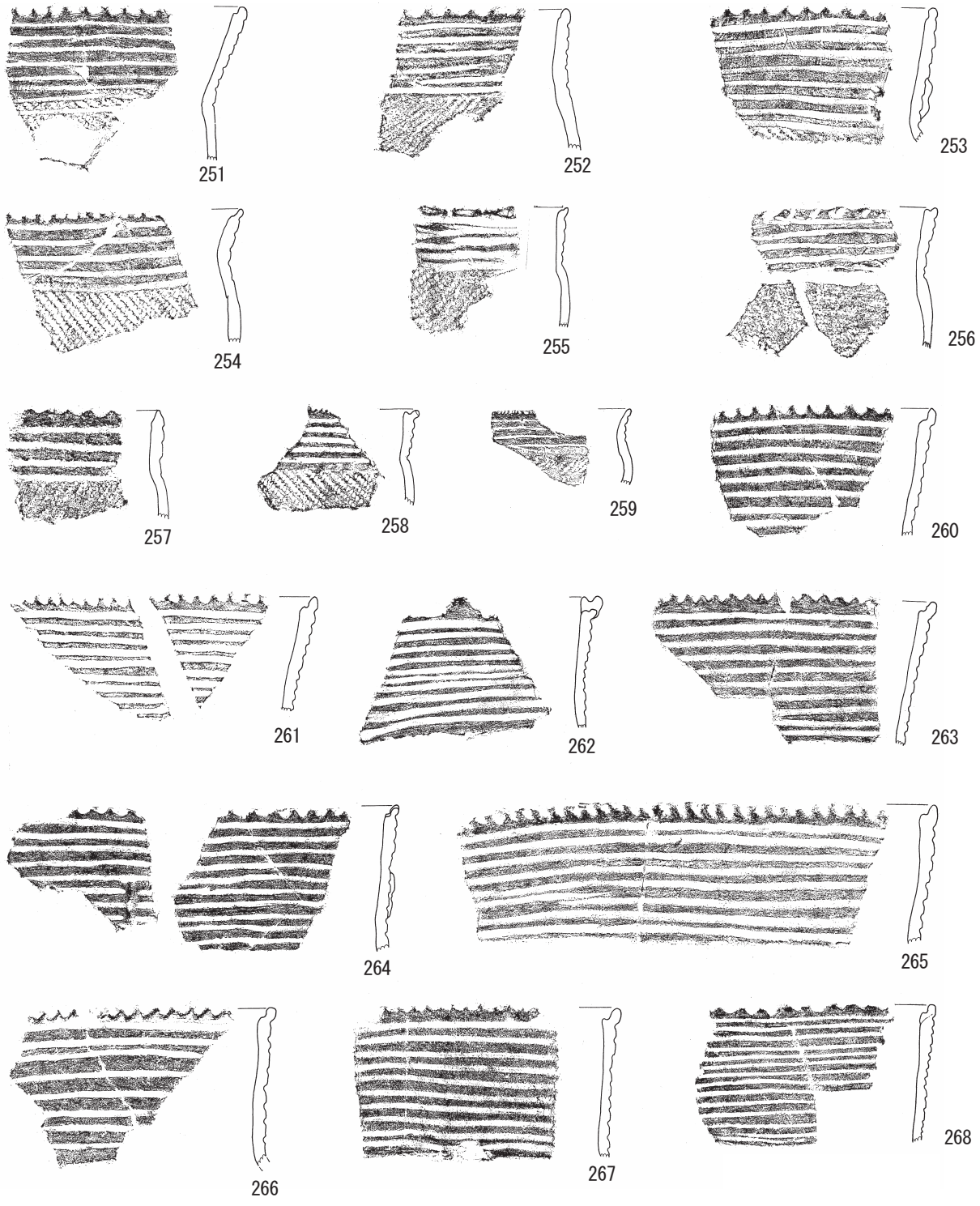
Fig. 50　Jomon Pottery from the Satoyari site



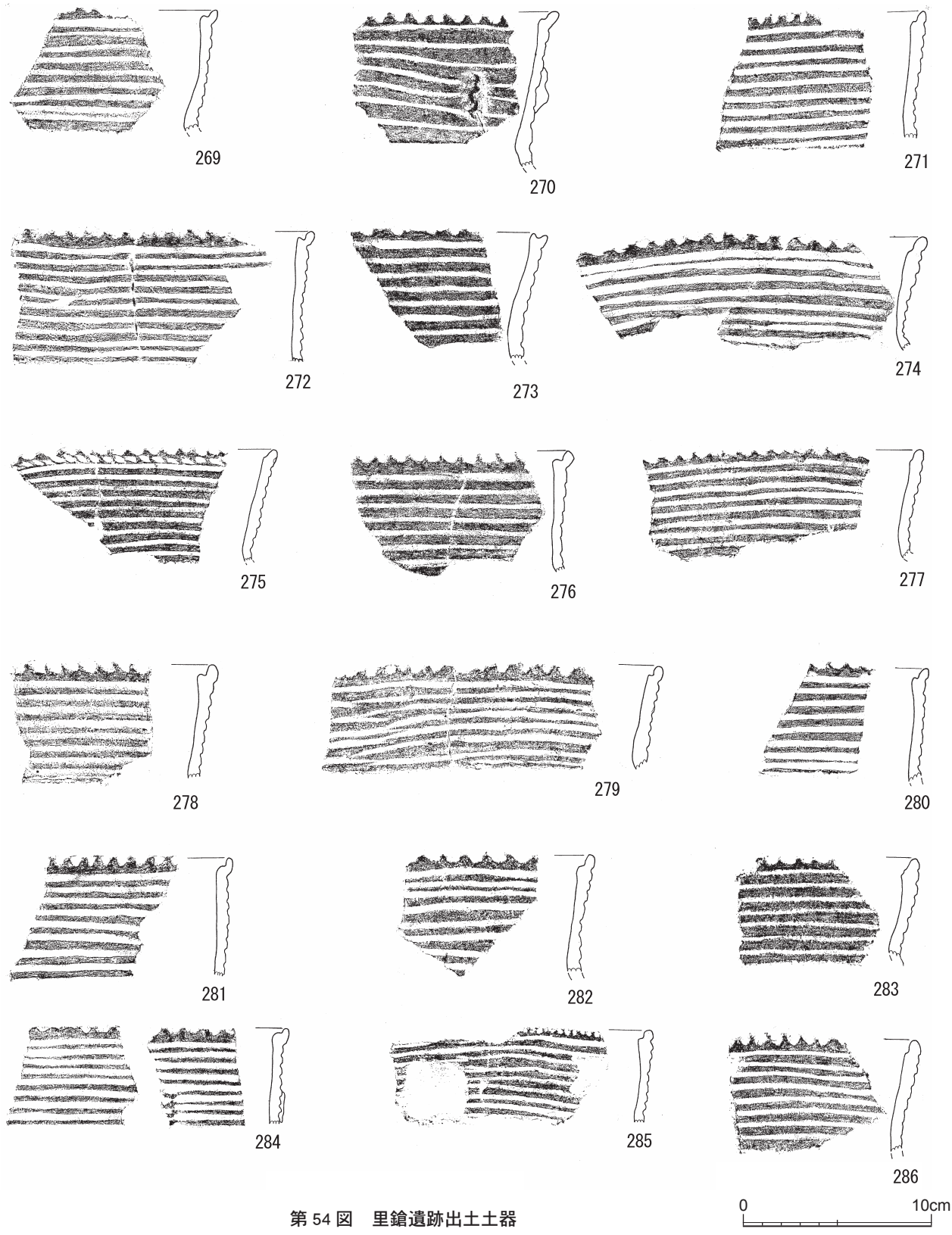
第51図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 51 Jomon Pottery from the Satoyari site



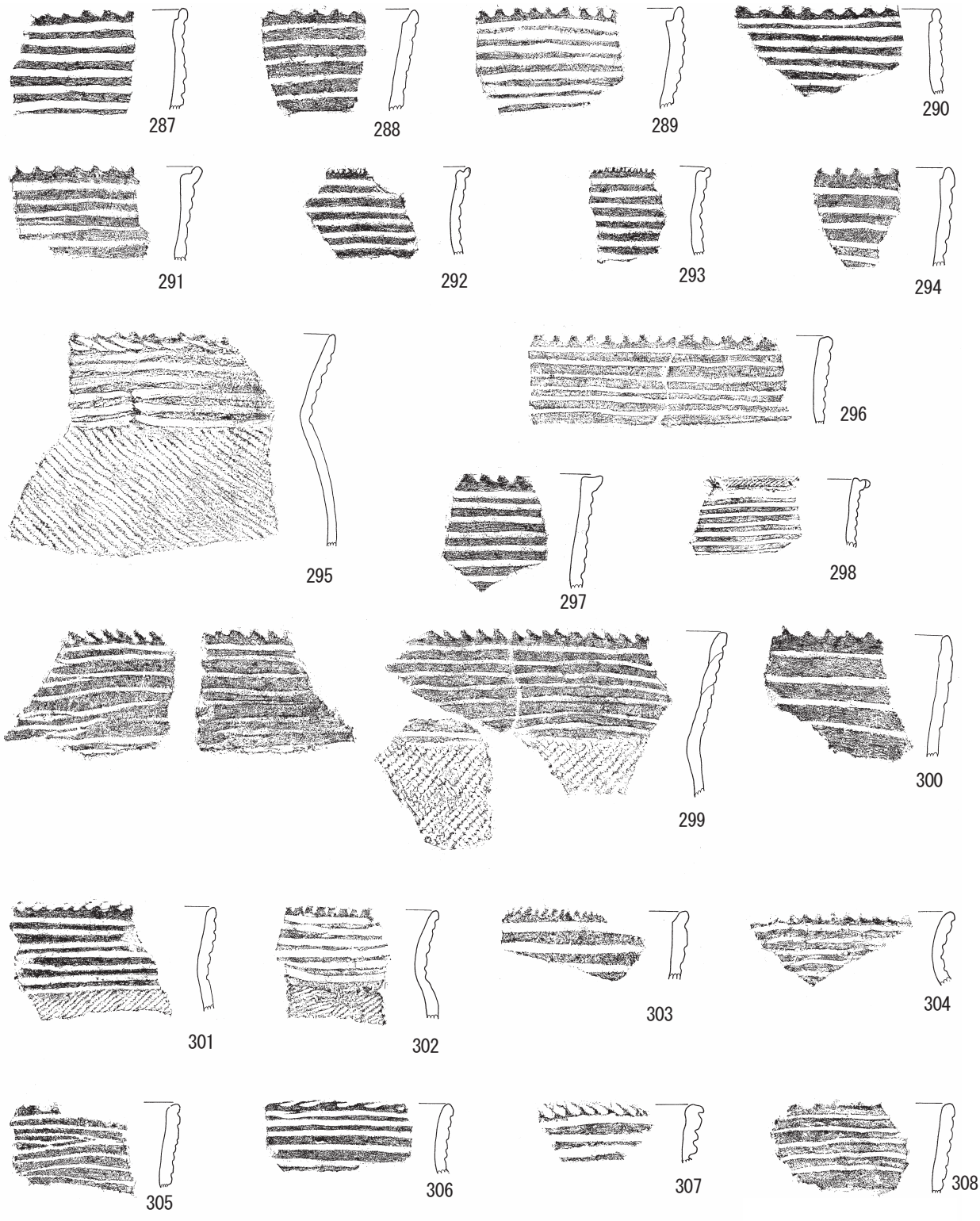
第 52 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 52　Jomon Pottery from the Satoyari site



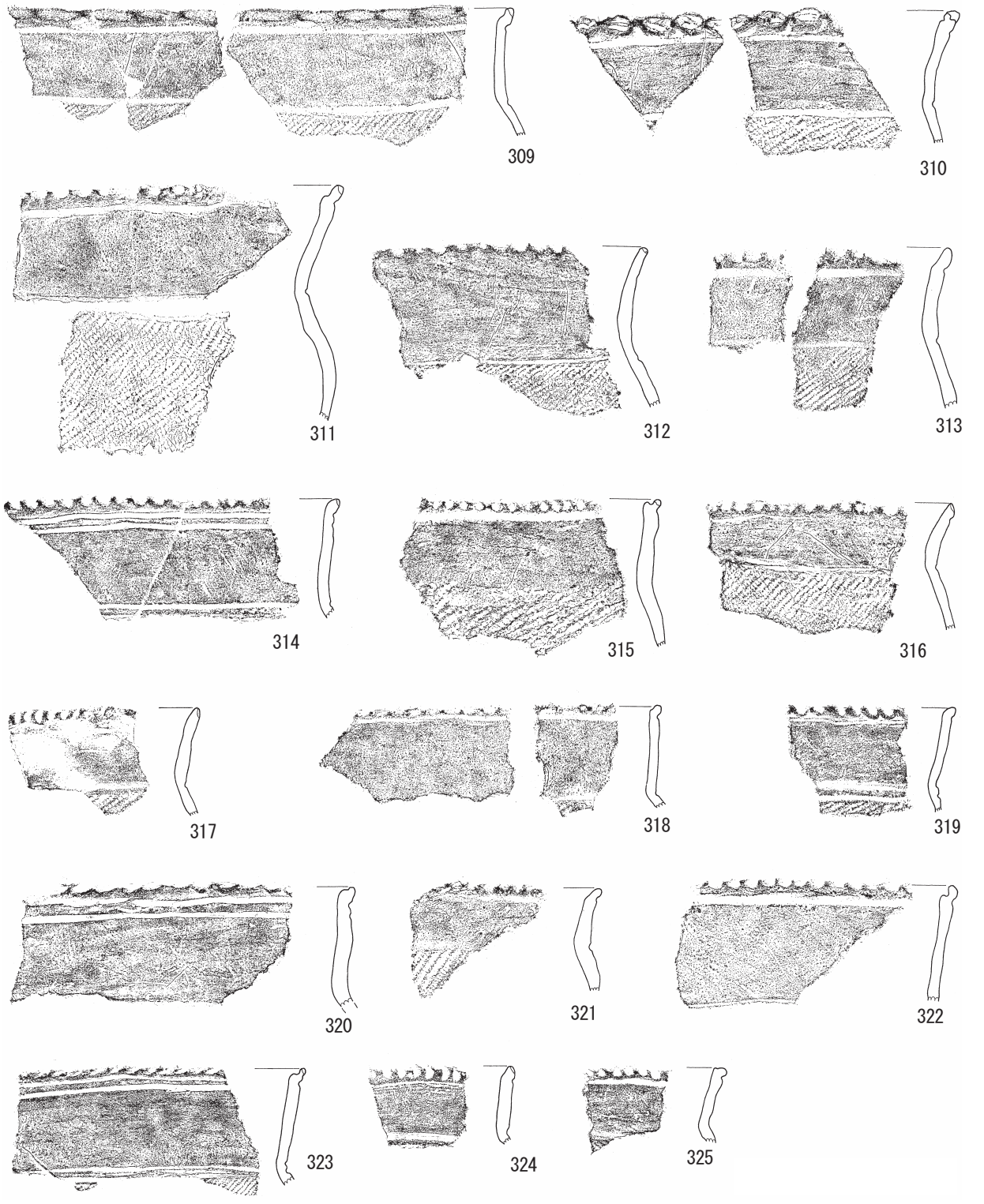
第53図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 53 Jomon Pottery from the Satoyari site



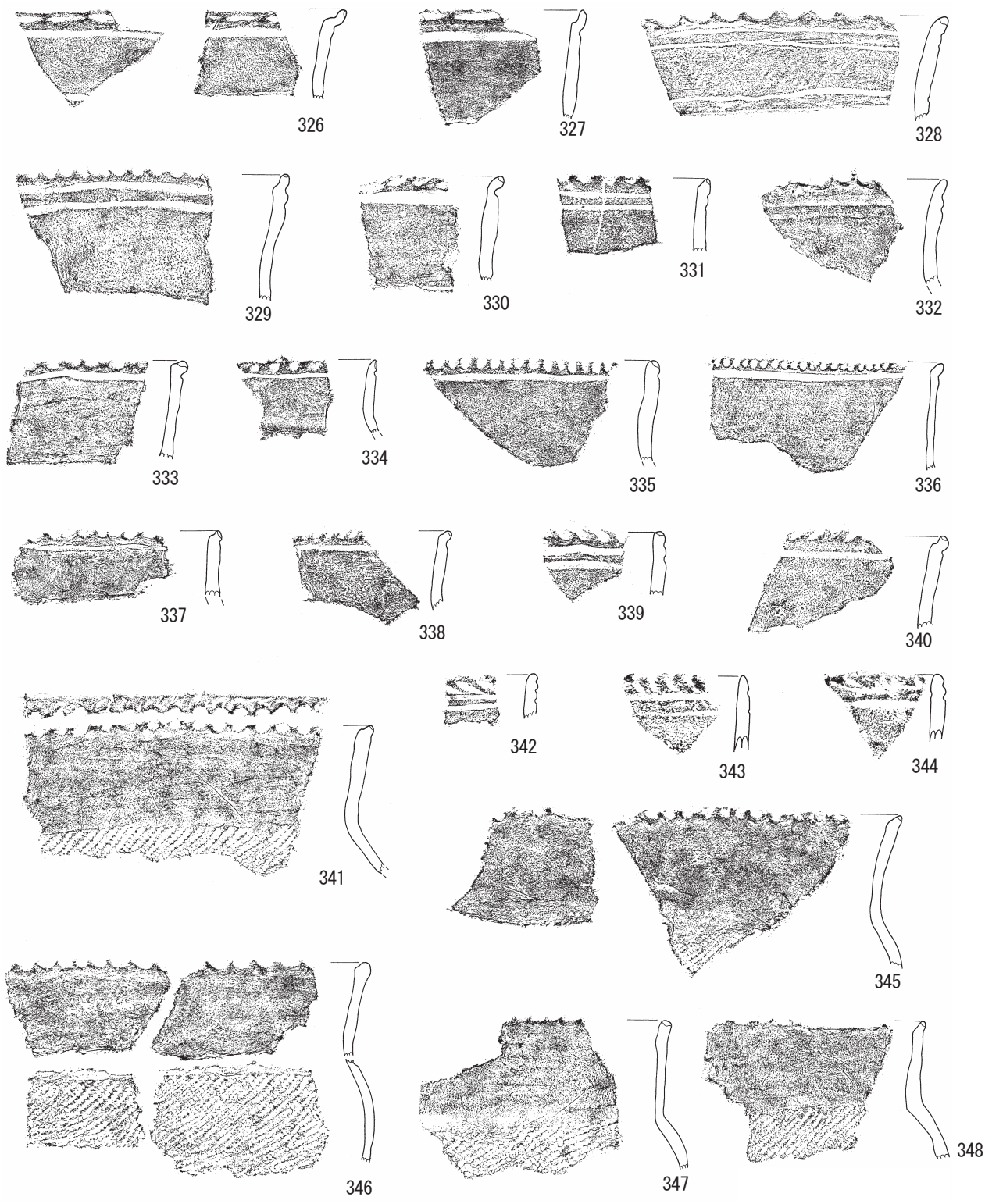
第 54 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 54　Jomon Pottery from the Satoyari site



第55図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 55 Jomon Pottery from the Satoyari site

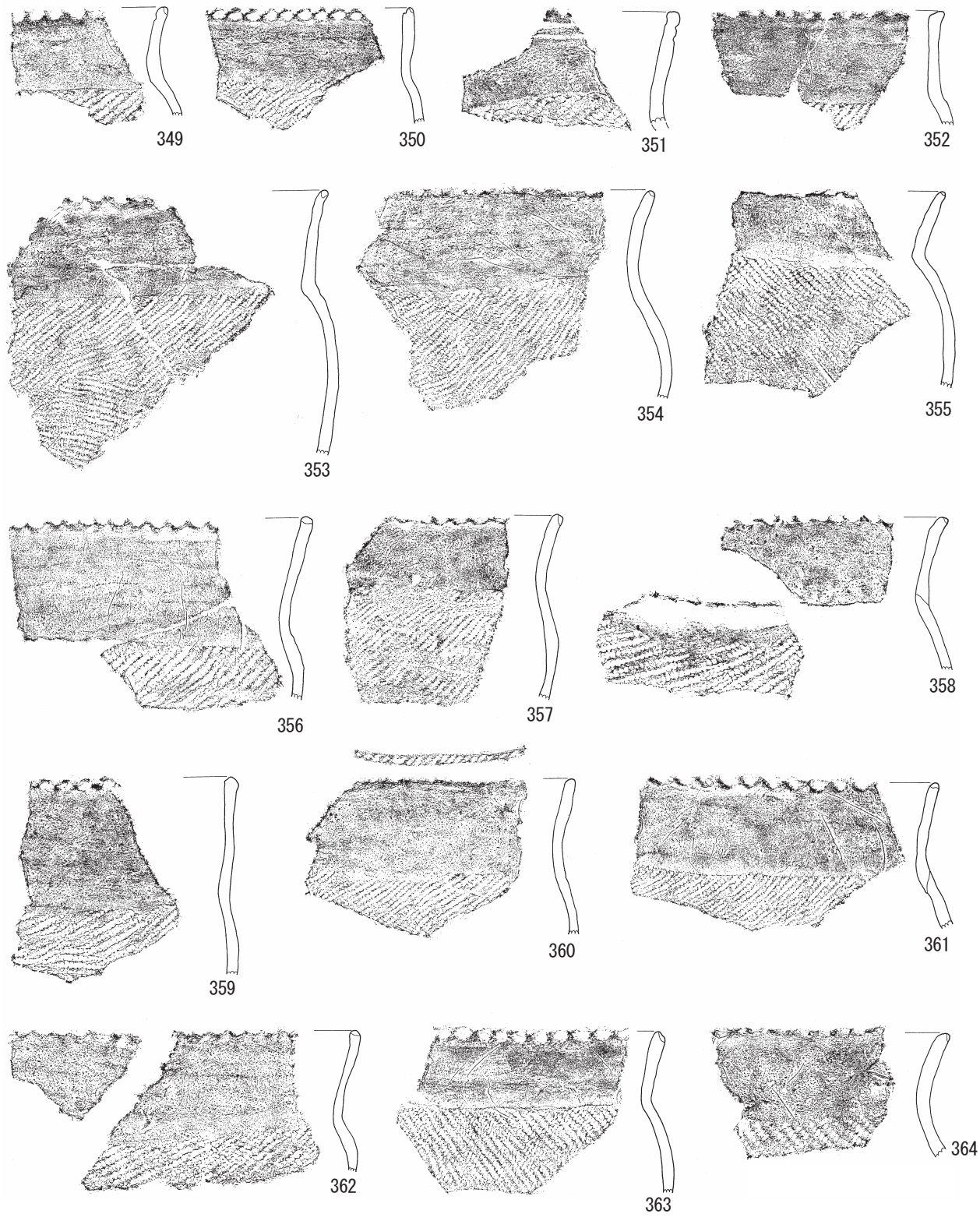


第 56 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 56　Jomon Pottery from the Satoyari site

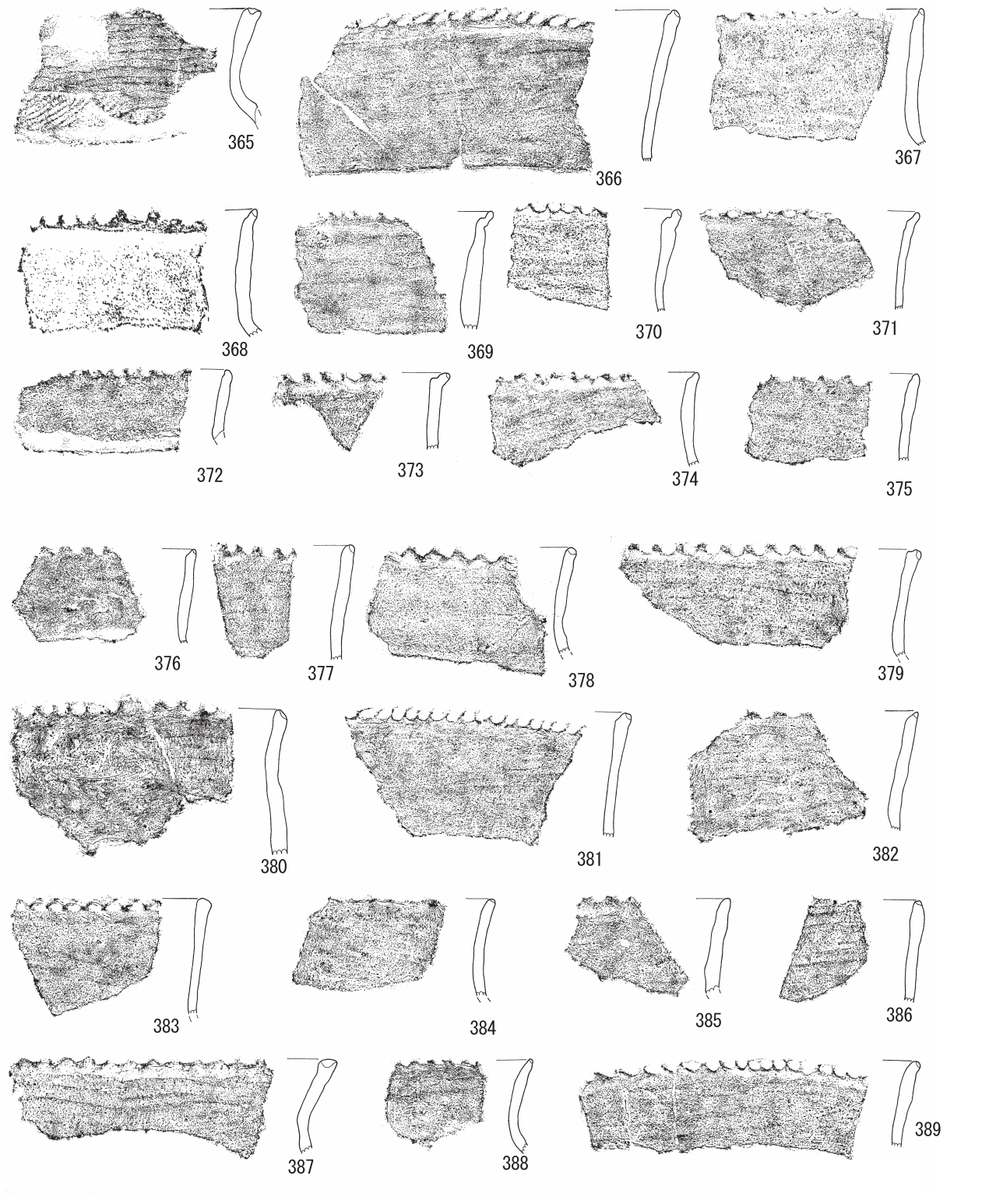


0　10cm

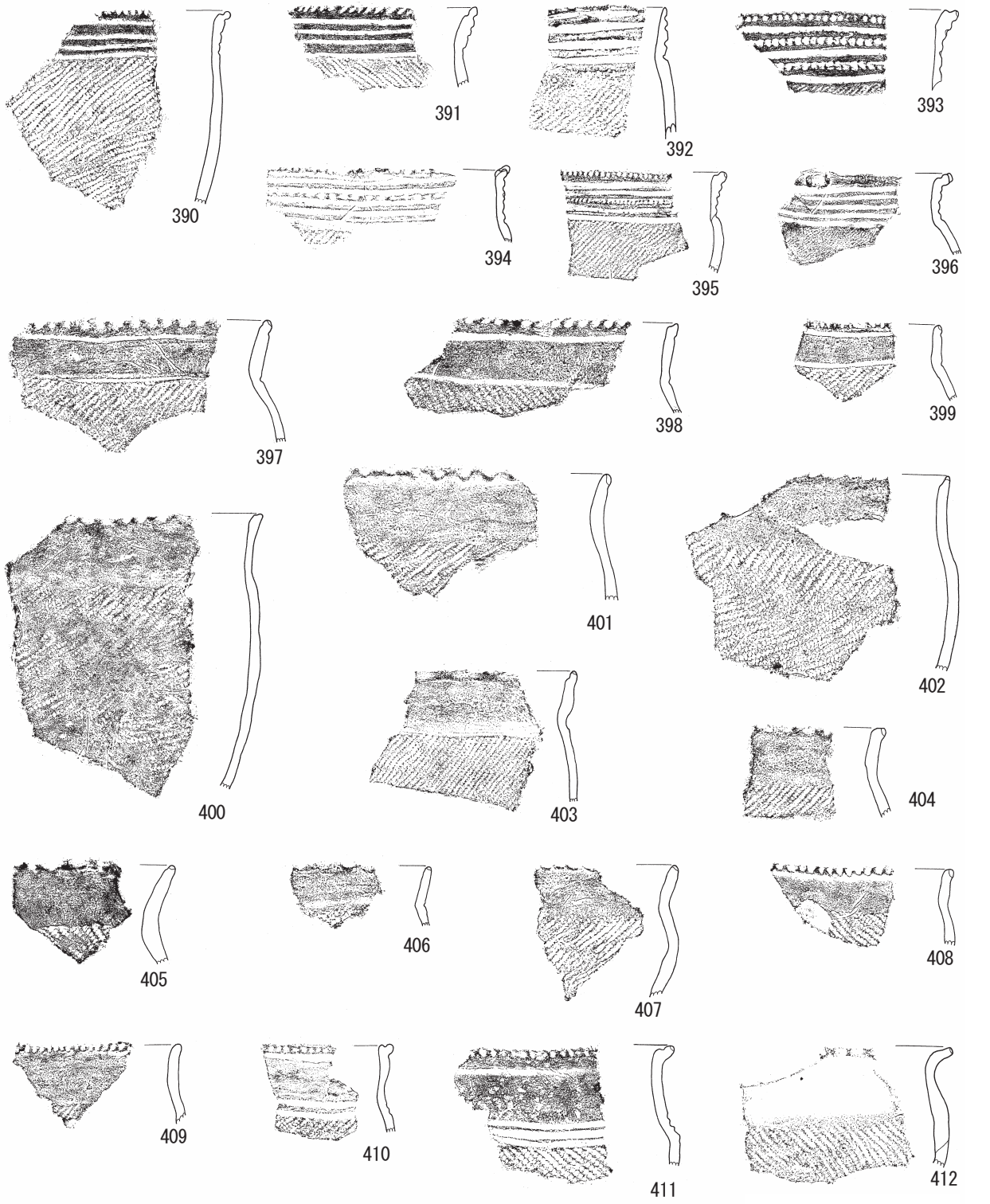
第57図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 57　Jomon Pottery from the Satoyari site



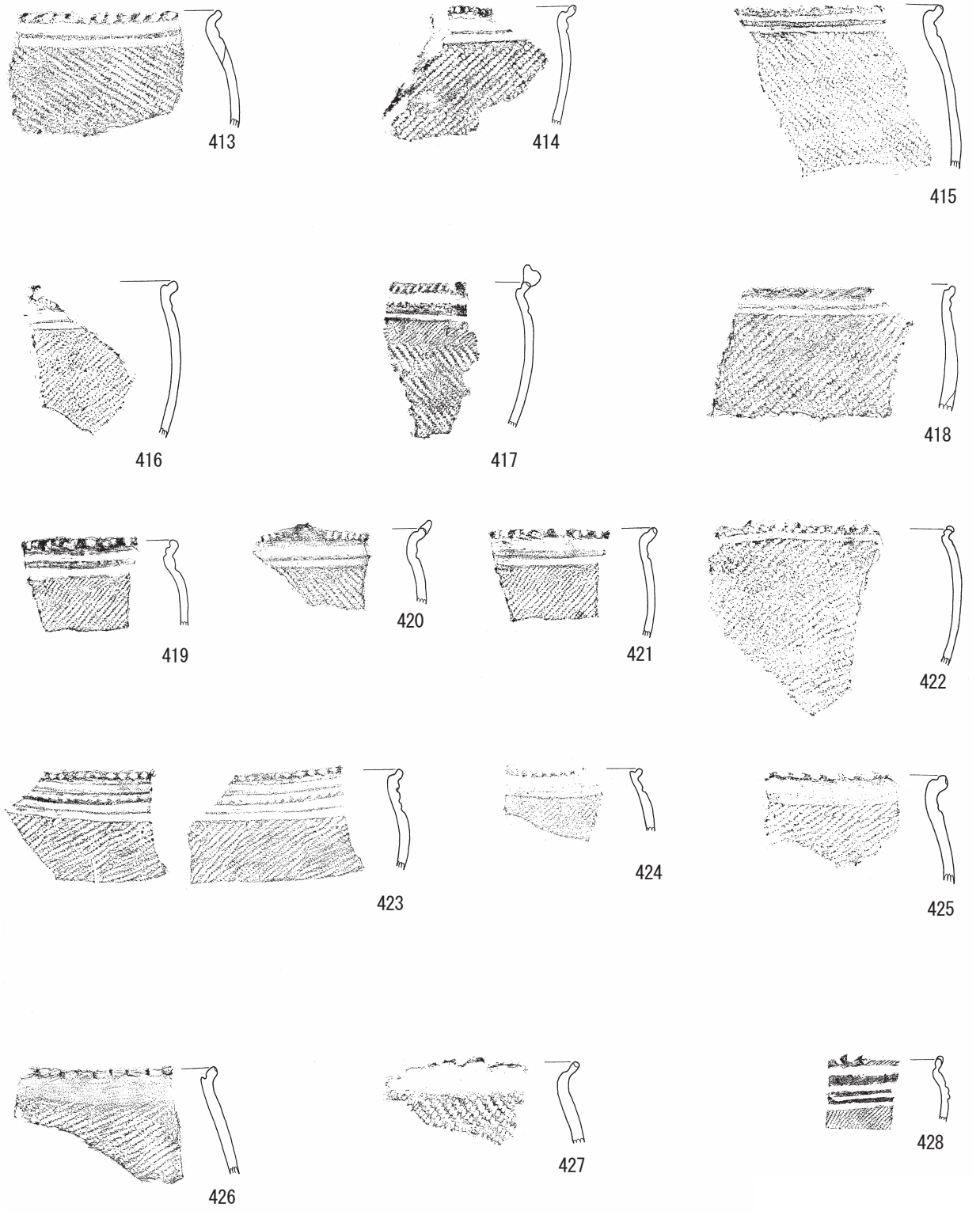
第 58 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 58　Jomon Pottery from the Satoyari site



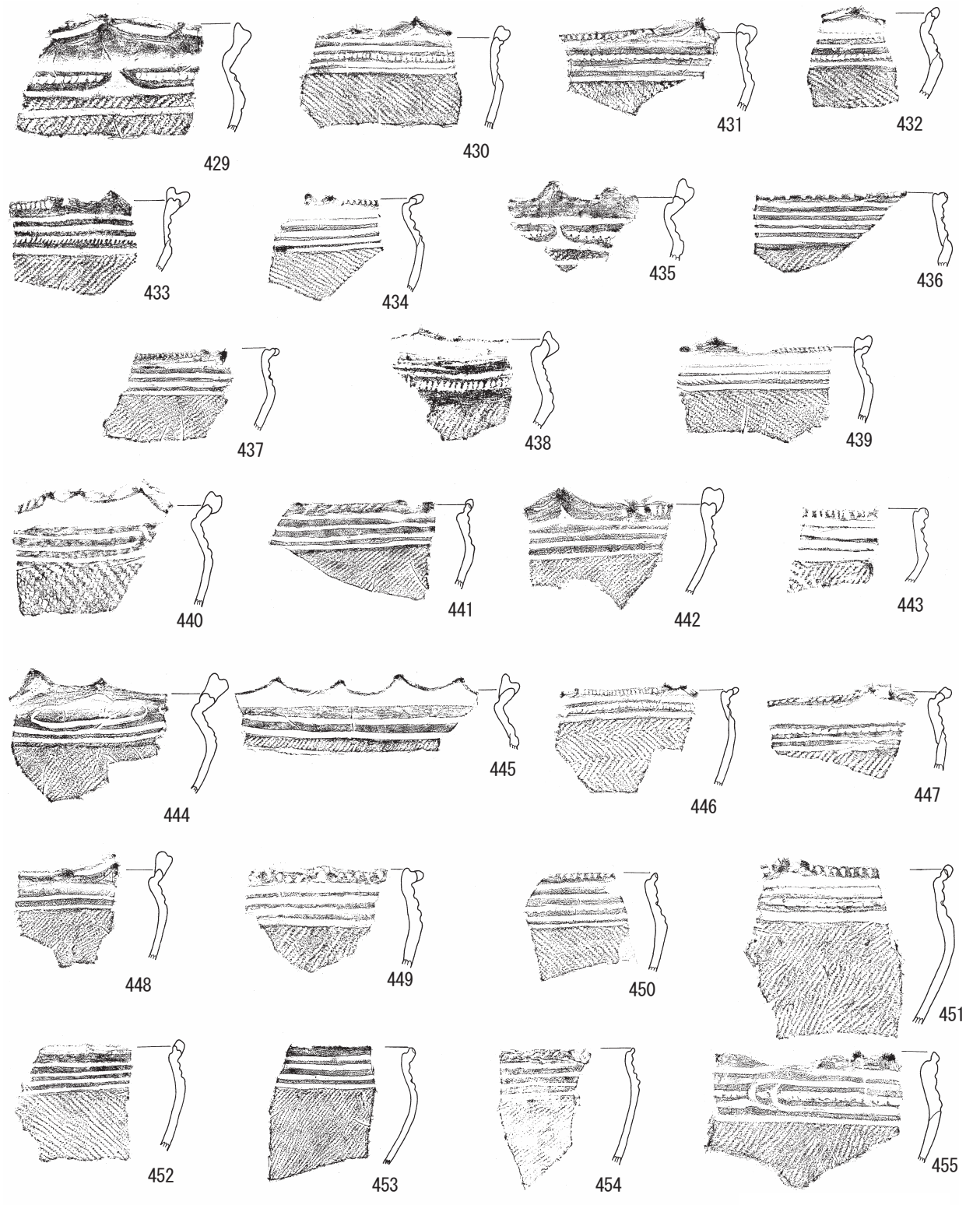
第59図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 59 Jomon Pottery from the Satoyari site



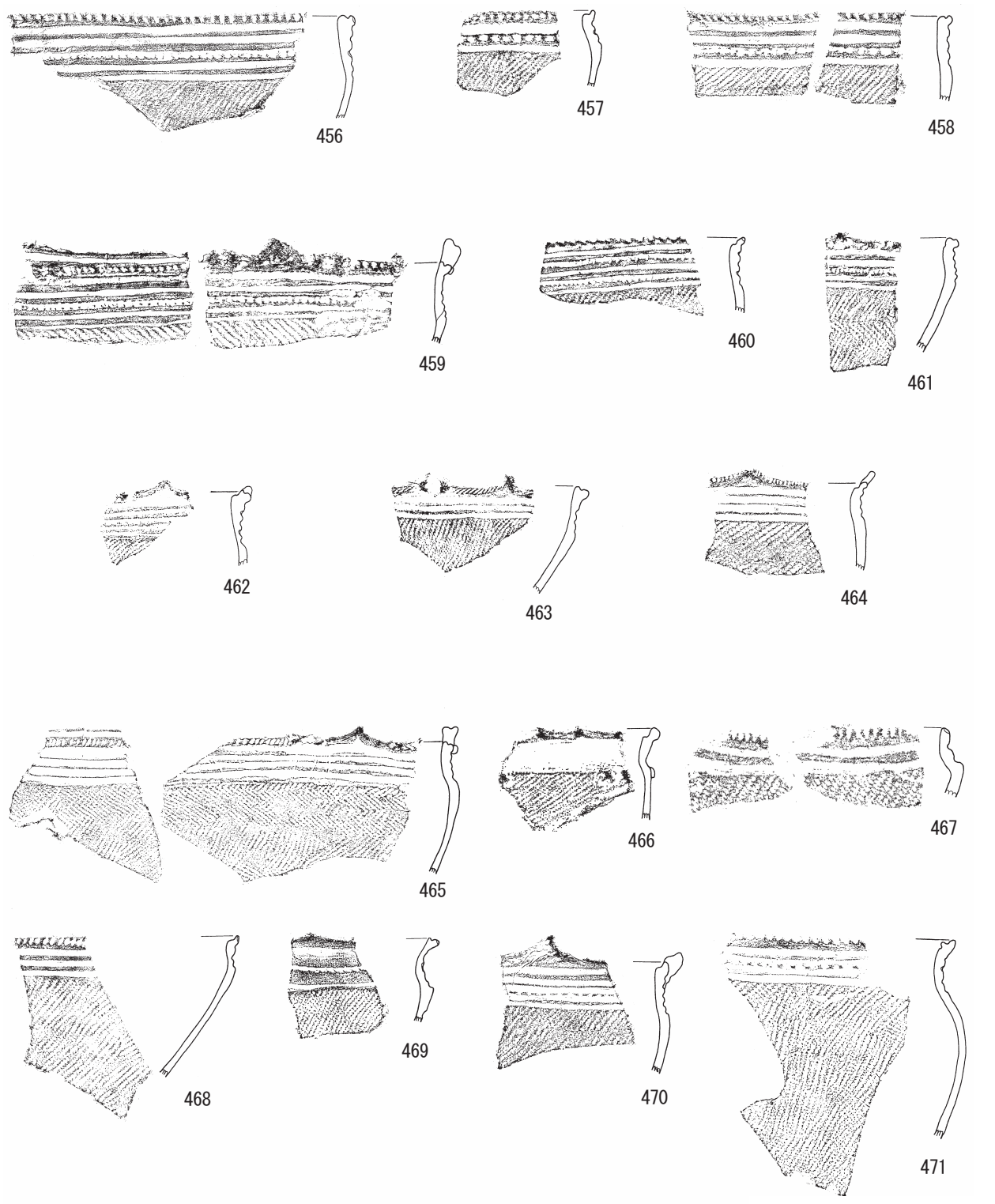
第 60 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 60　Jomon Pottery from the Satoyari site



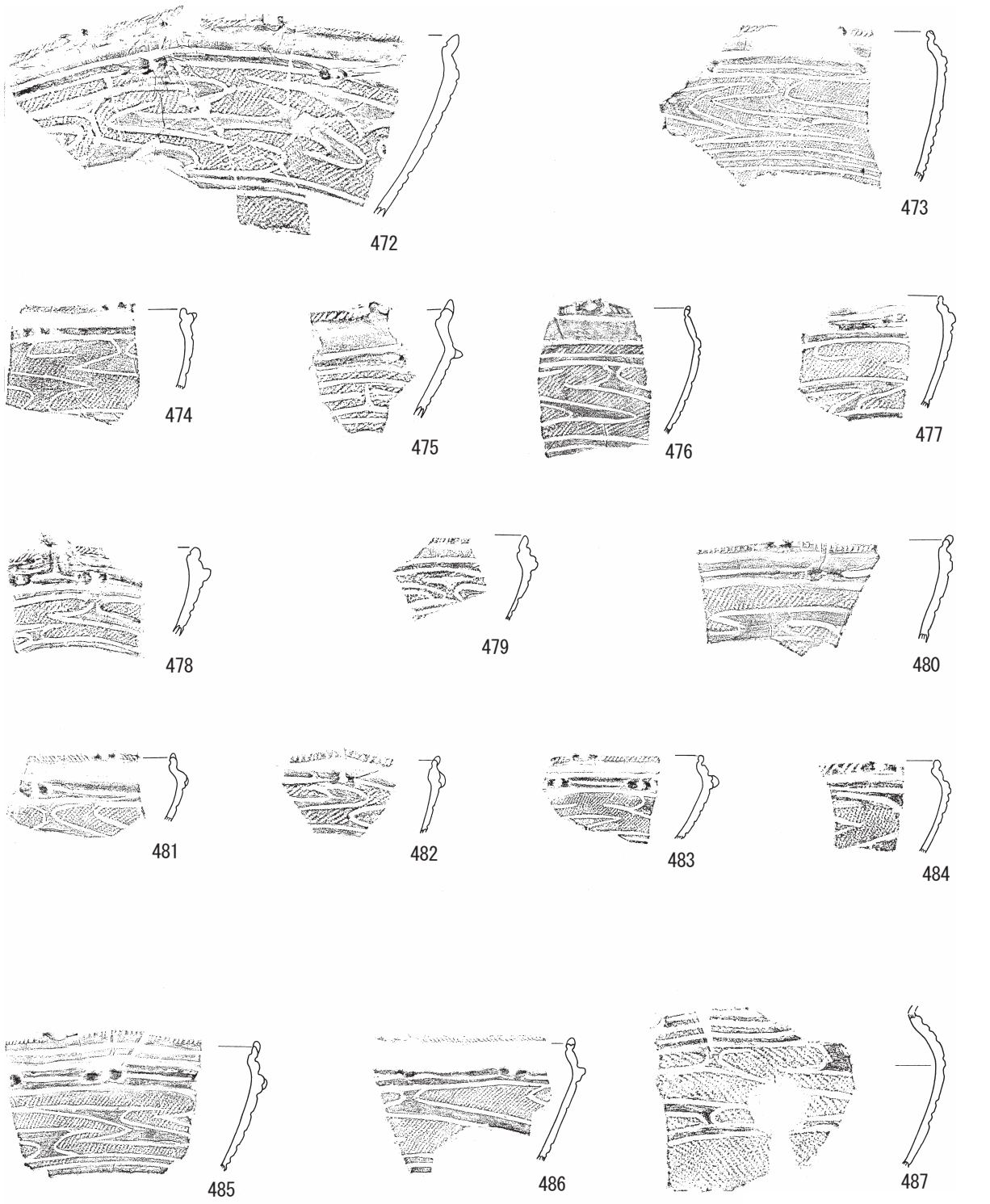
第61図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 61 Jomon Pottery from the Satoyari site



第 62 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 62　Jomon Pottery from the Satoyari site



第63図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 63 Jomon Pottery from the Satoyari site

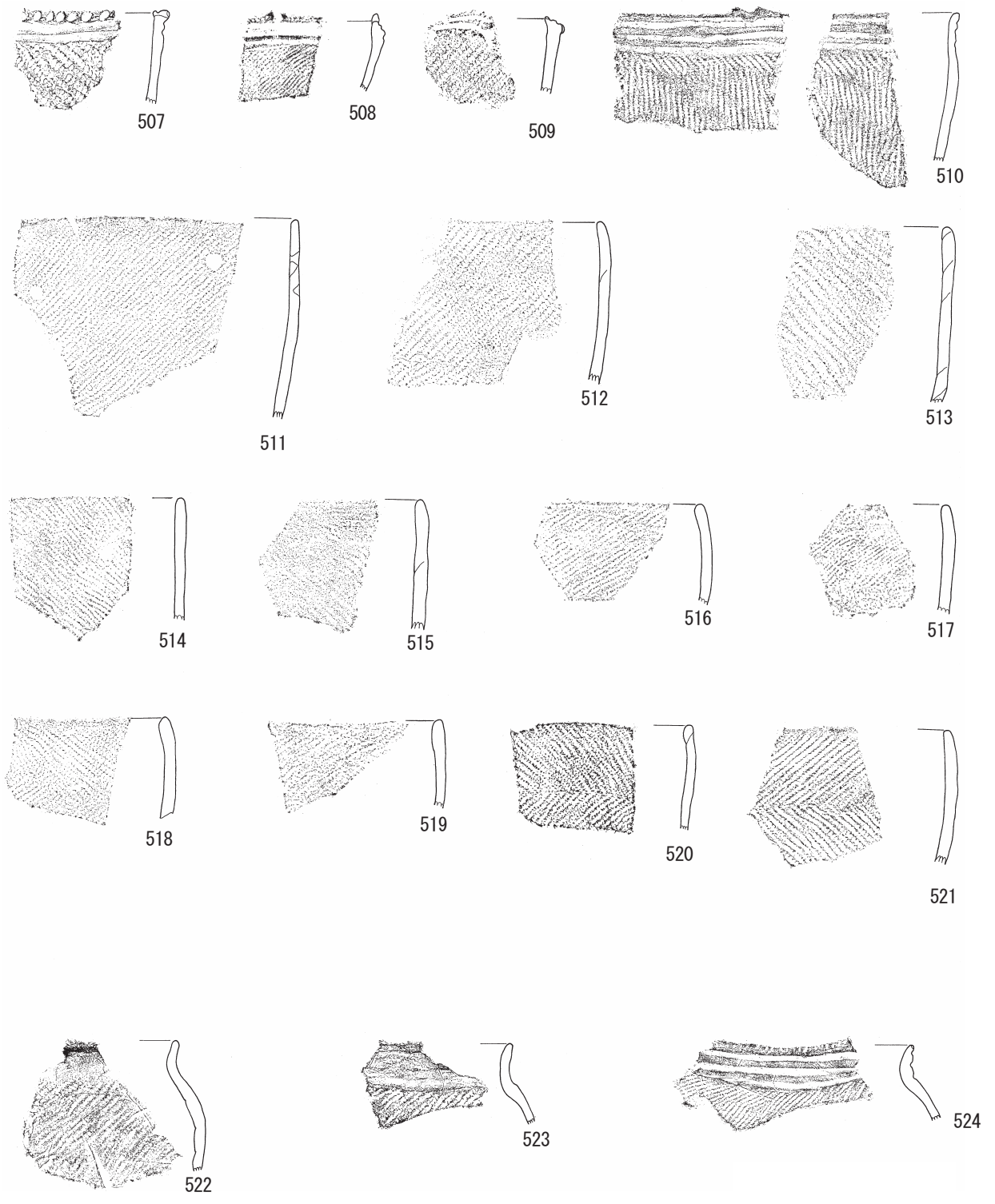


第 64 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 64　Jomon Pottery from the Satoyari site

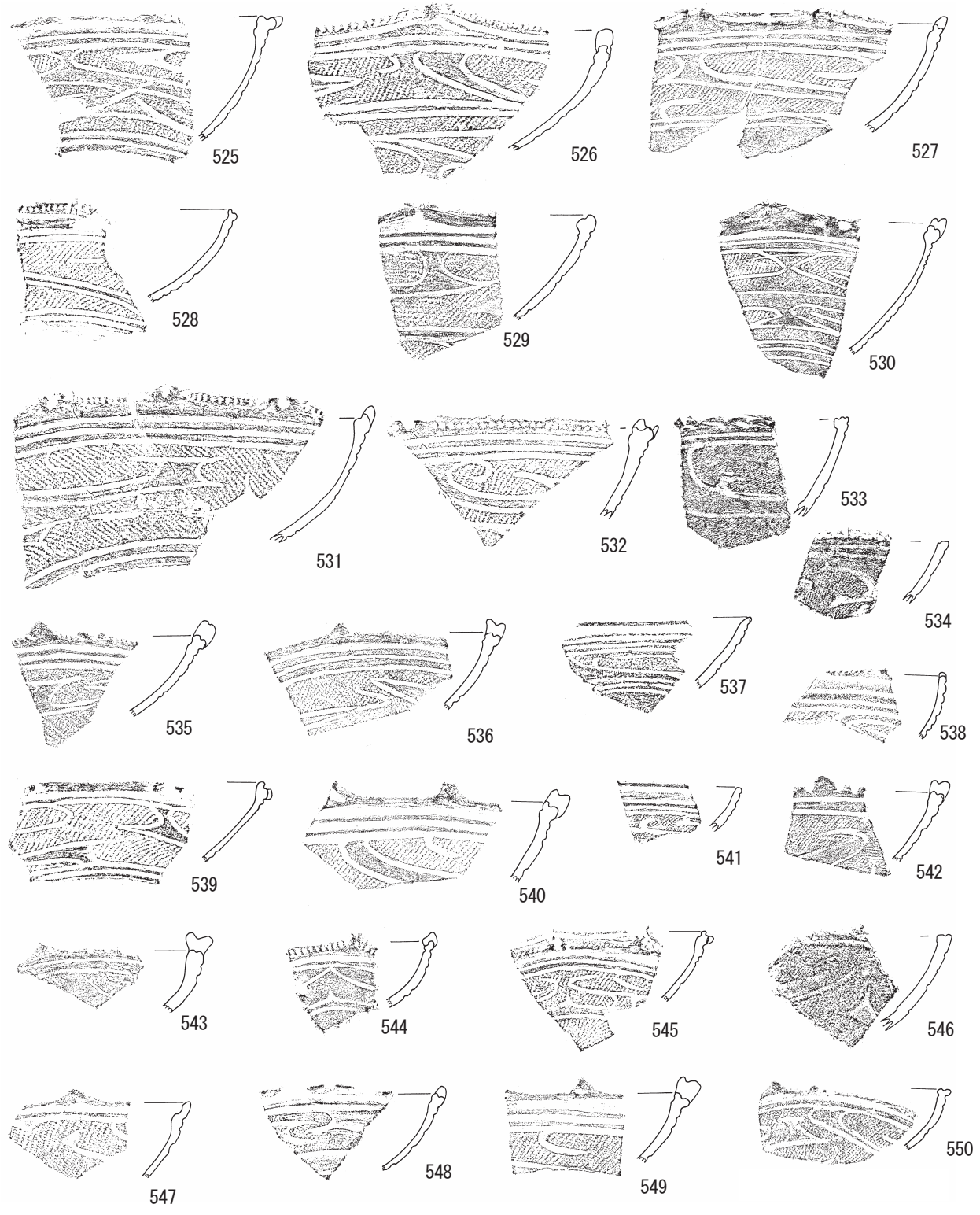
第65図　里鎗遺跡出土土器

Fig. 65 Jomon Pottery from the Satoyari site

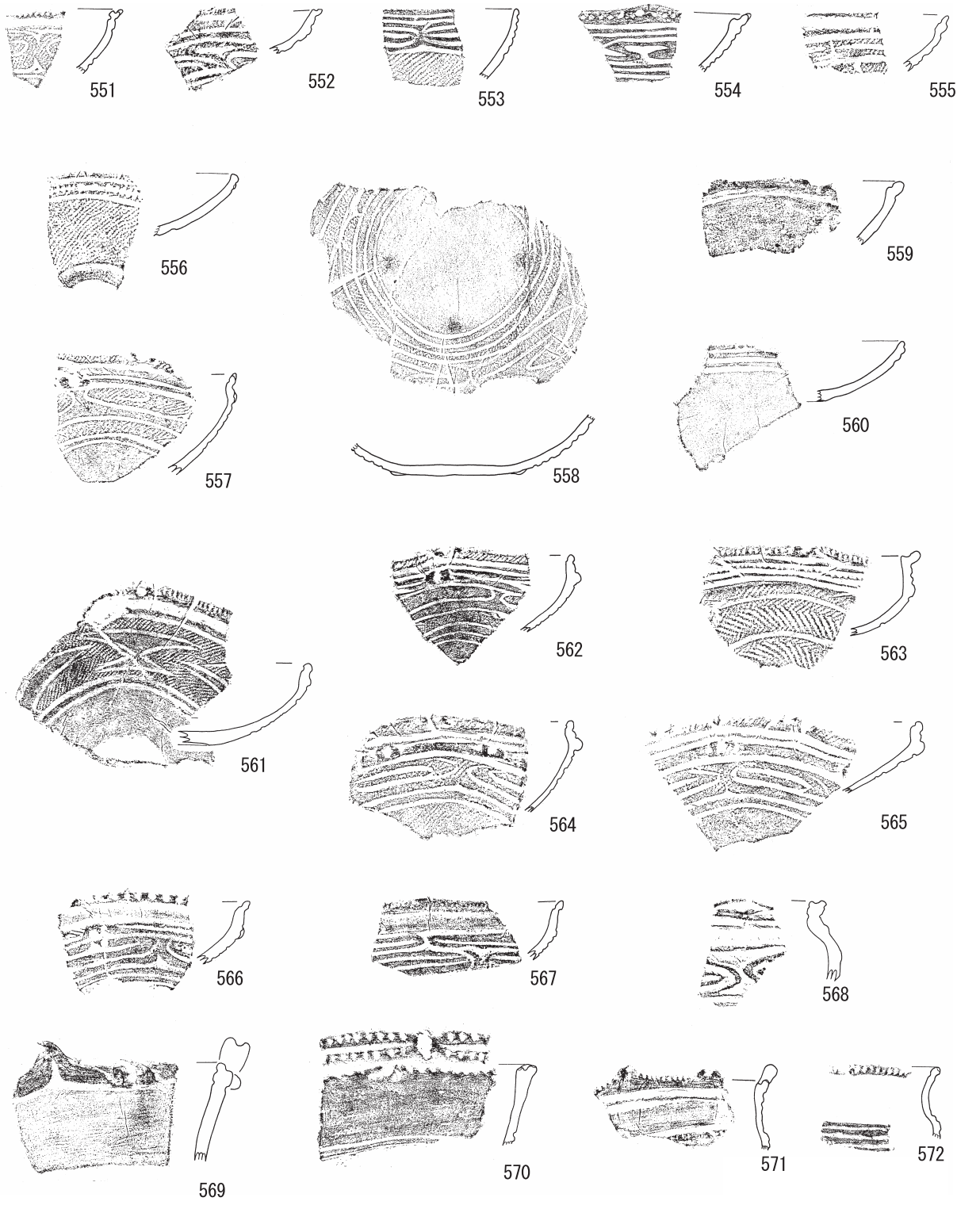
0 10cm



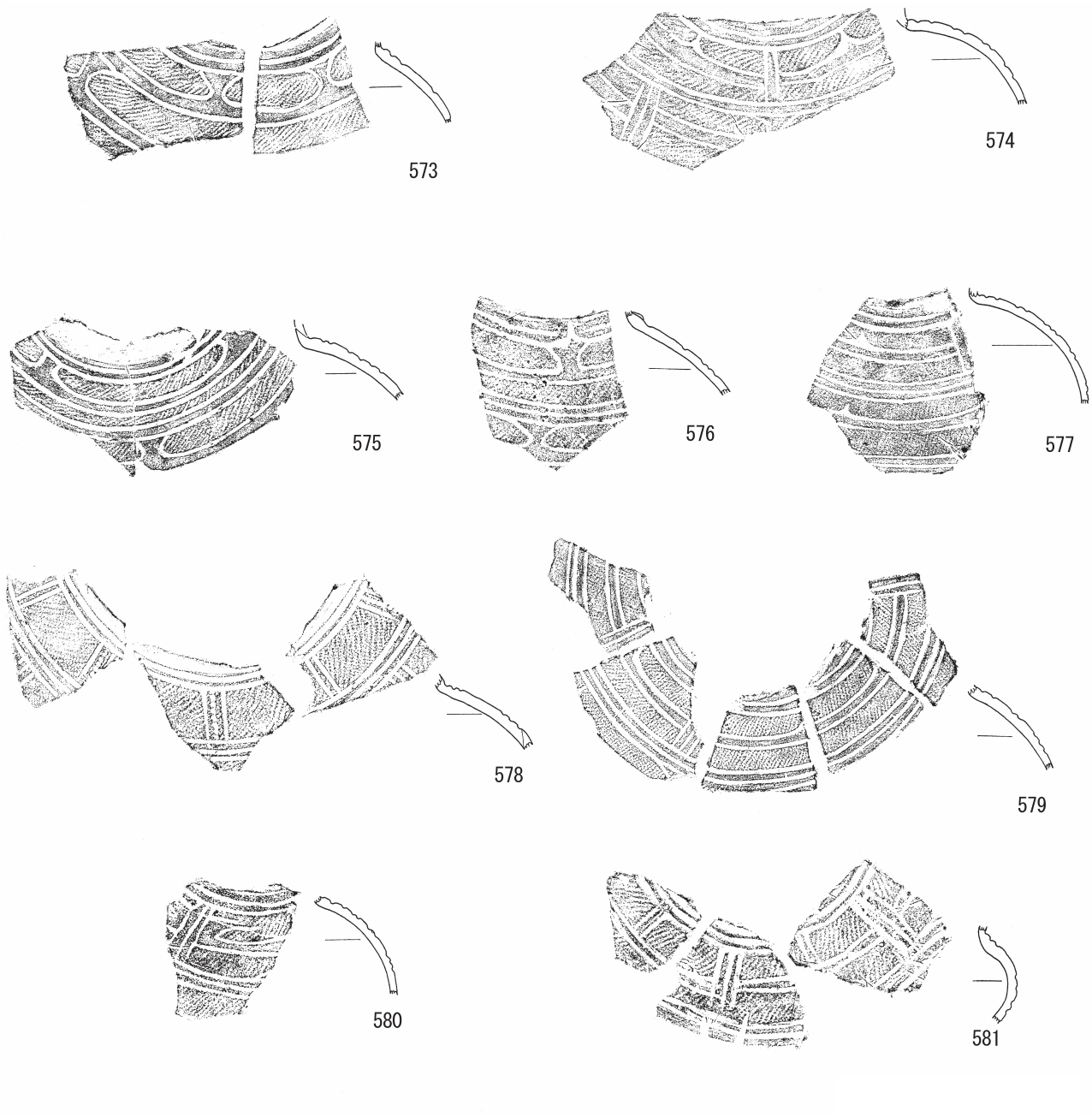
第 66 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 66　Jomon Pottery from the Satoyari site



第67図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 67 Jomon Pottery from the Satoyari site

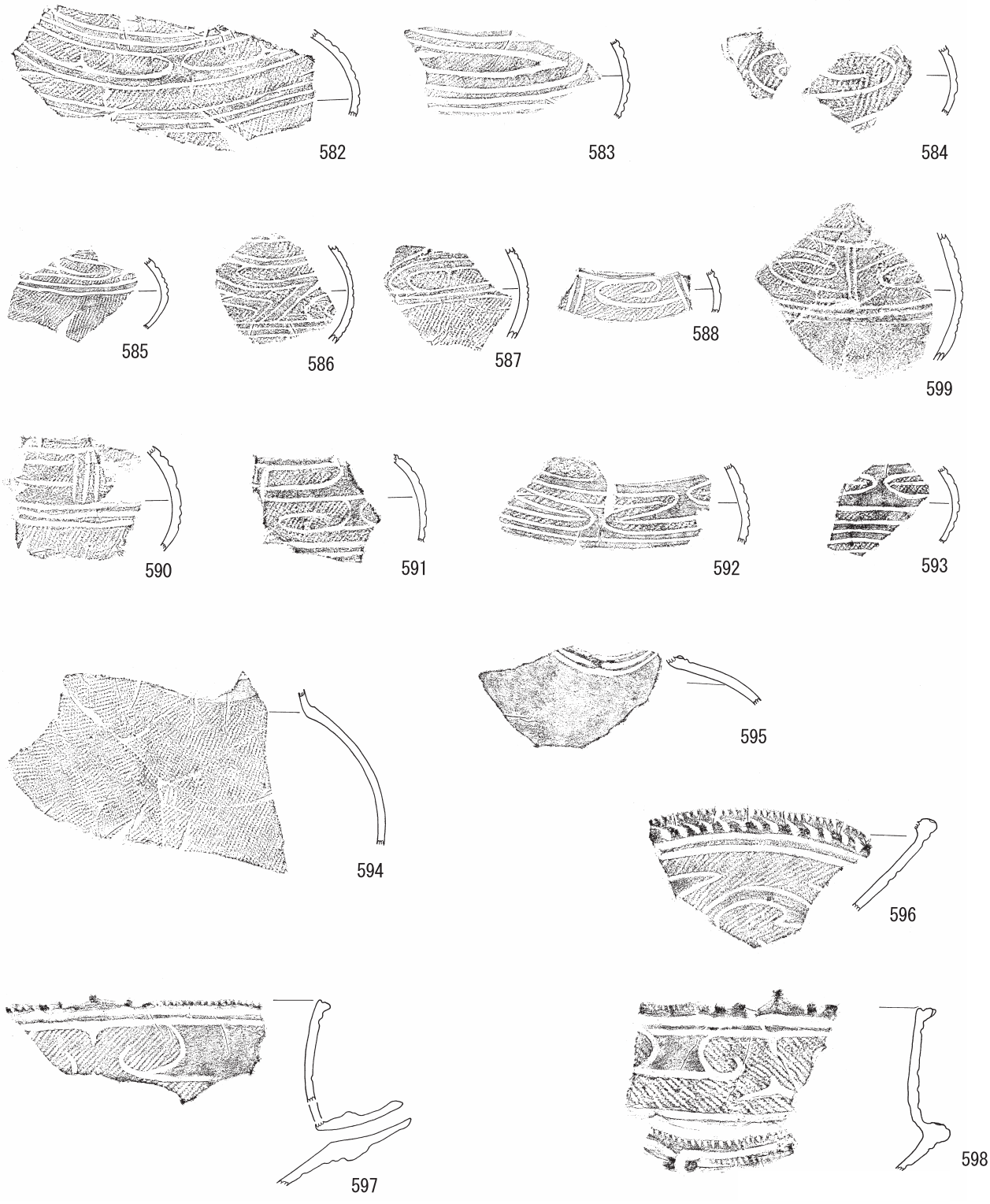


第 68 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 68　Jomon Pottery from the Satoyari site



第69図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 69 Jomon Pottery from the Satoyari site

0 10cm

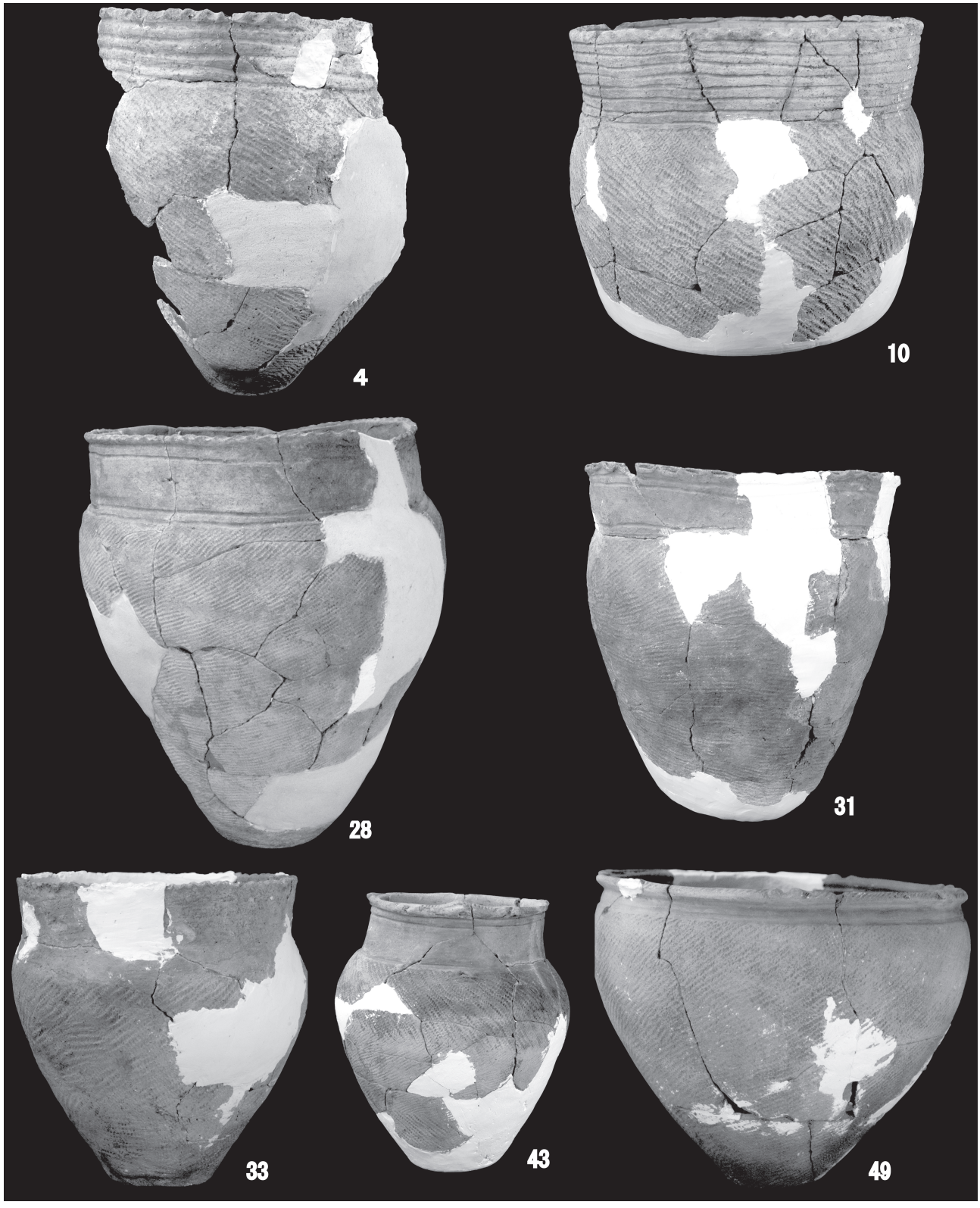


第 70 図　里鎗遺跡出土土器
Fig. 70　Jomon Pottery from the Satoyari site

写真図版 1-1　里鎗遺跡遠景
Plate1-1　Distant View of the Satoyari site

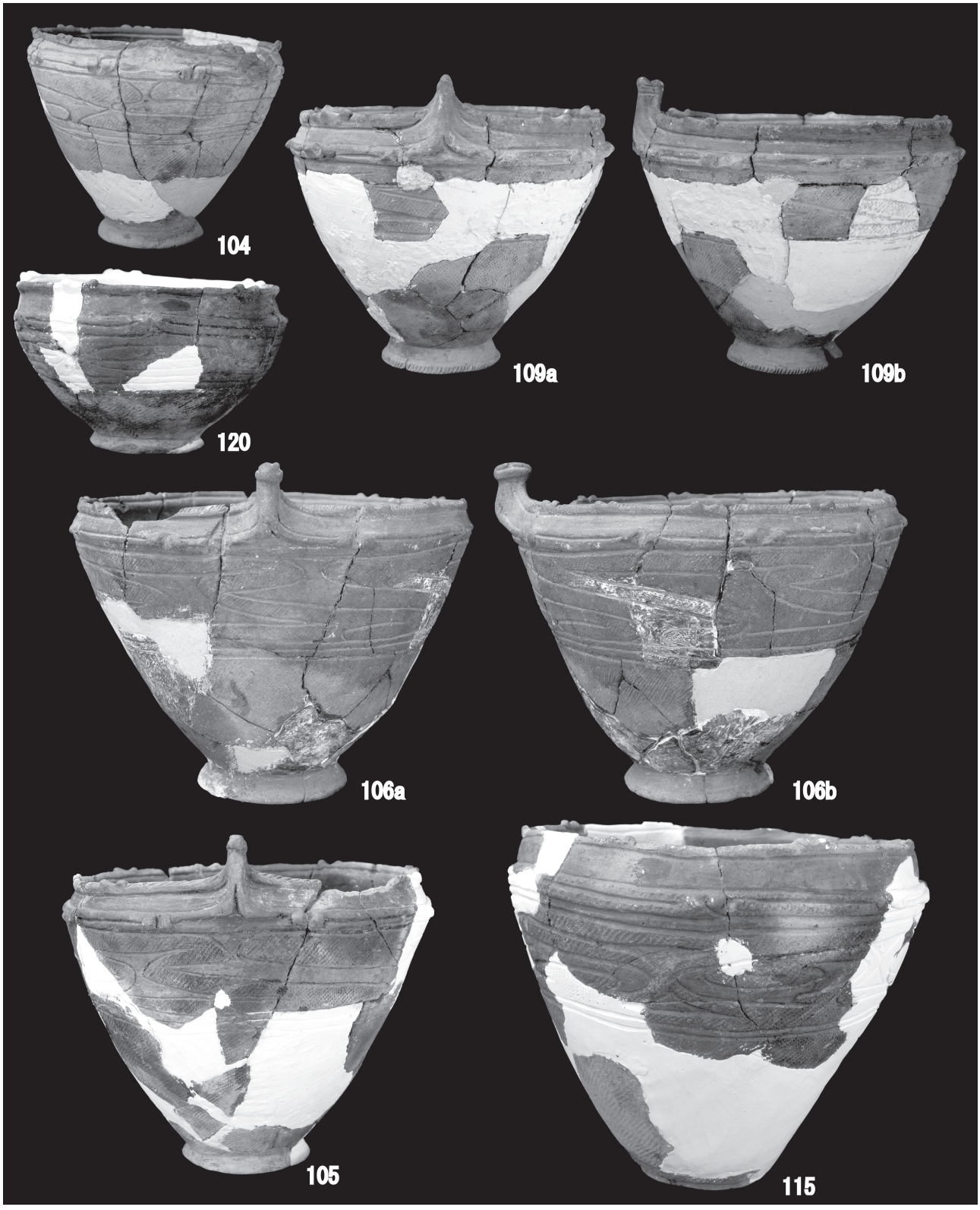
写真図版 1-2　里鎗遺跡発掘調査風景 1
（岩波書店編集部編 1952『平泉』より）
Plate1-2 Excavation in progress at the Satoyari site

写真図版 1-3　里鎗遺跡発掘調査風景 2
Plate1-3 Excavation in progress at the Satoyari site

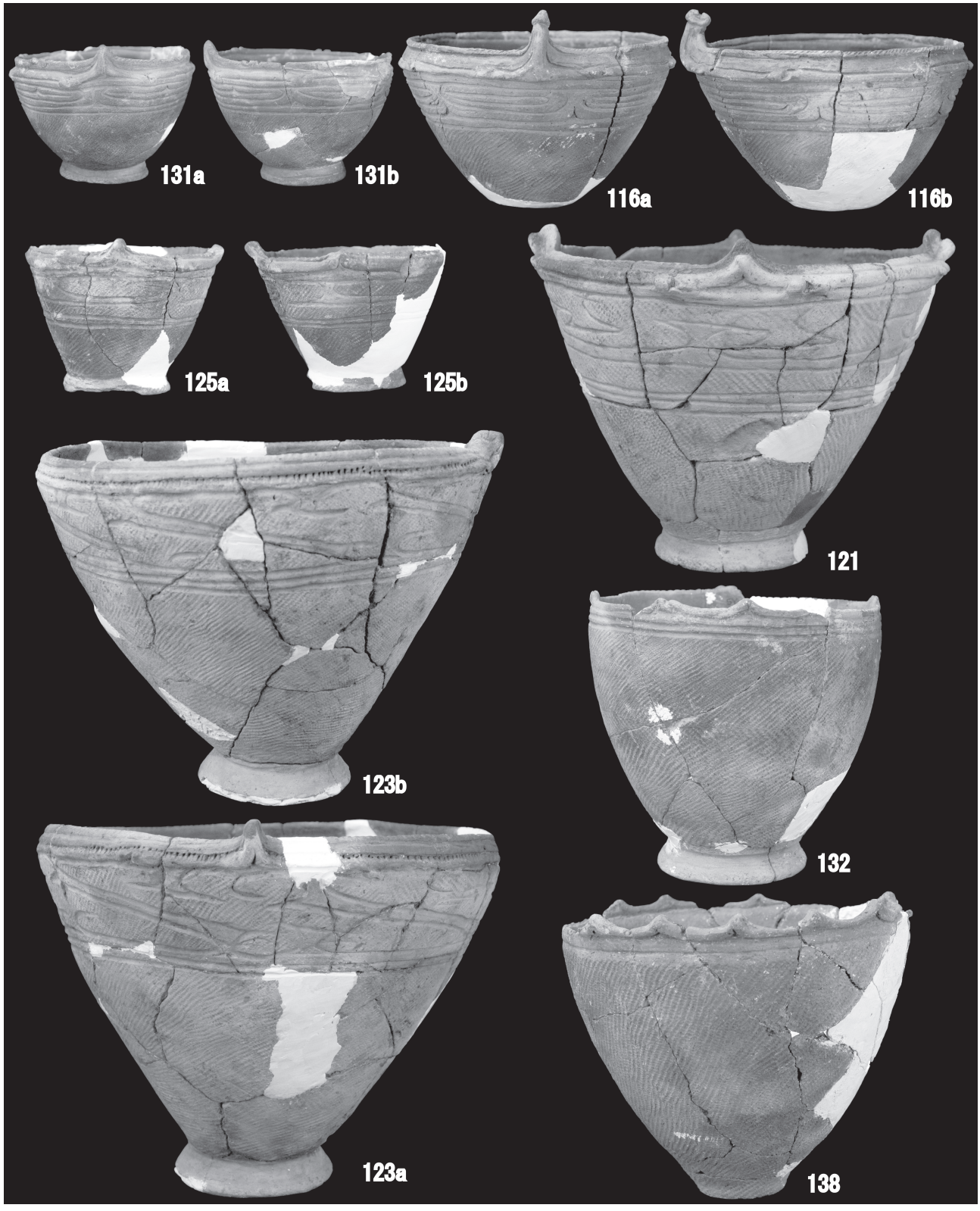


写真図版２　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：４）
Plate 2　　Jomon Pottery from the Satoyari site

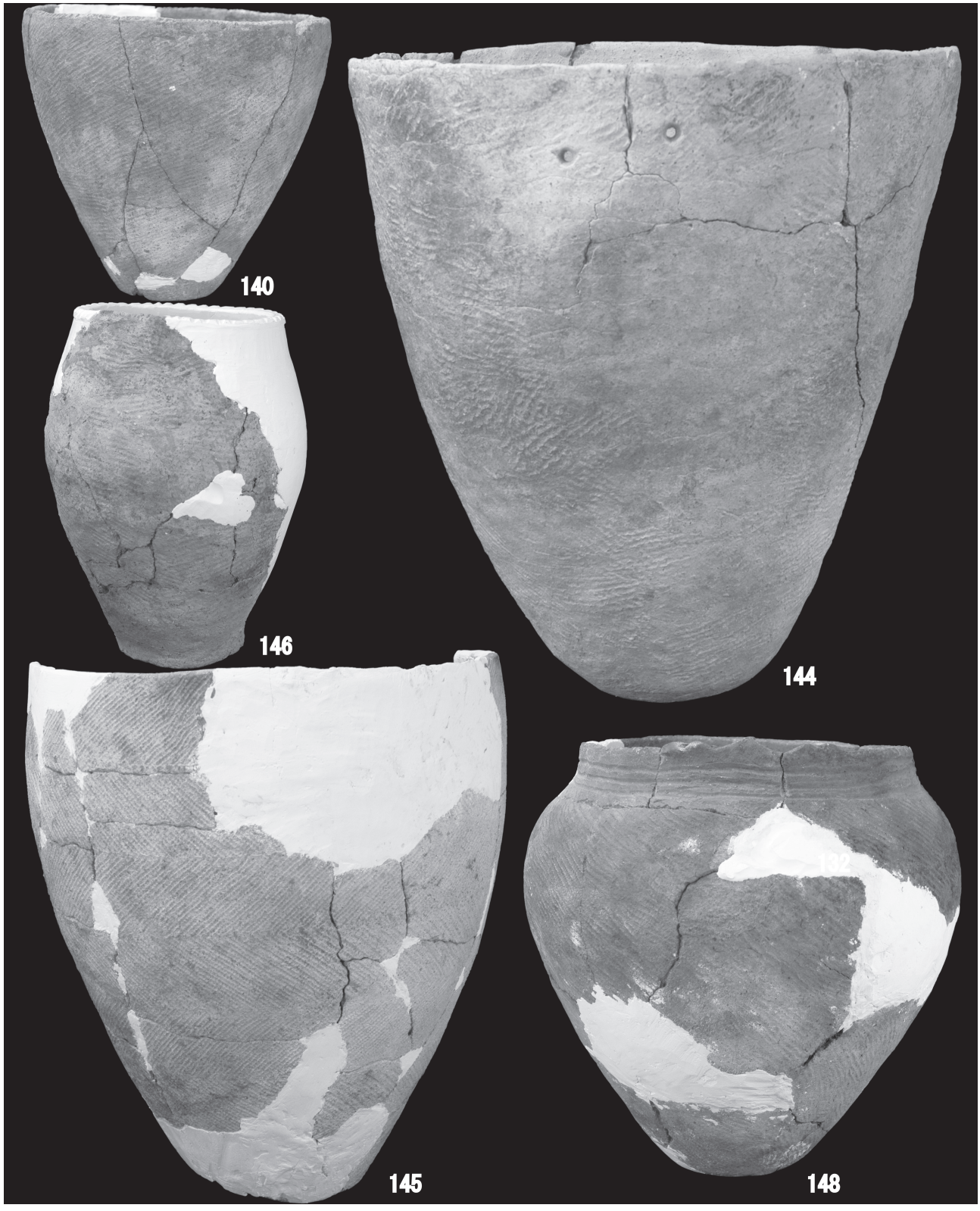
写真図版３　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：３）
Plate 3　Jomon Pottery from the Satoyari site



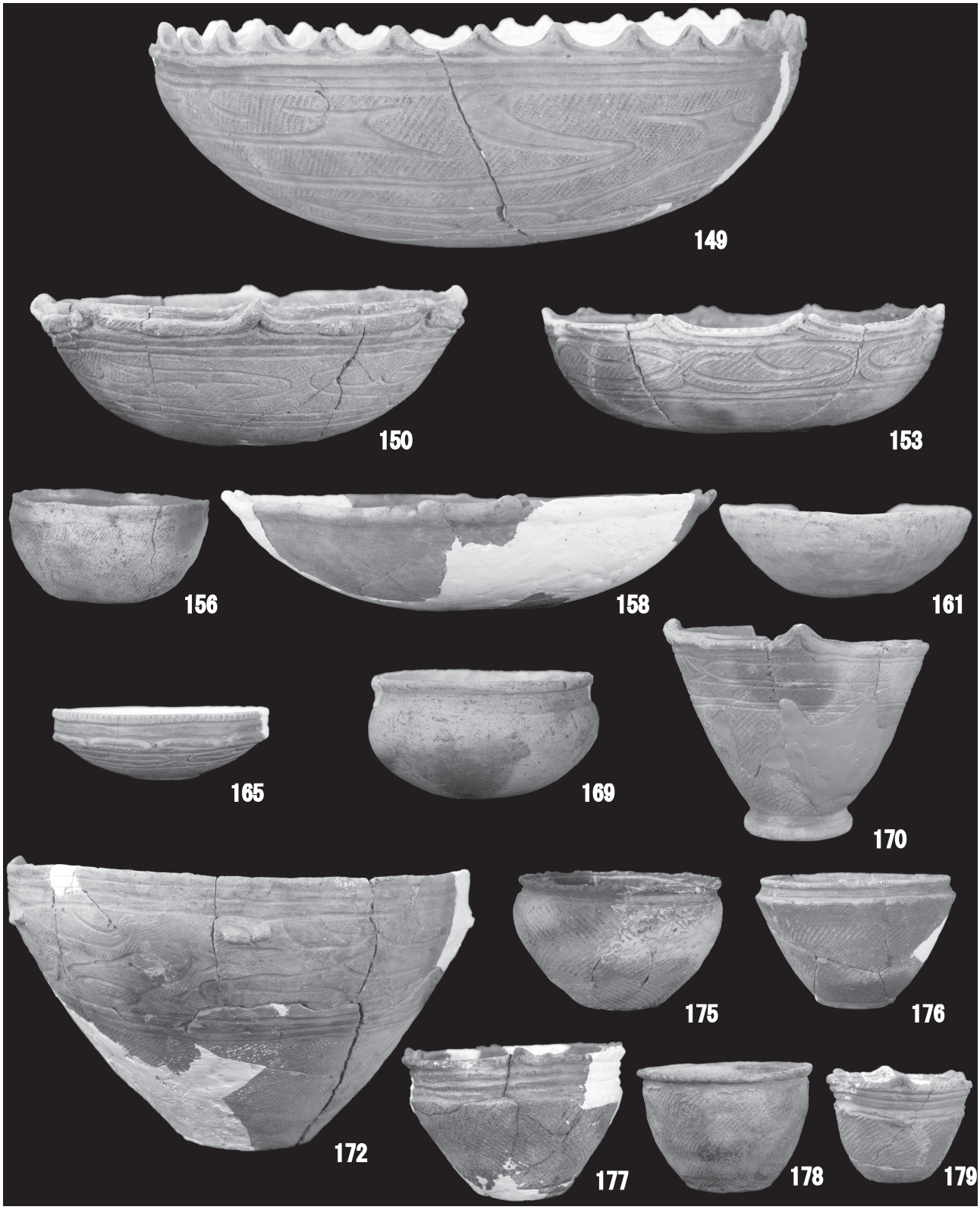
写真図版４　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：３）
Plate 4　Jomon Pottery from the Satoyari site



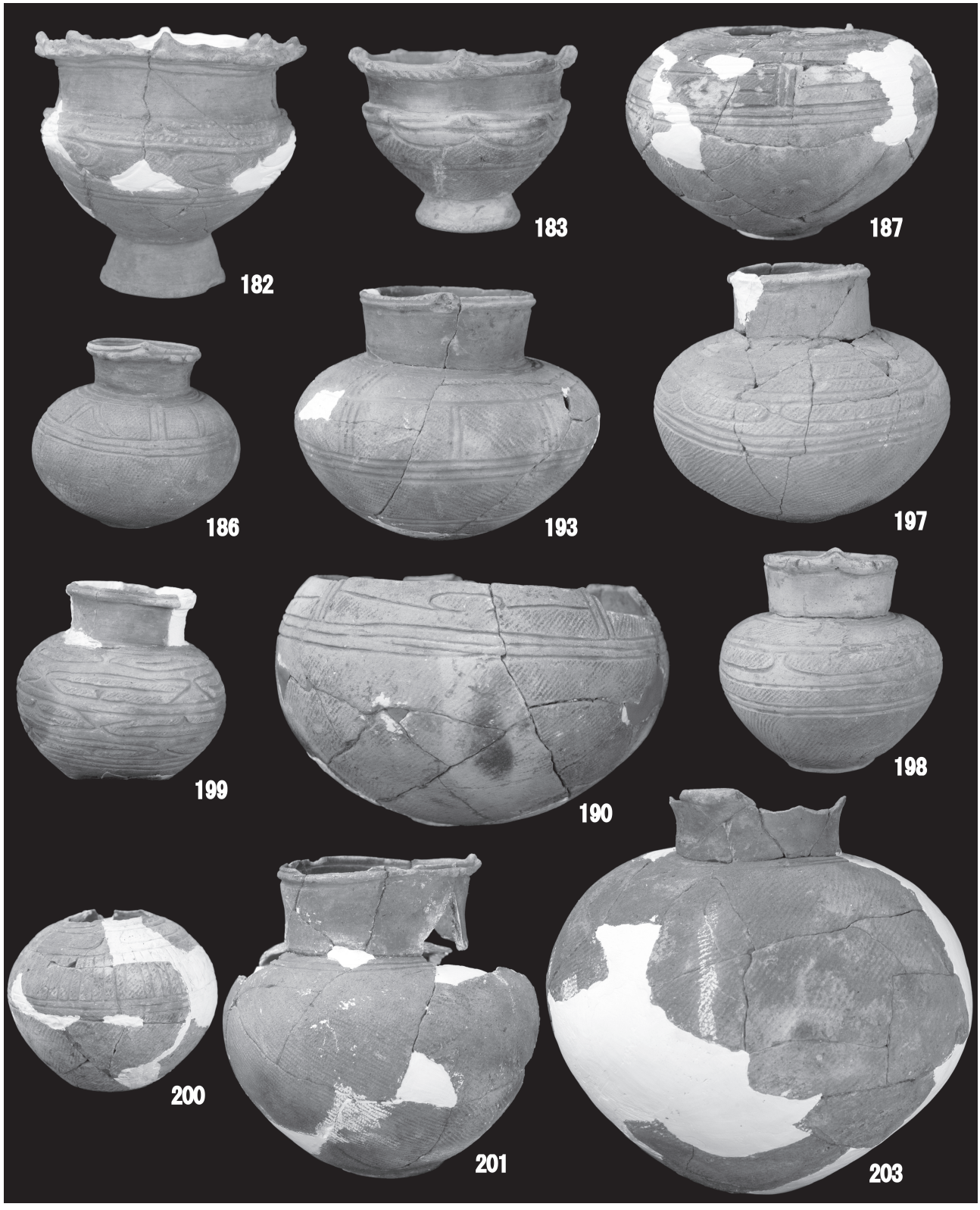
写真図版５　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：３）
Plate 5　　Jomon Pottery from the Satoyari site



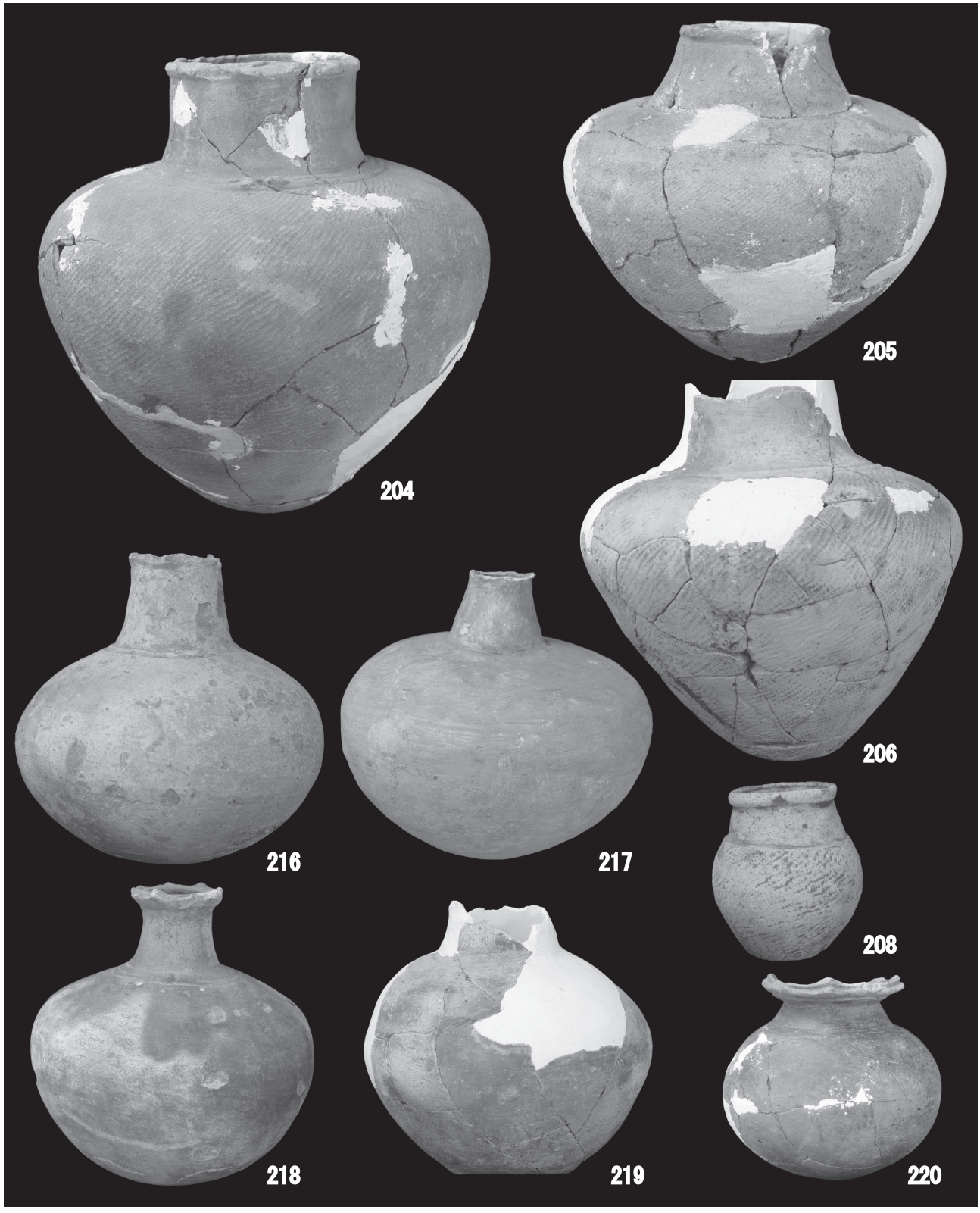
写真図版６　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：３）
Plate 6　Jomon Pottery from the Satoyari site



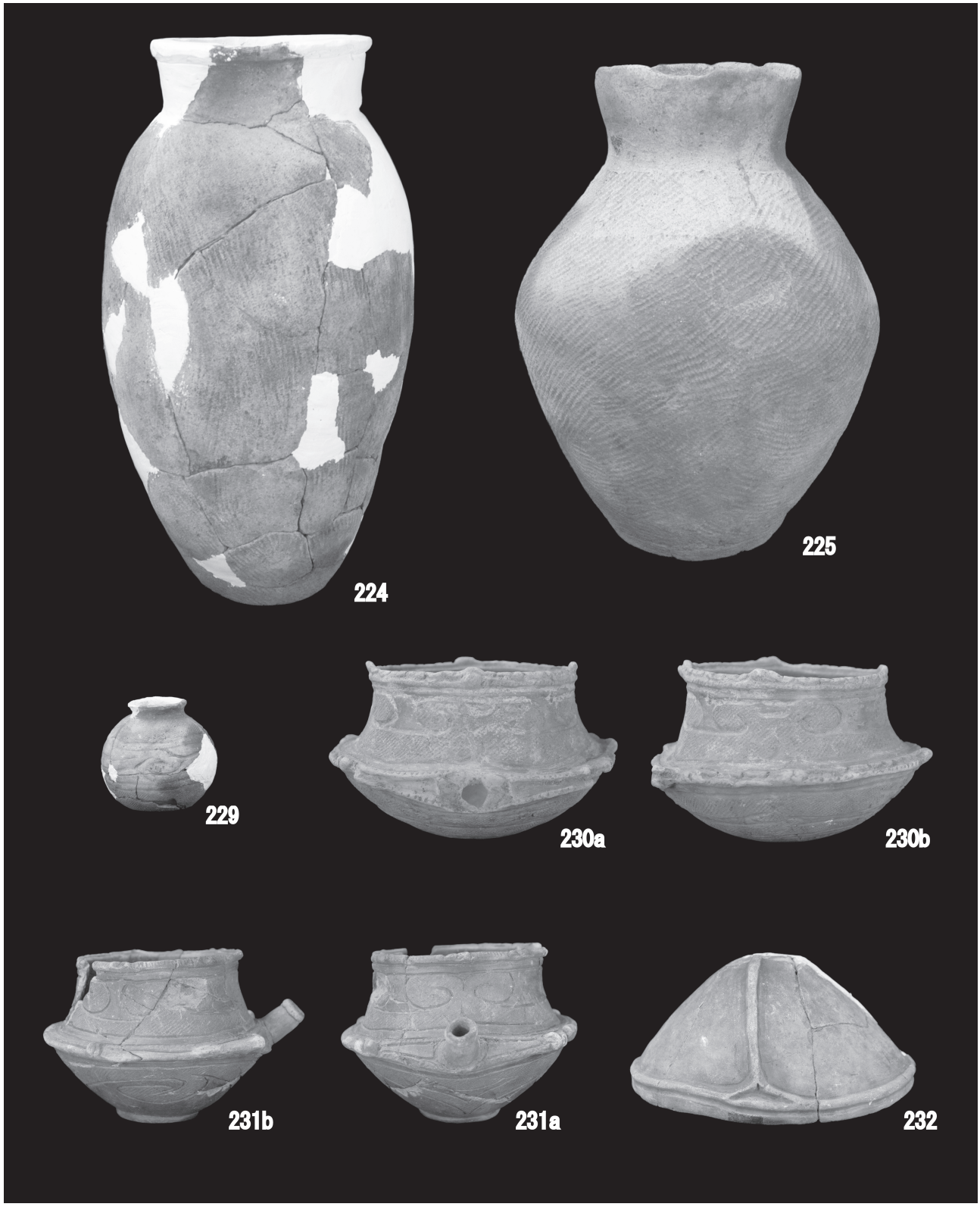
写真図版７　里鎗遺跡出土土器（Scale＝１：３）
Plate 7　Jomon Pottery from the Satoyari site



写真図版８　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝１：３）
Plate 8　Jomon Pottery from the Satoyari site



写真図版９　里鎗遺跡出土土器（Scale＝１：３）
Plate 9　Jomon Pottery from the Satoyari site



写真図版 10　里鎗遺跡出土土器（Scale ＝ 1：3）
Plate10　Jomon Pottery from the Satoyari site

第3表　里鎗遺跡出土土器属性表1（完形・復元個体1）
Table.3　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

No.	類型	タイプ	容量	施文	単位文様	単位数	スス・コゲ（深鍋）と彩色（鉢・壷）	口径	頸部径	胴部最大径	最大径	底部径	器高	括れ度	相対的深さ	伊東報告の実測図番号
1	深鍋1類	九年橋タイプ	17.67	素文	素文		胴下部コゲ	278	266	292	292		387	91.1	132.5	147
2	深鍋1類	九年橋タイプ	8.78	素文	素文		ind	200	195	253	253	76	239	77.1	94.5	46
3	深鍋1類	九年橋タイプ	13.77	素文	素文		コゲなし、ススス不明	237	222	267	267	100	358	83.1	134.1	45
4	深鍋1類	九年橋タイプ	6.96	素文	素文		胴下部パッチ	225	216	236	236	72	269	91.5	114.0	48
6	深鍋1類	九年橋タイプ	13.01	素文	素文		胴下部コゲ	271	264	315	315			83.8	0.0	146
10	深鍋1類	九年橋タイプ	7.98	素文	素文		胴下部コゲ＋コゲ上半	237	227	246	246			92.3	0.0	47
26	深鍋1類	九年橋タイプ	1.48	素文	素文		スス・コゲなし	154	147	153	153		142	96.1	92.8	101
28	深鍋1類	九年橋タイプ	12.42	素文	素文		胴下部バンド＋コゲ上半	224	207	220	224	76	285	94.1	127.2	52
29	深鍋1類	九年橋タイプ	15.55	素文	素文		ind	273	999	314	314	95	376	86.9	119.7	51
30	深鍋1類	九年橋タイプ	18.61	素文	素文		胴下部バンド＋コゲ上半	294	284	322	322			88.2	0.0	144
31	深鍋1類	九年橋タイプ	6.32	素文	素文		胴下部パッチ＋コゲ上半	232	214	228	228		290	93.9	127.2	50
32	深鍋1類	九年橋タイプ	7.45	素文	素文		紛失	223	217	245	245		296	88.6	120.8	49
33	深鍋1類	九年橋タイプ	4.50	素文	素文		コゲ上半のみ	200	193	215	215	71	222	89.8	103.3	53
43	深鍋1類	九年橋タイプ	1.62	素文	素文		コゲなし	129	124	167	167		202	74.3	121.0	36
44	深鍋1類	九年橋タイプ	5.64	素文	素文		胴下部バンド	184	180	216	208	72	248	83.3	119.2	54
48	深鍋2類	山王タイプ	1.94	素文	素文		紛失	157	154	173	173	54	164	89.0	94.8	41
49	深鍋2類	山王タイプ	2.59	素文	素文		コゲなし	192	182	194	194	41	163	93.8	84.0	40
50	深鍋2類	山王タイプ	0.95	素文	素文		紛失	140	133	143	143	48	111	93.0	77.6	63
53	深鍋2類	山王タイプ	1.74	素文	素文		コゲ上半	150	999	160	160	64	160	93.8	100.0	38
62	深鍋3類	頸部屈折・素文	1.91	素文	素文		紛失	192	178	188	188	56	144	94.7	76.6	74
63	深鍋3類	頸部屈折・素文	2.97	素文	素文		コゲなし？	208	199	206	208	55	165	96.6	79.3	73
64	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.36	素文	素文		スス・コゲなし	206	194	200	200	58	174	97.0	87.0	77
65	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.57	素文	素文		ind	225	999	231	231	54	176	97.4	76.2	78
66	深鍋3類	頸部屈折・素文	1.89	素文	素文		コゲなし	178	169	176	178	56	144	96.0	80.9	79
67	深鍋3類	頸部屈折・素文	1.30	素文	素文		スス・コゲなし	159	157	165	165	58	136	95.2	82.4	93
68	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.20	素文	素文		紛失	212	999	226	226	50	187	93.8	82.7	72
69	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.61	素文	素文		胴下部コゲ＋コゲ上半	226	999	232	232	58	176	97.4	75.9	58
70	深鍋3類	頸部屈折・素文	4.33	素文	素文		コゲ上半のみ	214	210	214	214	58	176	98.1	82.2	57
71	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.39	素文	素文		コゲ上半のみ	223	999	227	227	60	187	98.2	82.4	59
72	深鍋3類	頸部屈折・素文	2.47	素文	素文		ind	178	999	182	182	48	156	97.8	85.7	43
73	深鍋3類	頸部屈折・素文	1.67	素文	素文		コゲなし	165	154	164	165		115	93.9	69.7	65
74	深鍋3類	頸部屈折・素文	1.23	素文	素文		コゲ上半のみ	154	153	161	161	53	124	95.0	77.0	62
75	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.81	素文	素文		スス・コゲなし	129	127	129	129	45	105	98.4	81.4	61
76	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.60	素文	素文		コゲ上半のみ	125	120	126	126	52	96	95.2	76.2	110
77	深鍋3類	頸部屈折・素文	4.45	素文	素文		コゲ上半のみ？	225	220	229	229		195	96.1	85.2	75
87	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.22	素文	素文		スス・コゲなし	91	84	92	92	35	74	91.3	80.4	67
88	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.65	素文	素文		コゲなし	125	118	126	126	46	104	93.7	82.5	82
89	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.50	素文	素文		紛失	105	102	114	114	42	98	89.5	86.0	64
90	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.57	素文	素文		コゲなし	132	127	130	132		103	97.7	78.0	84
91	深鍋3類	頸部屈折・素文	0.17	素文	素文		スス・コゲなし	81	75	76	81		70	98.7	86.4	83
96	深鍋2類	山王タイプ	0.83	素文	素文		コゲ上半のみ	134	127	140	140	45	110	90.7	78.6	81
101	深鍋3類	頸部屈折・素文	4.26	素文	素文		胴下部バンド＋コゲ上半	226	217	219	219	57	188	99.1	85.8	60
102	深鍋3類	頸部屈折・素文	3.22	素文	素文		胴下部パッチ＋コゲ上半	226	217	225	225	65	172	96.4	76.4	119
103	深鍋3類	頸部屈折・有文	4.20	有文	B1	5	コゲ上半のみ	232	999	247	247	69	194	93.9	78.5	95
104	深鍋3類	頸部屈折・有文	0.81	有文	B1	3	胴下部コゲ	135	133	142	142	52	109	93.7	76.8	112
105	深鍋3類	頸部屈折・有文	2.76	有文	B1	3	コゲ上半のみ	191	190	200	200	66	162	95.0	81.0	89
106	深鍋3類	頸部屈折・有文	3.12	有文	B1	3	胴下部バンド＋コゲ上半	208	203	210	210	63	156	96.7	74.3	91
107	深鍋3類	頸部屈折・有文	2.72	有文	B1	3	コゲ上半	203	999	214	214		142	94.9	66.4	98

第4表　里鎗遺跡出土土器属性表2（完形・復元個体2）
Table.4　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

No.	類型	タイプ	容量	施文	単位文様	単位数	スス・コゲ（深鍋）と彩色（鉢・壷）	口径	頚部径	胴部最大径	最大径	底部径	器高	括れ度	相対的深さ	伊東報告の実測図番号
108	深鍋4a類	括れなし・有文	1.50	有文	B1	3	磨耗?	163	999	170	170		125	95.9	73.5	71
109	深鍋3類	頚部屈折・有文	1.56	有文	B1	3	コゲ上半のみ	167	999	178	178	57	132	93.8	74.2	92
110	深鍋3類	頚部屈折・有文	3.05	有文	C1		紛失	197	194	206	206		160	94.2	77.7	94
111	深鍋4a類	括れなし・有文	0.27	有文	B1	ind	紛失	93	999	95	95	41	61	97.9	64.2	111
112	深鍋3類	頚部屈折・有文	2.2	有文	B1		ind	185	999	198	198		144	98.4	72.7	
115	深鍋3類	頚部屈折・有文	4.24	有文	C1	4	コゲ上半のみ	222	999	238	238	75	197	93.3	82.8	69
116	深鍋3類	頚部屈折・有文	0.80	有文	A3	6	内面全体コゲ	144	142	152	152	999	94	93.4	61.8	99
120	深鍋3類	頚部屈折・有文	0.87	有文	A3	6	コゲ上半のみ	143	140	147	147	57	95	95.2	64.6	113
121	深鍋4a類	括れなし・有文	3.26	有文	その他	6	胴下部バンド(喫水線上）＋コゲ上半	222	999	999	222	78	166	100.0	74.8	106
122	深鍋4a類	括れなし・有文	3.17	有文	B1	4	胴下部パッチ(喫水線か？）	212	999	999	212	71	180	100.0	84.9	105
123	深鍋4a類	括れなし・有文	4.39	有文	B1	6	コゲ上半のみ	243	999	250	250	72	180	97.2	72.0	96
124	深鍋4a類	括れなし・有文	0.70	有文	B1	ind	胴下部コゲ＋上半(連続）	103	999	104	104	47	69	99.0	66.3	90
125	深鍋4a類	括れなし・有文	0.31	有文	A6?	3	内面全体コゲ	101	999	999	101	50	74	100.0	73.3	108
126	深鍋4a類	括れなし・有文	2.03	有文	B1	4	コゲ上半のみ	207	999	999	207		139	100.0	67.1	107
127	深鍋4a類	括れなし・有文	1.87	有文	B1	4	胴下部コゲ＋上半(連続）	166	999	182	182		152	91.2	83.5	100
128	深鍋4a類	括れなし・有文	1.02	有文	B1	3	コゲ上半のみ	144	999	999	144	54	103	100.0	71.5	109
129	深鍋4a類	括れなし・有文	0.43	有文	B1	4	コゲ上半のみ	115	999	999	115		80	100.0	69.6	87
130	深鍋3類	頚部屈折・有文	1.76	有文	C1	4	コゲ上半のみ	184	999	186	186	50	124	98.9	66.7	142
131	深鍋4a類	括れなし・有文	0.29	有文	B1	5	スス・コゲなし	104	999	106	106	47	70	98.1	66.0	102
132	深鍋4a類	括れなし・素文・台付	1.76	素文	素文		コゲ上半のみ	155	999	157	157	70	142	98.7	90.4	116
133	深鍋4a類	括れなし・素文・台付	1.17	素文	素文		内面全体コゲ？	132	999	134	134	56	133	98.5	99.3	115
136	深鍋4b類	括れなし・素文	2.22	素文	素文		コゲ上半	183	999	185	185	55	154	98.9	83.2	42
138	深鍋4b類	括れなし・素文	1.91	素文	素文		コゲ上半のみ	182	999	999	172	43	149	100.0	86.6	80
140	深鍋4b類	括れなし・素文	1.77	素文	素文		胴下部コゲ＋上半(連続）	165	999	999	165	52	157	100.0	95.2	44
141	深鍋4b類	括れなし・素文	2.27	素文	素文		ind	163	999	164	164		192	99.4	117.1	
144	深鍋4b類	括れなし・素文	12.47	素文	素文		コゲなし、ススあり	304	999	999	304	103	328	100.0	107.9	0
145	深鍋4b類	括れなし・素文	9.33	素文	素文		コゲなし、ススあり？	233	999	246	246		288	94.7	117.1	55
146	深鍋5類	内傾	1.61	素文	素文		コゲなし	97	999	141	141	68	182	68.8	129.1	37
148	深鍋5類	内傾	5.19	素文	素文		胴下部パッチ＋コゲ上半	167	999	222	222	59	223	75.2	100.5	39
149	浅鉢1a	括れなし・有文	6.83	有文	その他	4	赤なし	352	999	999	352	999	108	100.0	30.7	126
150	浅鉢1a	括れなし・有文	1.5	有文	C1	4	赤なし	235	999	999	235	999	80	100.0	34.0	129
151	浅鉢1a	括れなし・有文	1.99	有文	C1	4	赤なし	258	999	999	258	999	63	100.0	24.4	128
152	浅鉢1a	括れなし・有文	3.18	有文	A5	4	赤なし	287	999	999	287	999	76	100.0	26.5	127
153	浅鉢1a	括れなし・有文	1.34	有文	A3	8	赤なし	212	999	999	212	999	60	100.0	28.3	130
154	浅鉢1a	括れなし・有文	1.87	有文	A5	4	赤なし	238	999	999	238	999	73	100.0	30.7	131
155	浅鉢1a	括れなし・有文	1.61	有文	A5		赤なし	240	999	999	240	999	70	100.0	29.2	
156	浅鉢1b	括れなし・縄文	0.27	素文	素文		赤なし	106	999	999	106	40	54	100.0	50.9	121
157	浅鉢1b	括れなし・縄文	0.84	素文	素文		赤なし	149	999	155	155	999	74	96.1	47.7	125
158	浅鉢2類	括れなし・丸底・無文	2.18	無文	ミガキ		磨耗・赤彩	263	999	999	263	999	67	100.0	25.5	132
160	浅鉢2類	括れなし・丸底・無文	0.25	無文	ミガキ		赤彩内外	145	999	999	145	999	36	100.0	24.8	133
161	浅鉢2類	括れなし・丸底・無文	0.25	無文	ミガキ		赤なし	121	999	999	121	999	44	100.0	36.4	134
163	浅鉢3類	括れあり・有文	0.53	有文	B1		赤なし	141	999	143	143		62	98.6	43.4	
164	浅鉢3類	括れあり・有文	0.1	有文	B2	5	赤彩	89	999	92	92	26	41	96.7	44.6	137

第5表　里鎗遺跡出土土器属性表3（完形・復元個体3）
Table.5　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

No.	類型	タイプ	容量	施文	単位文様	単位数	スス・コゲ（深鍋）と彩色（鉢・壷）	口径	頚部径	胴部最大径	最大径	底部径	器高	括れ度	相対的深さ	伊東報告の実測図番号
165	浅鉢3類	括れあり・有文	0.18	有文	A3	4or5	赤彩	112	999	112	112	33	37	100.0	33.0	136
166	浅鉢3類	括れあり・有文	0.53	有文	A1		赤なし	123	118	124	124		65	95.2	52.4	
167	浅鉢3類	頚部屈折・縄文	0.38	縄文	素文		赤なし	122	115	118	122		63	97.5	51.6	
168	浅鉢3類	括れあり・無文	0.28	無文	ミガキ		赤なし？	123	121	122	123	999	41	99.2	33.3	135
169	浅鉢3類	括れあり・丸底・無文	0.53	無文	ミガキ		磨耗	116	999	123	123	999	68	94.3	55.3	124
170	浅鉢3類	括れあり・丸底・無文	0.6	無文	ミガキ			116	112	133	133	999	74	84.2	55.6	123
171	浅鉢3類	括れなし・有文	2	有文	A1	9	赤なし	203	999	211	211		100	96.2	47.4	70
172	鉢4類	括れなし	4.10	有文	C1	6or5	赤なし	262	999	999	262	66	151	100.0	57.6	68
174	深鍋3類	頚部屈折・素文	0.98	素文	素文		コゲ上半のみ	145	999	155	155		108	93.8	69.7	114
175	深鍋2類	山王タイプ	0.38	素文	素文		赤なし	108	103	112	112	40	75	92.0	67.0	88
176	鉢4類	鉢	0.32	素文	素文		赤なし	105	999	113	113	43	74	92.9	65.5	66
177	深鍋3類	頚部屈折・素文	0.42	素文	素文		赤なし	117	113	114	117	46	80	99.1	68.4	85
178	深鍋4b類	括れなし・素文	0.28	素文	素文		コゲ上半のみ	94	999	999	94	41	70	100.0	74.5	122
179	深鍋4b類	括れなし・素文	0.13	素文	素文		赤なし	81	999	999	81	30	58	100.0	71.6	86
180	鉢5類	有文台付鉢		有文	A6	4	赤なし	296	272	293	296			92.8	0.0	117
181	鉢5類	有文台付鉢	7.70	有文	D	7	赤なし	252	235	277	277		200	84.8	72.2	118
182	鉢5類	有文台付鉢	0.88	有文	A6	5	赤なし	135	116	134	134	53	105	86.6	78.4	103
183	鉢5類	有文台付鉢	0.42	有文	その他	8	赤彩	115	104	112	115	46	78	92.9	67.8	104
184	壷1類	外反／直立・球胴	2.86	有文	F	4	赤なし	96	90	211	211	60	204	42.7	96.7	1
186	壷1類	外反／直立・球胴	0.47	有文	F＋△	4	赤なし	60	52	115	115	37	98	45.2	85.2	12
187	壷1類	外反／直立・球胴	1.72	有文	F＋A1	4	磨耗?	999	76	174	174	47	150	43.7	86.2	7
189	壷1類	外反／直立・球胴	0.49	有文	F＋△	5	赤なし	82	67	120	120	32	101	55.8	84.2	13
191	壷1類	外反／直立・球胴	1.92	有文	F＋A1	ind	赤なし	999	84	171	171		164	49.1	95.9	5
192	壷1類	外反／直立・球胴	1.21	有文	F	6	赤なし	100	94	151	151	46	137	62.3	90.7	8
193	壷1類	外反／直立・球胴	1.21	有文	F	5	赤なし	87	82	161	161	46	128	50.9	79.5	9
194	壷1類	外反／直立・球胴	2.88	有文	A2	4	赤彩	94	92	201	201		194	45.8	96.5	3
197	壷1類	外反／直立・球胴	1.13	有文	A1	6	赤なし	63	999	153	153	42	132	41.2	86.3	6
198	壷1類	外反／直立・球胴	0.56	有文	A1	5	赤なし	70	63	121	121	48	114	52.1	94.2	14
199	壷1類	外反／直立・球胴	0.49	有文	A3	4	赤なし	70	61	115	115	44	104	53.0	90.4	15
200	壷1類	外反／直立・球胴	0.61	有文	F＋A1		磨耗?	999	58	117	117	45	121	49.6	103.4	16
201	壷1類	外反／直立・球胴	2.09	縄文	素文		赤なし	117	107	179	179	53	168	59.8	93.9	20
202	壷1類	外反／直立・球胴	2.75	縄文	素文		赤なし	88	82	192	192		190	42.7	99.0	25
203	壷1類	外反／直立・球胴	4.32	縄文	素文		赤なし	98	83	224	224		218	37.1	97.3	22
204	壷2類	直立・肩張る	4.11	縄文	素文		磨耗?	97	92	228	228	999	232	40.4	101.8	19
205	壷2類	内傾・肩張る	2.97	縄文	素文		赤なし	87	999	212	212		190	41.0	89.6	23
206	壷2類	内傾・肩張る	3.07	縄文	素文		赤なし	90	999	209	209	55	206	43.1	98.6	24
207	壷1類	外反／直立・球胴	2.82	縄文	素文		赤なし	95	74	203	203		208	36.5	102.5	21
208	壷2類	内傾・縄文	0.21	縄文	素文		磨耗	56	53	80	80	37	88	66.3	110.0	35
216	壷4類	細口・丸底	1.32	無文	ミガキ		赤彩	999	43	167	167	999	170	25.7	101.8	32
217	壷4類	細口・丸底	1.43	無文	ミガキ		赤彩	999	32	169	169	40	154	18.9	91.1	27
218	壷4類	細口・丸底	0.95	無文	ミガキ		ind・赤彩	44	33	144	144	999	152	22.9	105.1	31
219	壷4類	細口・丸底（突起4）	1.22	無文	ミガキ		ind・赤彩	999	35	158	158	60	150	22.2	94.9	26
220	壷4類	細口・丸底	0.55	無文	ミガキ		赤彩	56	44	116	116	999	117	37.9	100.9	29
221	壷4類	細口・丸底	0.23	無文	ミガキ		剥落・赤彩	28	25	134	134	999	98	18.7	73.1	28
222	壷4類	細口・丸底（突起4）	0.59	無文	ミガキ		ind・赤彩	69	53	123	123	30	106	43.1	86.2	30
223	壷4類	細口・丸底	0.49	有文	A3	5or6	赤彩	999	30	104	104		101	28.8	97.1	17
224	壷4類	長胴	3.38	縄文	素文		赤なし	125	99	168	168	68	293	58.9	174.4	34
225	壷4類	長胴	3.66	縄文	素文		赤なし	107	91	195	195	93	252	46.7	129.2	33
229	壷	大洞B式	0.35	有文				45	39	96	96	53	86	40.6	89.6	18
230	注口	注口	0.75	有文	注口	4	赤彩	112	109	157	157	25	92	69.4	58.6	138
231	注口	注口	0.49	有文	注口	5	赤彩	96	92	130	130	45	96	70.8	73.8	139
232	蓋	蓋	0.73	隆線			赤なし	165	999	999	165	999	79	100.0	47.9	120
	深鍋1類	九年橋タイプ	9.36	素文	素文		胴下部バンド	238	233	255	255	78	307	91.4	120.4	999

第6表　里鎗遺跡出土土器属性表4（破片資料1）
Table.6　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1沈	5	220	A'・B	C	1	D	8	―	LR→RL羽	15	7.3	14.3	16	頚部～体部にスス
深鍋1沈	7	201	A上・下	C	1	D	7	―	RL	14.2	4.8	13.4	16.3	縄文は非帯状・沈線下部まで施文。沈線との切り合い無し
深鍋1沈	8	207	A'・A下	C	1	D	14	―	LR	15.6	8.5	15	17.1	B突起貼付後,沈線施文 口唇部と口縁部境界に接合痕
深鍋1沈	9	203	A'・A下	C	1	D	9	―	RL	16	7.1	14.3	29.6	
深鍋1沈	11	218	A下	C	1	D	9	―	LR	14.2	4.8	13.3	16.2	
深鍋1沈	12	213	A'・A上・A下	C	―	C	7	―	RL	12.6	5.7	11.6	13	沈線施文が粗い。沈線→縄文
深鍋1沈	13	204	A上・下	C	1	D	12	―	RL	15.6	7.6	15.7	17.5	口縁～体部上半にスス
深鍋1沈	14	244	A上	C	1	D	7	―	LR	13.6	6.2	14.2	14.8	沈線は縄文に切られている。
深鍋1沈	15	252	B	C	1	D	10	―	LR	15.8	6.1	14.9	18	沈線→B突起貼付→沈線施文
深鍋1沈	16	245	B・B'	C	1	D	9	―	LR	18	6.8	19.1	18.6	B突起4貼付→沈線施文→調整
深鍋1沈	17	208	B'	C	1	D	9	―	RL	13.1	7	13.6	14.4	沈線施文→B突起1貼付後、央部彫込×1　頚部にスス
深鍋1沈	18	223	B'	C	1	D	9	―	LR	14	5	14.3	15	B突起×1
深鍋1沈	19	224	B・B'	C	1	D	9	―	LR	16.4	6.6	16.1	17.3	
深鍋1沈	20	127	B	C	1	C	8	―	LR	14	5.8	13.6	15.7	
深鍋1沈	21	247	B	C	1	C	7	―	LR	ind				
深鍋1沈	22	212	B	C	―	D	6	―	LR	ind	4.6	5.5	5.5	頚部にスス
深鍋1沈	23	221	B'	A	―	C	6	―	LR	6.6	2.8	6.2	8.1	刻みは爪圧痕の可能性有
深鍋1沈	24	294	B	C	1	D	6	―	LR	5.8	3.7	5.4	6.8	縄文には綾繰文有
深鍋1沈	25	250	B	C	―	C	8	―	RL	7.6	4.1	7.4	13.4	口唇部内面に爪状の刻み有、頚・体部にスス
深鍋1沈	27	7	ind	A	―	C	6	―	LR	8.3	3.7	7.7	7.5	沈線が調整により潰れている。頚部にコゲ
深鍋1沈	233	16	A下	C	1	D	12	―	RL	14.4	6.5	13.9	24.4	B突起1貼付後、央部彫込→沈線施文
深鍋1沈	234	308	A'・A上	C	1	D	≧8	―	LR	11.4	8	9	9.3	
深鍋1沈	235	13	A下	C	―	D	8	―	LR	13.9	7.2	13.9	13.9	
深鍋1沈	236	101	B	C	1	D	9	―	LR	15.8	7.8	13.6	18.4	頚・体部にスス
深鍋1沈	237	58	A上・下	C	1	D	≧6	―	LR	5.2	4.4	8.8	8.8	縄文は非帯状施文
深鍋1沈	238	22	A下	C	1	D	8	―	RL	12.6	6.7	9.4	11.6	体部にコゲ
深鍋1沈	239	24	A下	C	1	D	9	―	RL	15	5.6	13.5	15	
深鍋1沈	240	129	B	C	1	D	9	―	LR	ind	7	6.9	8.9	
深鍋1沈	241	107	A'・B'	C	1	D	10	―	LR	14.2	6.9	13.3	14.2	
深鍋1沈	242	23	A下	C	1	D	7	―	LR	13	5.3	11.9	13.3	
深鍋1沈	243	133	B	C	1	D	7	―	RL	ind	5.5	12.7	12.7	
深鍋1沈	244	106	B	C	1	D	9	―	LR	13.8	6.7	7.1	13.8	
深鍋1沈	245	10	A'・A下・B	C	1	D	7	―	LR	13.8	5.8	14.2	14.2	
深鍋1沈	246	144	B	C	1	D	9	―	ind	11.4	7.4	9.2	9.2	
深鍋1沈	247	110	A上・B	C	1	C	10	―	RL	15.4	6.7	15.4	15.4	
深鍋1沈	248	307	A'・B・B'	C	1	D	10	―	LR	11.8	7.3	12.8	12.8	
深鍋1沈	249	163	B	C	1	D	7	―	LR	ind	5.1	10	10	
深鍋1沈	250	408	B'	C	1	D	9	―	LR	12.6	6.8	11.6	12.6	体部にスス
深鍋1沈	251	161	B	C	1	D	8	―	RL	13	5	9.4	9.4	
深鍋1沈	252	28	A上・下	C	1	C	6	―	ind	12.4	4.5	6.6	12.4	
深鍋1沈	253	138	B	C	1	D	8	―	RL	12.1	6.7	10.8	12.1	B突起1貼付後、央部彫込→沈線施文
深鍋1沈	254	158	B	C	―	C	5	―	RL	11.6	4.2	8.8	11.6	
深鍋1沈	255	168	B	C	―	C	5	―	LR→RL羽	5.8	3.1	6.2	6.2	頚部にスス
深鍋1沈	256	316	A'	C	1	D	6	―	LR	8.6	4	3.8	8	縄文が調整により磨り消されている。
深鍋1沈	257	169	B	C	―	C	4	―	LR	10.8	3.7	10.6	10.6	
深鍋1沈	258	57	A上	C	1	D	≧7	―	ind	7.9	4.6	9	9	
深鍋1沈	259	512	ind	A	―	B	4	―	LR	4.8	1.7	4.8	4.8	
深鍋1沈	260	126	B	C	1	D	≧9	―	ind	13	6.5	9.8		
深鍋1沈	261	137	B	C	1	D	≧9	―	ind	15.1	6	11.7	12.9	頚部にスス
深鍋1沈	262	118	B	C	1	D	≧11	―	ind	8	6	9.9	9.9	頚部にスス

第7表　里鎗遺跡出土土器属性表5（破片資料2）
Table.7　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1沈	263	111	B	C	1	C	≧11	―	ind	14	6.9	15.3	15.3	
深鍋1沈	264	17	A下	C	1	D	≧11	―	ind	13.2	8.1	8.4	13.2	
深鍋1沈	265	309	A’	C	1	D	≧9	―	ind	13.6	6.5	20.5	20.7	
深鍋1沈	266	331	A’	C	1	D	≧9	―	ind	19	8.2	10.5	19	
深鍋1沈	267	132	B	C	1	D	≧11	―	ind	16	7.4	11	11	
深鍋1沈	268	56	A上	C	2	C	≧14	―	ind	9.1	6.7	10.2	10.2	
深鍋1沈	269	145	B	C	1	D	≧10	―	ind	ind	6.5	8.5	8.5	頚部にススス
深鍋1沈	270	21	A・A上・B	C	1	D	8	―	LR	15.2	8	14.2	18.6	口唇部内面に爪状の刻み有 B突起貼付後、央部彫込×1
深鍋1沈	271	162	B	C	1	D	≧10	―	ind	ind	6.9	8.3	8.3	頚部にススス
深鍋1沈	272	305	A’	C	1	D	≧11	―	ind	13.2	6.3	14	14	
深鍋1沈	273	25	A下	C	1	C	≧9	―	ind	12.1	6.9	8.4	12.1	
深鍋1沈	274	324	A’	C	1	D	8	―	ind	10.6	5.9	9.4	16	
深鍋1沈	275	511	ind	C	―	C	≧10	―	ind	13.2	5.7	10.8	11.4	
深鍋1沈	276	135	B	C	1	D	≧8	―	ind	13.2	5.7	10.3	10.3	頚部にススス
深鍋1沈	277	119	B	C	1	D	≧9	―	ind	13.8	5.5	11.8	12.1	
深鍋1沈	278	114	B	C	1	D	≧9	―	ind	11.4	5.7	14.4	14.8	
深鍋1沈	279	125	B	C	1	D	≧8	―	ind	13.6	5.2	14.1	14.1	
深鍋1沈	280	32	A下	C	1	D	≧9	―	ind	12.4	5.6	5.6	6.5	口唇部内面に爪状の刻み有
深鍋1沈	281	36	A下	C	1	D	≧9	―	ind	11.4	5.9	7.8	7.8	
深鍋1沈	282	29	A下	C	1	D	≧8	―	ind	11.4	6.5	8		
深鍋1沈	283	150	B	C	―	C	≧8	―	ind	ind	5.2	7.9	7.9	頚部にススス
深鍋1沈	284	323	A’	C	1	D	≧9	―	ind	5.2	5.2	6.8	6.8	
深鍋1沈	285	311	A’	C	1	D	≧9	―	ind	6.6	4.9	10	10	
深鍋1沈	286	31	A下	C	1	D	≧9	―	ind	ind	5.7	8.2	8.2	口唇部内面に爪状の刻み有
深鍋1沈	287	33	A下	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4.9	6.9	6.9	
深鍋1沈	288	166	B	C	1	C	≧6	―	ind	ind	5.2	5.6	5.6	
深鍋1沈	289	136	B	C	1	D	≧8	―	ind	14	5	7.9	7.9	頚部にススス
深鍋1沈	290	37	A下	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4.5	8.9	8.9	
深鍋1沈	291	139	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind	4.5	7	7	頚部にススス
深鍋1沈	292	422	B’	C	1	D	≧6	―	ind	ind	4.4	5.2	5.2	
深鍋1沈	293	314	A’	C	1	D	≧7	―	ind	3.6	3.9	3.9	4.5	
深鍋1沈	294	329	A’	C	1	C	≧6	―	ind	4.6	4.3	4.8	4.8	
深鍋1沈	295	149	B	A	―	B	6	―	RL	12.8	4.8	11.4	12.8	B突起1貼付→沈線施文
深鍋1沈	296	201	B	C	―	C	≧7	―	ind	ind	4.3	13.4	13.4	
深鍋1沈	297	414	B’	C	1	C	≧8	―	ind	ind	5.4	5.7	5.7	頚部にススス
深鍋1沈	298	263		A	1	B	≧7	―	ind	ind				
深鍋1沈	299	326	A’	A	―	C	8	―	LR	12.2	5.8	11	12.7	
深鍋1沈	300	160	B	A	―	B	≧5	―	ind	ind	5.7	7.8	7.8	
深鍋1沈	301	152	B	C	―	C	7	―	LR	10.4	4.2	7.2	10.4	
深鍋1沈	302	43	A下・B	A	―	C	6	―	ind	7.6	3.9	6.1	6.1	
深鍋1沈	303	328	A’	C	―	C	≧3	―	ind	5.2	3.2	7.7	7.7	
深鍋1沈	304	42	A下	A	―	C	≧5	―	LR	9.2	3.7	7.6	8.4	
深鍋1沈	305	312	ind	C	―	C	≧7	―	ind	8.2	4.5	6	6	
深鍋1沈	306	313	ind	C	1	D	≧6	―	ind	7.4	7.7	7.7	3.3	
深鍋1沈	307	426	B’	A	―	C	≧4	―	ind	4.8	2.3	5.4	6.1	口縁装飾に弧線文が 接続する。
深鍋1沈	308	151	B	C	―	C	7	―	ind	ind	4.4	7.2	7.2	
深鍋1沈		18	A’・A下・B	C	1	D	10	―	LR	15.8	7.6	14.7	25.9	
深鍋1沈		26	A下・B	C	1	D	≧8	―	RL	11.2	5.2	6	11.2	
深鍋1沈		27	A下	C	1	D	≧8	―	LR	ind	5.1	10.2	10.2	頚部にススス
深鍋1沈		30	A下・A’	C	1	D	≧6	―	ind	10.4	3.8	9.8	10.4	
深鍋1沈		34	A下	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4.6	5.8	6.1	頚部にススス
深鍋1沈		38	A下	C	1	D	≧4	―	ind	9.4	2.6	7.2	7.2	
深鍋1沈		40	A下	C	1	D	≧7	―	ind	10.5	4.1	5	10.5	口縁・頚部にススス
深鍋1沈		44	A下	C	1	D	≧5	―	ind	8	4.8	4.1	8	
深鍋1沈		45	A下	C	1	D	≧4	―	ind	7.4	2.3	5	7.4	
深鍋1沈		46	A下	C	1	D	≧6	―	ind	ind	4.1	4.2	4.2	
深鍋1沈		47	A下	C	1	D	≧3	―	ind	ind	1.5	3.6	3.8	
深鍋1沈		51	A上・B	C	1	D	≧8	―	ind	2.2	5.6	7.9	7.9	
深鍋1沈		53	A上	C	1	D	≧10	―	ind	4.5	6.4	9.5	9.5	沈線は調整により 潰れている。
深鍋1沈		54	A上	C	1	D	≧9	―	ind	6	5.5	8.3	8.3	

第8表　里鎗遺跡出土土器属性表6（破片資料3）
Table.8　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1沈		55	A上	C	1	D	≧8	―	ind	9.3	4.1	9	10	
深鍋1沈		59	A上	C	1	D	≧7	―	ind	2.6	4.4	4.1	4.1	
深鍋1沈		60	A上	C	1	D	≧7	―	ind	3.3	4.2	4.2	4.2	沈線は調整により潰れている。
深鍋1沈		61	A上	C	1	D	≧7	―	ind	3.6	3	4	4.3	
深鍋1沈		62	A上	C	1	D	≧3	―	ind	2.5	1.5	4.9	4.9	
深鍋1沈		63	A上	C	1	C	≧8	―	ind	1.8	3.3	3.9	3.9	
深鍋1沈		64	A上・B	C	1	D	≧5	―	ind	2.9	3.4	5.1	5.1	
深鍋1沈		65	A上	C	1	D	≧3	―	ind	2.1	2.2	3.1	3.1	
深鍋1沈		105	B	C	1	D	≧7	―	ind	11.5	5.4	10.2	10.2	
深鍋1沈		108	B	ind	1	ind	7	―	LR	ind	3.7	10.2	10.2	
深鍋1沈		112	A’	C	―	C	7	―	LR	7.4	4.1	7.7	7.8	刻み押圧後、内面を調整して面取している。
深鍋1沈		113	B・B’	C	―	C	≧12	―	LR	ind	7.2	12.1	12.1	
深鍋1沈		120	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind	4.1	5.1	5.1	
深鍋1沈		121	B	C	1	D	≧7	―	ind	12.2	4.4	7.2	7.2	
深鍋1沈		122	B	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4	4.8	4.8	
深鍋1沈		123	ind	C	1	D	≧3	―	ind	ind	2.6	4.7	4.7	
深鍋1沈		124	B	C	2	D	≧4	―	ind	ind	2.5	5.3	5.3	
深鍋1沈		130	B	C	1	D	8	―	ind	13.8	4	8.6	8.6	
深鍋1沈		131	B	C	1	D	≧10	―	ind	ind	5.9	5.5	5.5	
深鍋1沈		134	B	C	1	D	≧7	―	ind	11.8	6.1	11.8	11.8	
深鍋1沈		141	B	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4.8	6.3	6.5	
深鍋1沈		142	B	C	1	D	≧5	―	ind	ind	5.2	6.1	6.1	
深鍋1沈		143	B	C	1	D	≧7	―	ind	ind	5.4	5	5	
深鍋1沈		147	B	C	1	D	≧5	―	ind	12	3	6.7	6.7	
深鍋1沈		148	B	C	1	D	≧4	―	ind	ind	2.8	4.6	4.6	頚部にススス
深鍋1沈		153	B	C	―	C	≧9	―	ind	ind	6.9	5.9	5.9	
深鍋1沈		154	B	A	1	D	≧6	―	ind	9	4.2	5.2	9	
深鍋1沈		155	B	A	―	B	≧4	―	ind	ind	3.4	3.9	3.9	
深鍋1沈		156	B	C	―	C	≧7	―	ind	6.8	4.6	10.6	10.6	頚部にススス
深鍋1沈		157	B	C	―	C	≧8	―	ind	ind	5	4.4	4.4	頚部にススス
深鍋1沈		159	B	C	―	C	≧7	―	ind	ind	6.4	6	6.1	
深鍋1沈		164	B	C	1	D	≧7	―	ind	ind	4.7	5.2	5.2	
深鍋1沈		165	B	C	―	C	≧8	―	ind	ind	5.1	6.8	6.8	頚部にススス
深鍋1沈		167	B	C	1	C	≧7	―	ind	10.6	5.8	8.2	8.2	
深鍋1沈		170	B・B’	C	―	C	6	―	ind	8.4	2.6	6.3	8.4	
深鍋1沈		171	B	C	―	C	≧4	―	ind	ind	3.2	6.1	6.1	
深鍋1沈		172	B	C	1	D	≧5	―	ind	ind	3.8	4.2	4.2	頚部にススス
深鍋1沈		173	B	C	1	D	≧1	―	ind	ind	2.9	3.8	3.9	
深鍋1沈		174	B	C	1	D	≧5	―	ind	ind	3.1	3.6	4.7	
深鍋1沈		175	B	C	1	D	≧4	―	ind	ind	2.4	3.6	3.7	
深鍋1沈		176	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind	2.9	3.3	3.3	
深鍋1沈		179	B	C	1	D	≧2	―	ind	ind	2.7	3.1	3.1	
深鍋1沈		180	B	C	1	D	≧1	―	ind	ind	2.5	3.3		
深鍋1沈		181	B	C	1	D	≧4	―	ind	ind	2	3.4		
深鍋1沈		182	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind				
深鍋1沈		183	B	C	1	D	≧2	―	ind	ind	1.4	2.7	2.7	
深鍋1沈		185	B	C	1	D	≧2	―	ind	ind	1.8	2.6	3.9	
深鍋1沈		186	B	C	1	D	≧2	―	ind	ind	1.1	3.9	3.9	
深鍋1沈		187	B	C	1	D	≧5	―	ind	ind	3.8	3	3	
深鍋1沈		188	B	ind	1	ind	≧3	―	ind	ind	2.4	3.6	3.6	
深鍋1沈		189	B	C	1	D	≧1	―	ind	9.2	1.2	5.8	9.2	
深鍋1沈		190	B	A	1	D	≧4	―	ind	ind	2.5	3.8	3.8	
深鍋1沈		191	B	A	1	D	≧4	―	ind	ind	2.1	4.5	4.5	
深鍋1沈		192	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind	3.2	2.4	2.4	
深鍋1沈		193	B	C	1	D	≧6	―	ind	ind	3.4	3.2	3.5	
深鍋1沈		194	B	C	1	D	≧4	―	ind	ind	3.9	3.3	3.5	
深鍋1沈		195	B	C	―	C	≧3	―	ind	ind	2.4	3.4	3.8	
深鍋1沈		196	B	C	1	C	≧1	―	ind	ind	3.2	3.4	3.6	
深鍋1沈		197	B	A	―	B	≧1	―	ind	ind	2	4.6	4.6	
深鍋1沈		198	B	C	―	C	≧2	―	ind	ind	2.4	2.8	3.6	
深鍋1沈		200	B	C	1	C	≧3	―	ind	ind				口縁内面は面取されている。
深鍋1沈		202	B	C	1	D	≧8	―	ind	ind	4.5	3.4	3.4	

第9表　里鎗遺跡出土土器属性表7（破片資料4）
Table.9　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1沈		203	B	C	1	D	7	―	RL	ind	2.7	2.7	3.9	
深鍋1沈		204	B	ind	1	ind	≧4	―	ind	ind	3.6	2.7	1.7	
深鍋1沈		206	B	A	―	D	3	―	LR	ind	2.1	8	8	
深鍋1沈		310	A'・A下	A	1	C	9	―	RL	17	7.4	9.9	17	端面内面に爪形の痕跡有
深鍋1沈		315	A'	C	1	D	≧4	―	ind	3.1	4.9	4.9	2.6	
深鍋1沈		318	A'	C	1	D	≧8	―	ind	5	4.6	5.8	5.8	
深鍋1沈		319	A'	C	1	D	≧7	―	ind	5.8	4.3	4.8	5.8	
深鍋1沈		320	A'	C	1	D	≧5	―	ind	5.5	3.6	5.2	5.5	
深鍋1沈		321	A'	C	1	D	≧3	―	ind	4.1	2.7	4.5	4.5	
深鍋1沈		322	ind	C	1	D	≧9	―	ind	12	6.3	6.7	6.7	
深鍋1沈		325	A'・B'	C	1	D	≧10	―	RL	12.6	7.4	9.8	12.6	体部にスス
深鍋1沈		330	A'	C	―	C	≧4	―	ind	3.6	4.2	4.7	4.7	
深鍋1沈		332	A'	C	―	C	≧6	―	ind	6.4	3.3	3.5	6.4	
深鍋1沈		333	A'	C	1	D	≧3	―	ind	2.5	2.6	2.6	2.6	
深鍋1沈		407	B・B'	C	1	D	≧9	―	ind	17.2	3.9	16.5	17.9	粘土粒1貼付後央部彫込×1
深鍋1沈		409	B'	C	1	D	≧10	―	ind	9.9	5.6	13.1	13.1	
深鍋1沈		410	B'	C	1	D	≧8	―	LR	6.3	4.8	6.5	7.2	
深鍋1沈		411	B'	C	1	D	≧8	―	ind	11.1	5.8	14.2	14.2	
深鍋1沈		412	B'	C	1	D	≧10	―	ind	18.1	6.5	19.8	19.8	頚部にスス
深鍋1沈		413	B'	C	1	D	≧9	―	ind	2.4	5.4	5	5	沈線潰れ
深鍋1沈		415	B'	C	1	D	≧12	―	ind	4.7	6.2	5.7	5.7	
深鍋1沈		416	B'	C	1	C	≧4	―	ind	14.8	2.7	8.3	14.8	頚部にコゲ
深鍋1沈		417	B'	C	1	D	≧5	―	ind	4.9	3.3	4.5	5.6	
深鍋1沈		418	B'	C	1	D	≧8	―	ind	4.8	5.2	8.4	8.4	
深鍋1沈		420	B'	C	1	D	≧6	―	ind	ind	4.1	4.3	4.3	
深鍋1沈		421	B'	C	1	D	≧4	―	ind	2.4	2.9	3.7	3.8	
深鍋1沈		424	B'	C	1	D	≧6	―	ind	1.8	2.7	3.8	3.8	
深鍋1沈		425	B'	C	1	D	≧6	―	ind	5.2	4.1	5.7	6.5	
深鍋1沈		427	B'	C	1	D	≧4	―	ind	ind	2.4	4.8	4.8	
深鍋1沈		428	B'	C	1	D	≧4	―	ind	3.6	2.5	4.2	4.6	
深鍋1沈		429	B'	C	―	C	≧3	―	ind	ind	1.9	3.2	3.4	
深鍋1沈		430	B'	A	―	B	≧2	―	ind	2.4	1.9	3	3	
深鍋1沈		431	B'	A	―	C	≧2	―	ind	3.6	1.1	4.9	4.9	
深鍋1沈		551	ind	A	―	C	0＋x	―	―	6	3		6	
深鍋1沈		554	ind	C	―	B	―	―	RL	4.8	2.4	4.8	5.1	
深鍋1沈		―	A下	C	1	D	5	―	RL	9	3.2	8.6	9	
深鍋1無	34	13	B	A	―	B	1＋1	―	LR	9.2	3.6	8.9	9.2	
深鍋1無	35	222	A下・B	C	―	C	―	―	LR	9.8	3.3	9.4	9.6	
深鍋1無	36	251	A上	C	―	C	―	―	LR	11	5.1		11	
深鍋1無	37	12	B・B'	C	1	C	―	―	LR	12	4.7	8.1	8.1	頚部にスス
深鍋1無	38	206	A下・B	C	―	C	1＋1	―	RL	13	2.7	13.5	14.6	口縁～体部にスス
深鍋1無	39	240	A上	C	―	C	―	―	LR	12	5.3	10.9	12	
深鍋1無	40	309	A上	C	―	C	2＋2	―	RL	19.3	4.9	20.5	20.7	
深鍋1無	41	246	ind	C	1	C	1＋1	―	RL	12	7.1	10	15.1	頚部にスス
深鍋1無	42	230	B'	C	―	C	1	―	RL	14	5.7	15.6	14.9	
深鍋1無	45	205	A'・B	A	―	B	0＋x	―	LR	16.7			16.7	
深鍋1無	46	319	B・B'	C	―	C	1＋1	―	LR	13.8	5.4	12.6	13.8	頚部にスス
深鍋1無	47	215	A上	C	―	D	1＋1	―	LR	12.6	6.2	12	12.6	
深鍋1無	309	111	B	W	―	C	1＋1	―	LR	12.2	5.3	12.5	12.5	頚部にスス
深鍋1無	310	26	A下	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無	311	23	A下	C	―	C	0＋x	―	ind	14	5.2	12.7	14.6	内面に接合痕有
深鍋1無	312	196	B・B'	A	―	B	0＋1	―	LR	ind				
深鍋1無	313	323	A'	C	1	D	1＋1	―	LR	ind	5.2	5.1	5.1	
深鍋1無	314	136	B	C	―	C	2＋x	―	LR	11.4	6.3	10.7	11.4	
深鍋1無	315	12	A下	C	―	C	1＋0	―	LR	12	4.5	12	12	
深鍋1無	316	410	A'	A	―	C	1＋1	―	LR	8.8	3.6	8.1		
深鍋1無	317	152	B	A	―	C	1＋1	―	LR	12.2	4.3		12.2	
深鍋1無	318	110	B・B'	C	1	D	1＋x	―	ind	14.9	4.9	11.8	14.9	頚部にスス
深鍋1無	319	116	B	C	―	C	1＋2	―	―	11.2	4.8	10.8	11.2	頚部にスス・コゲ、 体部にコゲ
深鍋1無	320	6	A下・B	C	1	C	2＋x	―	―	15	6.1	14.1	15	
深鍋1無	321	181	B	C	―	C	―	―	LR	8	3.4	7.4	8	
深鍋1無	322	7	A下	C	1	D	1＋x	―	ind	15.2	6.5	14.3	15.2	
深鍋1無	323	312	A'	C	1	C	2＋2	―	LR	11.2	5.8	10.1	11.2	

第10表　里鎗遺跡出土土器属性表8（破片資料5）
Table.10　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1無	324	120	B	C	―	C	1＋x	―	―	8	4		8	
深鍋1無	325	404	A’	C	―	C	1＋0	―	RL	8	3.4			
深鍋1無	326	131	A’・B	W	1	D	1＋1	―	LR	10	4.6	10	10	
深鍋1無	327	130	B	W	1	D	1＋1	―	ind	ind	5.2	6.2	6.2	波状口縁
深鍋1無	328	137	B	C	―	C	2＋x	―	LR	14.2	5.4	12.9	14.2	頚部外面に縄文が残存
深鍋1無	329	313	A’	C	1	D	2＋x	―	―	15.6	6.8	14.5	15.6	頚部にスス
深鍋1無	330	25	A下	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無	331	138	B	C	―	C	2＋x	―	―	ind				頚部にスス
深鍋1無	332	428	B’	C	―	C	2＋x	―	―	ind				
深鍋1無	333	117	B	C	―	C	1＋x	―	―	10			10	頚部にスス
深鍋1無	334	429	B’	C	―	C	1＋x	―	―	9				頚部にスス
深鍋1無	335	119	B	C	―	C	1＋x	―	―	15			15	
深鍋1無	336	24	A上	C	1	C	1＋x	―	ind	ind	5.3	14	14	
深鍋1無	337	14	A下	C	―	C	1＋x	―	―	10	3.6		10	頚部にスス
深鍋1無	338	430	B’	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無	339	30	B	A	―	B	2＋x	―	―	ind				
深鍋1無	340	129	B	A	1	C	1＋x	―	ind	ind	6.2	8.2	8.2	
深鍋1無	341	8	A下	C	―	C	―	―	LR	15	5.4	13.7	15.5	頚部にコゲ
深鍋1無	342	37	A上	A	―	B	2＋x	―	―	ind	ind	ind	ind	
深鍋1無	343	431	B	A	―	B	2	―	―	ind				
深鍋1無	344	―	B・B’	A	1	B	2	―	―	ind				
深鍋1無	345	9	A下	C	―	C	―	―	ind	16.2	5.3	14.7	12.6	頚・体部にスス
深鍋1無	346	314	A’・B	A	―	C	0＋1	―	LR	12.2	5.3	11.7	12.8	
深鍋1無	347	145	B	A	―	B	―	―	LR	15.1	5.7	13.5	15.1	
深鍋1無	348	112	B・B’	C	―	C	―	―	LR	12.7	4.9	11.6	12.7	内面に接合痕、頚部にスス
深鍋1無	349	422	B’	C	―	C	―	―	LR	9	4.1		9	
深鍋1無	350	11	A下	C	―	C	―	―	LR	9	3.7	8.8	8.8	
深鍋1無	351	140	B	C	―	C	2＋0	―	LR	ind	4.8			
深鍋1無	352	179	B	A	1	C	―	―	LR	14.2	4.9	14	14.2	
深鍋1無	353	176	B	C	―	C	―	―	LR→RL羽	13.6	5.3	13.6	13.6	縄文は非帯状施文、頚部にスス
深鍋1無	354	144	B	A	―	B	―	―	LR	13.4	5.1	12.6	14.3	体部にコゲ
深鍋1無	355	143	B	A	―	B	―	―	RL	ind	4			頚～体部にスス
深鍋1無	356	408	A’	A	―	B	―	―	LR	16.4	6.5	16	17.1	
深鍋1無	357	27	A上	A	1	C	2＋x	―	ind	11	4	5.3	11	ケズリ著しい、体部にスス
深鍋1無	358	308	A’	C	―	C	―	―	LR	10	4.8	11.1	10.4	
深鍋1無	359	186	B	C	―	C	―	―	LR	10.8	6.8	10.8	11.5	くびれ弱い、頚部にスス
深鍋1無	360	550	ind	A	―	B	―	―	LR	15	5.3		15	頚・体部にスス
深鍋1無	361	411	A’	A	―	C	―	―	LR	14.8	5	14.3	14.8	
深鍋1無	362	36	A上・B	A	―	B	―	―	LR	11.7	5.4	11.2	12	
深鍋1無	363	115	B	C	―	C	―	―	RL	12.2	4	12.2	13.6	頚部にスス
深鍋1無	364	146	B	C	―	C	―	―	―	7.6	4.6	7.2	7.6	
深鍋1無	365	552	ind	A	―	B	―	―	LR	14.2	4.3		14.2	
深鍋1無	366	113	B	C	1	C	0＋x	―	ind	13	7.9	25.2	25.2	内面に接合痕、頚部にスス
深鍋1無	367	412	B’	C	―	C	0＋x	―	ind	14.6	7.2	9.6	9.9	
深鍋1無	368	21	A上	C	―	C	―	―	ind	ind	6.7	6.4	6.4	
深鍋1無	369	128	B	C	1	D	1＋x	―	ind	ind	3.9	6.5	6.5	内面に接合痕
深鍋1無	370	193	B・B’	C	―	C	―	―	ind	ind	5.1	5.9	5.9	
深鍋1無	371	180	B	C	1	C	0＋x	―	ind	12.6	5.1	9.2	12.6	
深鍋1無	372	153	B	A	―	C	0＋x	―	―	11				内面に接合痕
深鍋1無	373	31	A下	C	1	C	0＋x	―	ind	ind	3.8	5.7	5.9	内面に接合痕有
深鍋1無	374	311	A’	C	―	C	0＋x	―	ind	10.6	3.9	10.1	10.6	口縁～体部にスス
深鍋1無	375	182	B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4.6	6.7	6.7	
深鍋1無	376	28	A上	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4.8	7.3	7.3	頚部にスス
深鍋1無	377	423	B’	C	―	C	―	―	LR	ind				
深鍋1無	378	324	A’	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無	379	177	B	C	―	C	―	―	LR	16	5.8	16.2	17.4	内面に接合痕
深鍋1無	380	24	A上・A下	C	―	C	―	―	―	12	4	13.3	13.3	頚部にスス
深鍋1無	381	413	B’	C	―	C	0＋x	―	ind	13.6	6.5	11.9	12.8	
深鍋1無	382	309	A’	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	6.3	9.8	9.8	
深鍋1無	383	186	B	C	―	C	0＋x	―	―	ind				頚部にスス
深鍋1無	384	31	A上	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	3.5	4.1	4.1	
深鍋1無	385	188	B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	5.9	7	7	
深鍋1無	386	34	A上	A	―	C	0＋x	―	―	ind				

第11表　里鎗遺跡出土土器属性表9（破片資料6）
Table.11　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1無	387	317	A’	C	―	C	―	―	ind	11.8	4.5	7.4	11.8	
深鍋1無	388	32	A上	A	―	C	―	―	―	ind	4.3			
深鍋1無	389	310	A’	C	―	C	0＋x	―	ind	14.4	4.6	16.2	16.2	
深鍋1無	390	117	B	C	1	D	4	―	LR	9	2.3	5.5	9	
深鍋1無	391	199	B	C	1	D	4	―	RL	9.3	2.5	9	9.3	
深鍋1無	392	52	A上	A	―	D	4	―	LR	10.8	2.9		10.8	くびれが弱い
深鍋1無	393	214		A	1	B	5	―	LR	22.8				体部上半にコゲ
深鍋1無	394	441		A	1	B	5	―	LR	23.4				B突起×1
深鍋1無	395	17		A	1	B	5	―	LR	8.6	2.5	8.7	9	頚部にコゲ
深鍋1無	396	262		E	1	A	5	―	LR	ind				B突起×1
深鍋1無	397	126	B	C	1	C	1＋1	―	LR	10.6	3.2	10.2	10.6	
深鍋1無	398	125	B	C	―	D	1＋1	―	RL	12.8	3.3	12.8	12.8	
深鍋1無	399	127	B	A	―	C	1＋1	―	LR	10.2	2.3	10.5	10.5	口縁・頚部にスス・コゲ
深鍋1無	400	16	A下・A’	C	―	C	―	―	LR	9.4	3.6	9.8	9.8	
深鍋1無	401	22	A上	C	―	C	―	―	LR	12	5.3	10.9	10.9	頚部にスス
深鍋1無	402	316	A’	A	―	B	―	―	LR	ind	3.7			くびれ弱い
深鍋1無	403	321	A’	W	1	D	―	―	LR	6.8	3.2	6.5	8.1	
深鍋1無	404	555	ind	C	―	C	―	―	LR	7.6	3.2	5.8	7.6	
深鍋1無	405	147	B	A	―	C	―	―	―	ind	3.3			
深鍋1無	406	173	B	C	―	B	0＋x	―	LR	ind				
深鍋1無	407	424	B・B’	A	―	B	―	―	LR	4.9	2.7			頚・体部にスス
深鍋1無	408	554	B’	C	1	D	―	―	ind	4.8	2.4	4.8	5.1	
深鍋1無	409	553	ind	C	―	C	―	―	LR	9.4	3.2	4.2	9.4	
深鍋1無	410	450		A	―	B	1＋2	ind	LR	ind				
深鍋1無	411	15	A下	A	1	C	1＋3	―	RL	14	4.8		14	
深鍋1無	412	251		A	1	C	―	―	RL	ind	3.1			
深鍋1無		5	A下・B	C	1	C	1＋1	―	LR	12.4	6.2	11.3	12.4	頚部にスス
深鍋1無		10	B	C	1	D	1＋2	―	RL	12	4.8	13.2	12.6	内面に接合痕、 頚～体部にスス
深鍋1無		10	A下・B	C	―	C	0＋x	―	ind	13.6	6	19.2	19.2	頚部にスス
深鍋1無		18	A下・B’	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4.3	7	7	
深鍋1無		19	A下	C	1	C	1＋x	―	―	9.1			9.1	
深鍋1無		20	A下	C	1	C	0＋x	―	ind	ind	4.2	7.4	7.4	
深鍋1無		29	A下・B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	5	8	8	内面に接合痕有
深鍋1無		32	A下	A	―	B	―	―	―	8.3	4		8.3	
深鍋1無		35	A上	A	―	B	―	―	ind	9.5	3.9	4.5	4.9	
深鍋1無		38	A上	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	3.5	4.5	4.5	
深鍋1無		39	A上	C	―	C	2＋x	―	―	ind	ind	ind	ind	
深鍋1無		40	A上	C	1	D	1＋x	―	ind	ind	4.8	4.9	4.9	
深鍋1無		42	A上	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4.2	3.7	3.7	
深鍋1無		43	A上	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	3.1	2.8	2.8	
深鍋1無		54	A上	C	―	C	1＋1	―	―	9.2			9.2	
深鍋1無		55	A上	C	―	C	1＋1	―	―	ind				
深鍋1無		56	A上	W	1	D	1＋1	―	LR	17	5.4	15.3	17	口縁装飾は押圧→短線施文
深鍋1無		57	A上	A	1	D	2＋x	―	―	10.2	6.7			
深鍋1無		58	A上	C	―	C	2＋x	―	―	ind				
深鍋1無		88	B’	A	1	B	2＋1	―	RL→ LR羽	ind				
深鍋1無		106	B・B’	C	―	C	―	―	LR	12	5	11.1	12.8	
深鍋1無		107	B	C	1	D	1＋x	―	ind	15	4.9	23.5	25	頚部にスス
深鍋1無		114	B	C	1	C	0＋1	―	LR	8.6	4.1	8.9	10	
深鍋1無		118	B	C	―	C	1＋x	―	―	12	5	12.3	12.3	
深鍋1無		121	B	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		122	B	A	―	C	2＋x	―	―	ind				
深鍋1無		123	B	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		124	B	C	1	D	2＋x	―	ind	ind	2.7	3.9	3.9	
深鍋1無		132	B	E	1	A	0＋x	―	―	14.2	4.4		14.2	内面沈線は押圧を 切っている。
深鍋1無		133	B	C	1	D	2＋x	―	ind	ind	3.8	4.6	4.6	
深鍋1無		134	B	C	1	C	1＋x	―	ind	11	2.8	7.5	7.5	
深鍋1無		135	B	C	1	C	1＋x	―	―	ind				内面に接合痕
深鍋1無		155	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		156	B	A	―	C	―	―	RL	ind	4.3			
深鍋1無		157	A’・B	A	―	B	0＋x	―	―	15.8	4.6	15.3	15.8	

第12表　里鎗遺跡出土土器属性表10（破片資料7）
Table.12　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋1無		158	B	A	―	B	―	―	―	ind				
深鍋1無		159	B	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		160	B	A	―	C	0＋x	―	―	2.5				
深鍋1無		161	B	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		162	B	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		163	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		164	B	A	―	C	―	―	―	ind				頚部にケズリ、頚部にスス
深鍋1無		165	B	A	―	C	―	―	RL	ind				くびれ弱い
深鍋1無		166	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		167	B	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		168	B	A	―	B	0＋x	―	―	8.4				
深鍋1無		169	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		170	B	A	―	B	0＋x	―	ind	ind	4.2	4.5	4.5	口縁内面に弧線有。
深鍋1無		171	B	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		172	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		175	A'・B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	3.5	5	5	
深鍋1無		178	B	A	―	B	0＋x	―	―	11.8			11.8	
深鍋1無		183	B	C	1	C	0+≧1	―	ind	ind	4.4	5.8	5.8	
深鍋1無		184	B	C	―	C	―	―	LR	13.4	4.8	12.7	13.4	
深鍋1無		187	B	C	1	C	0＋x	―	―	ind				頚部にスス
深鍋1無		190	B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4.9	5.7	6.2	
深鍋1無		192	A下	C	1	D	0＋x	―	ind	ind	4.4	5.6	5.7	頚部にスス
深鍋1無		197	B	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		198	B	C	1	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		199	B	C	1	D	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		201	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		202	B	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		203	B	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		204	B	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	2	4	4	
深鍋1無		205	B	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		207	B	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		315	A'	A	―	B	―	―	R	8.8	4.2	8.3	9.2	頚・体部にスス
深鍋1無		318	A'	A	―	B	0＋x	―	―	ind				頚部にスス
深鍋1無		319	A'	A	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		322	A'	C	1	C	0＋x	―	―	5.2	3			
深鍋1無		325	A'	W	1	D	1＋x	―	ind	ind	3.7	3.7	3.7	波状口縁
深鍋1無		326	A'	A	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		327	A'	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		328	A'	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		329	A'	W	1	D	1＋x	―	ind	ind	2.7	5.4	5.4	波状口縁
深鍋1無		330	A'	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		415	B'	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	5.3	4.8	4.8	
深鍋1無		418	B'	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	4	5	5.6	
深鍋1無		419	B'	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		420	B'	C	―	C	0＋x	―	ind	ind	3.7	4.8	4.8	頚部にスス
深鍋1無		421	B'	A	―	B	0＋x	―	L	11			11	
深鍋1無		426	B'	C	―	C	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		432	B'	C	1	D	1＋x	―	―	ind				
深鍋1無		433	B'	C	―	C	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		434	B'	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		435	B'	C	1	D	2＋x	―	ind	ind	3.6	3.7	3.8	
深鍋1無		436	B'	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋1無		437	B'	A	―	B	0＋x	―	―	ind				
深鍋2類	51	282		A	1	B	2	―	LR→RL羽	8	1.5	7.7		A突起×2
深鍋2類	52	285		A	1	B	1	―	LR	ind				B突起×2
深鍋2類	54	426		A	1	B	2	―	LR	13	1.7	13	14.1	B突起×1
深鍋2類	55	240		A	1	B	3	―	RL→LR羽	22.8				体部上半にコゲ
深鍋2類	56	259		A	1	B	2	―	RL→LR羽	ind				
深鍋2類	57	427		A	1	C	2	―	LR	14.2	1.8	14.1	15	
深鍋2類	58	255		A	―	B	―	―	LR	10.2	1.5	9.9	10.7	

第13表 里鎗遺跡出土土器属性表11(破片資料8)
Table.13 Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋2類	59	245		A	1	B	2	―	LR→RL羽	15.6				A・B突起≧1
深鍋2類	60	260		W	1	D	2	―	LR→RL羽	7.2	1.5			
深鍋2類	61	286		W	1	D	2	―	LR	ind				内面に朱塗、ミニチュア
深鍋2類	413	244		A	1	C	2	―	RL	11.6	1.6	11.8	12.7	口縁～体部にスス・コゲ
深鍋2類	414	20		A	1	C	2	―	LR	ind				
深鍋2類	415	10		A	1	B	2	―	RL	8.4	0.6			B突起≧1
深鍋2類	416	2		A	1	C	2	―	LR	12.6	1.1			
深鍋2類	417	245		A	1	B	2	―	LR→RL羽	9.5	1.7	9.7	9.8	
深鍋2類	418	22	A下・A'	A	1	C	2	―	LR	12.5	1.1			
深鍋2類	419	428		A	2	C	2	―	LR	8.3	1.7	8.1	8.3	体部上半にコゲ
深鍋2類	420	118		A	1	B	2	―	RL	9.1	1.7			
深鍋2類	421	438		A	1	B	2	―	LR	8.6	2.6			
深鍋2類	422	350	B	A	1	C	1	―	LR	8	0.8			
深鍋2類	423	238		A	1	B	4	―	LR	8.4	2.3	8.7	15.2	頚部にコゲ
深鍋2類	424	453		A	1	C	2	―	LR	6.8	1.3			
深鍋2類	425	243		C	1	C	1	―	LR	12	1.9	11.8	12	
深鍋2類	426	432		A	1	C	―	―	LR	11.8	1.9	12	12.8	
深鍋2類	427	119		A	1	C	―	―	RL	10.5	2			
深鍋2類	428	260		E	―	B	4	―	LR	ind				B突起×1
深鍋2類		19		W	1	D	2	―	LR	8.9	1.7	9.2	9.2	体部上半にスス
深鍋2類		21		A	1	B	2	―	LR帯	ind				
深鍋2類		23		A	―	B	2	―	―	ind				
深鍋2類		54		A	―	B	3	―	RL	9.7	2.1	9.6	9.9	頚・体部上半にコゲ
深鍋2類		61		A	1	B	2	―	LR	ind				
深鍋2類		62		A	1	B	5	―	LR	11.1	2.7			くびれ弱い
深鍋2類		62		A	1	B	2	―	LR	ind				
深鍋2類		63		A	―	B	4	―	RL	ind				
深鍋2類		64		A	―	B	4	―	RL	ind				
深鍋2類		65		A	―	B	2	―	―	6.4	2.6			
深鍋2類		101		A	1	B	4	―	LR	9.6	2.7	ind	10.6	体部上半にコゲ
深鍋2類		117		A	2	B	2	―	LR	ind				
深鍋2類		120		A	―	C	―	―	RL	ind				
深鍋2類		121		A	1	B	2	―	RL	ind				
深鍋2類		122		A	1	B	≧3	―	―	10.8				
深鍋2類		123		A	―	B	≧5	―	―	7.1				口縁部にコゲ
深鍋2類		124		A	1	B	4	―	LR	ind				
深鍋2類		130		A	1	B	1	―	LR×6帯	11.4				A・B突起≧1
深鍋2類		246		A	1	B	2	―	LR	6.2	1.6	5.7	6.2	
深鍋2類		247		A	―	C	ind	―	―	ind				
深鍋2類		248		A	―	C	2	―	RL	9.3	1.4			
深鍋2類		249		A	―	C	2	―	LR	8.9	1.7			頚部にスス、体部にコゲ
深鍋2類		252		A	1	C	2	―	LR	8	1.6			
深鍋2類		254		W	1	D	―	―	LR	10.2	1.3			
深鍋2類		256		A	―	B	2	―	LR	7.7	1.9			
深鍋2類		257		A	1	B	≧3	―	―	ind				
深鍋2類		258		E	1	A	5	―	LR	9.7	2.5			頚部にコゲ
深鍋2類		261		A	―	B	4	―	―	ind				
深鍋2類		262		A	1	B	≧3	―	―	7.4				胎土に砂粒多
深鍋2類		263		A	1	B	≧5	―	―	ind				
深鍋2類		264		A	―	B	≧3	―	RL	6	1.5			頚部にスス
深鍋2類		270		A	1	B	2	―	LR	ind				B突起≧1
深鍋2類		271		A	1	B	2	―	LR	10				B突起≧1
深鍋2類		276		E	1	A	2	―	LR	12				
深鍋2類		425		W	1	D	2	―	LR→RL羽	8.6	1.6	8.6	9.5	体部上半にコゲ
深鍋2類		429		A	1	C	2	―	LR	9.6	2.1	8.9	9.8	
深鍋2類		431		A	1	B	2	―	RL	ind				
深鍋2類		433		A	1	B	2	―	RL	ind				
深鍋2類		434		A	1	C	―	―	RL	ind				
深鍋2類		435		A	―	B	≧6	―	―	10.7				

第14表　里鎗遺跡出土土器属性表12（破片資料9）
Table.14　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋2類		436		A	1	B	≧1	―	―	9.8				胎土に砂粒多
深鍋2類		437		A	―	B	6	―	LR	9.5				
深鍋2類		439		A	1	B	≧3	―	―	ind				
深鍋2類		440		A	1	B	≧2	―	―	ind				
深鍋2類		441		A	―	B	5	―	LR	11.7	3.2			内面に接合痕有
深鍋2類		466		A	1	B	2	―	LR	ind				B突起×1
深鍋3類	78	33		A	1	B	5	―	RL	17.2				
深鍋3類	79	292		A	―	B	5	―	LR	11.4	3.4		11.4	頚部にコゲ
深鍋3類	80	254		A	1	B	4	―	LR	ind				A・B突起×1
深鍋3類	81	276		A	1	B	4	―	LR→RL羽	8.7	2.4	7.3	8.7	口縁・頚部にスス 口縁～体部にコゲ
深鍋3類	82	256		A	1	B	4	―	LR	ind				A・B突起×1
深鍋3類	83	291		A	1	B	5	―	LR→RL羽	9.2	3.5	3		頚部にスス、コゲ
深鍋3類	84	257		W	2	D	5	―	RL	ind				A突起×2
深鍋3類	85	423		A	1	B	5	―	LR	8.4	2.8	8.5	8.7	B突起×1　頚・体部上半にスス
深鍋3類	86	281		W	1	D	3	―	LR	8	2.5			体部上半にスス
深鍋3類	92	419		A	1	B	5	―	RL	6.3	2.1			B突起×1 体部上半にスス・頚部にコゲ
深鍋3類	93	318		A	1	B	3	―	LR→RL羽	11.4	2.2	11.6	12.5	
深鍋3類	94	8		A	―	B	3	―	LR	8.2	2	7.9	8.2	A突起×1・B突起×2
深鍋3類	95	204		A	1	B	4	―	LR	11.3	2.3	11.3	11.3	{A突起1+B突起2}×4
深鍋3類	97	293		A	1	B	4	―	RL	6.2	1.9			
深鍋3類	98	271		A	1	B	5	―	RL	ind				
深鍋3類	99	284		A	1	B	4	―	LR→RL羽	11.6	2.4			B突起×2
深鍋3類	100	261		A	1	B	4	―	LR	18				
深鍋3類	113	57		A	1	B	4	C1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類	114	272		A	1	B	1	ind	LR	11.6	1			B突起≧3
深鍋3類	117	311		A	1	B	3	ind	LR	9	1.9			B突起≧1
深鍋3類	118	288		C	1	B	6	ind	LR	6.5	1.1			
深鍋3類	119	255		A	1	B	3	C1	LR	ind				頚・体部上半にコゲ
深鍋3類	429	104		A	1	B	2	ind	LR	8.6	2.1			B突起≧2貼付後、沈線施文 頚部にコゲ
深鍋3類	430	2		A	1	B	5	―	RL	8.7	2.2	8	8.7	
深鍋3類	431	404		A	1	B	4	―	RL	9.1	2.6			A・B突起×1　頚部にスス
深鍋3類	432	112		W	1	D	4	―	RL	ind	2.7			
深鍋3類	433	205		A	1	B	4	―	LR	8.6	2.7	8.6	8.6	
深鍋3類	434	402		A	1	B	5	―	RL	9.8	2.3			頚部にスス、体部上部にコゲ
深鍋3類	435	409		A	1	B	4	―	LR	9.3				A・B突起×1
深鍋3類	436	109		A	1	B	5	―	LR	10.5	2.6		10.6	
深鍋3類	437	150		A	1	B	4	―	LR	ind				
深鍋3類	438	401		A	1	B	1＋3	―	LR	12.4	2.1			B突起≧2貼付後、沈線施文 体部にスス
深鍋3類	439	107		A	1	B	4	―	RL	ind				頚部、体部上半にスス
深鍋3類	440	102		A	1	B	4	―	RL	8.4	3			
深鍋3類	441	103		A	1	B	4	―	LR	8.5	2.4	8.7	8.7	A・B突起×1
深鍋3類	442	207		A	1	B	4	―	LR	9.3	2.5		9.3	A突起×1・B突起×3
深鍋3類	443	115		A	1	B	4	―	LR→RL羽	ind	2.7			
深鍋3類	444	106		E	1	A	3	―	LR	7.6	2.6			A突起×1・B突起×3 体部上半にコゲ
深鍋3類	445	405		W	1	D	3	―	LR	7.8	2.6			
深鍋3類	446	452		A	1	B	3	―	ind	ind				B突起×1
深鍋3類	447	227		A	1	B	2	―	LR	10.4	2.8			A・B突起×1
深鍋3類	448	410		W	1	D	3	―	LR	6.4	1.7			A・B突起×1
深鍋3類	449	407		A	―	B	4	―	LR	8.3	2.8			
深鍋3類	450	412		A	1	B	5	―	RL	8.8	2.8			頚部にスス
深鍋3類	451	101		A	1	B	4	―	LR	19.2				体部上半にコゲ
深鍋3類	452	111		W	1	D	4	―	RL	8.2	2.3			A突起×1・B突起×2 頚・体部上半にスス・コゲ
深鍋3類	453	219		A	1	B	4	―	LR	9.4	2.4		9.4	口縁部から体部下半 までスス・コゲ

第15表　里鎗遺跡出土土器属性表13（破片資料10）
Table.15　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋3類	454	103		A	1	B	4	ind	LR	ind	1.8			頚部にコゲ
深鍋3類	455	422		A	1	B	5	―	LR	19.6	3.3	19.6	20.1	A突起×1・B突起×2
深鍋3類	456	422		A	1	B	5	―	LR	10.9	1.7	10.9	10.9	B突起×1
深鍋3類	457	70		A	1	B	2	―	LR	ind				頚部にスス
深鍋3類	458	16		A	―	B	4	―	LR	10	2.7	10.5	11	頚部にコゲ
深鍋3類	459	4	A'・B'	A	―	B	5	―	RL	9.3	3	8.9		A・B突起×1
深鍋3類	460	114		A	1	B	5	―	LR	12	2.7	12.3	12.4	頚・体部上半にコゲ
深鍋3類	461	408		A	1	B	5	―	LR→RL羽	ind				A・B突起×1
深鍋3類	462	223		E	―	A	5	―	LR	ind				
深鍋3類	463	58		A	1	B	3	―	LR	5.7	1.4	5.8	5.9	A・B突起×1　体部上半にスス
深鍋3類	464	116		A	1	B	4	―	LR	10	2			A突起×1 口縁～体部にスス・コゲ
深鍋3類	465	203		A	1	B	4	―	RL→LR羽	8.8	2.2	1.7		突起の連続
深鍋3類	466	―		W	1	D	1＋1	―	LR	10.4	3.3	10.2	10.4	B突起×2　頚部にコゲ
深鍋3類	467	―		A	―	B	2	―	LR	3.6	1	3.4	3.8	
深鍋3類	468	9		A	―	B	3	―	LR	8.3	0.6			B突起≧1
深鍋3類	469	265		W	1	D	3	―	LR	ind				B突起×1 口縁～体部上半にスス・コゲ
深鍋3類	470	403		A	1	B	5	―	LR	17				A突起×1 口縁～体部上半にコゲ
深鍋3類	471	15		A	1	B	4	―	LR	13.9	2.6	14.1	15.6	頚・体部上半にコゲ
深鍋3類	472	151		A	1	B	4	C1	LR	ind				B突起×2
深鍋3類	473	402		A	1	B	1＋3	B1	LR	9.4	2.2			B突起≧2貼付後、沈線施文 頚部にコゲ
深鍋3類	474	3		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類	475	421		A	1	B	1＋1	ind	LR	ind	2.3			B突起≧1
深鍋3類	476	4		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1　頚部にスス
深鍋3類	477	405		A	1	B	2+≧2	B1	LR	ind				B突起≧1
深鍋3類	478	201		A	1	B	2+≧2	B1	LR	6.4	1.5			B突起≧2
深鍋3類	479	201		A	1	B	3+≧2	―	LR	ind				頚・体部上半にスス
深鍋3類	480	2		A	1	B	1	A1	LR	8.4	1.1			B突起≧1　頚部にコゲ
深鍋3類	481	51		A	1	B	3	B1	LR	8.8	1.9			B突起≧1貼付後、沈線施文
深鍋3類	482	201		W	2	D	2＋x	―	LR	10.1	2.8	10.8	10.8	B突起×1　赤彩
深鍋3類	483	408		A	1	B	1+≧2	B1	LR	6	1.4			B突起≧2
深鍋3類	484	409		A	1	B	1	ind	LR	10	1.9			B突起≧1
深鍋3類	485	1		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1 頚・体部上半にスス・コゲ
深鍋3類	486	401		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1 頚・体部上半にスス・コゲ
深鍋3類	487	―		ind	ind	ind	≧4	B1	RL	ind				体部上半にコゲ
深鍋3類		1		A	1	B	ind	―	ind	ind				
深鍋3類		1	A上	A	1	B	1+≧3	B1	LR	9.6	2.2			頚～体部にスス・コゲ
深鍋3類		3		A	1	B	1+≧2	B1	LR	9.2	1.1			B突起≧1
深鍋3類		3		A	―	B	5	―	LR	ind	2.6			A・B突起×1
深鍋3類		4		A	1	B	2+≧3	B1	LR	7.4	2			頚部にスス
深鍋3類		5	A上	A	1	B	2	ind	LR	7.7	1.9			B突起≧1
深鍋3類		5		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×2
深鍋3類		5		A	―	B	4	―	LR	10.1				A・B突起×1
深鍋3類		6	B'	A	1	B	3	B1	LR	8.2	2.3			B突起≧1
深鍋3類		6		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		6		A	―	B	5	―	LR	ind	2.7	9.5		A・B突起×1
深鍋3類		7		A	1	B	1＋3	B1	LR	ind	1.2			
深鍋3類		7		A	1	B	ind	ind	LR	ind				
深鍋3類		7		A	―	B	5	―	LR	5.7	2	5.7	5.7	A突起×1・B突起×3
深鍋3類		8		A	―	B	2＋3	B1	LR	8.2	0.7			B突起≧2
深鍋3類		9		A	1	B	3	―	RL→LR羽	10	2.5			
深鍋3類		10		A	―	B	4	―	―	9.8	2.6			
深鍋3類		11		E	―	A	5	―	LR	5.2				
深鍋3類		12		C	―	B	1+≧2	ind	LR	8	1.2			
深鍋3類		12		A	2	B	ind	ind	RL	ind				B突起×2
深鍋3類		12		A	―	B	4	―	LR	ind		8.3		B突起×1　体部上半にスス

第16表　里鎗遺跡出土土器属性表14（破片資料11）
Table.16　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋3類		14		A	1	B	4	―	RL	6.4	3.2	6.5	7.3	
深鍋3類		18		A	1	B	4	―	LR	10.6	2.3	10.7	10.9	口縁～体部にスス
深鍋3類		51		A	1	B	4	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		51		W	1	D	3	―	LR	ind	1.9			B突起×1　体部上半にコゲ
深鍋3類		52		A	1	B	2	ind	LR	9.8	1.8			B突起≧2
深鍋3類		52		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		52		A	1	B	5	―	LR	ind	2.8			
深鍋3類		53		A	1	B	2	ind	LR	7.2	1.2			
深鍋3類		53		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		53		A	1	B	3	―	LR	ind	1.9			頚部にスス
深鍋3類		54	B'	ind	1	ind	ind	ind	LR	12.4	2			B突起≧1　頚～体部にコゲ
深鍋3類		54		E	―	A	ind	ind	LR	ind				口縁部～体部上半にコゲ
深鍋3類		55	A上	A	1	B	5	―	LR	9.4	2.6			口縁・頚部にスス・コゲ
深鍋3類		56	B'	A	1	B	5	―	RL	11	2.7	11.2	11.3	頚・体部にスス
深鍋3類		57		A	1	B	5	―	RL	ind	2.9			
深鍋3類		59		A	1	B	3	―	LR	10.4	2.1			
深鍋3類		60		A	1	B	3	―	LR	5.4	1.5			
深鍋3類		62		A	1	B	5	―	LR	ind				
深鍋3類		63		A	1	B	4	―	RL	ind				
深鍋3類		64		A	1	B	4	―	ind	ind				
深鍋3類		71		A	2	B	≧5	―	ind	ind				
深鍋3類		72		A	1	B	≧4	―	ind	ind				
深鍋3類		73		A	1	B	≧4	―	ind	ind				A突起×1・B突起×2
深鍋3類		74		W	1	D	≧3	―	ind	ind				A・B突起×1
深鍋3類		75		A	2	B	≧5	―	ind	11				
深鍋3類		101		A	1	B	ind	ind	LR	ind				
深鍋3類		102		A	1	B	2	ind	ind	1.2	2.5			B突起≧1
深鍋3類		103		A	1	B	ind	ind	LR	ind				頚部にコゲ
深鍋3類		104		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		105		A	ind	B	1	B1	RL	8.8	2.2			B突起≧1貼付後、沈線施文 体部にコゲ
深鍋3類		105		A	1	B	4	―	L	2.6	2.5	3.3		頚部・体部上半にコゲ
深鍋3類		108		A	1	B	2＋2	B1	LR	7.2	0.7			B突起≧1
深鍋3類		108		A	1	B	4	―	RL	ind				体部上半にスス、突起
深鍋3類		110		A	1	B	4	A3	ind	ind				
深鍋3類		110		A	1	B	5	―	LR	9.2	2.8			沈線は薬研彫を呈する。
深鍋3類		113		A	2	B	5	―	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		113		A	1	B	5	―	LR	ind				器形の屈曲が弱い。
深鍋3類		114		A	1	B	≧3	―	―	9.4	ind			
深鍋3類		122		A	1	B	≧4	―	ind	ind				B突起×1
深鍋3類		123		A	1	B	≧5	―	ind	ind				B突起×1　口縁部にコゲ
深鍋3類		162		A	1	B	ind	ind	ind	ind				
深鍋3類		202		A	1	B	1＋3	ind	LR	10	2.2			B突起≧2貼付後、沈線施文
深鍋3類		202		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		203		A	1	B	1	ind	ind	ind	2.5			B突起≧1貼付後、沈線施文 頚部にコゲ
深鍋3類		203		A	1	B	ind	ind	ind	ind				口縁・頚部にコゲ
深鍋3類		204		A	1	B	≧1	ind	ind	8.8	1.7			頚部にコゲ
深鍋3類		204		A	1	B	ind	ind	ind	ind				B突起×1　体部上半にコゲ
深鍋3類		205		A	1	B	1	ind	LR	ind				
深鍋3類		205		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		206		A	1	B	2	ind	ind	ind	2			
深鍋3類		206		A	1	B	ind	ind	ind	ind				B突起×1
深鍋3類		207		A	1	B	ind	ind	LR	ind	1			
深鍋3類		207		A	1	B	5	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		208		A	1	B	ind	ind	LR	ind	1.9			B突起≧1
深鍋3類		208		A	1	B	ind	ind	RL	ind				磨消手法無
深鍋3類		208		A	1	B	3	―	LR	6.6	1.7			A・B突起×1
深鍋3類		209		A	1	B	1	ind	LR	ind	0.9			B突起≧1
深鍋3類		209		A	1	B	5	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		209		A	1	B	4	―	LR	ind				A突起×1・B突起×3
深鍋3類		210	B'	A	1	B	1+≧2	ind	LR	160	1.4			B突起≧1
深鍋3類		211		ind	1	B	2	ind	LR	ind				
深鍋3類		211		A	1	B	4	―	LR	9	2.3	9.2	9.3	

第17表　里鎗遺跡出土土器属性表15（破片資料12）
Table.17　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋3類		212		A	1	B	2	ind	RL	9	2.2			B突起≧2貼付後、沈線施文
深鍋3類		212		A	1	B	4	―	LR	10.9	2.4		10.9	
深鍋3類		213		A	―	B	2＋2	B1	LR	6.2	0.7			B突起≧1
深鍋3類		213		A	1	B	2	―	LR	7.8		1.7		
深鍋3類		214		A	1	B	1	B1	LR	9.1	1.1			B突起≧1
深鍋3類		214		A	1	B	4	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		215		A	―	B	2＋2	A1	LR	ind	1.3			B突起≧1
深鍋3類		215		W	1	D	4	―	LR	10.2	2.6		10.2	口縁部にコゲ
深鍋3類		216		A	―	B	1	ind	LR	9.1	0.7			B突起≧1
深鍋3類		216		W	1	D	4	―	RL	8.8	3		8.8	口縁～体部にスス
深鍋3類		217		A	1	B	5	―	RL	8.8	2.7		8.8	頚・体部上半にスス・コゲ
深鍋3類		218		A	1	B	1+≧3	ind	LR	ind	1			B突起≧1
深鍋3類		218		A	1	B	3	―	LR	8.2	2.5		8.2	A突起×1・B突起×3
深鍋3類		220		A	―	B	2	ind	ind	ind				
深鍋3類		220		A	1	B	5	―	RL	9.7	2.8		9.7	
深鍋3類		221		A	1	B	ind	ind	LR	ind				
深鍋3類		222		A	1	B	ind	ind	ind	ind				
深鍋3類		222		W	1	D	≧4	―	―	9.2				口縁部・頚部にコゲ
深鍋3類		223		A	1	B	5	―	LR	ind				A突起×1・B突起×2
深鍋3類		224		A	1	B	5	―	RL	8.4	3.2			
深鍋3類		226		W	1	D	≧3	―	―	11.9				A突起×1・B突起×2
深鍋3類		228		A	―	B	≧5	―	―	9.4				
深鍋3類		228		A	1	B	≧5	―	ind	ind				
深鍋3類		229		W	1	D	3	―	LR	7.1	2.9			B突起×1
深鍋3類		230		A	1	B	3	―	LR	ind				A・B突起×1 頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		231		A	1	B	3	―	LR	ind				A突起×1
深鍋3類		232		A	1	B	4	―	RL	ind				
深鍋3類		233		A	1	B	3	―	RL	6.8	1.9			B突起×1
深鍋3類		234		A	1	B	3	―	RL	ind				
深鍋3類		235		A	―	B	4	―	LR	ind				
深鍋3類		237		A	―	B	3	―	LR	ind				
深鍋3類		242		A	―	B	3	―	LR	4.8	1.8			
深鍋3類		258		A	1	B	5	―	LR	ind				体部上半にコゲ
深鍋3類		259		A	1	B	≧5	―	RL	ind				
深鍋3類		260		A	1	B	3	―	LR	ind				
深鍋3類		260		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		261		A	1	B	4	―	RL	ind				B突起×1
深鍋3類		263		A	1	B	≧5	―	ind	ind				
深鍋3類		264		A	―	B	3	―	RL	ind				頚・体部上半にスス
深鍋3類		272		A	1	B	≧3	―	ind	ind				
深鍋3類		273		A	1	B	4	―	ind	12				B突起×1
深鍋3類		275		A	1	B	3	―	LR	ind				A・B突起×1
深鍋3類		277		A	1	B	3	―	ind	ind				
深鍋3類		278		A	1	B	≧4	―	ind	ind				
深鍋3類		279		A	1	B	≧3	―	ind	ind				
深鍋3類		281		A	1	B	≧5	―	ind	ind				A・B突起×1
深鍋3類		282		A	1	B	≧4	―	ind	ind				B突起×1
深鍋3類		283		A	1	B	≧3	―	ind	ind				
深鍋3類		284		A	1	B	≧2	―	ind	ind				{A突起1+B突起2}×4 頚部にスス、赤彩
深鍋3類		285		A	1	B	≧4	―	ind	ind				B突起×1
深鍋3類		288		A	1	B	≧6	―	ind	ind				
深鍋3類		402		A	1	B	3	B1	LR	ind				B突起×1　頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		403		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		403		A	1	B	5	―	LR	8.5	2.9			
深鍋3類		404		A	1	B	2	ind	LR	9.4	1.6			B突起≧1　体部にスス
深鍋3類		404		A	1	B	ind	ind	LR	ind				体部上半にスス
深鍋3類		406		A	1	B	≧3	ind	ind	11.2	2.6			B突起≧2
深鍋3類		406		A	1	B	ind	ind	RL	ind				B突起×1貼付後、縄文施文
深鍋3類		406		A	―	B	4	―	―	11.7	2.5	11.6	11.7	
深鍋3類		408		A	1	B	3	B1	LR	ind				頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		409		A	1	B	5	B1	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		410		A	1	B	ind	ind	LR	ind				頚・体部上半にコゲ

第18表　里鎗遺跡出土土器属性表16（破片資料13）
Table.18　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋3類		411		A	―	B	1	ind	LR	8.2	2.5			B突起≧1
深鍋3類		411		E	―	A	ind	ind	ind	ind				
深鍋3類		411		A	1	B	5	―	LR	7.4	2.4			
深鍋3類		412		A	1	B	2	ind	LR	ind				
深鍋3類		412		A	1	B	ind	ind	ind	ind				頚部にコゲ
深鍋3類		413		ind	1	ind	3	ind	LR	ind				B突起≧1
深鍋3類		413		A	1	B	5	―	LR	ind				体部上半にコゲ
深鍋3類		414		A	1	B	1	ind	LR	7.8	1.8			B突起≧1
深鍋3類		414		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1　頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		414		A	1	B	5	―	LR	10.3	2.7		10.3	B突起×1
深鍋3類		415		A	1	B	1	ind	LR	7.8	1.4			B突起≧1
深鍋3類		415		A	1	B	ind	ind	LR	ind				
深鍋3類		415		A	1	B	5	―	RL	11	3.2		11	
深鍋3類		416		A	1	B	2	ind	LR	7.8	2.3			体部にコゲ
深鍋3類		416		A	1	B	ind	ind	LR	ind				B突起×1　体部上半にコゲ
深鍋3類		416		A	1	B	3	―	LR	ind				くびれ弱い
深鍋3類		417		A	1	B	2	G2	LR	3.6	1.9			
深鍋3類		417		A	1	B	3	―	LR	ind				
深鍋3類		418		A	1	B	4	―	LR	ind				
深鍋3類		418		A	1	B	2	A3	―	8.4	1.7			B突起≧1
深鍋3類		418		A	1	B	4	―	LR	10.4	12.4	10.6	10.4	くびれ弱い
深鍋3類		419		A	1	B	2	ind	LR	9.6	1.7			
深鍋3類		419		A	1	B	5	A3	LR	ind				B突起×1
深鍋3類		420		A	1	B	1	ind	LR	12.4	2.1			B突起連続
深鍋3類		420		A	1	B	ind	ind	LR	ind				A突起×1
深鍋3類		420		A	1	B	4	―	RL	9.5	2.1		9.5	A・B突起×1
深鍋3類		421		A	1	B	3	G2	LR	ind				頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		421		A	1	B	3	―	RL	5.7	2.5			B突起×1
深鍋3類		422		A	1	B	ind	ind	ind	8.6	2.1			B突起≧1
深鍋3類		422		A	1	B	ind	ind	ind	ind				頚・体部上半にコゲ
深鍋3類		423		A	1	B	ind	ind	ind	9.4	2.9			
深鍋3類		424		A	1	B	3	―	LR	8.3	2.3			
深鍋3類		424		A	1	B	ind	ind	LR	ind				
深鍋3類		424		A	1	B	ind	ind	LR	ind				赤彩
深鍋3類		425		A	1	B	1	ind	RL	5.8	1.9			
深鍋3類		426		A	1	B	1	ind	ind	5.6				
深鍋3類		428		A	1	B	ind	ind	ind	11.8				B突起≧1
深鍋3類		429		A	1	B	2+≧3	B1	LR	ind	6.7			B突起≧1
深鍋3類		430		A	―	B	≧2	ind	ind	8.9	0.6			B突起≧1
深鍋3類		430	B'	A	1	B	2	ind	LR	13	1.8			
深鍋3類		431		A	―	B	2	ind	RL	ind				B突起≧1
深鍋3類		432		C	―	B	3	B1	LR	12.2	1.2			
深鍋3類		433		A	1	B	ind	―	LR	1	2.2			
深鍋3類		435		A	1	B	≧5	―	ind	ind				頚部にコゲ
深鍋3類		437		A	1	B	6	―	ind	ind				
深鍋3類		439		A	2	B	≧4	―	ind	ind				
深鍋3類		440		A	1	B	ind	ind	ind	ind				
深鍋3類		441		A	1	B	ind	ind	ind	ind				
深鍋3類		451		A	―	B	≧6	―	ind	ind				B突起×2
深鍋3類		454		A	1	B	≧6	―	ind	ind				B突起×2
深鍋3類		461		A	1	B	5	―	ind	ind				
深鍋3類		463		A	1	B	≧4	―	ind	ind				B突起×1
深鍋3類		464		A	1	B	≧4	―	ind	ind				
深鍋3類		465		A	1	B	≧3	―	ind	ind				
深鍋3類		501		A	1	B	3	―	LR	10.2	1.6			
深鍋4類	134	283		A	―	B	2	―	RL	8				頚部にコゲ
深鍋4類	135	267		A	―	B	3	―	LR	ind				
深鍋4類	137	202		A	―	B	2	―	LR	13.8	1.4	14.6	14.6	
深鍋4類	139	269		A	―	B	3	―	LR	ind				B突起×1
深鍋4類	142	287		A	―	C	―	―	LR	ind				
深鍋4類	143	268		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類	488	213		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類	489	401		W	1	A	3＋2	―	LR	13	1.6			
深鍋4類	490	422		A	―	B	5	B1	LR	ind				

第19表　里鎗遺跡出土土器属性表17（破片資料14）
Table.19　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋4類	491	215		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類	492	106		A	1	B	3	B1	LR	ind				口縁部～体部上半にコゲ・ススス
深鍋4類	493	—		A	1	B	2	—	LR→RL羽	ind				
深鍋4類	494	2		A	1	B	2	—	LR	ind				B突起×1　体部上半にコゲ
深鍋4類	495	17		A	—	B	2	—	LR	14	1.2			
深鍋4類	496	520		A	—	B	1	—	RL	ind				口頚部にコゲ
深鍋4類	497	—		A	—	B	2	—	LR→RL羽	ind				
深鍋4類	498	422		A	—	B	3	—	RL	ind				頚部にコゲ
深鍋4類	499	241	B'	A	1	B	3	—	LR	6.7	1.7			A突起×1・B突起×2 頚部・体部上半にススス・コゲ
深鍋4類	500	210		A	—	C	2	—	LR→RL羽	ind				
深鍋4類	501	—	A下	A	—	C	3	—	RL	14.8	1.3			頚部にコゲ
深鍋4類	502	4		A	1	B	2	—	LR→RL羽	ind				
深鍋4類	503	21	A下	A	—	B	2	—	LR	ind				
深鍋4類	504	201	B'	A	—	B	3	—	LR→RL羽	10.8			11.3	頚部にススス
深鍋4類	505	401		W	1	D	2	—	RL	10.1	3.6			体部上半にコゲ
深鍋4類	506	1	A下	A	—	B	3	—	LR	ind				
深鍋4類	507	250		A	—	C	2	—	RL	11.4	1.4			
深鍋4類	508	—		A	—	C	3	—	LR	ind				
深鍋4類	509	—	A上	A	—	C	2	—	LR	ind				
深鍋4類	510	54		E	—	A	3	—	RL	ind				
深鍋4類	511	301	B	E	—	A	—	—	LR	15				補修孔有・体部上半にコゲ
深鍋4類	512	101	A'	A	1	B	—	—	LR	9.2				体部上半にススス
深鍋4類	513	5	A上・B'	E	—	A	—	—	RL	ind				
深鍋4類	514	303		E	—	A	—	—	RL	ind				
深鍋4類	515	217	B'	A	1	B	—	—	RL	ind				
深鍋4類	516	220	B'	A	1	B	—	—	LR	11.2				口縁部肥厚
深鍋4類	517	102	A'	E	—	A	—	—	LR	ind				
深鍋4類	518	106		A	1	B	—	—	RL→LR羽	19				口縁部肥厚
深鍋4類	519	344		A	1	B	ind	—	LR	11.6				
深鍋4類	520	201		E	—	A	—	—	RL→LR羽	ind				口縁部肥厚
深鍋4類	521	302		A	1	B	—	—	LR→RL羽	ind				
深鍋4類		2	A下	A	1	B	ind	—	L	ind				
深鍋4類		3	A下	A	1	B	ind	—	LR	ind				
深鍋4類		4		E	—	A	—	—	LR	11.2			11.8	口縁部肥厚
深鍋4類		6	A下	A	1	B	—	—	LR	ind				口縁部肥厚
深鍋4類		7	A下・B	A	1	B	—	—	LR→RL羽	15.2			16.2	頚部にコゲ
深鍋4類		8		E	—	A	—	B1	LR	ind				口縁部～体部上半にコゲ・ススス
深鍋4類		9		A	1	B	—	B1	LR	ind				A突起×1 頚部・体部上半にススス
深鍋4類		9	A下	A	1	B	—	—	LR	11	1.7		11.6	頚部にコゲ
深鍋4類		11		A	—	B	—	ind	LR	ind				A・B突起×1 口縁部～体部上半にコゲ
深鍋4類		13		A	—	B	3	B1	LR	ind				
深鍋4類		51	A上	A	1	B	—	—	LR	ind				頚部にコゲ
深鍋4類		51		E	—	A	2＋1	—	LR	12.9	1.3	13.6	13.6	体部上半にコゲ
深鍋4類		52		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類		53		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類		55		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類		56		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類		57		A	1	B	—	—	LR	ind				
深鍋4類		58		E	—	A	—	—	LR	ind				内面に接合痕有
深鍋4類		60	A上	A	1	B	—	—	RL	ind				
深鍋4類		61	A上	E	—	A	—	—	RL	ind				
深鍋4類		62	A上	E	—	A	—	—	RL	ind				

第20表　里鎗遺跡出土土器属性表18（破片資料15）
Table.20　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋4類		63	A上	A	1	B	―	―	LR	ind				頚部にスス
深鍋4類		102	A’	A	1	B	―	―	L	ind				
深鍋4類		103	A’	A	1	B	―	―	L	ind				
深鍋4類		105	A’	A	1	B	―	―	RL	ind				
深鍋4類		107		A	1	B	―	―	RL	ind				
深鍋4類		108		A	1	B	―	―	RL	ind				
深鍋4類		109	A’	E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		110	A’	E	―	A	―	―	LR	9.9				頚・体部上半にスス
深鍋4類		201		A	1	B	1＋1	―	LR	ind				
深鍋4類		202		E	―	A	―	―	LR	ind				内面に接合痕有
深鍋4類		203		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		204		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		205		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		206		A	1	B	―	―	LR	6.8				
深鍋4類		207		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		208		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		209		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		210		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		211		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		212		A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		213		E	―	A	―	B1	LR	ind				
深鍋4類		214		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		215		E	―	A	―	C1	LR	ind				
深鍋4類		216		E	―	A	―	ind	LR	ind				
深鍋4類		216		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		218		E	1	A	―	ind	LR	ind				
深鍋4類		218		A	1	B	―	―	RL	ind				
深鍋4類		219		E	―	A	―	―	RL→LR羽	ind				
深鍋4類		221		E	―	A	―	ind	LR	ind				
深鍋4類		221		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		222		E	―	A	―	―	RL→LR羽	7				口縁部肥厚
深鍋4類		224		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		225		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		226	B’	A	1	B	―	―	LR→RL羽	17.2	1		17.9	口縁～体部にスス
深鍋4類		228		A	1	B	―	―	RL	ind				
深鍋4類		303		A	1	B	―	―	LR	10				
深鍋4類		304		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		305		A	1	B	―	―	L	8				
深鍋4類		306		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		307		E	―	A	―	―	LR	8				
深鍋4類		308		A	1	B	―	―	LR	9				
深鍋4類		310		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		311		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		312		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		313		E	―	A	―	―	LR	ind				補修孔有・内面に接合痕有
深鍋4類		314		A	1	B	―	―	LR	ind				補修孔有・内面に接合痕有
深鍋4類		315		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		317		A	1	B	―	―	LR	8				
深鍋4類		318		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		319		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		320		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		321		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		322		A	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋4類		323		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		325		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		326		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		327		A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		328		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		329		A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		330		A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		331		A	1	B	ind	―	LR	ind				

第21表　里鎗遺跡出土土器属性表19（破片資料16）
Table.21　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
深鍋4類		332	B	E	―	A	―	―	RL	ind				頚部にコゲ
深鍋4類		333		E	―	A	―	―	RL	ind				口縁部肥厚
深鍋4類		334		E	―	A	―	―	RL	ind				口縁部肥厚
深鍋4類		335		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類		336		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類		337		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類		338		A	1	B	ind	―	RL	ind				
深鍋4類		339		A	1	B	ind	―	RL	ind				
深鍋4類		340	B	A	1	B	ind	―	LR→RL羽	14			14.8	口縁部肥厚
深鍋4類		341		E	―	A	―	―	LR	ind				補修孔有
深鍋4類		343		E	―	A	―	―	L→R羽	ind				
深鍋4類		345		A	1	B	ind	―	RL	ind				口縁部肥厚
深鍋4類		346		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類		347		A	1	B	ind	―	RL	ind				
深鍋4類		349		A	1	B	ind	―	RL	ind				
深鍋4類		356		E	1	A	1	―	LR	9.1				頚部にスス
深鍋4類		402		A	―	B	2＋3	―	LR	ind				
深鍋4類		429		E	―	A	―	B1	LR	ind				
深鍋4類		430		E	―	A	―	ind	ind	ind				口縁・頚部にコゲ
深鍋4類		431		E	―	A	―	ind	RL	ind				口縁・頚部にコゲ
深鍋4類		501	ind	A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		502	ind	E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		503		E	―	A	―	―	RL	ind				
深鍋4類		504	ind	A	1	B	ind	―	LR	ind				
深鍋4類		505		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋4類		506		A	1	B	ind	―	―	ind				
深鍋5類	147	432		C	1	B	―	―	LR	ind				
深鍋5類	522	302		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋5類	523	401		E	―	A	―	―	LR	ind				
深鍋5類	524	101		A	―	B	3	―	LR	ind				
浅鉢1類	525	102		W	2	D	3+≧3	B1	LR	ind				突起の連続　口縁肥厚
浅鉢1類	526	402		A	2	B	3	D1	LR	15.2				A突起×1
浅鉢1類	527	3	B	A	2	B	3＋2	A5	LR	14.3				B突起×2　口縁肥厚
浅鉢1類	528	8		A	1	B	3＋2	ind	LR	ind				
浅鉢1類	529	103		A	2	B	3	ind	LR	ind				B突起×1　口縁肥厚
浅鉢1類	530	403		A	1	B	3＋3	ind	LR	11.1				A・B突起×1
浅鉢1類	531	201		A	3	B	3+≧3	A5	RL	14.0				B突起×3
浅鉢1類	532	4		A	1	B	3	A5	LR	10.7				B突起×1
浅鉢1類	533	230		A	1	B	2	A5	LR	11.6				
浅鉢1類	534	241		A	1	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類	535	405		A	1	B	3	C1	RL	10.3				A・B突起×1
浅鉢1類	536	202		A	2	B	3	A5	LR	12.2				A突起×1・B突起×2
浅鉢1類	538	419		A	―	B	3	ind	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類	539	8		E	―	A	2＋2	ind	LR	ind				B突起×2
浅鉢1類	540	1	B・B’	A	2	B	3	A5	LR	15.1				A・B突起×1
浅鉢1類	541	250		E	―	A	4	ind	LR	ind				
浅鉢1類	542	208		C	段1	C	2	A5	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類	543	14		E	―	A	2	ind	―	6.5				
浅鉢1類	544	215		A	2	B	2	ind	LR	5.2				A突起×1
浅鉢1類	545	409		A	1	B	3	ind	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類	546	232		A	1	B	≧1	A5	LR	ind				
浅鉢1類	547	206		A	2	B	2	A3	LR	13.4				A突起×1
浅鉢1類	548	―		A	1	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類	549	51		A	2	B	3	ind	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類	550	211		E	2	A	2	A5	LR	ind				A・B突起×1
浅鉢1類	551	216		E	2	A	2	A3	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類	552	23		A	―	B	3	ind	LR	ind				
浅鉢1類	553	10		E	―	A	2＋1	A3	LR	ind				小形
浅鉢1類	554	10		E	1	A	2+≧3	A3	―	ind				B突起×1
浅鉢1類	555	430		E	1	A	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類	556	12		E	2	A	2	A5	RL	ind				
浅鉢1類	557	2	B	A	2	B	3	ind	LR	14.8				B突起×1

第22表　里鎗遺跡出土土器属性表20（破片資料17）
Table.22　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
浅鉢1類	558	212		－	―	－	―	G	LR	ind				4つ足
浅鉢1類		5		A	2	B	3	ind	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類		6		A	2	B	3	ind	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類		7		A	1	B	2	B1	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類		9		A	―	B	≧2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		11	A下・B	A	―	B	2＋2	A5	LR	12.0				
浅鉢1類		13		C	ind	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類		15		A	2	B	3＋1	A3	LR	ind				A・B突起×1
浅鉢1類		52		A	2	B	2	A1	LR	ind				A突起×1　磨消手法無
浅鉢1類		53		A	2	B	2	A3	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類		55	A上	A	1	B	3	A5	LR	ind				
浅鉢1類		56		A	1	B	3	A5	LR	10.8				
浅鉢1類		101	A'・B・B'	A	1	B	3＋x	ind	LR	15.2				
浅鉢1類		104		A	段1	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類		107		A	2	B	3	G2	LR	ind				B突起×2
浅鉢1類		203		A	2	B	3	ind	LR	14.3				B突起×2
浅鉢1類		204		A	2	B	2	A5	RL	8.0				B突起×2
浅鉢1類		205	B	W	2	D	2	ind	LR	11.4				A突起×1　突起の連続
浅鉢1類		207		A	1	B	3	ind	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類		209		A	2	B	2	A3	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類		214		A	2	B	2	A5	LR	ind				A・B突起×1
浅鉢1類		217		A	2	B	2	A5	LR	ind				A・B突起×1
浅鉢1類		218	B	A	2＋段1	B	2	ind	LR	ind				A・B突起×1
浅鉢1類		219		A	段1	B	≧2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		220		A	1	B	3	ind	RL	ind				A突起×1
浅鉢1類		221		A	1	B	2	ind	RL	ind				
浅鉢1類		222		A	1	B	2	ind	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類		223		A	1＋段1	B	2	ind	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類		224		A	2	B	3	ind	LR	ind				B突起×1　小形　赤彩
浅鉢1類		225		A	1	B	3	ind	ind	ind				
浅鉢1類		226		A	1	B	2	ind	RL	ind				
浅鉢1類		227		A	―	B	2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		228		C	2	C	2	ind	LR	ind				B突起×2
浅鉢1類		229		A	1	B	2	ind	RL	ind				
浅鉢1類		231		A	1	B	2	A5	LR	ind				A突起×1
浅鉢1類		233		A	―	B	2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		235		A	段1	B	2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		236		A	1＋段1	B	2	A5	LR	ind				A突起×1　小形
浅鉢1類		237		A	1	B	≧2	ind	ind	ind				赤彩
浅鉢1類		238		A	1	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類		239		A	1	B	ind	ind	ind	ind				
浅鉢1類		240		A	段1	B	≧2	ind	LR	ind				
浅鉢1類		245		A	1	B	2	ind	LR	ind				
浅鉢1類		273		ind	2	ind	2	ind	ind	ind				赤彩
浅鉢1類		401		A	2	B	3＋3	B1	LR	13.1				A突起×7
浅鉢1類		404	B	A	1	B	3	A5	LR	16.4				B突起×2
浅鉢1類		406	B	A	1	B	3＋3	A5	LR	13.0				B突起×1
浅鉢1類		407		A	1	B	3	ind	RL	10.2				A・B突起×1　赤彩
浅鉢1類		408		A	1	B	3	ind	ind	ind				
浅鉢1類		410		A	1	B	3	ind	LR	6.2				A突起×1・B突起×2
浅鉢1類		411		A	1	B	2	ind	LR	7.5				B突起×2
浅鉢1類		412		A	1	B	3	ind	LR	ind				小形
浅鉢1類		413		A	1	B	3	ind	LR	ind				A・B突起×1　小形
浅鉢1類		415		A	―	B	2	ind	RL	ind				小形
浅鉢1類		416		A	―	B	3	ind	ind	ind				
浅鉢1類		417		A	―	B	ind	ind	ind	ind				
浅鉢1類		420		A	1＋段1	B	2	A5	LR	10.7				A突起×1
浅鉢1類		421		A	1＋段1	B	2	ind	LR	12.6				
浅鉢1類		422		A	1	B	2	ind	ind	ind				
浅鉢1類		423		A	1	B	2	ind	LR	6.9				
浅鉢1類		431		A	―	B	3	ind	LR	ind				B突起×1縦位
浅鉢1類		432		A	―	B	3	ind	LR	ind				B突起×1
浅鉢1類		501		E	1	A	2＋2	ind	LR	7.4				小形
浅鉢2類	159	313	A'	A	1	B	1	ind	―	11.5				

第23表　里鎗遺跡出土土器属性表21（破片資料18）
Table.23　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
浅鉢2類	559	243		E	1	A	1	ind	ー	7.8				
浅鉢2類	560	244		E	1	A	3	ind	ー	ind				
浅鉢2類		12	A下	E	ー	A	3	ind	ー	6.9				
浅鉢2類		57	A上	E	ー	A	1	ind	ー	ind				厚手
浅鉢2類		58		E	1	A	2	ind	ー	3.2				
浅鉢2類		106		E	1	A	2	ind	ー	5.8				
浅鉢2類		241		A	ー	B	ind	ind	ー	11.2				やや厚手
浅鉢2類		242		E	1	A	2	ind	ー	7.8				赤彩
浅鉢2類		245		E	段1	A	2	ind	ー	ind				赤彩
浅鉢2類		246		E	1	A	2	ind	ー	12.2				
浅鉢2類		247		C	ー	C	ー	ind	ー	ind				
浅鉢2類		248		E	ー	A	2	ind	ー	ind				小形
浅鉢2類		249		E	1	A	3	ind	ー	ind				
浅鉢2類		250		A	ー	B	2	ind	ー	ind				小形
浅鉢2類		251		A	ー	B	2	ind	ー	ind				
浅鉢2類		424	B'	E	ー	A	2	ind	ー	10.4				赤彩
浅鉢3類	162	310		E	1	A	2	G2	LR	5.9				B突起
浅鉢3類	537	402		E	1	A	4＋2	A5	LR	7.4	1.2			
浅鉢3類	561	23		A	1	B	2	ind	LR	6	1.3			B突起×1　赤彩
浅鉢3類	562	501		A	1	B	4	B1	LR	7.9	1.2	8.2		B突起×1　赤彩
浅鉢3類	563	25		A	1	B	4	ind	LR→RL羽	5.7	1.7	5.8		B突起×1 沈線内に刺突有
浅鉢3類	564	209		A	1	B	2＋2	A3	LR	7.1	1.2			B突起
浅鉢3類	565	209		A	1	B	2＋2	A3	LR	7.3	1.7	7.7	7.7	B突起
浅鉢3類	566	23		A	1	B	3	A4	ー	6	1.2			赤彩
浅鉢3類	567	23		E	1	A	1	ind	ー	6.4	1	6.6		
浅鉢3類	568	27		E	2	A	2	ind	ー	ind	1.3			
浅鉢3類		1		A	1	B	1＋2	A1	LR	6.6	1.1			B突起×6　赤彩有
浅鉢3類		2		E	1	A	2＋1	A1	ー	5.6	1.8	5.7	5.7	B突起×6　頚～体部にスス
浅鉢3類		11	A下	A	1	B	1+≧3	B1	LR	7	1.5			B突起×1　赤彩
浅鉢3類		52		A	1	B	1	B1	LR	7.1	1.4	7.4	7.4	B突起×8　磨消手法無
浅鉢3類		54		A	1	B	1	A1	LR	5.6	1.1	5.8		B突起　赤彩
浅鉢3類		101		E	1	A	≧2	A3	LR	7.3	1.6	7.3		B突起　磨消縄文
浅鉢3類		103		A	1	B	1＋2	B1	LR	8.3	1			B突起×1
浅鉢3類		106		E	1	A	1	A3	ー	7.2	1.1			
浅鉢3類		201		A	1	B	1+≧2	D1	LR	ind				
浅鉢3類		202		A	1	B	ind	ind	LR	7.4	1.1			B突起
浅鉢3類		204		A	1	B	4	ind	LR	4.7	1.7	5.1		
浅鉢3類		208		A	1	B	2	ind	LR	12.2	2.2			B突起×2
浅鉢3類		401		A	1	B	1	A3	ー	9	2			B突起　赤彩
浅鉢3類		501		A	1	B	1＋3	A1	LR	5.6	1.2	5.8		B突起×1　赤彩
鉢4類	173	9	A下	A	ー	B	3	ind	RL→LR羽	ind				体部上半にスス
鉢4類		10	B	A	ー	B	2＋1	ind	ー	ind				体部にコゲ・ 頚部～体部上半にスス
鉢4類		205	B	A	1	B	ind	ind	RL	ind				
鉢4類		206	B	A	ー	B	3+≧3	ind	ー	ind				
鉢4類		207	B	E	ー	A	ind	ind	LR	ind				赤彩
鉢4類		403	B'	A	1	B	ind	ind	LR	ind				
鉢4類		404	B'	A	1	B	2＋2	ind	LR	ind				
鉢4類		405	ind	A	ー	B	2＋2	ind	ー	ind				
鉢5類	569	ー	A下	A	2	B	1＋x	ind	ind	1.2	1.3			
鉢5類	570	132	A'	E	1	A	ind	ind	ind	1.3	1.8			
鉢5類	571	ー	B'	E	1	A	ind	ind	ind	2.4	2.6			
鉢5類	572	261	B'	E	1	A	ind	ind	ind	1.6	1.7			
鉢4類		8	A下	A	1	B	3＋2	ind	LR	7.1				
鉢5類		502	B'	E	1	A	ind	ind	LR	2.4	2.7			
鉢5類		505	ind	E	1	A	ind	ind	RL	1.3	2.5			
鉢5類		516	ind	E	1	A	ind	ind	LR	1.3	1.7			
壷直立	185	ー	A下	E	1	A	3	F＋A1	LR	ind				
壷外反	188	129	A'	E	1	A	3	F＋A1	LR	4.5				
壷	190	113		ind	ind	ind	ind	F	LR	ind				
壷外反	195	128		E	1	A	3	A1	RL	4.2				A・B突起
壷	196	130		ind	ind	ind	≧2	G2	LR	ind				

第24表　里鎗遺跡出土土器属性表22（破片資料19）
Table.24　Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
壷直立	209	274	B	E	1	A	1	―	―	5.3	3.9			
壷直立	210	278		E	―	A	≧3	―	―	4.0				
壷直立	211	279		E	1	A	≧1	―	―	5.2				B突起　赤彩
壷直立	212	275		E	1	A	≧1	―	―	3.8	2.8			
壷直立	213	277	B	E	1	A	1＋3	―	―	4.9	4.4	5.3		
壷外反	214	273		E	―	A	1+≧3	ind	―	6.1				
壷内傾	215	263		E	―	A	ind	―	―	4.5				
壷外反	226	265	A’	A	1	B	―	―	LR	5.1	1.9			
壷外反	227	264	ind	E	―	A	―	―	RL	3.0	2.3			
壷直立	228	262	B’	A	1	B	1＋1	―	―	6.3	2.5			
壷	573	3		ind	ind	A	3	A1	LR	ind	5.2			
壷	574	501	B	ind	ind	A	≧2＋≧2	F	LR	ind	4.5			A・B突起
壷	575	202		ind	ind	B	2＋3	A1	LR	ind	2.5	3.8		
壷	576	303		ind	ind	B	0＋x	A1	LR	ind				
壷	577	101		ind	ind	A	≧3＋≧3	F	LR	ind				B突起
壷	578	304		ind	ind	C	3＋3	F	LR	ind	2.9			
壷	579	301		ind	ind	A	≧3	F	LR	ind				
壷	580	502	B	ind	ind	A	≧3	F	LR	ind	5.0			
壷	581	302	B	ind	ind	B	3	F	LR	ind	1.9			
壷	582	1		ind	ind	B	ind	A1	―	ind				体部破片のため個体数集計には含めていない
壷	583	4		ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind	ind			同上
壷	584	413		ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind	ind			同上
壷	585	52	A上	ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind				同上
壷	586	202		ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind				同上
壷	587	201	B	ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind				同上
壷	588	217		ind	ind	ind	ind	F	LR	ind				同上
壷	589	216		ind	ind	ind	ind	F	LR	ind				同上
壷	590	211		ind	ind	ind	≧2＋3	F	LR	ind				同上
壷	591	410		ind	ind	ind	ind	F	LR	ind				同上
壷	592	501		ind	ind	ind	ind	G1	LR	ind				同上
壷	593	406		ind	ind	ind	ind	ind	LR					同上
壷	594	215	A’	ind	ind	ind	1	―	LR	ind				
壷直立	595	243		ind	ind	ind	≧3	―	―	ind				
壷外反		1	A上下・A’	A	1	B	2	F＋A1	LR	6.4	4.8			
壷外反		1	A下	E	1	A	3＋3	A2	LR	ind				
壷		10	A下	E	ind	A	≧1	―	RL	ind				A突起×1
壷直立		101	A’	E	ind	A	3	F	LR	ind				台付の可能性
壷直立		107		E	1	A	ind	―	LR	5.0	5.0			B突起×2
壷直立		114	A’	E	1	A	≧1	―	LR	3.9	3.1			A突起×1・B突起
壷外反		204		E	ind	A	≧2	F	LR	4.7				A・B突起　赤彩
壷直立		206		C	1	C	3	A1	―	5.6	3.0			
壷外反		207		A	1	B	≧2	A1	RL	9.1	2.2	9.8		
壷内傾		207	B	E	1	A	≧1	F	LR	6.2	4.0			
壷外反		208		E	1	A	1	A1	LR	3.3	2.8	2.6		
壷外反		209		C	1	C	3	A1	―	ind				
壷外反		209		E	ind	A	≧3	F	LR	ind				A突起×1
壷外反		219		E	1	A	ind	―	LR	6.2				A突起×1・B突起×2
壷外反		220	B	E	1	A	≧1	―	LR	5.0				A突起×1・B突起×2
壷外反		221		E	1	A	≧1	―	RL	3.8	6.0	.		A突起×1・B突起×2
壷外反		402		E	1	A	≧1＋≧2	F＋A1	LR	ind				
壷内傾		405		E	1	A	3＋3	A1	LR	4.7	5.6			B突起
壷内傾		407		E	1	A	≧2＋≧2	A1	LR	4.5	8.4			B突起×11
壷外反		408		E	ind	A	≧2	A1	LR	ind				
壷外反		410		E	ind	A	1	A1	LR	ind				
壷内傾		415	B’	E	1	A	1＋3	―	LR	3.7	2.9			A突起×1・B突起×2
壷直立		425		E	1	A	≧1	―	LR	4.4	2.8			A突起×1・B突起×2
壷直立		4		E	1	A	1	―	RL	4.6	5.6	4.5		
壷外反		6	A下	E	1	A	1	―	LR→RL羽	5.0	3.1	3.4		
壷外反		7		E	1	A	ind	―	―	3.9	3.2			
壷外反		8	A下	E	1	A	ind	―	LR	ind	4.1			B突起
壷直立		11	A下	E	ind	A	1	―	RL	ind				
壷外反		52	A上	E	1	A	ind	―	RL	5.8	4.7			赤彩

第25表 里鎗遺跡出土土器属性表23(破片資料20)
Table.25 Atribute List of the Final jomon pottery from the Satoyari site

類型	No.	個体No.	グリッド	口縁装飾	内面沈線	施文工程	頚部沈線	文様	胴部縄文	口径	頚部幅	頚部径	最大径	備考
壷		54		E	1	A	1	―	―	ind				赤彩
壷		55		E	ind	A	1	―	LR	ind				A突起×1 補修孔
壷		57	A上	E	ind	A	1	―	―	ind				
壷		57	A上	E	ind	A	1	―	RL	ind				
壷内傾		58		E	1	A	1	―	―	2.8	2.7			
壷		102	A'	E	ind	A	2	―	―	ind				
壷直立		106		E	1	A	1	―	LR→RL羽	4.1	3.5			B突起 赤彩
壷直立		108		E	1	A	1	―	RL	3.7	2.9			
壷直立		112	A'	E	ind	A	1	―	RL→LR羽	5.2	5.7			
壷直立		113	A'	E	1	A	1+3	―	LR	4.2	4.8	4.1		A突起×1・B突起
壷直立		116	A'	E	1	A	1+≧2	―	LR→RL羽	5.4	5.5	6.2		
壷直立		119		E	1	A	1+3	―	LR	ind	5.5			A突起×1
壷内傾		120	A'	E	1	A	1	―	RL	ind				
壷外反		222		E	ind	A	1	―	―	4.8				
壷外反		223		E	1	A	1	―	―	5.6				
壷外反		224		E	1	A	1	―	LR→RL羽	5.1	4.7			
壷外反		227		E	1	A	1	―	RL	4.4				B突起
壷外反		228		E	1	A	1	―	―	5.1	4.6			
壷外反		230	B	E	1	A	1+3	―	LR→RL羽	4.3	4.6	5.2		
壷外反		232	B	E	2	A	1+2	―	LR→RL羽	4.5	3.3			
壷直立		234		E	1	A	1	―	―	4.9	4.3			
壷外反		235		E	1	A	1	―	―	4.8				
壷直立		236		E	1	A	ind	―	RL→LR羽	3.7	2.6			
壷外反		241		E	ind	A	1	―	RL	ind				小形
壷内傾		243	B	E	ind	A	1	―	―	ind				赤彩
壷内傾		244		E	1	A	1	―	―	4.5	4.2	4.1		赤彩
壷内傾		245		E	1	A	1	―	RL	4.1				
壷内傾		253		E	1	A	1	―	―	6.0				
壷直立		301	B'	A	1	B	≧3	F	LR	4.0	1.8	4.0		
壷内傾		401		A	1	B	―	―	LR	2.2	8.9			
壷外反		401	B'	E	1	A	ind	―	RL	9.0	4.5			B突起×2
壷内傾		406		E	1	A	2	―	―	5.0	4.0			
壷内傾		409	B'	E	1	A	ind	―	LR	3.7	ind			
壷直立		413		E	1	A	1	―	LR→RL羽	5.1	4.4	4.7		
壷内傾		417		E	1	A	1	―	―	4.4	4.0			
壷内傾		420		E	1	A	1	―	RL	4.6	3.5			
壷内傾		422		E	1	A	1	―	RL	4.3	3.6			
壷内傾		423	B	E	1	A	1	―	―	4.4	3.4			
壷内傾		424		E	1	A	1	―	―	4.4	3.7			
壷内傾		429		E	1	A	1	―	―	4.3				
壷外反		430	B'	E	1	A	1	―	RL→LR羽	5.5	4.8			
壷外反		431		E	1	A	1	―	RL	5.1				
壷直立		432		E	1	A	1	―	―	5.0	4.2			
壷直立		434		E	ind	A	1	―	―	ind				赤彩 小形
壷直立		435		E	1	A	1	―	―	4.7				
壷外反		436	A	E	1	A	1+2	―	LR	3.7	4.3	4.3		
壷外反		437		E	1	A	1	―	―	4.9				
壷内傾		438		E	ind	A	1	―	LR	4.8	3.7			B突起
壷内傾		439		E	1	A	1	―	RL	4.4				
壷		444	B'	E	ind	A	1	―	RL	ind				
壷直立		102	B	C	1	C	―	―	―	5.4	2.3			赤彩
壷外反		110	ind	E	1	A	1	―	LR	6.3	2.5			B突起
注口	596	3		ind	ind	ind	ind	ind	LR	ind				
注口	597	1	A下	A	―	B	1	○	LR	ind				赤彩
注口	598	301	ind	A	1	B	1	○	LR	ind				